

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Ts.ローホーズ：追放を生き抜いた政治家

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-04-28<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00001399">https://doi.org/10.15021/00001399</a>           |

## Ts.ローホーズ ——追放を生き抜いた政治家

### 解説

- |                |                   |
|----------------|-------------------|
| 1 1930年代のモンゴル  | 11 学位取得をめざして      |
| 2 小学校時代        | 12 ツェデンバルへの批判     |
| 3 ウランバートルの生活   | 13 党中央委員会第6回総会にて  |
| 4 党幹部学校へ進学     | 14 私生活            |
| 5 党中央委員会講師局    | 15 未開地開墾事業        |
| 6 ツェデンバルとの関係   | 16 私たちの正義         |
| 7 ソ連留学         | 17 反逆者として         |
| 8 マルクス・レーニン主義室 | 18 モンゴルの伝統技術      |
| 9 ゴビアルタイ県にて    | 19 刑務所での生活        |
| 10 国営農場管理局長に   | 20 20年後のツェデンバルの更迭 |
|                | 21 民主化以降          |

### 解説

国立民族学博物館調査報告SER41号(日本語版)およびSER42号(モンゴル語版)やその普及版とも言うべき『モンゴルの二十世紀—社会主義を生きた人びとの証言』(中央公論社)では、社会主義時代に農業部門を担った政治家としてSh.ゴンガールドジ氏に対するインタビューを掲載した。そのインタビューにおいて、Sh.ゴンガールドジ氏の恐い上司として登場するのがTs.ローホーズ氏である。

モンゴル高原では、その縁辺部や水利の便のよい一部の地域において農耕が行われてきたけれども、国家経済を担う1分野として本格的に農業部門が確立されたのは20世紀後半である。言い換えれば、農業部門の確立は、社会主義時代の主要な経済目標の1つであった。Ts.ローホーズこそは、この部門の設立史をひもとくにあたってもっとも重要なキーパーソンである。

それゆえに私は彼との面会を強く希望していたが、先述のSh.ゴンガールドジ氏にインタビューを行った2001年8月の時点では、Ts.ローホーズ氏との連絡がつかず、また体調が悪いとの噂を聞き、ひとたび断念した。そして、当時、農業専門家としてJICAから派遣されていた鈴木由紀夫氏に彼とのインタビューを託した。その後、鈴木氏が行ったインタビューは『モンゴル研究・日本モンゴル学会紀要』に掲載されている。もっぱら農業推進に関する聞き取り調査の結果が示されている。

また彼はしばしばTV番組にも登場するようになった。社会主義時代に30年余にわたって追放されていたことが民主系のTV局によって取り上げられたのである。それゆえに、番組では往々にして、偽装離婚しなければならなかったなど党からの除名や地方

追放の悲惨さにもっぱら焦点がしばられていた。そうしたエピソードも興味深いが、より重要なのは彼の特異な人生経験を、当時の社会の反映として包括的に理解することであろう。

そこで、2005年6月8日と10日の2日間にわたって長時間のインタビューを行った。さらに、2005年11月には来日していただき、国立民族学博物館においてモンゴル現代史に興味をもつ人びとに公開しつつ、その語りを聞いた。モンゴルおよび日本におけるこれらのインタビューはのべ20時間に及ぶ。あまりに長いため、言及されている時代が前後する場合には、部分的に順序を入れ替えるなどして語りのテキストを再構成した。したがって、本書のテキストは語られたままではない。時間にかかわる順序の入れ替えを含めてここに掲載する全文について、Ts. ローホーズ氏自身から承諾を得ている。

Ts. ローホーズ氏は1964年のモンゴル人民革命党中央委員会第6回総会において、Y. ツェデンバル書記長をはげしく批判し、その結果、地方へ追放され、また監獄生活も余儀なくされた。そうした追放生活は1984年のY. ツェデンバルの解任まで続く。すなわち20年にわたって辛酸を舐めたのである。新しい政治体制が胎動したとき、彼は初代大統領候補に推薦されたものの、高齢を理由に辞退した。現在、彼は自宅に工房をもうけて多様な工芸品等の製造と販売に従事している。現在を自力で生きている彼には、自らの過去を回想記としてしるす意思は当面なさそうである。したがって、このインタビューはきわめて貴重な歴史証言になっている。

彼らの政治闘争が、Y. ツェデンバル書記長による独裁体制への批判であったことは明白である。批判の根拠として、人材登用方法などについても言及されていたが、全国の国営農場の経営に対して責任を持ち、また黒字経営を果たすことのできる能力を有していた彼にとって、もっとも問題視すべきは国家の経営であった。社会主義下における飛躍的な経済発展がひとたび鈍化の兆しを見せ始めていた頃である。また、それまでの飛躍的発展にも国際的な負債という大きな落とし穴のあることがもはや明らかになっていた時である。中ソ対立のあおりをうけ、モンゴルはソ連への従属性をいっそう高めていくことになった時期である。

なぜ、社会主義体制のもとで経済がうまく展開しなかったのだろうかという問いに対して、彼の追放生活は1つの回答を提供しているように思われる。意外にも、彼の追放生活は十分に楽しく、かつまた裕福になる道でもあった。彼が追放されているあいだにしていたことごとは、すべて禁じられていた経済活動である。言い換えれば、そうした創意工夫に満ちた経済活動を禁じていたのが社会主義だったのである。社会主義を生きる人びとにとって日常的な経済生活とは何であったかがこの語りによって「反証」されていると言えよう。それは同時に、農業や牧畜業の社会化を果たした道のりについて、その成果とともにその失敗原因をも明らかにしてくれる。

## 文 献

鈴木由紀夫

2005 「モンゴル社会主義の証人・ローホーズ氏へのインタビュー」『日本モンゴル学会紀要』53号, 87-97頁, 日本モンゴル学会。

LO：ツォグトオチリーン・ローホーズ

IL：イチンホルローギーン・ルハグワスレン

KY：小長谷有紀

## 1 1930年代のモンゴル

IL：ツォグトオチリーン・ローホーズさんは、20世紀のモンゴルの最も著名な政治家の1人であると評価されています。今回のインタビューを、あなたの子ども時代のようにすから始めてはどうでしょうか？何年にどこでお生まれになりましたか？子ども時代とご両親、ごきょうだいについてお話しいただけますか？

LO：そうですね。われわれモンゴル人の生活の話を聞きに遠方から来てくださり、うれしく思います。私は1923年、モンゴルの西部地域はモンゴルアルタイ大山脈のゴビアルタイの山々の中で生まれた人間です。子年生まれです。私の生まれ故郷はウランバートルから1,000キロ余り離れたところにあります。古い行政単位で言えば、ザサグトハン・アイマグ〔アイマグは行政単位〕のザサグトハン旗で、現在の行政単位で言えば、ゴビアルタイ県のチャンドマニ郡です。わが家がボトゴノ川というところで夏営していた時に私は生まれたのだそうです。父はラブジャーギーン・ツォグトオチルという人でした。父は社会的出自の点ではタイジだったのです。

IL：高貴な血筋の人をタイジと言うのですよね。

LO：そうです。チンギス・ハーンの「黄金の一族」の家系に生まれた高貴な血筋の人たちを「タイジ」と呼ぶという話があるでしょう（タイジは台吉、清朝がモンゴル貴族に与えた爵位）。私の父の父親ラブジャーは「トイン」という身分だったのです（トインは貴族出身の僧侶）。彼は「青い瑠璃のジンス（頂子）」〔頂子とは帽子上の球状の飾り。等級を色や材質で示す〕の家系を受け継いだタイジでした。兄弟にはゴンチグ・タイジとか、誰それタイジとか、タイジが大勢いました。この人たちは生まれながらのタイジだったのです。ラブジャー・トインの息子である私の父はタイジの家系の人ですね。私の故郷にはチンギスの血筋をひくタイジの家系の「フフ・ダンギーンハン」という一族がいました。父の血筋はそういうところから出ていたのですね。

母はバートルーン・ルハムジャブという人でした。母の父親ハルガイ・バートルはボ

グド・ハーン政権の時代に西部地域の防衛軍に加わった人です。娘が6人いたそうです。長女が私の母です。

私は5人きょうだいです。私の上に姉が2人、兄が1人、下には妹が1人です。私は4番目の子どもでした。私が幼いころ、姉は2人とも嫁に行き、その1人は子どもを2人、もう1人は子どもを5人もうけました。姉たちは牧畜をして生活していましたよ。

父は1932年に内務省に逮捕され、現在のザブハン県のオリヤスタイ刑務所に投獄されました。父の逮捕に関連して、ここでごく手短かに歴史を話しましょう。

1921年にモンゴルで人民革命が勝利しました。この時から人民政府の活動が始まります。1924年までは、モンゴルに社会主義を建設するかどうかということにははっきりしていませんでした。当時の人民政府の指導部はこの問題についての統一見解を持っていませんでした。一部の人びとが社会主義の建設を強く拒否する一方で、支持する傾向の人も一部いたようです。そんな状況の中、1924年を迎えました。1924年はモンゴルの現代史において転機の性格をもつ年になりました。1924年5月、モンゴルの仏教指導者ボグド・ジェプツンダムバ・ホトクトが寂滅されました。仏教はモンゴル社会に絶大な影響力をもっていたのですよ。

ボグド・ジェプツンダムバ・ホトクトは仏教指導者のみならずモンゴルの元首でもありました。1921年より前は、絶対君主でした。人民革命後、人民政府がボグドの権限を制限して制限君主にしたのです。私は、モンゴルの現代史家や学者がボグド・ジェプツンダムバ・ホトクトの死因についていつか真実を語るだろうと信じています。ボグドの死後に展開したいくつもの政治的事件から動かしがたい要因がわかります。

ボグド・ジェプツンダムバ・ホトクトがお亡くなりになる直前の1923年2月にも、もう1人亡くなっています。それは1921年の人民革命の指導者の1人D.スフバートルです。モンゴルの人びとは、スフバートルのことをこの革命の指導者の中で最も信頼にたる指導者で、熱烈な愛国者だと評価しています。モンゴル人民革命党史には「スフバートルは肺炎を患って亡くなった」と書かれています。しかし「それは彼が亡くなった原因ではない！」と疑念を持っている人が大勢います。これについては、人民革命党のイデオロギーから自由になった歴史家たちが発言することでしょう。

ボグド・ジェプツンダムバ・ホトクトがこんなふうになされた後、モンゴルの政治の世界にはいくつもの事件が1度に起こりました。まもなく1924年11月には第1回国家大会議が開催され、わが国最初の憲法が承認されました。この法律ではわが国の統治形態を「人民主権の共和制国家」と規定しています。こうしてハーンの位の継承は2度と行わないことを決めました。こういったことはすべて人民革命党が直接指導したのですよ。このころ、人民革命党は政権を握る唯一の政治勢力でした。モンゴルの発展や人びとの生活に関連するあらゆる問題がこの党の政策で決められていました。

1924年8月に人民革命党の第3回党大会が開かれ、モンゴルの将来の発展方向と路線の問題を取り上げて話し合いました。そしてモンゴルを以後「非資本主義的な道で発展させる」という政策方針を提示し、承認しました。この方針は「モンゴル人民革命党の基本方針」と呼ばれました。この方針の承認に、大会に参加した人民革命党指導部の一部はとて強く反対しました。ところが大会の最中にその人たちが逮捕され、問答無用で銃殺されるという恐ろしい事件が起きました。このように銃殺で命を失った人たちの中には、人民政府の著名な人物が含まれていました。

このような悲劇的な事件には、「共産主義インターナショナル（略称コミンテルン）」が大きな役割を果たしたとモンゴルの歴史には記されています。「共産主義インターナショナル」とは、ロシアで勝利した十月社会主義革命の指導者V. I. レーニンの提唱で1919年に設立された国際的労働運動組織です。コミンテルンの執行委員会はモスクワでその活動を行っていました。この組織の主な目的は、世界の社会主義革命を各地で勝利に導くことでした。世界の社会主義革命についての理論は19世紀半ばにドイツで生まれました。この理論の基礎はK.マルクスとF.エンゲルスが築きました。彼らは「社会主義革命は1国で勝利しただけでは達成されない。世界の資本家が結託して押さえ込んでしまう。だから万国のプロレタリアートは力を合わせ、社会主義革命を世界中で同時に勝利させる必要がある」と教えていました。2人は1848年に書いた『共産党宣言』という有名な著作の中で、初めてこの考えを提示したのです。彼らは「万国のプロレタリアートよ、団結せよ！」という有名なスローガンをこのころ初めて掲げました。1924年までコミンテルンの活動はレーニンが指導していました。1943年にこの国際労働運動組織は自ら解散しました。設立以来約20年、「世界の社会主義革命」を各国で勝利させようとさまざまな「テロ」活動を行いましたが、何ら達成できなかったことが影響して、そういう決定に至ったのでしょうか。

モンゴル人民革命党の歴史において第3回党大会は特別な位置を占めています。この時から世襲貴族やタイジといった上層の人びと、仏教の高僧たちを「抑圧階級」と見なすようになったのです。そして彼らのことを「階級の敵」とか「反革命分子」と規定し、即刻殲滅するという政策を実行し始めたのです。1923年1月に人民政府は、「モンゴル諸ザサグおよび非ザサグ王公権限規則」、「モンゴル国地方行政規則」という文書を成立させ、公布していました。この2つの文書は世襲貴族、タイジたちを社会生活からつまはじきにし、「階級の敵」として殲滅するのに重要な役割を果たしたはずですが。

ところが、第3回党大会以降、人民革命党内ではこの問題について、ふたたび意見が食い違い、分裂が生じていました。第3回党大会決定の実施を拒否し、それに反対した一部の党員が人民革命党指導部にいたのです。その人たちのことを歴史では「右派」と記しています。一方、この決定を支持し、直ちに実施するために活動していた一部の党員のことは「左派」と呼ぶようになりました。この人たちの闘争は、かなりの年月続

きました。最初のうちは「右派」が優勢でした。彼らは大衆に対して、自分の力に応じて蓄財し、生活を豊かにすることを呼びかけていました。この政策は国民から大いに支持されたのでした。

しかし、「右派」は結局負けました。1928年10月に第7回人民革命党大会が開かれ、「右派」は党指導部から追放され、党からも除名されました。この人たちはのちにみな逮捕され、処刑されたのです。この時から党指導部では「左派」が多数派となり、自分たちの政策を実行に移し始めました。彼ら「左派」は第7回党大会で「抑圧階級」の経済力を一掃するという目標を提示しました。こうして財産を持った裕福な市民やかつての貴族・タイジたちの財産没収という決定が打ち出されたのです。1929年、財産没収国家中央委員会が国家小会議に付設されました。この委員会が全国的に財産没収事業を指導しました。

この事業の一環として、仏教寺院の財産や、寺院が管轄していた家畜の没収が始まりました。この事業は「ジャス・カンパニア」という名前でモンゴル史に残りました。1930年、「左派」の指導のもと、第8回党大会が開かれました。この党大会は、人民の私有財産である家畜を社会化し、たくさんのコルホーズを設立する決定を出したのです。こうして、人民の私有財産である家畜の強制的な社会化が始まりました。これは「モンゴルでの速やかな社会主義建設という目標から生じた決定である」と、当時、党指導部で多数派になっていた「左派」は説明していました。仏教寺院から没収した家畜を、新しく設立したコルホーズに与えるようになりました。

1930年、党と人民政府は、「外国貿易における国家の特権」を確立しました。外国貿易特権が国家の管理下に移行し、個人貿易はほとんど禁止になりました。この時から、国営商業機関と消費協同組合を通じて外国から輸入された製品が取引されるようになりました。それと同時に人びとの日用品不足が横行し始めました。日用品不足はわが国では1990年代まで続いたのですよ。

1920年代末から1930年代初めに開催された人民革命党大会で打ち出された、こうした諸々の決定は、国家の発展に多大な障害をもたらす非常に誤った決定でした。

このようなできごとが起こる中で、このような原因のせいで、父は1932年に逮捕されました。内務省は父に対して死刑を宣告しました。父のことも「階級の敵」「反革命」と見なしたのでしょう。当時、父のように単に「高貴な血筋」の世襲貴族、タイジ出身だったというだけの理由で内務省に逮捕され、死刑を言い渡された人は全国でたいへん大勢いたようです。ところが、父は獄中にあるあいだに衰弱して危篤状態になりました。そして父は釈放されました。ただし、釈放の理由はこの衰弱とは関係なかったでしょうがね。1930年代初め、人民革命党の政策を嫌った人民の不満は最高潮に達し、モンゴルのほとんどすべての県で人民蜂起が起こっていました。蜂起した人たちは、強制的に設立されたコルホーズと中央消費組合・商業機関の解体を始めたのです。こう

いった蜂起のことをモンゴルの歴史では「僧侶らの反革命反乱」と記しています。それは、人民の中で自然発生的に、何の組織もなく始まったこの蜂起に仏教の僧侶たちが大勢参加したからです。人民革命党と人民政府はこれらの蜂起を内務省軍と人民義勇軍の力で鎮圧し、首謀者たちを逮捕しました。人民革命党の政策を実施する過程で生まれたこの状況について人民政府は総括し、それまでに出したいくつもの誤った決定を急いで取り消し始めました。こうして私の父は監獄から釈放されて来たのですよ。父と一緒にオリヤスタイ刑務所に投獄されていたわずかな人が釈放されたようです。しかし、多くの無実の人が、釈放もかなわず処刑されたようです。父が釈放されたころの人民政府の政策をモンゴル史では「新転換政策」と呼んでいます。このころから、人民革命党のあまりにも大きな権限を制限し、党の政策や決定に従うことを拒否する傾向が強くなってきました。党の政策を直ちに実施したために国家が危機に瀕しているということを人民政府の指導部が理解し始めたのです。しかし「新転換政策」は長く続くことができず、まもなく終わりました。

内務省が父を逮捕して連行した年、私たちの生活にはもう1つ大きな事件が起きました。1932年に兄が人民軍に召集されたのです。当時、わが国には18～25歳の者は全員兵役に服するという法律がありました。兄はウランバートルで兵役に就いていました。そして、ある不幸なできごとのために兄は亡くなりました。兄が召集を受けた当時は、国内情勢がとても不安定で、すべてにおいて不安な時代だったのですよ。モンゴルのほとんど全県で「僧侶らの反革命反乱」が起きていた時代です。兄はウランバートルの白い兵営（ツァガーン・ホアラン）で兵役に就いていました。内務省軍と人民義勇軍は蜂起や混乱の起きた主だった県へ行ってそれらを鎮圧し、蜂起の首謀者たちを逮捕する活動を遂行していました。兄が実際にそういった活動をしていたのかどうかはわかりません。このような微妙で困難な時に、兵士たちが暮らすツァガーン・ホアランの、軍の飲料水を供給する井戸に、毒の石灰が入れられて兵士たちが大勢殺されるという事件が起きたのです。この事件は、党と政府が進めていた政策を嫌い、恨みを持った誰かが故意にしたことかもしれません。大勢の人が亡くなったそうですよ。こうして私の兄は亡くなったのです。

兄が亡くなったその年、母も亡くなったのですよ。それは父が刑務所から出て来て2年が過ぎたころのことでした。当時、まもなく私の妹が生まれようとしていました。このころに兄が亡くなったという知らせが来ました。知らせを聞き、妹を産んだ後、母は産後の肥立ちが悪く、亡くなったのです。その時、母は44歳くらいの若さでした。こうして家には生まれたばかりの妹と父、それに私の3人が残されました。当時、私は14歳でした。2人の姉がそれぞれよそで生活するようになったころです。

しかし、国家と人民の生活には平穏がまだ確立されていない時代でもありました。1930年代半ばから、以前にも増して危険で悲劇的な事件が起り始めたのです。その



ことをモンゴル史では「個人崇拜」と呼んでいます。「個人崇拜」という名のもと、モンゴルでどんな事件が起きたのでしょうか？何よりも、政治的冤罪によって何千人もの無実のモンゴル人が処刑され、命を落としました。このことをモンゴル史では「政治的弾圧（肅清）」と呼びました。「政治的弾圧」は1937～38年に頂点に達しました。モンゴルでの「政治的弾圧」の展開には首相のKh.チョイバルサン元帥が大きな役割を果たしたと人民革命党史には記されています。

チョイバルサンはモンゴル人民革命党の創設者の1人で、1921年の人民革命を勝利に導いた愛国者の1人です。彼は1895年、セツェンハン盟のサンベイセ旗に生まれた人です。1921年にD.スフバートルが人民義勇軍を創設し、モンゴルに駐留していたロシアの白軍部隊や中国の国民党軍と戦ってモンゴルから追い出す時に、チョイバルサンが加わって目覚ましい手柄を立てたのです。1921年7月にスフバートル全軍司令官の命令で、チョイバルサン率いる西部方面特別部隊は首都フレーに駐留していたロシア白軍のバロン・ウンゲルン軍とみごとに戦い、モンゴル国の首都イフ・フレーの解放に参加しました。チョイバルサンはモンゴル人民義勇軍のすぐれた指導者の1人だったのです。1921年の人民革命勝利後、チョイバルサンは国や政府の高官には任命されていなかったのですが、第3回人民革命党大会以降、かなり活発に政治活動に加わるようになりました。1929年には財産没収中央委員会の委員長に任命され、立派にこの仕事をやり遂げたそうです。チョイバルサンは1936年に内務大臣、1937年に首相、国防大臣、全軍司令官に任命されました。このころからチョイバルサンが人民革命党の活動をほとんど1人で指導するようになったのです。こうしてその手には党と政府のあらゆる権限が集中しました。この状況がモンゴルでの「個人崇拜」に拍車をかけ、「政治的弾圧」が横行する条件を整えたと言えます。

1921年から1937年までのあいだにモンゴルでは合計およそ3万人が政治的冤罪で処刑されたという証言があります。そういった中の大きなものを挙げれば、20年代初めの「ボドーラの事件」に始まり、30年代半ばの「ルムベ事件」、「ゲンデン、デミドらの反革命組織」、「アマル、トブチンらの反革命事件」、「ロブサンシャラブ、ロソル、ドグソムらの事件」、「ヨンゾン・ハンボ、副ハンボらの反革命組織」などです。こういった事件はすべて「捏造」だったわけで、非常に大勢の人が巻き込まれ、してもいない罪を着せられ、たと誹謗され、裁判にかけられ、死刑を宣告されて、みな、銃殺されました。こうして処刑された人たちの中には人民政府の著名な高官が含まれていました。たとえば、3人の首相が「捏造」の事件の汚名を着せられ処刑されています。人民政府の創設者や国家小会議の議長、大臣、軍の高官、仏教の高僧、何千人もの一般僧侶も含まれ、処刑されて命を失ったのです。

当然、これほどの規模の政治的弾圧をチョイバルサン1人が発案し、遂行したわけではありません。人民革命党史では、この事件にはソ連共産党の政策の影響がとても大

きいと記しています。とりわけソ連共産党中央委員会書記長で閣僚会議議長のI.V.スターリンの直接の「助言」が多大な役割を果たしたと記されています。スターリンはソ連で大規模な、実に恐ろしい「粛清」を自らの手で行った、血塗られた独裁者です。

わが国の首相ペルジディーン・ゲンデンは短気な人だったと言われます。ゲンデンはアルバイヘールの平原で少年期を過ごした、すばらしく普通の、善良なモンゴル人でした。数多くの僧侶に関して実施すべき政策について与えられた「助言」を聞いてゲンデン首相は怒り、スターリンを平手打ちにしたという証言があります。2つの独立国の元首が会って、それぞれの国で実施中の政策について意見交換をし、経験を分かち合い、お互いに「助言」を与えるというのはいりうることですよ。スターリンがゲンデンにどんな「助言」をしていたかは簡単に推測できます。スターリン時代、ロシア正教は事実上、廃止されたのではないですか。

人民政府で要職を務めていて処刑された人たちの大半は、党の進めていた政策と何がしかの見解の相違があったことが、彼らのこのような「捏造」による中傷と処刑に直接影響を与えたと思います。当時、モンゴルの国外政治情勢がたいへん厳しくなっていたことも、弾圧のさらなる激化につながったでしょう。つまり、国外の資本主義国、たとえば資本主義日本と戦争することになれば、人民革命党と意見の合わないこういった「国内の敵」が国外の敵と結んで重大な危険を国家にもたらしかねないと、党指導部は警戒したのでしょう。そして戦争が始まる前に「国内の敵」を撲滅したというわけです。これはハルハ河戦争〔日本では「ノモンハン事件」と呼ばれる〕の直前に起きた事件なのです。私たちはこんな状況の中でハルハ河戦争を戦ってきたのですよ。

## 2 小学校時代

KY：1932年に内務省はあなたのお父様を逮捕しましたが、財産も没収しましたか？

LO：父には没収されるような財産はありませんでした。うちは家畜もわずかしかなかったのです。全部で100頭ちょっとだったでしょう。乗用馬と、乳牛と、食用の羊しかいない家でした。タイジには「隋丁（ハムジラガ）のいるタイジ」と「隋丁のいないタイジ」という2種類ありました。父は「随丁のいないタイジ」です。こういうタイジのことを「ホヒ・タイジ（貧しいタイジ）」と呼ぶのですよ。父はとても勤勉な人でした。また、先をよく見通す人だったようです。父は家畜を放牧する傍ら、いつも家で物を作る人でした。家畜の皮革をなめして子どもたちの着る物をすべて手ずから作ってくれ、家畜の頭絡、足かせ、革網など何でも自分で仕上げていました。木工の仕事もして、ゲル（モンゴルの移動式住居）の木製部品や、家具の長持、寝台、戸棚、乳搾り用の木桶などもすべて自分で作っていました。時には金属細工もして、はみ、ダロールガ〔鞍を固定するための金具〕、モンゴル式の錠前、ナイフ、錐などを作ることもできました。

およそ1921年の人民革命以前には、モンゴル人は自分の使うものは何でも自分で作っていましたよ。わが国では「家内工業」がとても発達していたのです。自分たちの使う物を作る方法や技術がとても高度に発達していました。これは何千年ものあいだ、試練に耐えてきた方法と技術だったのですよ。時の試練に耐えたものが残り、ますます豊かになり、発達していたのです。私の見るところ、1921年の人民革命後、国営商業機関と消費組合が設立され、出来合いの商品を供給するシステムが確立すると、「家内工業」が廃れ、消滅する道に入ったのです。物作りの方法や技術も忘れられ、作る人が減り始めました。のちに私はモンゴル人民革命党から追放され、地方を指定され、内務省の管轄のもとに地方へ追われて生活しましたが、その時このことがよくわかったのです。人びとは出来合いの物を買って使うようになってしまいました。これはたいへん危険な否定的影響を伴っていきます。新しいものが生まれればその一方では必ず否定的な現象があらわれてくるのですよ。1920年代半ばから国営商業機関と消費組合が作られたことは、その後のモンゴル社会に非常に有害な否定的影響を伴ってきたと私は思います。父は貧しい人たちを集め、皮革のなめし方、フェルトの作り方、金属細工や木工の作業のしかたを教えてやっていました。つまり、その人たちに生活の知恵を教えてあげる人だったわけですよ。

母と兄が亡くなったあと、父は私を小学校に入れました。当時は小学校のことは「テンヒム（学堂）」と呼んでいました。私たちのアルタイ地方には学校がまったくありませんでした。国営商業機関、消費組合もありませんでした。こういったものはみな、かなり遅れてできたものです。1922～23年、ウランバートルに最初の学校が設立されていたはずですよ。アルタイ地方にはその十数年後、最初の学校が開かれました。1935年、ゴビアルタイ県のチャンドマニ、エルデネ、ビゲル、バヤンツァガーン、バヤンウンドゥルといった5つの郡のあいだに最初の小学校が設立されたのでした。

父は私を小学校に入れる時、かなり先のことまで考えたようです。「新しい国と政府ができた。新しい時代が来ている。息子にはこの新しい時代の学問を学ばせよう！将来、この新しい時代に生き延びていくために必要になる！」と考えたようです。また、兄が兵役に就いて残念なことに亡くなったというできごとも、影響を与えたかもしれません。当時、人びとは自分の子どもを学校に行かせるのをとても嫌がっていましたよ。誰もが私有財産を持ち、家畜がたくさんいた時代のことですよ。教師たちは家々を訪ね、学校を宣伝してまわりました。「学校で学ぶことは生活に必要な、良いことなのだ」と説いて回ったのです。人びとはそれをほとんど受け入れていませんでした。当時、人びとが重要だと考えていたのは、子どもを僧侶にすることだったのですよ。

**KY**：あなたは学校に入るために家を出てしまったのですか？

**LO**：そうです。私たちの西部地域に設立されたその最初の小学校は、7つか8つのゲルでできていました。子どもたちは馬で両親に送り届けてもらい、そのゲルで生活し

ていました。そのゲルが「寄宿舎」ですよ。初期は全国規模で学校の寄宿舎をこのようにゲルに設けていたのです。のちにはゲルの代わりに建物が作られましたがね。私の学校の子どもたちは両親に作ってもらった普段着で来たものでした。学校に来たあとで、おそろいの服が支給されていました。たとえば、冬用の白い子羊の帽子、毛皮つきのデール〔モンゴルの民族服〕、フェルト製のロシア靴、春秋用の緑か褐色の綿入れデールといった衣類を支給していました。他地方の事例を見ると、最初のうち、子どもたちは家を恋しがって学校から脱走することも多かったようです。それで私たちの地方では子どもたちを学校に引き寄せ、学校を好きにさせる目的でいろいろな工夫をしたのです。学校は子どもたちに1日3食提供していました。生徒たちが食事をする「厨房ゲル」が別にありました。学校のゲルというのは、郡の中心地にあるのですよ。郡の中心地には郡役場、病院、小学校、家畜病院といった公的施設がありました。また「モンゴル人民革命党細胞（支部のこと）」、「モンゴル革命青年同盟細胞」が必ずあります。郡中心地の公的機関の職員は、毎週土日の休日に順番に、生徒たちを遊びに連れて行きました。郡中心地から出て、子どもたちを競走させたり、相撲をとらせたりしていました。また、歌や踊りをさせます。一番になった子どもにはご褒美に飴やお菓子を与えます。こういうさまざまな活動が行われていました。

**KY**：あなたの学校では、子どもが脱走したことはありますか？

**LO**：ほとんどありませんでしたよ。欠席許可をもらってから家に帰っていました。当時は子どもが学校から脱走するというのはいくらか減っていたのですよ。それに子どもたちをよく外へ連れ出していましたからね。学んでいた生徒たちは、年齢で言ってもそれほど幼い子どもではありませんでした。私はといえば14歳にもなった1年生でした。10歳未満の子どもはほとんどいなかったと思います。みな10歳以上で、中にはすでに16～17歳になってから入学した者もいたでしょう。それで19～20歳になってようやく小学校4年生を終えていたのですよ。

私たちは「モンゴル文字」の「アルファベット」,「算数」,「地理」という科目を習っていました。モンゴル文字の読み書きを教わっていました。「算数」の授業では加減乗除を習いました。それから「地理」の授業では、「世界政治地図」で、どんな国がどこにあるかの区別を覚えます。それから「自然学」という科目を習いました。世界の人口、植物、動物の発生、太陽や月、星、惑星の位置などを教えます。およそ近代的な知識の初歩的な情報を私が獲得したのは、このころだったでしょう。

私の学校には先生が3人いました。うちの郡には読み書きがよくできて、教師になれるような人はいませんでした。みなよその郡から来た先生たちでした。校長はD.ゴンチグという先生でした。ゴンチグ先生はウランバートルで師範学校を卒業し、私たちの県のタイシル郡に設立された小学校で教鞭をとっていました。タイシル郡の小学校は、私たちの県に設立された最初の小学校でした。他に、S.ヤドマー、Kh.ロチンとい

う2人の先生がいました。ヤドマー先生は私たちの県のトゥグルグ郡の人で、ロチン先生はエルデネ郡の人でした。この3人が私の最初の先生です。ゴンチグ先生は私に「モンゴル文字」を教えていました。先生はとても字が上手でした。私はそれを真似て上手に書こうと努めたものです。

ゴンチグ先生は授業以外の時間に、子どもたちとボール遊びをしました。当時、ボールはめったにないもので、それで遊ぶ人はほとんどいなかったのですよ。こうして都市の文化が、わずかではありましたが入って来ていたのですね。

当時、ペンや鉛筆、ノート、本は貴重品でした。鉛筆、鉄ペン、ペンを浸して書くインクがありました。わが国では昔、「灰板」を使っていました。木に油を塗り、その上に灰を平らに塗って、そこに細い木で絵や字を書いたのですよ。私が小学校で学んでいた時分にはそういう板は使われなくなって、その代わりに「木板」を使うようになっていました。鉛筆やノートは学校から支給されました。そういうノートや鉛筆は外国から入って来ていたのでしょう。ペンや鉛筆はとても高価でした。私たちは学校から支給された鉛筆を、帰省する時に持ち帰ったものでした。学校で学んでいない子どもたちがそれに興味を持つので、親たちは羊と交換して子どもたちに与えていました。私も自分の鉛筆を羊と交換して、羊を手に入れたことのある人間なのですよ。

私の学校では全部で20人余りの子どもが学んでいました。女の子はとてもわずかでした。女の子はだいたい2～3人しかいなかったと思います。それ以外は男の子でした。この子たちは卒業後、勉強を続けるために全員ウランバートルへ行きました。これは1939年ごろのことです。

当時、ウランバートルには大学はありませんでしたが、専門学校が5校ありました。「医療」、「獣医」、「師範」、「通信」、「財政」の5つの専門学校でした。この5校は20年代末に設立されたのでしょうか。私は最初、同じ学校の卒業生の中で1人だけ地元に残りました。私のいた学校の生徒たちは全員、専門学校で学ぶためにウランバートルへ行きました。うちは母が亡くなりましたし、兄も軍隊に行って亡くなりましたからね。郡の幹部には、わが家のこの状況がかなり厳しい印象を与えたのでしょうか。幹部の人たちは私に「家に残らせ、父親を手伝わせよう」と考えたのでしょうか。他の子どもたちと一緒にウランバートルへは行かせませんでした。

その年、私は郡の「モンゴル革命青年同盟細胞」の細胞長として選ばれました。革命青年同盟の細胞は当時ほとんど各郡にあったはずですよ。私は小学校在学中に革命青年同盟員に加わりました。およそのところ当時16歳になり、学校で学んでいる生徒はすべて自動的に革命青年同盟員に加盟させていたのです。こういうやり方はずっとのちの90年代まで続いたのですよ。革命青年同盟は1921年8月に創設されたと考えられています。「人民革命党の片腕かつ予備軍は革命青年同盟である」と見なされていました。モンゴルにおけるこの青年政治組織は設立当初から、人民革命党の政策の実施に大きな

役割を果たしていたのです。人民革命党が行っていた大規模な政治キャンペーンには革命青年同盟員が直ちに動員されたものです。私はこのような仕事を5月から9月までしました。私たちの革命青年同盟細胞には同盟員が20数人いました。

革命青年同盟の細胞長は月に1度、同盟員会議を開いていました。会議ではさまざまな問題を話し合うのですよ。主に郡や地方で起きているさまざまなできごとについて検討します。また、郡や地方で行われている、人手の必要な作業に加わったものです。当時、全国規模で「畜毛は黄金」運動が展開されていました。およそ羊毛だけではなく、家畜からとれる素材、肉、乳を安い値段で国に納める計画を、家畜数に応じて各家庭に割り当てていたのです。各家庭はこのような品目を必ず国家に納めなくてはならなかったので、それを「義務」と呼びました。

私は革命青年同盟細胞の成員の「畜毛は黄金」活動への参加を指導していました。当時、わが国では羊毛をあまり利用していませんでした。毛を刈るのは雄羊だけで、雌羊の毛は刈っていませんでした。雄羊の毛は年2回刈ります。春に刈った羊毛を「オルティン・ノース（長い羊毛）」、秋に刈った羊毛を「アハリン・ノース（短い羊毛）」と呼びます。羊毛で作るのは主にフェルトです。時には牛の毛と混ぜて縄をなったものです。カシミア毛や山羊の毛の利用は少しでした。しかし、ラクダの毛はよく利用しました。ヤクの毛はラクダのたてがみと混ぜて縄をないました。こういう縄で荷縄やゲルのブスルール〔ゲルの胴にまわして固定するロープ〕や紐を作ります。30年代末、モンゴル政府はソ連に対する羊毛・カシミア調達協定を結んだはずですが。私は革命青年同盟細胞の成員を集めて、1人につき大袋3つの毛を集めるという課題を与えていました。私たちは3袋の毛を集めるというこの課題を遂行するために、人の家に行って落ちている毛を拾ったものです。当時、宿营地では羊毛がたくさん放置されていました。とくに春营地にはたくさん放置されていました。羊毛は春に体から離れてくるのですよ。この時に刈り取らなくてはなりません。刈り取らなければ羊毛は自然に落ちて、そのままにされるのです。私たちはこうして落ちたままになった羊毛を全部拾い集め、郡の消費組合に納めました。私たちは羊の毛刈りの作業にはあまり参加しませんでした。打ち捨てられた羊毛ならたくさん拾いましたよ。

革命青年同盟の細胞長だった時に私がしていたもう1つ別の仕事は「教宣活動」でした。当時、憲法の承認と公布が準備中でした。私は各家庭を訪問し、新しく公布されようとしている憲法草案について話をしたものです。こういった活動は郡の人民革命党細胞長の直接の指導のもとです。私がこういう仕事をしていたところ、ザブハン県のSh.ゴンチグ財政課長という人がうちの郡に派遣されてきました。私はその人と一緒にいなかの家々をまわり、教宣活動をするようになりました。

ある日、その人が、

「君はなかなかよく文字を知っている子だね！なぜウランバートルの学校へ行かな

かったのだい？」と私に尋ねます。小学校の同級生はみな進学したが、自分は家庭の事情で進学せずに残ったことをその人に言いました。

「それでは、君自身はウランバートルの学校に行きたい気持ちはあるのかい？」と私に訊きます。

私は、

「勉強したい気持ちならあるのです！でも、もう進学の期限は過ぎたでしょう！」と彼に言いました。ゴンチグ氏はこのことを2度と口にはせず、まもなく帰ってしまいました。ところがまもなく、県の財政課から、私を財政専門学校に派遣して学ばせるという内容の「公文書」が来たのです。私はその文書を父に見せました。父はすぐに「行け、行け！行って勉強しろ！」と言います。こうして私はゴンチグという人の助けを得て、ウランバートルの財政専門学校で学ぶことになったのです。

### 3 ウランバートルの生活

KY：ウランバートルに初めていらしたのは何年ですか？

LO：1939年の秋も深まったころですよ。私は郵便自動車でウランバートルに来ました。私たちの県には郵便自動車がありませんでした。けれどもザブハン県には来ていました。ウランバートルへ行く目的の人が何人も地元から一緒に出発しました。私たちがザブハン県に到着してみると、郵便自動車がまだ来ません。そこで何日も待った末に1台のロシア製自動車に来て、私たちは乗り込みました。その車は道中何度も故障しては止まり、私たちはみなで協力して車を直しては走り、直しては走り、ウランバートルに向かいました。いなかの私たちが車を修理できるわけではありませんよ。運転手を手伝うのです。私たちは車のエンジンを3度分解したように思います。最後は現在のトゥブ県のルン郡にあるツェゲーン湖の近くで故障して止まりました。

運転手は、

「ピストンが割れた！」と言います。「ピストン」とは何だろう？それを直せるものだろうか？直せないものだろうか？ちっともわかりません！それで何もせずにいました。

運転手が、

「歩いたらウランバートルはとても遠いぞ！」と言っていました。そうして運転手は、ホスタイ山へ行き、カバノキを切って来るよう私たちに指示しました。私たちの切ってきたカバノキを削ってその自動車に合うように「ピストン」を作り、エンジンをかけました。こうして私たちはウランバートルに向かいました。

そこからウランバートルまで約130キロだということはのちに知りました。「自動車のピストンをカバノキを削って作った」などという話を聞いても今の若い人には信じがたいでしょうねえ。だいたい、当時から今に至るまで、モンゴルの運転手には1つ恐

ろしくたいへんな困難があるのですよ。それは「自動車の交換部品問題」です。モンゴルのように土地が広大で人の少ない国には、自動車ほど適した輸送手段はないでしょう。しかし、よく整備された道のないわが国の環境では、自動車の故障は必然的に起こることの1つです。冬の1月、マイナス40度の夜中、遠距離輸送のトラックがアルタイ山脈を走ったり、あるいはプラス50度の灼熱の夏の日、ガルビーン・ゴビを走ったりしている時に故障して止まってしまったらどうしますか？修理工場に電話しますか？電話もなく、修理工場もなければどうしますか？そういう場合、運転手が車を修理するよりほかに方法はありますか。そういうわけでモンゴルの運転手はみな自動車の修理に慣れています。本来、「交換用部品」というものがあるでしょう。それもやはりモンゴルにないものの1つなのです。モンゴルは国内で自動車を製造していない国ですからね。ですから壊れた古い部品を直すしかないのですよ。「ピストン」であれ、ほかの何であれ、すべてをモンゴルの運転手は自分で直していたのです。これは実にまったくモンゴルの驚異だと言っても良いでしょうね。木であれ鉄であれ、代用できるあらゆるもので代用していたのでしょう。モンゴルには「モンゴルチロフ」という言葉があります。これはあらゆる機械の部品を「モンゴル式」に代用して修理するという意味です。

最近外国のさまざまな自動車がウランバートルの街に納まりきらなくらい数多くなりました。自分の車のガソリンタンクがどこにあるかも知らない運転手が増えたと言いたことがあります。時代は大きく変わりました。当時、私たちはウランバートルの姿を目にするまで、道中およそ20泊していましたよ。私たちの乗って来た車はロシア製でした。ソ連で製造されたプルという車だったと思います。もともと1920年代初め、モンゴルではアメリカ製の自動車はかなり増えていたのです。モンゴル人はそれを「シレン・フォード（ガラスのフォード）」と呼んでいました。個人で「シレン・フォード」を所有する人もちらほらいたのです。自動車をよく使うのは主に外国の会社だったでしょう。このころモンゴルでは、アメリカ、ドイツ、ロシアの会社はかなり活発に活動するようになっていました。日本の会社がモンゴルに入って来ていたという話は、私は聞いたことがありません。ただ、日本人はモンゴル市場に関心を持っていたかもしれません。いずれにせよ、日本政府の工作員が商人のふりをしてイフ・フレーに来ていたということは、あとになって読んだことがあります。

当時、モンゴル市場では中国が支配する傾向にあったと言われます。20世紀初め、国内の混乱に疲弊した清朝が崩壊しましたね。その後、中国〔中華民国〕が誕生しました。中国は清朝を正式に後継した国ではないと私は考えています。しかし、清朝の崩壊は世界政治の舞台に未曾有の統一中国が誕生する条件を整えたでしょう。こうして漢人が自らの国家と政府を掌握することになりました。それ以前には、モンゴルやマンジュ（満洲）といった草原の遊牧民が現在の中国の土地に、自分たちの国を何百年間も代わる代わる作ってきたという歴史があります。この歴史はいくつにも分裂し、統一されて



いなかった漢人の統一など、数多くの肯定的な結果を伴いました。新たに誕生した中国はモンゴル市場を支配するために、当時、他の諸外国と激しい競争をする必要が出てきました。モンゴルと直接国境を接して存在するという地理的な位置が、中国をかなり有利にしていたかもしれません。1924年に開催された第3回人民革命党大会以降、モンゴル経済からの「外国資本駆逐政策」の実施が始まりました。1930年、モンゴル政府は「外国貿易特権」を国家の管轄下に置いたのです。この時から外国の会社、なかでも中国の高利貸会社は完全にモンゴルから出て行きました。

私たちが初めてウランバートルに到着したころは、ラジオや電灯をたくさん使うようになっていた時期です。私のいなかにはそういうものがまだ入って来ていないころですよ。私がこういったものを初めて見たのは、ウランバートルに来てからのことです。ウランバートルは私にはとても大きな街のように思われました。しかし、当時のウランバートルを今のウランバートルと比べれば、笑ってしまうような絵になるはずですよ。当時は、3階建ての建物は1つありませんでした。2階建ての建物は2～3あったように思います。今の政府庁舎のあたりにはゲルのようにまるい形で緑色の屋根の劇場がありました。その劇場は、ドイツ人の設計で建てられたと言われていたように思います。モンゴル人はそれを「ブンプグル・ノゴーン（まるい緑）」と呼んでいました。現在の美術館の建物には国営百貨店がありました。人びとはそれを「ウンドゥル・ホルショー（のっぼの組合商店）」と呼んでいました。「レーニン・クラブ」は今あるまさにあの場所にありました。現在アルド映画館のあるあたりには人民革命党ウランバートル市委員会がありました。

現在の教育大学の校舎は当時2階建てでした。当時も赤い色をしていました。その2階にモンゴル国政府が置かれていました。そこには、首相のチョイバルサン元帥の執務室もありました。建物の1階の奥の端に師範学校が置かれていました。現在の人民革命党中央本部のあたりには、小さくて白い建物がありました。それが人民革命党中央委員会だったのです。そこから東へ裁判所、ソ連大使館がありました。その東にある「アメリカの丘」にはアメリカの諸々の会社の現地事務所がありました。ドイツの会社は裁判所の近くにありました。

当時、ガンダンテグチンレン寺にあるジャンライサグ仏（観音大仏像）はとても目立ちました。それをモンゴル人は「ウンドゥル・ジャンライサグ」と言うのですよ。19世紀の末、ボグド・ジェブツンダムバ・ホトクトの視力が落ち、物がよく見えなくなりました。ボグドに視力を取り戻させるためにジャンライサグ仏を作ったと言われますね。のちに本で読んだ、建立にまつわる話は今でも記憶から離れません。ウンドゥル・ジャンライサグ仏の建立中、ロシアは自国の大使館で必要になったので、新しい建物を建て始めたのです。ところがその建物はわれわれのウンドゥル・ジャンライサグより高くなりそうだったようです。ガンダンテグチンレン寺の僧侶たちはロシア大使館に行き、

「あなたがたはこの建物を低くしろ！われわれのジャンライサグ仏より高くなってはならない！」という内容の要求をしたのでした。私たちが初めて来た時には、ウランバートルの人口が10万に届いていたかどうかはわかりません。そのくらいではあったでしょう。

**KY**：あなたがウランバートルにいらしたころ、外国人はたくさんいましたか？

**LO**：外国人はそれほど多くはありませんでした。外国人の大半は中国人でした。1921年の人民革命以前、イフ・フレーの東側にあるアムガランという小さい町はすべて中国商人の住む町でした。人民政府がモンゴル経済からの外国資本駆逐政策の実施を始めたことで、モンゴルで生活していた中国人の数は急激に減りました。彼らは中国の高利貸会社と一緒にモンゴルから出て行ったのです。それでわずかな数の中国人が残ったというわけです。

およそ中国人はどこに行っても気づいた時には大勢になってしまうものですよ。

1970年代中ごろ、モンゴルでは不法滞在している中国人を故郷に戻す仕事が組織されました。モンゴル国民になった中国人が生活するための特別地区をゾーンハラーあたりに作りました。するとウランバートルの中国人はとでも少なくなりました。ほとんどいなくなるまで減りましたよ。しかし、1990年代以降、いろいろな理由からモンゴルに中国人がたくさんやってくるようになりました。とりわけモンゴル政府が2000年から実施し始めた「ミレニアムロード」建設の援助によって多くの中国人が入って来るようになりました。そして中国人の不法滞在が増える結果を招いているのです。モンゴルに不法滞在している中国人は法律を守らないので、人びとは不安に感じているのです。

私が初めてウランバートルに来た時分は、中国人が大勢で住んでいる「ユスン・ゴダムジ」という名前の通りがありました。そこには床屋や食堂など中国人の個人経営の店が実にたくさんありました。そこに、肥汲みをする中国人が大勢暮らしていました。彼らは便所をさらい、汚物を馬車に積んで持って行き、野菜畑で肥やしとして利用していました。ウランバートル付近、たとえばオリヤスタイあたりには「中国の野菜畑」がありました。中国人の植えた野菜は中国人自身が食べていたのでしょうか。モンゴル人が中国人から野菜を買って食べるということはまるでないことでしたよ。便所の汚物を肥やしにしていることを知っていたからなのか、中国人から野菜は一切買っていませんでした。

当時ウランバートルでは馬車で人をよく運んでいました。ナライハから馬車で人が運ばれて来たものですよ。馬車に木樽を積み、それを水で一杯にして各家庭に配るということもしていました。各家庭は水をお金で買っていたのです。このような仕事は主にモンゴル人がしていました。中国人もしていましたがね。現在ゲセル廟のある場所には「シャーンザン」という中華料理屋がありました。そこで食事をしていたのは主に中国人だったと思います。さまざまな種類の料理の匂いと一緒につんとする悪臭がしていた

のは、いなかからやって来た私にはとても珍しく感じられたものですよ。

そこでは「スーデル・シー」や芝居もかかります。当時は映画のことを「スーデル・シー（影芝居）」と呼んでいてモンゴル人はよく観ていました。当時、ウランバートルの西側をチンゲルテイ川、東側をセルベ川が流れていました。その2つの川が合流してドンド川となりツール川に流れ込んでいました。セルベ川にかかる橋を「アルスラン橋」、チンゲルテイ川にかかる橋を「トゥムルジン橋」と言っていました。

そのトゥムルジン橋の近くには売店がたくさんありました。それはすべて小さな中国製品の売店でしたよ。金属や木の製品や布を縫って作った物を売っていました。モンゴル人は都会に暮らすことへの興味は長続きしないのです。モンゴル人は家畜を追ってなかなか生活するほうが良いと思っていました。ですから定住地で生活するモンゴル人は当時、とてもわずかでした。のちに、学校や文化施設ができてから、だんだんとウランバートル市の人口が増えたのです。

当時の「雑貨市場」は現在の「ブムブグル市場」のある場所にありました。休日にはとても大勢の人がその市場へ列をなしていました。冬季には地方からラクダの隊商で「乳製品」が入ってきます。また、ウランバートル北側の山からラクダで木材を運んで来て売ってもしました。当時はあらゆる物資が市場にはあったものですよ。ここでは馬、羊、牛といった家畜も売っていました。当時、家畜やその他の商品の値段はとても安いものでした。地方では雌羊が3～4トゥグルグ、種雄羊が5トゥグルグでした。ウランバートルではたしか5～10トゥグルグだったはずですよ。私は小学校卒業後、郡の革命青年同盟細胞長を務めていた時分、月額30トゥグルグの給料をもらっていました。初任給のうち5トゥグルグでズボン1本、シャツ1枚、包み紙にヤクの絵がついていて中に黒砂糖が入っている、ロシア製の飴1キロ、砂糖1箱、煙草を1包買いました。そうして残りの25トゥグルグと一緒にみな父に持って行ってあげたのでした。ズボンとシャツは自分用です。立派な「伊達男」になろうと思っていたのでしょうかね。その他はすべて父にあげました。息子が国の仕事に携わり、給料をもらうようになり、ますます父親を喜ばせていたということでしょうね。当時は、給料のもらえる仕事をする人は珍しかったのですよ。ですから現金を持っている人というのはほとんどいないのです。それで私は父に、

「3トゥグルグで羊を買って下さい！」とも言いました。当時、私の地元には家畜がたくさんいました。各家庭に羊が群でいたのですよ。ですから家畜取引の市場はありませんでした。みな家畜がたくさんいたので、家畜を買う人はまれでした。しかし、都市近郊の人たちは市場で売っていたでしょう。当時、ウランバートルの市場では家畜を紙幣でしか売りませんでしたよ。地方では家畜どうしを交換していました。

KY：初めて映画を観たのはどこですか？

LO：私たちのアルタイ西部に近代的な文化が入って来たのはウランバートルよりずっ

と遅れていたとお話ししましたね。われわれ子どもたちは夏には靴を履きません。羊の放牧に行く時も履きません。靴を履くのは秋に初雪が降ったあとですよ。秋、初雪が降った後のある日、私は羊の放牧に出かけていました。すると雷のように大きな音がします。空に雲はありませんでした。それに雷が鳴る季節でもないのに、私には何の音かわかりませんでした。驚いてあちこち見回しましたが、何も見あたりませんでした。夕方家に帰ると、人びとが私の家から遠くない場所を「自動車を通った」と話しています。「自動車」とは何のことだろう？ さっぱりわかりません！ みな、近くのゼレグト平原に自動車を通った跡があると話しています。私は同じ年ごろの友だちと一緒に、くだんの自動車の跡がある場所へ走って行きました。靴を履かない裸足ですよ。すると雪の上にとてもみごとな長い模様がついていました。その模様は、それはみごとなものです。そして私たちはその自動車を見ようと、跡をたどって走りました。その跡は東から西へ走った跡でした。ところがその跡は終わりません。自動車も見えません。私たちもその道をたどって走り続けました。夕方になりました。帰ることにしました。ところが帰り道がわからなくなってしまったのです。真っ暗になってしまいました。自分の家の場所までの目印を見失いました。それで私たちは自分の家を探して走り続けました。夜中になって、疲れ果て、倒れる寸前の子どもたちは何とか家に帰り着きました。私たちの足は凍傷になりかけていました。それでその時は自動車を見ることはできませんでした。私は10歳くらいだったでしょう。

そんな時、中国側から国境を越えて来て、1つの郡でいくつも強盗をはたらく強盗団が現れました。強盗団はその土地の家畜や財産を奪い、抵抗した人を殺し、狼藉を働いていました。その連中をモンゴルから追い出すために、ウランバートルから人民義勇軍が来ました。義勇軍はまもなく強盗団をモンゴルから追い出し、戻る際に、わが家が宿営をするボトゴン山という場所に来て泊まったのです。兵隊たちは車で来しました。その時、私たちは見るができなかったあの自動車というものを見たのです。タイヤにきれいな模様がついていることを自分の目で確かめました。われわれ子どもたちはその自動車を生きた動物のように思っていましたよ。運転手は前面のボンネットをめくって何かします。それを私たちは「自動車の口を開けた！」と思います。「何て大きな口をしているんだろう！」と言います。うしろ側にまわり、下側を見つめては「ここにちんちんがあるはずだ！」と言ったものです。

私が初めて映画を観たのは17歳か18歳の時です。当時、私たちの地方にウランバートルから教宣隊が来ていました。その教宣隊が映画を上映したのです。映画のことは「スーデル・シー（影芝居）」と呼んでいました。私たちは初めて映画を観て、「スクリーンの向こうに誰がいる！」と思っていました。それでうしろにまわって見もしました。そこには誰もいないのでとても驚きました。私が初めて映画を観たのは、たしか郡中心の「赤い家」だったと思います。「赤い家」というのは文化的な催しをする家のことです。

今では「文化センター」と呼ぶようになりました。各郡にあります。当時、私たちの地方に来ていた映画は、音がなく、画像だけを見せていました。

私が野菜スープを初めて食べたのはウランバートルに行ってからなのです。ジャガイモは土の味がして、初めて食べた時にはとてもまずいものでした。私たちの地方では栽培した野菜を食べることがありませんでした。野生のネギなら食べます。地元では大麦をよく植えていました。それを粉にします。大麦粉はとてもおいしいものでした。キビも植えます。わが家は自分では耕作をしていませんでした。けれど大麦粉やキビなどを、耕作している家から家畜と交換で入手していました。総じてどの家も大麦粉を使っていました。みな家畜と交換して手に入れるのです。大麦粉はモンゴル人自身が植えるのです。中国人は私の地元にはほとんどいませんでした。

ウランバートルに来て初めて鶏の卵を食べた時には、戻してしまいました。私たちがウランバートルへ来る道中、車が故障し、何日もかかったので疲れもたまり、腹ペコの面々となってやってきました。私たちの乗った車は私たちを運輸センターで降ろしました。当時、運輸センターは現在のブムブグル市場のあるあたりにありました。私ときたらウランバートルに知り合いが1人もいないで初めて来たわけですよ。車から降りて来たのは、地元を出る時に履いて出た靴はぼろぼろに裂けて裸足がのぞき、金がなく、食べるものがなく、くたびれ、腹を減らし、どこへ行ったらいいかもわからない人間だったのです。私たちがウランバートルに来た時には正午を回ったところだったはず。そして車から降りると、行き会う人みなに「おじさん、おばさん、財政専門学校はどこですか？」と訊いてまわったのです。当時のウランバートルの人たちはとても親切でした。今とは違います。中には立ち止まって道を教えてくれる人もいます。そしてその人たちの教えてくれた道を通って進むうちに、現在の教育大学を過ぎ、アルスラン橋の近くにやってきました。アルスラン橋の前には、たくさんの中国人の売店や食堂が営業していました。そこにやってくると料理の匂いがして不思議な気がしました。その食堂街の前で何人かの若者が立ち話をしています。

私はそこへ行き、

「財政専門学校はどこですか？」と訊きました。するとそのうちの1人が、

「君は地方から来たのかい？財政専門学校で勉強するの？首都に出て来たのは初めて？」といろいろ尋ねます。

私が、

「そうです。ゴビアルタイから来ました」と言うと、

「僕も財政専門学校で勉強しているんだ。僕についておいで！」と言います。そこで彼についてしばらく歩きました。私が飲まず食わずの様子に見えたのでしょう。その青年はしばらく行ったところで、

「これから君に食事をさせるよ！」と言います。そして私たち2人は1軒の食堂に

入って席につきました。そしてその青年は給仕に何か注文しています。何を注文しているか、私は気にとめませんでした。するとまもなく給仕がガラスの器に入った「黄色いもの」を2つ運んで来て私たちの前に置きました。青年はそれを取ってとてもうまそうに飲んでいきます。私はそれまで見たことのない、飲んだこともないその黄色いものを飲むつもりで口をつけました。すると苦くてまずいものです。飲むことなどできません。まずいと言うこともできません。内心では「これはきっと馬の小便だろう」と思っていました。これが私の飲んだ初めてのビールだったのです。

その青年は私を見ていたのでしょうか。

「飲めない？お茶を飲むかい？」と言います。そして給仕がお茶を持って来てくれました。

お茶を飲んでいると給仕が皿に乗った料理を運んで来て出します。料理を見ると白米です。白米は故郷ではとても珍しいものでした。故郷にいた時には白米を食べたことは1～2度しかありません。総じていなかの人は白米がそれほど好きではありません。とくに年配の人はほとんど食べません。「白米はとても冷たい性質の食べ物だ。食べれば小便が近くなる」と言われていました。私に出された皿の白米の上には何か白いものが、さらにその上に粘りのあるような黄色いものがあります。そのようなものはついぞ見たことがないので内心では「何だろう？」と驚きました。青年はその料理を取って食べています。私は米を少し食べてから、その黄色いものを少し取って食べると、とても気持ち悪くどろりとして、べたっとした味のないものです。この黄色いものの味見をしたために吐き気がしてしかたありません。それで料理を食べることもできずにそこから出ました。外へ出て人のいないところで顔をそむけ、少し吐きました。何も食べずに来たので何も出ませんでした。これが鶏卵を食べた最初でした。当時のウランバートルの人びとも野菜はほんの少ししか用いていませんでした。パンはそれよりは少し多く食べていました。「パン工場」という小さな工場が操業していました。

#### 4 党幹部学校へ進学

IL：当時、財政専門学校で学んでいたのは何人ですか？

LO：そのころ私たちの学校で私と一緒に学んでいたのは40何人かでした。最近調べてみたところ、当時の同窓生のうち6人が健在のようです。ほかの仲間はみないなくなっていました。つい最近ではD. ツェレンドルジという人がこの冬に亡くなりました。卒業生の中には軍関係の機関や国营工場、省庁での経理に派遣された人が大勢います。外務大臣のナムスライという人の息子のセルオドジャブは私と同窓です。セルオドジャブはソ連（当時）で歴史学の学位（Ph.D）を取得し、モンゴル国科学アカデミー歴史学研究所に長年勤めました。彼の書いた『古代テュルク』というモノグラフを読ん

だことがあります。私たちが卒業する前の年、D.ドルゴルマーという女性が卒業しました。その女性は長年モンゴル財務相という役職を務めました。ドルゴルマーは私たちの学校を卒業したのち、モンゴル国立大学で教鞭をとり、その後ソ連に行って財政や経済の方面の大学を卒業したのです。やはりそこで経済学の学位を取得しました。また、ドルゴルマーは社会主義諸国の「経済相互援助会議（コメコン）」で長年、モンゴルを代表してモスクワに駐在しました。私が財政専門学校を卒業したのは1942年のことです。

**KY**：卒業後はどこに派遣されましたか？

**LO**：私にはこんなことが起きたのです。私は「優」と「良」の成績でもなく卒業しようとしていました。最後の国家試験を受けているところでした。口頭に答える準備をして教室にいたところ、ある先生が入って来て、出題中の先生に、

「校長先生がローホーズに校長室へ来るよう言っている」と告げました。

先生は、

「試験の問題にまだ答えていませんよ！」と言いました。

「いいから、いいから！今すぐ行かせて！」と言います。

それで私は先生の許可をもらって校長室へ行きました。そこには校長と教務主任が座っています。そのほかに2人、よその人が座っています。私はとても驚きました。校長先生はその人たちのことを「人民革命党の中央委員会から来た人たちだ」と紹介します。

その1人が、

「君には、人民革命党の立派な職員になる気はあるかね？」と私に尋ねます。私はこの質問の意味がよくわかりませんでした。

「その気はあります！」と言いました。するとその人は壁にかかっていた地図のところへ行き、

「世界の大陸の名前を言って、この地図で示してください」と言います。私は自分の知っている大陸を指差して、名前を言いました。

するともう1人がいくつかの国の名前を言って、

「いま私が言った国を地図で示してください」と言います。私は、その人が言った国の位置を小学校にいた時によく覚えたので指差しました。するとその人は、

「いま君が指差した国々はどんな国ですか？」とさらに質問します。

私は資本主義国以外であるはずがないということをよく知っていたので、

「すべて資本主義国です！」と答えました。その後はもう質問されませんでした。するともう1人のほうが、

「よろしい。君を今後、党幹部学校で勉強させる。それでいいかね？」と尋ねます。私は少々驚いたままで

「わかりました！」とだけ言いました。

こうして私は財政専門学校から直ちに党幹部学校に移ったのです。

この会話があってからまもなく、私はそれまで財政専門学校から借りて使っていた本やそのほかのものすべてを返しました。そして党幹部学校へ行く準備を始めました。そしてある日、バスに乗って党幹部学校へ行きました。学校では入学手続きをしました。

その後、寮に入りました。寮は快適でよく整っていました。部屋にはじゅうたんが敷かれ、かの有名な「白いベッド」が置かれ、羽根布団がしつらえてありました。ただし1部屋で4人が生活することになりました。私は自分の生活する部屋をもらい、自分の本やノートといった若干の財産を置きました。入寮後、私たちは新しい服も支給されました。新品のスーツ、ジャケット、黒い靴、ネクタイなどです。古い服はすべていなくなりました。支給された服はドイツからの輸入品でした。こういったことをすべてやり終えると、寮の食堂に行って食事をしました。そこでは前菜とメイン料理が出ます。財政学校と比べるとはるかに条件のよい学校に入ったわけですよ。それに月給を貰うことになりました。こうしてわが人生の1つの新しい時代が始まりました。

その年、同じ学校から2人、私と一緒にこの学校に入学しました。G. ジャムスランジャブとD. バダムジャブと言いました。ジャムスランジャブはのちに有名な文芸評論家になった人物です。バダムジャブはある県の知事を務めた後、「モンゴル労働者組合中央評議会」の議長に選ばれました。彼はのちに、「党からの措置を受け」ました。「党からの措置を受ける」という言い回しがモンゴルにはあるのですよ。人民革命党の党員が国家の業務を担当していて職務に無責任だったり、規律違反をしたり、まじめに仕事をしないと無規律な行動をとれば、人民革命党が「措置をとり」、処分するのです。しかし、時には人民革命党と見解や考えが合わない人物に降格、免職、左遷といった処分を与えていました。処分自体は同じだったので、このこともまた同じように「党からの措置を受ける」と呼んでいたのです。根本的に両者は理由を異にしていました。このように理由が異なるものを同じように呼ぶのにもまた1つの理由があったのです。当時、「人民革命党は団結の固い党だ。人民革命党の全党員は思想が1つであり、モンゴルでの社会主義建設のために党が進めている政策をすべて承認しており、党の指導部も1つの目標のために行動する党だ。党の隊列には思想の異なる人間はいない」と宣伝していました。人民革命党の隊列に、指導部と意見が一致しないとか、指導部の実施している政策を受け入れない人間がいるはずがないのです。もしそのような人間がいたならば徹底的に隠し、表に出さないようにしていました。2つの異なるものを同じように「党の措置を受ける」と呼ぶのには、こういうわけがあったのです。

**KY**：当時、党幹部学校で教えていた先生がたについて少しお話しいただけますか？

**LO**：そうしましょう。人民革命党中央委員会と政府は党幹部学校の設立と運営に最初から留意しており、教師の選択を非常に重要視していました。1921年の人民革命勝利



後、わが国では賢くて有能で優秀な多くの人びとが「階級の敵」「人民の敵」「反革命」というさまざまなレッテルを貼られ、政治的冤罪で誹謗され、処刑されたでしょう。生き残った一部の人は、再び人民革命党と人民政府の仕事に戻ることを拒否するようになってしまいました。このように専門要員不足に陥った困難な時期に、党幹部学校は設立されたのです。もともとわが国は1921年の人民革命後、国内の人材育成問題をたいへん重視していたのですよ。人民政府の最初の教育相はE.バトハーンという人でした。この人は、モンゴルの新時代の教育システムの礎を築くために評価し尽せないほどの貢献をした人物です。彼はバイカル湖沿岸で生まれ育った、非凡なモンゴル人でした。彼のイニシアチブでドイツ、フランス、ロシアなどの各国に若い人たちを留学させるようになったのです。わが国の偉大な作家であるD.ナツァグドルジはドイツで、その後ロシアで学んだ人です。ところが彼のように外国に留学し、教育を受けてきた、賢くて有能で教養ある人びとの大半は政治的冤罪に大なり小なり連座させられ、投獄され、処刑と決められた者は処刑されていなくなってしまいました。エルデニーン・バトハーン大臣自身までもが政治的冤罪で汚名を着せられ、処刑されたのですよ。ですから党幹部学校がとても重視されたのです。この学校は真新しい思想を持った、新時代の人材を育成し輩出することを目的としていました。要するにこの学校で「民族主義」的でなく無宗教の人材を養成するという目的が掲げられたというわけですよ。そして、マルクス・レーニン主義の教養を研究し、その教養に忠実で、社会主義建設の意志と熱意をしっかりと持った人間であることはもちろんのことです。わが国の政界で「民族主義者」という用語がよく使われるようになったのはだいたいこのころからです。これは、人民革命党と思想が合わない人びとを言い表す新しい名前であり、レッテルです。

どういう人たちにこのような名前やレッテルが与えられたのでしょうか？簡単に言えば、モンゴル国の利益を第1に掲げた人たちのことを「民族主義者」と呼ぶようになったのです。40年代以降、「民族主義者」という名前を与えられなかった知識人はほんのわずかですよ。わが国の一流の政治家や社会活動家、学者、知識人は「民族主義者」となり、「党からの措置を受け」、取調べを受け、迫害され、非常に苦しい環境の中で暮らし、働いていたのです。

学長はCh.スレンジャブ氏でした。スレンジャブ氏は副首相だった人物です。首相であるチョイバルサン元帥と非常に近い関係にあり、信頼されていた人物です。党中央委員会の政治局員で、書記という役職にも就いていました。副学長はN.ダウジャエフというブリヤート人でした。この人はバイカル湖付近のブリヤート地方で生まれ育ち、教養があり、ものごとを組織する才能のある人でした。ダウジャエフ副学長は学校を規律正しく、とても厳しく律していました。学生たちには勉強と同時に必ず何か1つの仕事をさせていました。夏休みには地方へ派遣し、野菜の作付けや飼料用の草刈りの手伝いをさせます。また「教宣活動」に派遣します。冬季には薪用の木や小枝を集めにボ

グド山に登らせませす。私たちはこんな感じで2年間まったく暇なく過ごし、卒業しました。

私たちはニヤンタイスレンギーン・ラムスレンの講義を受けました。ラムスレンは非常に有能で、すばらしく博識な人でした。ラムスレンは党中央委員会政治局員で、書記を務めた人物ですよ。一時は外務大臣の職にもあった人です。私たちが講義を受けた先生がたの中で最も幅広い知識を持っていたのがラムスレンでした。彼は講義の時、講義のテーマだけに留まらないのです。たいへん幅広い内容で解説をしたものでした。彼の講義に出席すると、私はとても強い印象を受けたものです。とりわけチンギス・ハーンが樹立したモンゴル帝国の歴史についてとても詳しく知っており、当時のできごとをみごとに説明してくれました。

私たちの学校では「社会発展理論」や「哲学思想史」というタイトルの講義をダラミン・トゥムルオチルが教えていました。のちにトゥムルオチルは党中央委員会の政治局員で書記を務めました。トゥムルオチルは私たちに、マルクス主義の3つの基礎である「マルクス主義哲学」、「史的唯物論」、「弁証法的唯物論」の講義をしていました。

私たちは、サンビリーン・ジャランアージャブの講義も受けていました。この人は私たちの党幹部学校の第1期生です。彼は自分の出身校の教員になったのです。この人は党中央委員会の政治局員で、党活動担当書記、人民大会議幹部会副議長といった要職を長年務めた人物です。1970年代中ごろ、Y.ツェデンバルは彼のことを閣僚会議議長に任命する準備をしていましたが、辞退したのでした。1983年、ツェデンバルは彼を免職し、社会のくずとして捨てました。しかしまもなく党中央委員会の統制委員会は彼に「Ts.ローホーズ、B.ニヤムボー、B.ソルマージャブら反党分派活動の指導者の1人だった」という汚名を着せて除名にし、地方に追放したのです。ジャランアージャブには私たちとのつながりは一切ありませんでした。当時、ジャランアージャブの追放はツェデンバル自らの指示によって混乱させられようとしているものであることを私たちは知っていました。

私たちはテムチギーン・モロムジャムツの講義も受けました。この人は長年、中央委員会の政治局員で経済問題担当書記を務めました。一時は財務相の職にもあった人物です。モロムジャムツはツェデンバルが政権を握っているあいだ「党からの措置を受け」ずに残ったごく数人の1人です。しかし、ずっとのちになって民主化と刷新のムードのもと、1990年3月に開催された人民革命党臨時大会は彼を「ツェデンバルの取り巻き」と規定の上、除名し、送検しました。この大会では、モロムジャムツのほかにもツェデンバルと共に長年人民革命党と政府の要職にあった約40人を「ツェデンバルの取り巻き」と規定しました。そして彼らがツェデンバルと共に行ったあらゆる誤りを吟味し、正当な処罰をするために送検しました。彼らには公正な法によって処罰を受けるだけの十分な根拠があると人びとは考えたのです。

歴史の講義は学者のSh.ナツァグドルジが行っていました。

O.ブダエフ先生も、とても良い講義をする先生でした。国際関係についてとても興味深い話をしてくれる先生でした。中間試験で、ブダエフ先生は私たちのほとんど全員に「優」をつけるのですよ。しかし、国家試験の時には私たちはブダエフ先生の科目で「優」をほとんどとれませんでした。私たちに最も厳しい成績をつけたのはS.ツェデンジャブ先生です。数学の先生でした。中間試験で、私たちはそろいもそろってツェデンジャブ先生の科目で「ブローハ〔ロシア語で“不可”の意〕』という成績をとりました。それで先生には「ブローハ・ツェデンジャブ」というあだ名がつかまりました。国家試験の準備の時に私たちは「ブローハ・ツェデンジャブ」先生の科目にだけ備えて試験勉強をします。他の科目についてはそれほど試験勉強をしませんでした。国家試験は、授業を担当した先生自らは実施しないのですよ。別の先生が実施します。こうしてしっかり備えたので、ツェデンジャブ先生の科目の試験では全員「優」や「良」という成績をとりました。

KY：党幹部学校にはほかの人より抜きん出て優秀な学生はいましたか？

LO：私たちの中にはそういう若者が大勢いましたよ。私たちの学校には、ウランバートルの専門学校出身者がかなりいました。無試験で入学した人も相当いました。その中でもD.ホルマトベク、S.テレハンという2人の若者の名前をとくに挙げたいですね。彼らは出自の点ではカザフ民族です。この2人はいつも成績優秀でした。すばらしく才能豊かな人たちでした。先生の講義中はほかの者たちと同じように聴いています。それで先生の言った言葉を一言一句そのまま暗記してしまうのでした。改めてそのテーマの本を読むということはほとんどありません。国家試験になると、暗記したことをそのまま再現して述べます。テレハンのはちに建設大臣を長年務めた人ですよ。1960年代ごろからウランバートルの建設事業は急激に増えました。新しい建物が数多く建てられ、町の様子が大きく変わりました。ホルマトベクはカザフ民族が多数暮らしているバヤンウルギー県の知事を長年務めました。また自身の出身校の校長も何年も務めました。1958年に党幹部学校は拡大され「党大学」になりました。1944年6月に私は卒業しました。同窓生は卒業後ほとんど全員地方へ派遣されました。卒業生のほとんどは25～27歳くらいだったでしょう。彼らは直ちに県知事あるいは副知事として任命されて赴任しました。

## 5 党中央委員会講師局

LO：私は人民革命党ウランバートル市委員会の教育宣伝課長に任命されました。私にこの任務を配分したのはダウジャエフ先生でした。これにはちょっと事情があったのです。私たちは卒業試験をすべて終えていました。卒業証明書をみなもらいました。そし

て仕事の配属を待っていました。学生たちはみな親戚へ出かけたり、買い物に出かけたりして、ほとんど空っぽになってちょっと寂しい状態でした。私には首都に親戚もいませんし、買うべき物も思いつかないので、1人、学生寮に残っていました。配属されるちょうど1日前、私は部屋でそんなふうで1人でいました。すると、私たちと一緒に卒業する1人の女性が部屋に入ってきました。彼女の夫はある省の大臣でしたが、亡くなったということを私たちは知っていました。

「あなたは1人でここで何をしていますのですか？」と彼女はびっくりした様子で尋ねました。

「私にはこの町で訪問する知り合いがいませんから！いま配属を待っているところです！」と私は答えました。そして私の部屋で2人親しく話をしました。彼女が何を思ったのか、わかりません。彼女は私の部屋にしばらくいて出て行くときに

「あなたに訪問する知り合いがないなら、私の家に来ない？私の家はとても近くなのよ！」と言います。そうして私たちは彼女の家に向かって歩きました。トール川の方から暖かい風が穏やかに吹いて、沈む夕日の光が射す、とある美しい夜でした。私たち2人は歩いて彼女の家に行きました。彼女は私においしい料理を作ってくれました。私は薪を割って彼女を手伝いました。そうしているうちに私は彼女の家でいとまごいする時間をとっくに過ぎてしまいました。翌朝、私たちは一緒に学校へ行きました。すると、ダウジャエフ校長が私たちを目撃してしまったのです。彼は私たちを出迎えて

「わが校から新しい家庭が生まれましたね！おめでとう！」と握手します。それで私たち2人をN.ダウジャエフ先生は自分の部屋へ連れて入りました。彼は誰かに電話をしました。誰だか私は知りません。Kh.チョイバルサン元帥か、それとも彼の代理であるCh.スレンジャブ氏ではないでしょうか。私の配属についての話でした。校長は話を終えて電話を切ると

「さあ、ローホーズ君！君をウランバートルのモンゴル人民革命党委員会に配属することになった！」と言ってN.ダウジャエフ先生は握手を求めました。私は喜ぶやら、驚くやら、複雑な思いで彼の手を握り返しました。こうして私はウランバートルに職を得たのです。ダウジャエフ校長の部屋から出て来ると、同僚たちが拍手をして、私たちを祝ってくれました。1950年に私はモスクワの共産党大学に留学しましたが、それ以降、彼女とは会っていません。それまでは私たちは共同生活をしていました。そして1990年に再会しました。これについて話すと長くなるのでこのくらいで終わりにしましょう。

1944年6月に新しい職に就いたわけです。着任して勤めていたのですが、秋9月に人民革命党中央委員会に転属することになりました。1944年、チョイバルサン元帥の発案により、党中央委員会に「講師局」という部署が新設されたのでした。私はそこで働くことになったのです。この新しい部署の目的は、人民大衆に向けたマルクス・レー

ニン主義の宣伝でした。当時、マルクス・レーニン主義に関して人民大衆はさして関心を払っていませんでしたし、ほとんど宣伝もしていませんでした。

講師局長はチャドラーバリン・ロドイダムバでした。ロドイダムバは当時、ソ連のイルクーツク市で大学を卒業して来たばかりの青年でした。ロドイダムバは一時期、文化省の副大臣を務めた人物です。のちにとても有名な作家になりました。彼はすばらしい短編・長編小説を数多く書きました。最も有名なのは長編小説『清きタミルの流れ』です。彼はこの小説を講師局長在任中に書き始めたのです。私たちは毎月この小説の新しい章について議論し、誰もが自分の意見を述べました。このような形でみなから出された意見が反映され、加筆修正されながらこの小説は書き終えられたのです。この小説は出版後、いくつもの外国語に翻訳されました。この小説はモンゴルにおける現代散文作品の傑作になりました。今でもこれほどの作品は出ていませんよ。この作品はソ連の作家ミハイル・ショーロホフの『静かなドン』という有名な長編小説とそっくりになったと言われています。『静かなドン』は社会主義革命後のロシアの社会や一般の人びとの生活が激変したことをありのままに文学的に表現したものですよ。同様に『清きタミルの流れ』も20世紀の初頭にモンゴルで起きた事件、社会変化、モンゴル人の生活などを実にありのままに描いたものです。1970年代の中ごろ、ミハイル・ショーロホフは『静かなドン』でノーベル文学賞を受賞しましたよ。

1944年、モンゴル国立大学の第1期生が卒業し、そこから2人が私たちの講師局にも派遣されて来ました。この1人はバダミン・ラムスレン、もう1人はTs.バルドーでした。ラムスレンはのちに人民革命党中央委員会政治局員、書記になった人物です。バルドーはのちに党中央委員会付属党史研究所の所長を長年務めた人物です。そして外国でモンゴルを代表する大使の職にあった人物でもあります。この人たちはのちにツェデンバル人民革命党書記長と大の仲良しになったはずですよ。この2人が来て、講師局には合計10人が勤めることになりました。

講師局は党中央委員会の建物の中に置かれていました。党中央委員会の建物は、現在人民革命党の新しいビルがあるちょうどその場所にあったのですよ。講師局員は全員で1つの部屋を使っていました。ツェデンバル党中央委員会書記長の執務室は、私たちのいる部屋の向かい側に位置していました。彼の執務室のドアは、私たちの講師局の部屋のドアの真正面でした。

ツェデンバルは1916年に現在のオブス県のダウスト郡の地に生まれた人です。郡の小学校を卒業し、ホブド県で中学校に通ったのち、ソ連はウランウデ市の労働者予備学校（略称ラプファク）に留学し、卒業したのです。労働者予備学校とは、モンゴル人向けの大学入学準備クラスです。多くのモンゴル青年がここで学んでからソ連の大学に入学しました。ツェデンバルは労働者予備学校卒業後、イルクーツクの大学の経済学クラスに留学したのです。この学校を卒業して帰国すると、チョイバルサンが彼を財政専

門学校の教務主任に、その後モンゴル銀行総裁、財務副大臣、財務大臣など多くの要職に任命しました。

そして1940年に開催された第10回人民革命党大会で彼は党中央委員会書記長に選出されました。第10回党大会以前、人民革命党の中央委員会には「書記長」という役職はありませんでした。彼がこの役職に選出されるにあたっては、首相であるチョイバルサン元帥が大きな役割を演じたのです。当時ツェデンバルは24歳くらいの青年でした。ただ最近では、彼がこの役職に選出されるに際してはソ連共産党の介入があったという話がよく聞かれるようになりました。真偽を明らかにするのは難しいですがね。

講師局の部屋は書記長の執務室とかなり近くにあったので、私たちは彼と親しくなる機会ができました。彼がいつ誰と会ったか、どこへどんな用事で行ったかなどということは、すべて手に取るようにわかりました。ほんの20数歳の、同世代の若者たちが1つところに集まったのです。私たちの中には、結婚して一家のあるじとなった人はまだほとんどいませんでした。興味関心も似ていたでしょう。書記長のところには、中央や地方の党細胞長や党委員長、政府の閣僚、芸術家や文化人、優良労働者たちがよく来ていました。人が大勢やってきました。その中には有名な歌手や俳優、女性のダンサー、今で言う「スター」たちも自由に出入りしていました。

私が講師局に勤め始めた年、わが国の偉大な学者であるビャムビーン・リンチェンの脚本で「ツォグト・タイジ」という映画の製作がモンゴルキノ映画製作所で始まりました。ツォグト・ホンタイジとは、17世紀に実在した、聡明で教養があり、モンゴルのために決然と戦った、熱烈に愛国的な歴史上の人物です。彼はチンギス・ハーンの直系の高貴な血筋の、世襲タイジでした。この映画のツォグト・タイジの役は、モンゴル映画芸術の偉大な名優で「人民俳優」のツァガーニー・ツェグミドが演じました。この映画にはそのほか著名な俳優が大勢出演しましたが、その1人にロブサンジャムツィーン・ツォグゾルマーがいます。ツォグゾルマーはオペラ歌手で、有名な美しい女性でした。私がツォグゾルマーを初めて見たのはそのころだったでしょう。「ツェデンバルとツォグゾルマーが結婚するそうだし」という噂話も人びとのあいだに流れていました。このころ、ツェデンバルがどんな人を妻にするかという問題が人びとの注目を集めていました。モンゴル人と結婚することを多くの人は期待していたかもしれませんが、しかし、この問題を彼の運命は異なる形で決着させたのです。

1947年、ツェデンバルはロシアのリャザン地方の金髪女性アナスタシア・イワノブナ・フィラトワと結ばれたのです。しかし、ツェデンバルがロシア人を妻にしたことに、チョイバルサン元帥は表立って賛成しませんでした。ツェデンバルとフィラトワはモスクワで結婚式を挙げました。2人がモンゴルに来て結婚披露宴を催した時、チョイバルサンは出席しませんでした。チョイバルサンはそのような形でこの2人の結婚を快く思っていないということを表現したのです。ツェデンバルは、教育程度が低く粗野な

ロシア人妻を、人民革命党の指導者そしてモンゴル政府の要職に長年留まるという個人的な目的のためにとても巧みに利用したのです。フィラトワが自分の夫を守り、擁護するために行った発言や行動はすべて、人民革命党と長年の厚い友好関係にあったソ連共産党の発言と行動であるかのように人民に受け取られました。ツェデンバルはこのように受け取らせる機会は1つも逃しませんでした。

ソ連共産党の指導者たちはツェデンバルを人民革命党の指導者に長年留めることに関心を持っていたのかという疑問が湧いてきます。そのような関心はまずあったと言えるでしょう。ロシア人妻を持つツェデンバルは、ロシア人の目には常に「身内」に見えていたのです。しかし1984年8月に開催された人民革命党中央委員会の第8回総会は、ツェデンバルをすべての役職から解任する決定を出しました。彼のこのような解任の、主な理由を準備したのが、この「奥さま」でした。彼女は贅沢三昧と粗野で奇妙な振舞いとで有名になった人でした。「ツェデンバルは奥さまの操り人形になった」という話は根も葉もないことではないのですよ。ツェデンバルが指導者を務める党中央委員会の政治局員自身があちこちに行ってこのような話をしていたという証言があります。この「奥さま」が政治局員を集め、夫をかばって菌に衣着せずに叱りつけていたという証言は、モンゴル社会で口から口へと伝えられていきました。のちに、党中央委員会政治局員の解任や追放が始まったのは、彼女の奇妙な性格に長年耐え続けたツェデンバルの「取り巻き」連中の忍耐力が尽きたということだったのです。彼らの前には自分たちが追われるか、それとも「奥さま」を追い出すかという問題が持ち上がっていました。「奥さま」と政治局員のどちらか先手を取った方がもう一方を追い出すという、そんな微妙な状況が生まれました。そして政治局員が先手を取り、「奥さま」の追い出しに成功したのです。これには、彼らに対してソ連共産党中央委員会から「惜しめない援助」が与えられました。夫を守り、夫をかばい、この「奥さま」のした発言や事業がソ連共産党の発言や事業と同一視されていたことが、モンゴル人民のあいだでソ連共産党の権威が失墜する原因の1つになり始めたことを、ソ連はすばやく悟ることができたのです。もしこの援助をタイミングよく受けることに成功しなければ、政治局員たちの方が追放されていたでしょう。彼らは「奥さま」を単独でなく、その夫のツェデンバルもろとも追放することに決めました。ツェデンバルはこのようにして妻が原因で職から追われたのです。

私たちモンゴル人のあいだには「上に向かって投げた石が自分の頭に落ちる」という言葉がありますよ。自分の妻をコントロールできない人が、国家の指導を語ったり考えたりすべきではないのは当然ですよ。こうして人民革命党中央委員会書記長の、40年余りの政治的経歴は恥さらしな形で終わったのです。このように、ツェデンバルが、自分で集め、何年間も自分を守らせ、養ってきた「取り巻きたち」によって、妻ともども追い出されるという「奇妙な歴史」が始まったのです。「飼った牛が荷車を壊す」とい

う言葉がモンゴル人のあいだにはあります。ツェデンバルが職を追われ、妻の介護のもと、異国でどのような暮らしをしていたか、われわれモンゴル人みなが知っています。このことは彼の息子ツェデンバリーン・ゾリグやD.ゲルバダム大使、ジャーナリストのレオニード・シンカリョフらがのちに詳しく書きました。

このようにして職を追放されたのち、ツェデンバルの健康状態が良好だったことを、彼と面会した多くの人が証言しています。「ツェデンバルの体調が悪かった」という話は「ツェデンバルの取り巻き」の思いついた捏造だったのです。彼を解任するための理由がほかにたくさんあったということを、私は1956年に開催された党中央委員会の第2回総会や、1964年の第6回総会ではっきりと述べていました。私だけでなく、ツェデンバルには国家を指導する能力がないということを多くの人が指摘し、それが何度も批判されてきたではないですか。それから20年後、ツェデンバルは解任されましたが、真の理由は国民に隠されていました。そしてそのためにこの奇妙な捏造が考え出されたのです。そればかりかこの捏造を大衆に信じ込ませるためにたいへんな努力が払われたのです。このことは、ツェデンバルの指導していた党中央委員会政治局員の中には長いあいだ国家の利益を重んじて健全に物を考える、己れの考えを持った人物がわずかしかなかったことをも重ねて証明しているのです。いずれにせよ、歳のいったツェデンバルには、精力的かつ健康でいることはできません。これは誰の目にも明らかな絶対的真理にはほかなりません。

私が講師局に勤めていた当時、私たちの誰もが首相の元帥を非常に畏怖していました。彼の権威も国民のあいだで非常に高かったのですよ。時おり、突然チョイバルサンからのお呼びがかかります。そんな時私たちは、上司であろうと何だろうと、その場のすべてをそのまま放り出して全速力で飛んで行くのですよ。そういう生活でした。このような中で私はそこにまる6年勤めたのですね。人民革命党中央委員会のその建物には、大きな会議室が1つありました。そこで党中央委員会の総会が開かれました。私たちは当時開催されたすべての総会に出席しました。閉会后、総会の決定を実践するという大仕事が展開されました。およそこのころから、わが国の社会や政治に対する人民革命党の介入がますます度を強める傾向が生じてきました。国家の発展と国民の生活に関するあらゆる問題を、人民革命党の政策だけで処理するようになりました。

こうして徐々に人民革命党がモンゴル政府の上に置かれるようになって来ました。このころから「愛するモンゴル人民革命党」という政治的表現が次第に普及し始めました。モンゴル人民革命党のすべての公文書にこの表現が用いられました。党が政府の上に立つことは1960年の憲法によって保証されました。わが国の3番目の憲法です。最初の憲法は1924年に、2番目の憲法は1940年に承認されました。新憲法を承認した1960年代を「モンゴルにおける社会主義の物質的・技術的基盤の建設の終了期」と人民革命党史では記しています。「社会主義の物質的・技術的基盤」というのは、社会主義・共産



主義社会の完成直前の発展段階です。この段階の建設を終えれば、わが国は社会主義・共産主義社会に完全に移行すると説明されていました。社会主義・共産主義社会を建設するために、初めにその「物質的・技術的基盤」を建設すべきなのです。

私たちの中ではこの「社会主義の物質的・技術的基盤」にまつわる1つの小話が長いあいだ語られていました。当時、大学の学生は必ず「社会主義・共産主義理論」の試験を受けることになっていました。「ある学生に〈社会主義の物質的・技術的基盤〉とは何を指すか？」という問題が出されました。するとその学生は考えて考えて「社会主義の物質的・技術的基盤とはトルゴイトの近くにある大きな木製の囲いのことを指します！」と答えたので「不可」をもらったとき、という内容の笑い話でした。私たちはこの学生を笑います。本来は「社会主義の物質的・技術的基盤とは社会主義・共産主義社会建設の直前の発展段階である」という理論的回答をするべきだったのです。このような大きな理論的問題を「木製の囲い」と間違えた人が不合格になるのは当然ですよ。しかし、私たちはこの学生が「理論を知らない」から笑ったわけではないのです。「悪い成績をとった」ことを笑ったわけでもありません。私たちは「この学生の答えは実に正しいぞ」と笑っているのです。この学生の言った大きな木製の囲いは、本当にウランバートル鉄道のトルゴイト駅近くにあります。それを一般に「トルゴイト物資基盤」と呼んでいたのです。その囲いにはソ連その他の諸国から届いた援助物資や機械・装置が保管されていました。そこでこの学生は「社会主義の物質的・技術的基盤」という理論的概念と、「トルゴイトにある大きな木製の囲い」とを取り違えていたのです。外国人には理解し難いかもしれませんが、私たちが笑う主な理由は「社会主義の物質的・技術的基盤を、モンゴル人自らでなく、国外の借款や援助の力で建設するようだぞ！」という含意にあります。1960年の憲法には、国外の借款や援助に依拠して社会主義・共産主義を建設するという人民革命党の政策を法制化したという特徴があります。

KY：あなたは講師局ではどんな職務を担当していたのですか？

LO：講師局の行う主な仕事は宣伝です。私たちがそこに勤め始めた時期は、第2次世界大戦がまだ終わっていないころでした。私たちの宣伝活動は、ドイツのファシズムと戦っている偉大な隣国にして兄弟的友好関係にあるソ連を勝利させること、第2次世界大戦をできるだけ早く終結させること、モンゴル人民のあいだでソビエト人民への支援運動を展開することに向けられていました。私たちは、独ソ戦の前線情報を集めて人民に伝えるということもしていました。それと同時に、英米側が行う第2戦線の形成と対独戦の開始の進行状況についての情報も、私たちの宣伝活動の1つの主要なテーマとなっていました。

また、極東における戦争の元凶である日本との交戦の重要性を宣伝し、そのための準備がいかなる段階にあるかという情報を大衆に伝えていました。それから第3次世界大戦を起ささないための世界諸国による努力についても大衆に知らせるといった活動を

していました。主にマルクス主義を知らしめるための宣伝活動でした。弁証法の諸法則や史的唯物論を解説する活動をしました。「資本主義はおよそ今後発展する展望のない社会である。この社会は自ら発展するためのすべての条件を使い果たし、人類はまもなくすべて共産主義社会へ移行する。英国、アメリカ、日本など主要な資本主義諸国では共産党が活動している。彼らは自国の人民の闘争を指導し、社会主義革命を勝利させる。各国に共産主義の赤旗が揚がる時は近い。万国のプロレタリアートは団結して世界社会主義革命を勝利に導く。人類の明るい未来は共産主義社会だ！」などと宣伝するのですよ。

私たちは国営工場や公的機関、省庁を訪ねて「政治サークル」を開いたものです。政治サークルがつい最近の1990年代までわが国の社会に存在したことを私たちは知っています。この活動は講師局が始めたのです。時代とともに話題は変化したことでしょう。当時、私たちは主に終業後の夕方に政治サークルを開いていました。私たちは宣伝するテーマにしたがって「講義」の準備をしました。それを講師局で議論し、承認します。私たちは講義の準備の際、主にロシアの本を利用していました。私はロシア語を読んでほんの少しだけ理解できるようになっていました。私たちのところには資料をロシア語から翻訳する優れた翻訳者たちがいました。しっかりと準備した講義を編集し、『講義集』を出版したものです。

私たちはよく地方へ行き、この講義集を使って宣伝を行いました。当時、私はほとんど全県に行ったはずですよ。党中央委員会の書記や閣僚や長官たちは当時よく地方に出張していました。私たちはその人たちに同行したのです。当時は実務の手配が上手で頭脳明晰な戦闘的幹部が大勢いましたよ。とくに閣僚会議のスレンジャブ副議長です。非常に明晰かつ戦闘的で、すぐれたまとめ役として有名でした。また、閣僚会議のS.ラムジャブという次官もいました。この人のことは「責任を持って職務を果たし、他人と共に働く才能のある人物」であるとチョイバルサン元帥はとても高く評価していました。私はこの人に同行して地方へ行ったことが2回あります。この2人のことを首相チョイバルサン元帥は「右腕と左腕」と呼んでいました。当時は国民の政治的意欲はとても高かったですよ。地方の労働者は私たちの話をとても積極的に聞いたものです。そのころの人びとは、新しいものを吸収するのがとても得意でした。

戦時中、モンゴル人民のあいだでは、兄弟的友好関係にあるソビエト赤軍への支援運動が全国的に展開されていました。ドイツがソ連に侵攻し、ソビエト人民による大祖国戦争が始まってから、9月、赤軍への支援運動を指導する援助活動中央委員会が設立されました。その支部が各県各郡に設置されました。「すべてを前線へ」「すべてを勝利のために」というスローガンが掲げられ、人民はこの援助活動中央委員会を通じて赤軍に支援物資や寄付を送っていました。人民は最大限、金銀や馬を贈り物として提供しました。戦時中、モンゴル人民の資金で「モンゴル人民」飛行中隊や「革命モンゴル」戦

車隊を編成し、戦闘中のソビエト赤軍に届けました。人民は自家製の暖かい毛皮コート、手袋、帽子、靴を戦闘中の赤軍兵士たちに送りました。人民の自発的な贈り物を積んだ支援列車を、首相チョイバルサン元帥を団長とするモンゴル政府代表団が、戦闘中の赤軍兵士たちに何度も届けたのです。支援列車を最初に届けたモンゴル政府代表団を迎える会見でスターリンは「苦境を救う友こそ真の友」という有名な発言を初めてしたと言います。独ソ戦時、モンゴルは参戦こそしませんでした。自らの持つあらゆる条件を動員してこのように支援し、ソ連の勝利のために努力をしていたのです。

これはモンゴルが相互援助議定書によって負った義務を果たしていたということです。相互援助議定書は、ソビエト・モンゴル両政府の首脳が1936年にモスクワ〔モンゴル科学アカデミー歴史研究所、二木博史ほか訳『モンゴル史』（恒文社、1988年）によればウランバートル〕で調印しました。この議定書によって双方は、どちらか一方が第三国と戦争をした場合には相互に援助を行うという義務を負ったのです。1939年、ハルハ河戦争が始まると、ソビエト側はモンゴルに来て私たちを援助し、義務を果たしましたよ。ハルハ河戦争に参戦したソビエト赤軍部隊を指揮したのはジューコフ將軍でした。G.K.ジューコフは第2次世界大戦時の、世界で最も有名な將軍の1人です。われわれモンゴル人は彼に対して深い敬意を払っていますよ。ウランバートルには彼の博物館があります。そもそも独ソ戦で最もすぐれた3人の將軍の運命はいずれもモンゴルと関係があったのです。ジューコフ、K.K.ロコソフスキー、F.コーネフの3人です。ロコソフスキーとコーネフは20年代、モンゴルに駐留していた白軍と戦闘を繰り返した赤軍の司令官です。ハルハ河戦争の時には、モンゴル人民革命軍の総司令官はチョイバルサンでした。彼の副官は軍団司令官のJ.ルハグワスレンが務めました。ルハグワスレンはハルハ河戦争の時に戦闘活動を直接指揮し、勝利に導いたモンゴル側の軍司令官です。彼は最も軍事的才能のある青年將軍でした。人びとのあいだでは彼を讃えた歌が作られ、歌われていました。ハルハ河戦争50周年の時には、ウランバートルに彼の銅像を立て、敬意とともに彼を偲びました。しかし、ツェデンバルが彼のことを長年のあいだ抑圧し、冷遇し、実に不当な態度をとっていたということを、今日でも多くの人は忘れていません。日本ではハルハ河戦争について一般人はほとんど知らないそうですね。正式な第2次世界大戦の開戦は宣言されていませんでしたが、ハルハ河戦争では短期間に非常に大規模な戦闘活動が行われたのです。この戦争には、当時の最新鋭の飛行機、大砲、戦車などの兵器が最も広く使われました。ハルハ河戦争はモンゴルの勝利に終わりました。

1941年の独ソ戦開始は、モンゴル経済にとって非常に大きな打撃となりました。当時モンゴルでは工業がほとんど未発達でした。工業コンビナートが建設され、国民の日用品を多少は生産するようになったものの、おおかたの日用品はソ連から輸入していました。ところが、わが国の対外関係の主な相手国であるソ連の経済が戦時体制に入った

ため、わが国に物資を提供することができなくなったのです。ですからわが国の政府は自国の経済を戦時体制に合致するよう運営するという政策を立て始めました。

1941年の末から1942年の初めにかけて、人民革命党の総会が何度も開催され、わが国の経済をいかに戦時体制に合わせるかという諸問題を議論しました。こういった総会では国内の潜在的資源をすべて動員し、かつてソ連から得ていた日用品をできるだけ国内生産すると決定しました。こうして手工業最高評議会が設置されたのです。議長にはN.デムチグという人が選ばれました。この手工業最高評議会の支部が各県や各郡に設置されました。デムチグ議長は進取の気質に富み、経営の手腕に長けた人物でした。今の言い方をするなら「マネジメントがうまい」人物だったわけですね。人びとのあいだで今では「オルトツァガーン」と呼ばれるようになったウランバートル市サービスセンターは、当初、デムチグ議長が手工業を運営するために作られたのです。

当時、わが国ではほとんど洋服を生産していませんでした。国の役職についている大臣や幹部用の洋服縫製室が1つあっただけでした。そこでは洋服の号数を適用していませんでしたので、作った洋服はすべて同じサイズでした。ある人には大きすぎ、ある人には小さすぎて、それはおかしいのですよ。私は1950年代半ばに、洋服のサイズ別の型紙をルーマニアからデムチグ議長に買って来てあげたことがあります。それで作った最初の48号のスーツとジャケットを私自身着てみました。それ以来、わが国では洋服を作る時に、人の身体のサイズに合わせ、号数を適用して作るようになりました。

デムチグ議長は新しいものをいろいろと導入しましたよ。重要性の高いさまざまな労働用具などを作るための工作機械を外国から買い入れて用いるようになりました。モンゴルで、各種の金物や釘などを種類別に作るようになったのはこのころですよ。各種のガラスや鏡も国内で作るようになりました。建設事業ではこういったものを多く使っていました。各県に設立された手工業の工場では、皮革を工業的手法でなめしたり、デール、帽子、靴といったその他の日用品を作ったりするようになりました。

こうして徐々に、外国から輸入する製品の数が減り始めました。手工業がこのようにうまくいき始めたので、工業省が設置されました。大臣にはD.バポドルジという人が任命されました。バポドルジ大臣は以前に県知事だった人物です。この人は恐ろしく戦闘的で、有能な人でした。こうして工業省の設置によって手工業と工業が同時に発達する出発点が置かれました。こういったことはすべてチョイバルサン元帥が提唱して行われた事業なのです。

**KY:** チョイバルサン元帥とお会いになったことはありますか？

**LO:** 私は元帥と親しかったわけではありません。当時は若くもありましたね。初めて会ったのはバザリーン・シレンデブ氏の指示によるものでした。当時シレンデブ氏は人民革命党中央委員会の政治局員で書記でした。私はシレンデブ氏の指示で、全国規模の教宣活動を県や郡で組織するための計画を立案しました。この計画を自分でチョイバ

ルサン元帥に説明するように指示されたのです。元帥といえば国民のあいだで名高く、崇拜されていた人物ですよ。そんな人の執務室に初めて入る時には誰だって物怖じしますよ。私も怖気づきました。それでも入りましたよ。その部屋の一角に、とても大きな机の前に座っていました。部屋もとても大きいのです。その大きな机の向こう側に、元帥自身はとても小さく見えていました。部屋には、自身の座っている机のほか、色布のしつらえられたもう1つの机があります。元帥の座っている机の背後の壁には、レーニンとスファートルの絵がかかっていました。ほかのものはありませんでした。私が入って来るとチョイバルサンは席から立ち上がって来て、

「こんにちは」と挨拶し、

「君のことはシレンデブが寄越したのだろう？」と尋ねます。

私は挨拶を返してから、

「そうです。シレンデブさんに来るように言われました！」と言いました。

チョイバルサンは、

「ああ、そうかね。君の名は？」と尋ねました。

私が名乗ると彼は改めて、

「それで君はどんな仕事をしているのかね？」と尋ねます。

「講師局で教育宣伝担当をしています！」と私は言いました。

「ああ、そうかね。それで君はどのくらい教育宣伝をしているのかね？ 地方に行って人民と会っているか？ 人民は今われわれが語っている社会主義を理解しているか？」と彼は改めて質問したあと、

「こちらへ来なさい！ここに座って！作ってきたその計画をこの机の上に広げなさい！そしてあわてずによく説明しなさい！」と言います。チョイバルサン自身はとても普通に、私にとっても優しく対応してくれました。とは言っても私のひざは震えていました。それから私は自分の作った計画をひとしきり説明しました。その時一体どんな計画を立案し、元帥に何を話したのか？さてね！気がついた時には元帥が、

「もうよし！わかった！」と言っています。そして

「君は今ロドイダムバの下で働いているのだろう。彼は徹夜で文学を書くような人間なのだよ！君たちは余計にしっかり働かなくてはならない。人民にわれわれの事業をよく理解させなければならない！これは非常に重要な活動だ！」と言って手を差し伸べています。私は握手をして部屋を出ました。こんなふうには私は初めて元帥と会ったのでした。

1952年、私がモスクワの共産党大学に留学中、チョイバルサン元帥の体調が悪くなり、モスクワに行き、入院して手術を受けました。しかし、彼は手術に耐えられず、手術台の上で亡くなったのです。チョイバルサン元帥はこうして亡くなりました。遺体はモスクワにあるソビエト会館〔正しくは労働組合会館と思われる〕の列柱大広間に安置

され、ソ連共産党指導部やソビエト政府の幹部、閣僚、大衆代表が告別式を執り行いました。

私はその時、チョイバルサン元帥の遺体の側に「儀仗兵」として立ちました。その後、遺体は列車でモンゴルへ運んで来られ、埋葬されました。私たちはモスクワのヤロスラブ駅で遺体を載せた列車に接吻し、見送りました。元帥はとても威厳のある人だったのです。彼の活動は個人崇拜の拡大や、罪のない多くの人の政治的冤罪による処刑と結びついたりくつもの大きな誤りはありましたが、彼が亡くなった時に悲しみ、涙を流さなかったモンゴル人は成人ではほとんどいなかったのですよ。「世界大戦の勃発と列強間の戦争という困難な時代にモンゴルの運命を元帥が救った。元帥以外の人にはこのような意志と忍耐力とで国家を指導することはできなかった」と多くの人びとがそう考えていました。「元帥は多くの政治的誤謬を犯したが、モンゴルの運命に関わるたった1つの問題では常に正しい立場をとっていた」と私は思います。2つの大きな隣国がわが国のような小国を思い通りにし、利用していた歴史がまだ記憶に新しかった時代ですよ。そんな時代に国家の手綱を取るということが並々ならぬ忍耐と意志、知恵、柔軟性を求められるのは当然のことです。「元帥はそれを類まれなる巧みさで実行した」と私は思っています。

私が講師局に勤めていた時期に開催された党中央委員会のすべての総会でチョイバルサンは発言しています。元帥が何度も繰り返して語ったある1つのことがらがあります。それは「党内批判」の問題です。「党とは、積極的な人びとの集合体である。社会の指導を任務とした政治機関でもある。この機関の活動を常に正し、修正しなければ社会から取り残される。党を常に正し、修正する必要がある。このように正し、修正を図るための最良の方法は、党内批判である。内部批判をやめてしまえば、党は自らの欠点を自覚しなくなる。自らの欠点を自覚しない党は弱体化する。批判は上級機関の側および党員の側から行うべきである。われわれは党の上級機関にいる人間である。われわれは下級の人びとを常に批判し、要求を行うことができる。しかし、党にとっては党員の言葉が最も重要だ。今こそ、ツェデンバルと私をはじめとして他の大臣や幹部らの仕事ぶりについて、党員の言葉に耳を傾けよう！われわれの事業の何が成され、何が成されていないかを聞こう！」と語っていました。当時、元帥が亡くなるまで、党の中央出版物にはそのような原則にのっとった批判がよく掲載されていました。しかし、元帥は陰口をたたく人間をとっても嫌っていました。たとえば、「あの人は仕事をしません」というような陰口の類を聞くのをとても嫌う人でした。そういう話を聞いた時には、あまり物を言いません。黙っていて、「チョールト（畜生）」とだけ一言言うのです。おべっかを使う人間も嫌う人でした。国の要職に新顔を選任する時には、その人物がそれ以前にしていた活動の成果を見ました。たとえば、あるバグ〔郡の下の行政単位〕の事業で優れた指導をした人物は郡長に昇格させることができ、ある郡の事業で優れた指導をした

人物は県の知事に昇格させることができ、ある県の事業で優れた指導をした人物は大臣に昇格させることができ、ある省の事業で優れた指導をした人物は閣僚会議の次官に昇格させることができ、閣僚会議次官の職務をしっかりと果たした人物は人民革命党中央委員会の書記に昇格させることができる」と彼は考えていたのです。これは人材選考のすぐれた方法だと私は思います。わが国では、チングス・ハーン時代には十戸長、百戸長、千戸長の王侯もこのような方法で、軍を指揮した経験や成果を見て選考していたという歴史があるのですよ。チョイバルサン時代の13省の大臣は全員が元県知事です。彼らは自分の県の事業の指導に優れていたために大臣になったのです。人材に関して元帥の採っていたこの政策は非常に正しかったと私は思います。

ツェデンバルが国の権力を握り始めてから、人材の選考に関して元帥の採っていたこの政策は根本的に変更されました。ツェデンバルは人を選考する際、本人の活動の成果ではなく口約束や出身校や出身地によって選ぶという誤った方法を用い始めたのです。責任重大な国の役職に任命される人びとをこのような方法で採用したために、しばらく経つとわが国のあらゆるレベルで事業が停滞し始めました。こうして実生活と指導とのあいだに矛盾が生じ出しました。指導部は現実から生まれて来る諸問題を把握できなくなりました。そして正しい決定を下すことができなくなりました。こうしてこの矛盾はますます深まり始めました。時には、この状態から脱するための方法を探していましたが、成果が得られなかったので、わが国では陰に陽にさまざまな形での指導部批判が一般に広がり出しました。わが国の工場や企業で働く者たちは、仕事をしない幹部の言葉に耳を傾けなくなり、与えられた課題の遂行をしなくなってきました。幹部たちは従業員たちの言葉を聞かなくなり、彼らの考えや希望の受け入れや理解をしなくなって来たのです。こうして全般的な不信が生まれました。そしてすべてのレベルで、事業が停滞した状態の中で日々を過ごすようになったのです。

## 6 ツェデンバルとの関係

KY：党中央委員会のツェデンバル書記長との個人的関係はいかがでしたか？

LO：近い、良い関係だった時期はあります。私がツェデンバルの自宅を訪ねていた時期もあります。彼の弟や妹とも仲は良かったのです。彼には弟が1人と妹が1人います。妹さんと親しかった時期もあります。私がモスクワの共産党大学を卒業して帰国後に起こったあるできごとについて話しましょう。

当時、わが国ではナーダム〔毎年7月の革命記念日に行われる国民の祭典〕をととても盛大に祝ったものです。何日も休暇を楽しみました。そんなナーダム中のある休日、ツェデンバルの妹と私はトール川に行って過ごすことにしました。ところが、私たちをトール川まで送り届けてくれる車がありません。それで車を持っている人を探そうと

ナーダム会場付近を歩いていました。そこにはナーダムの見物に来たたくさんの人や車が集まっていました。すると、彼女が突然「ねえ！ここに兄の車が停まっているわ。あの車で行きましょうよ！私、運転手をよく知ってるの！」と言います。本当に私たちからそう遠くない場所、政府や党中央委員会の幹部用駐車場にあるたくさんの車の中に、真っ黒で真新しい乗用車が停まっています。確かに彼女のお兄さんの車です。運転手は車内にいます。私たちの頼みを聞くと、その運転手はあまり気が進まないようでした。けれども断りませんでした。「ナーダムが終わる前に必ず戻って来なくてはなりませんよ！」と繰り返し繰り返し言い聞かされました。私たちも「ナーダムが終わる前に必ず戻って来る」と約束しました。

こうして私たち2人はその自動車でトール川を下って走りました。そして柳のある気持ちの良い場所を見つけました。のちにその付近には「ソングノ」という名の保養所が作られたのですよ。運転手と3人で柳の木陰に座り、お茶を沸かして飲み、ちょっとしたピクニックをしました。暑い日だったので、運転手と私たちは水に潜って遊びました。そこに来た時には正午を過ぎたばかりだったので、ナーダムが終わるまでまだたっぷり時間がありました。安心した私たちは水遊びを終え、柔らかい砂の上に寝そべり、甲羅干しをしているうちにぐっすり眠ってしまいました。こうして3人とも目覚めてみると、まもなく日が暮れようというところあいになってしまっていたのです。夏の日の日暮れは遅いでしょう。ナーダムがとっくに終わってしまっていたのはもちろんのことです。こうして一大事になるにちがいないということになってしまいました。こんな時には「正直に全部話して、彼女のお兄さんに謝る以外に助かる道はない」ということを私たち2人はわかっていました。それで彼女のお兄さんのところへ行きました。正直に話しました。謝りました。「2度とこんなことはしません！」と約束しました。ナーダムが終わってツェデンバルが出て来ると、車がありませんでした。それで彼はそこに停まっていたある大臣の車で自宅まで送らせたのでした。当時、わが国は穏やかないい国でしたよ。今とは大違いです。元首や党の指導部や大臣たちが街で一般人と同じように歩くこともよくあったのです。彼らは時間さえあれば街を歩いたものでした。私の女友達のお兄さんは、私たちがこんなことを引き起こしたのを喜んで受け入れたわけではないのはもちろんです。けれども激しく怒った様子もなく済みました。

ツェデンバルの弟はアヨーシといいます。細君の父親はJ.ナンサルという人でした。アヨーシは細君を連れて、私は妻と、ツェデンバル、フィラトワ夫妻と一緒に、ナンサル氏の家で国際女性の日や新年、十月革命記念日のお祝いを何度もしたものです。ツェデンバルの弟アヨーシの細君と私の妻は姻戚関係のある、親類だったので。

**IL:** ツェデンバル氏は概してどのような性格の人ですか？

**LO:** それはもう、いたって善良ですよ。総じて善良です。気さくで、温厚で、物腰の良い人ですよ。私たちが批判したのは、ツェデンバルの個人的欠点や仕事上のやり方、



彼の進めた政策，方針だったのですよ。人びとの生活からかけ離れた人でしたよ。

この点について私はあなたたちに1つの例を述べましょう。1950年代末ごろ，私たちはボル湖の国営農場に新しく馬農場を建設しました。ソ連から良い血統の馬をたくさん輸入したのです。ある日，ツェデンバルは私を呼びました。私が彼の執務室に行くと，彼は「私は明日，君たちが話している馬農場を見に行く。君も一緒に来たまえ」というのです。翌日は休日でした。私たちは約束した時間にウランバートルを出発しました。ツェデンバルの警護の人たちはほとんどいませんでした。ボル湖の国営農場は近いのでまもなく到着しました。ウランバートルから出発するとき，私たちは農場長に事前に連絡しませんでした。そのため誰も私たちを出迎えませんでした。みな休んでいたのです。ただ1人見張り番の老人がいました。彼が出迎えました。休日にそもそも誰が来ているのか彼は理解できていないようでした。そして「こんにちは」と手を差し出しました。私たちは彼と挨拶を交わし，彼に続いて私もその老人と握手しました。それから，見張り番は私たちに馬農場の柵囲いを案内しました。私は，ツェデンバルに対して馬の血統や品種について説明しました。こうしてすべての柵囲いを見学し終えました。そして私たちはそこを出ました。例の老人は私たちを見送りながら「では，さようなら！」と言ってまた手を出します。「では，さようなら！」「さようなら！」と私たちも彼に言って再び握手しました。こうして私たちはそれぞれの車に乗り込みました。私が車に乗って出発しようとしているのに，ツェデンバルの車が動きません！ウランバートルから来るときには彼の車が先行し，私の車がうしろからついて行きましたからね。私の車の運転手は少し待ちました。しばらくして私はどうなっているのかと車から降りました。すると，ツェデンバルはうしろのトランクをあけて，大きな瓶に入った青色のアルコールを白い布に振りかけて両手を交互に拭いていたのでした。消毒していたのですよ。この瞬間，私はとても怒りを覚えました。「この人はこんなに人民の生活からかけ離れてしまったのだ。普通の遊牧民の老人と握手したために病気がうつるのを恐れているのだ。このアルコールも，この白い布も，ロシア人の妻が準備して彼に与えたにちがいない！ツェデンバルとは何者か？彼はいつも白い布で手を拭き，白いシャツを着て，こんなにも清潔にしてきたのか？そうではないだろう。彼自身はこの老人よりずっと貧しい環境で育った人間だ。彼にせよ，私にせよ，およそ私たちモンゴル人が暮らして育ってきた環境はこんなものだった。みな同じだ。それなのに今さらこの人はなんとという性格を出しているのだろうか？この人は誰をばかにしていることになるのか？これはいったいどの習慣か？これはどう見てもモンゴルの習慣ではない！」という思いが生まれてしまいました。そして，私は自分の車に乗って，振り返らず，ウランバートルの方向へ猛スピードで帰りました。A.I.フィラトワはモンゴルに40年近く住んでいましたが，1度としてモンゴル遊牧民の家に泊まったことはありませんし，一言もモンゴル語を学ばないまま故郷に帰りました。彼らは，スラビク（幼名）とゾリグという2人の

子どもたちを同世代のモンゴル人たちとまったく遊ばせませんでしたし、彼らは一言もモンゴル語を話さないまま20歳になりましたよ。彼らはそういう人たちだったのです。そんな人たちが私たちを教え導くと称して、私たちの舵を取り、統治していたのですよ。

このような姿勢は職務の遂行にとって大きな障害になっていました。私たちが批判したのは、人民の生活に生じている諸問題に対して支援を与えず、それらの問題についてまったく理解に欠けた彼の姿勢でした。仕事や親類の関係、あるいは個人的問題で会った時に「ちょっとまずいですよ。人民の生活や国の状況をよく知る必要がありますよ！」と何度も言ったのですがね。いっこうに改善されませんでしたね。

## 7 ソ連留学

KY：留学で初めてソ連に行かれたのはいつですか？

LO：私は講師局に1944年から1950年まで勤めました。優秀な教官担当者だと評価されていました。当時、私はロシア語を独学で学ぼうと大いに努力していました。夜中の2時まで職場に残ってロシア語の本を読んで訳すということをしていました。そのころ、人民革命党中央委員会イデオロギー問題担当書記のN.ソルバラムという人がいました。その人はロシア語を身に付けようと努力している私を見てきつと思うところがあったのでしよう。

1940年代末、モスクワの「共産党大学」へのモンゴルからの留学生派遣が議論され始めました。当時ソ連共産党は、社会主義建設に着手した諸国や将来の社会主義建設に関心を持っている国々での人材育成を支援しようと決めたのです。そのような国々の中にはモンゴルも含まれていたのですよ。最初の年には4人が行きました。これはTs.ドゥゲルスレン、S.ゾンドイ、D.ツェデンダムバ、B.エネビシたちでした。

次の年もまた4人行くことになりました。それはD.チョイジャムツ、S.デレグ、Ts.ダグワスレン、そして私です。チョイジャムツ氏は党中央委員会の書記を務めた人物で、私たちの中で1番年長者でした。ダグワスレンは党中央委員会の対外関係課長だった人です。ダグワスレンは現在モスクワで生活しています。彼はロシア人の奥さんをもらったのです。私たち3人は27歳前後の同年輩でした。

私たちが行った当時、共産党大学はモスクワ市の10階建ての灰色のビルにありました。国立で、非常に物質的環境が整い、優れた教育を行う学校でした。ソ連共産党中央委員会の書記をはじめ、各課長、閣僚、大臣、長官たちはこの大学の卒業生でした。また資本主義国、たとえばアメリカ、フランス、英国といった国々の共産党員が留学していました。彼らがここで学んでいることは公然ではなく、秘密でした。ごくわずかな人だけが来ていたのでしょう。私の留学時代、この学校に日本人が来たかどうかは知りま

せん。いたとしてもやはり秘密だったでしょう。

私たちが行った当時、この学校の学生は月額1,500ルーブルをもらっていました。外国からの留学生には500ルーブルが割増されていました。最初の年は2人部屋でした。翌年から1人部屋で生活できます。寮にはクレムリン食堂の支店がありました。そこでは1週間ごとに料理を予約するのです。私はロシアで学んだ3年の間、ジャガイモとパンはほとんど食べませんでした。クレムリン食堂が料理を出してくれるので、自分の好きな肉料理ばかり注文していました。いろいろな動物の肉を注文するのですよ。ガチョウ、鶏、豚、羊、牛の肉を頼んでいました。当時、クレムリン食堂は自分のところで使う肉をフランスから仕入れていました。ガチョウと鶏もやはり輸入品だったでしょう。豚肉はウクライナから来ていたはずですよ。私たちは衣類も直接オーダーで作らせていました。オーダーメイドの服を作る大きな工場があったのです。文化・芸術のすべての施設に並ばずに入場する権利がありました。学生証を見せてそのまま入るのです。

ソ連共産党中央委員会の総会や十月革命記念式典といった革命的内容の大規模な式典の時に行われる集会への参加に招待されました。十月革命祭典の時には「赤の広場」で労働者祝賀デモが行われ、次に軍事パレードが行われたものです。当時、ソ連共産党の指導部やソビエト政府の幹部は、レーニン廟の演壇に並び、労働者祝賀デモと軍事パレードを迎えるのでした。私たちはレーニン廟のすぐ隣に立たされました。そこには政府の要人、大臣、外国の大使たちが並ぶための「特別ステージ」がありました。私たちはその人たちと並んで立ったものです。

大学にはとても大きな図書館がありました。国立中央レーニン図書館、ソ連共産党中央委員会付属のマルクス・レーニン主義研究所図書館を利用しました。大臣や長官、仕事ぶりが優秀な工場や企業の責任者、労働英雄たちが来て講義をし、自分たちの仕事や成功に至った方法、経験をお話しました。私たちも優秀な工場や企業をよく訪問しました。彼らの仕事ぶりを現場で見学しました。実務の経験を研究しました。私は留学の3年間にとても多くのことを新しく知り、理解しました。とくに経営の指導法や経験には多くのことを考えさせられました。

**KY**：モスクワでは自由時間をどのように過ごしていましたか？

**LO**：私は留学の3年間に、モスクワにあるすべての劇場で公演を観ました。それに関連してちょっとした歴史をお話しましょう。

私たちは留学の当初、ロシア語がよくわかりませんでした。人の話していることはほとんどわかりません。自分で本や新聞を読む時には多少は理解できます。それで私たちの目の前には「どうすればロシア語を早く覚えられるだろうか？」という問題が非常に切実に突きつけられました。それで私たちはロシア語の速やかな習得という問題について研究してみました。そして「ロシア語を習得するための最速の方法は、ロシア人女性と知り合うことである。これこそが最良の方法だ！」ということで全員意見が一致しま

した。

私たちはみな27歳前後の若者だったのですよ。それで私たち3人は、ロシア語を教えてくれるロシア人女性と知り合いになることに決めました。当時、私たちの大学はモスクワだけでなくソ連全国規模でとても権威があったのですよ。私たちが行ったのは戦争の痕跡がまだ一掃されていない時期です。一般のロシア人家庭では、ジャガイモとパンが主な食べ物だった時代です。そのころ、ロシア人男性は酒浸りになる人が多かったのです。その理由はあとでわかりました。戦時中、ロシアの労働者は昼食に一切れのパンとジョッキ1杯のビールを飲んでいました。パンは黒パンですよ。パンには辛子を塗って食べるのです。ほかに食べ物はありません。それでパンを食べながらビールを飲んだのです。ビールは酒の一種ですからだんだんと酒飲みになる道が敷かれるのです。

当時は男性の数がとても減っていました。ソ連は戦争で何百万人も失いましたね。そういう理由のせいでロシア人女性は、誰でも構わないから外国人と結婚することに関心があったのでしょう。とくにうちの大学の学生と知り合いたいという気持ちがロシア人女性のあいだでは大きかったかもしれません。しかし、当時、ロシア人女性と外国人との結婚を認める法律はなかったのです。この問題はずっとのちの、1950年代の末になってから解決されました。私たち3人がそのような法律がソ連にはないということを当時知っていたのかどうか、さっぱりわかりません。ただモンゴルにはロシア人を妻に持つ人がいることは知っていました。

私たちは学校の近くにダンスホールがあるのを見つけました。そこに若いロシア人女性が大勢かよって来ることを知りました。それでみなで踊りに行くことになりました。私たち3人はそこへ行き、ダンスに加わるようになりました。S.デレグはダンスがとても上手でした。ワルツなどはクルクルとうまいものでした。当時はワルツ以外のダンスはしなかったのです。今の若者のマンボやらタンゴやらいうダンスは踊らなかったのです。私たち2人はデレグのように踊れなかったのですがね。それでもダンスはとても好きでした。ロシア人はダンスが上手です。彼らはすらっと背が高いのでダンスをするととても美しく見えます。まさにダンスをするために生まれてきたように思えました。それでふと気がついた時には、私たちはすっかりそこから離れられなくなっていました。ダンスが終わったあとも耳には音楽が聞こえ、踊っている人の姿が目には浮かび、おとなしく勉強することも、夜眠ることもできなくなりました。

こんなふうに過ごしているうちに、それぞれガールフレンドができました。私の彼女は教師でした。彼女は母親と2人でモスクワ郊外に暮らしていました。母親は飛行機工場に勤め、本人は中学校で教えていました。彼女はとても教養があり、読書や劇場、美術館に行くことがとても好きな人でした。私はその女性と知り合ったおかげで、3年のうちにモスクワにあるすべての劇場、すべての美術館を見物しました。モスクワに

は全部で33の大きな劇場があります。中でも最も有名なのはボリショイ、マールイ、ヴァフタンゴフ、エルミーロフ、プーシキンという5つの劇場です。私たちはこの5つの劇場にかかるレパトリーすべてを観ました。

初めのうち、私が最も理解できないものはクラシック音楽でした。彼女はベートーベン、モーツァルト、シュトラウス、シューベルト、ショパン、チャイコフスキー、バッハ、ショスタコービチ、ハチャトリアンなどのクラシック音楽のコンサートを聴きに、チャイコフスキー記念モスクワ音楽院のコンサートホールに私を連れて行ったものです。しかし、私は眠くなって演奏が始まるやいなや座席で眠ってしまったものでした。彼女は隣からつねって起こします。またもや眠ってしまいます。そんなふうになっているうちに、だんだんとクラシック音楽がいくらかわかるようになりました。しまいには聴くのがすっかり好きになりました。

そして劇場以外では、モスクワの美術館や展覧会の類はすべて見ました。時にはレニングラードへ行くこともありました。レニングラードは世界で最も美術館の多い街なのです。私たちは土曜日に特急列車でレニングラードへ行って見学し、翌日帰って来たものです。そのころデレグと私は、全連邦ラジオ管理局の「モスクワからのモンゴル語放送制作部」の仕事に関わることになりました。私は「講師」活動の経歴があるので必要とされたのです。月額1,000ルーブルをもらっていました。

全連邦ラジオ管理局の保養所がクリミア半島の黒海沿岸にありました。それはかつてロシア皇帝が所有していた場所なので、立地もよく、自然に恵まれたところでした。私は学校が春休みになるとロシア人の彼女を連れてそこへ行き、2ヶ月を過ごしました。モスクワからは運転手つきの車を雇って行きました。そして保養所の近くに部屋を借りて運転手を住ませ、自分たちは保養施設に滞在しました。

黒海沿岸は見るべきものがたくさんある、自然の美しい場所ですよ。私たちが休暇を過ごしたところから西へそう遠くないところにセバストポリ市、東にはカフカスの山々があります。私たちはそこへ車で遊びに行きました。秋になって帰る時にはカフカスやウクライナでさまざまな種類の果物を買って、モスクワに持って帰りました。彼女の母親は、私たちが持ち帰った果物でおいしいジャムを作りました。私たちの暮らしぶりはこんなふうでした。私は彼女のおかげで音楽や劇場芸術を理解するようになり、ロシア語を覚えたのです。

当時、私は本をよく買いました。有名な交響楽やオペラ、創作歌謡のレコードもよく買いました。モスクワから帰国する時にはトラックいっぱいの本と一緒に帰りました。モスクワでは酒や煙草は1つも覚えませんでした。すべての時間を、勉強と劇場と音楽鑑賞に使っていたのです。1週間のうち5日間はすべてを勉強に使いました。夜中の2時や3時まで本を読みました。「自分には2度と勉強のチャンスはないのだから、得られたこの機会を有効に使おう！」と思っていました。モスクワ留学中、モンゴル人民革

命党中央委員会の書記の方々や、国の高官がしばしばモスクワを訪れました。私は人民革命党の中央委員会に勤めていたので、その多くとはすでに知り合いました。私たちは訪れた人たちと会い、国の様子を聞くのが楽しみでした。

**IL**：共産党大学で学んでいた外国人のうち、卒業後に帰国し、自分の国の最高指導部に加わった人物はいますか？

**LO**：いますとも。自国の政府の一員や大臣といった役職に就くのは普通に見られます。国の中心的指導者になった人としては、ルーマニア大統領でルーマニア共産党中央委員会書記長のニコラエ・チャウシェスクを挙げることができます。

チャウシェスクは私たちと一緒に学んでいました。私は1956年12月、チャウシェスクの招待で、人民革命党代表団長としてルーマニア共産党大会に出席しました。当時私は、共産党大学を卒業し、ゴビアルタイ県の人民革命党委員会第1書記を務めていました。その大会には中国共産党代表団長として朱徳国防相〔実際は国家副主席で国防委員会副主席。国防相にあたる国務院国防部長は彭徳懐〕が来ました。ソ連共産党代表団は、ウクライナ共産党第1書記が団長として来ていました。その党大会にはさまざまな国の共産党代表団が来たのです。大会後、ゲオルギユ＝デジ・ルーマニア大統領〔正確には1956年当時、ゲオルギユ＝デジはルーマニア共産党第1書記兼首相〕は外国からの代表団をブカレスト市郊外にある自らの邸宅に招待し、会見しました。新年も近づいていました。それで大掛かりな歓迎パーティーが催されました。その歓迎パーティーでは大会代表に順番をふり、ゲオルギユ＝デジ大統領の娘さんとダンスをしました。娘さんは銀色がかった髪色の、顔立ちの整った、美しい娘だったのが思い出されます。ゲオルギユ＝デジ大統領は邸宅に娘さんと2人で暮らしていたのです。夫人は亡くなっていました。そこで彼は私たちにある珍しいものを見せてくれました。ダンスの最中に彼は、

「ではみなさん、私のプレイルームにどうぞ!」と言いました。「大統領のプレイルーム」というのを私は「スポーツをプレイする部屋」と受け取ったのですがね。それで私たちは邸宅の1階に下りました。1階では、おもちゃがぎっしり並べられた一室に案内されました。おもちゃは実にさまざまなものでした。とても数多くのおもちゃが飾られていました。するとその部屋が「大統領のプレイルーム」なのだと言います。大統領は知的労働をし、とても疲れた時にその部屋に入って遊ぶのだそうです。私たちと一緒に部屋に来た外国代表団の人たちがそのおもちゃで思わず遊んでいましたよ。その部屋について興味深い思い出が残っています。その部屋で、中国共産党代表団長で中華人民共和国国防大臣〔正しくは国防委員会副主席〕の有名な朱徳将軍が、そのおもちゃで遊び、心から笑い、喜んでいたことは、今でも忘れられません。本当に大の大人が子どものおもちゃを見て楽しむということがあるものなのですね。長いあいだ知的労働をしている人は、このような方法で疲れをいやすことがあり得るように思われましたよ。とて

も妙な方法を見つけたものです。今なら「ストレスをとる」としてさまざまな方法が使われていますがね。

当時、私の知人ニコラエ・チャウシェスクはルーマニア共産党中央委員会のイデオロギー担当書記を務めていました。彼はモンゴル代表団を別個に招待して会見しました。この会見でチャウシェスクが語ったあることがら、今でもはっきり思い出されます。ルーマニアは天然資源が乏しい、貧しい国だが、多少の石油資源はありました。それで彼は「石油資源をロシアに取られないよう努力している」と語ったのです。そもそもチャウシェスクは当時から多くの点でソ連共産党と意見が食い違い、ソ連共産党の言葉に耳を貸さず、独自の考えを持った人でしたよ。すべての問題を自分たちだけで決め、ソ連から「助言」をもらっていませんでした。後年、チャウシェスクはルーマニア大統領、そしてルーマニア共産党中央委員会書記長になったのち、この姿勢をますます確固たるものにすることができたのです。90年代に世界の社会主義システムが崩壊した時には、ルーマニアは対外債務のない唯一の社会主義国でしたよ。その他の社会主義諸国の対外債務は膨大なものになってしまっていました。しかし、彼が国内で行った政策は正しくなかったのでしょうか。エレナ・チャウシェスク夫人は夫の代わりに国の問題に口を出し、国務大臣や幹部を自分の好きなように更迭したり、贅沢好きの度が過ぎていたり、とても大きな欠陥を持っていたのです。1990年代、ルーマニアの民主化と刷新が非常に急激な形で展開し、ニコラエ・チャウシェスクとエレナ・チャウシェスクは逮捕され、さらに世界中の目の前で処刑されましたね。およそ国外であれ国内であれ、夫人に国の問題に口出しさせるといのは、国家首脳最大の誤りですよ。私生活と国の業務の2つは区別されるべきです。

**KY**：モスクワの共産党大学では何年学ばれましたか？

**LO**：3年です。卒業して帰国することになりました。例の彼女と一緒に帰国すると決めました。彼女も一緒に行くと言っていました。ところがロシアの女性が外国人と結婚するための法律がないという大問題が持ち上がってきました。当時は、法律がないとはいえ、ロシア人女性と外国人との結婚例はかなりあったようです。そのような場合にはソ連の最高会議が許可を与えていました。当時、ソ連最高会議議長はクリメント・エフレモビチ・ボロシーロフが務めていました。それで私たちはボロシーロフに会うことにしました。一般人はクレムリンに入らせてもらえません。ボロシーロフには、勤労者の訪問を受けるという特別なスケジュールの日がありました。まず赴いて、そのスケジュールに従って面会の許可をもらうことになっていました。ただし、クレムリンの勤労者受付局がボロシーロフと面会する問題を検討して、面会を認めるかどうかを判断し、回答するのです。私たちは決められた日に、クレムリンの勤労者受付局に行きました。そこにはボロシーロフと面会を希望する人がとても大勢いました。私たちはほとんど1日中行列に並んで入りました。そして、ボロシーロフとの面会の用件を言い、許

可を求めました。それから待ちました。何日も何日も待った挙句、「受け入れ不可」との回答を受け取りました。こうして私たちが一緒にモンゴルへ行くという全計画が崩れました。

## 8 マルクス・レーニン主義室

LO：それで私は1人でモンゴルに帰国しました。私が帰国すると、講師局は拡大されて、人民革命党中央委員会の「マルクス・レーニン主義室」と呼ばれるようになりました。この新しい部局の長に私が任命されました。ソ連で3年学び、ロシア語を話したり書いたりするようになったし、やる気一杯で着任しましたよ。30歳になっていました。1953年の秋です。こうして着任し、今後なすべき仕事について考えました。それ以前、私たちはいつも「講義」の準備をし、それを大衆に語り知らせるということをしてきました。このような手法は今ひとつ不十分に思われました。それで「マルクス・レーニン主義理論のすぐれた著作を書こう！」という考えが生まれました。これについて私は職場の勤務員たちと話してみました。そして、マルクス・レーニン主義の3つの基礎である「弁証法的唯物論」、「史的唯物論」、「マルクス主義政治経済学」について理論書を書くことに決めました。それで共著でこのテーマの本3冊を出版しました。この3冊は長年、わが国の大学教員や学生の「座右の書」となりました。

そのころ、ソ連の科学アカデミーと、モンゴルの典籍委員会〔当時の名称は「科学委員会」〕(のちモンゴル科学アカデミーとして拡大)とが共同で、モンゴル史の新しい本を著し、出版する事業が始まりました。この事業にモンゴル側からは、シレンデブ氏を筆頭とする学者たちが参加しました。こうしてモンゴル史の新しい1巻の本が、モスクワからロシア語で出版されました。私たちの「マルクス・レーニン主義室」が1ヶ月のうちにその本をロシア語から翻訳し、モンゴル語で出版しました。そこで働き始めた当初、私が常に考えていた1つのことは、モンゴル国の今後の発展という問題でした。モンゴルは今後どのように発展すべきなのかという問題をよく考えました。これについて当時、人民革命党と政府は明確な政策や理論的方向性を持っていませんでした。モンゴルを将来どんな国に発展させるのかということについて、明確な計画や理論の方針はどこにもありませんでした。すべてのものがたった1つの流れに沿って進んでいました。「現状に正しい評価を加え、今後の正しい発展方向を定める必要がある」と考えるようになりました。それでこのテーマについて多くの人と話し合ってみました。幾人かには新しい提案の論文を書かせるようになりました。そういった理論的論文を『ウネン(真実)』紙〔モンゴル人民革命党の機関紙〕や『党生活』誌が掲載するようになりました。

しかし、ある時、私たちの書いた論文について新聞や雑誌の編集部が掲載を拒否する



傾向があらわれだしました。彼らはこういった論文の掲載を恐れ、警戒するようになったのです。そのころ人民革命党中央委員会の出版室長はTs.ナムスライという人物でした。この出版室が新聞や雑誌の編集部や出版所に直接指示を与えていたのです。党書記長は彼らと常に面会し、業務方針と任務や指示を与えていました。そのころは、出版物が厳しい管理下に置かれ始めていたころですよ。出版の自由はこのころに終わりを告げたのです。出版物には主に政権を握っている人民革命党の政策や決定ばかりが載っていました。それ以外の考えを持った記事が出ることはまれになってきたのです。それで私はこの問題についてツェデンバルと話すことにしました。ある日、彼の執務室に行きました。私は彼とつねづね会っていました。ただ、この問題については初めて触れるのでした。

ツェデンバルは、

「何の話をしに来た？」と尋ねます。

「1つ重要な問題があります。私にはあなたの助けが必要です。私たちはモンゴルの将来の発展について提案する理論的論文を書いています。今後、党がわが国の将来の発展方向を定めたり、その理論的基礎を練ったりするために必要になるだろうと考えたのです。ところが新聞や雑誌の編集部は一部の論文の掲載を拒否しています」と話しました。「ツェデンバル書記長は私の話を支持するだろう」と私は信じていたのですよ。ところが、私は正反対の返事もらいました。

「この理論問題はあとにしないで！これについてわが党が議論するのはまだ早い！」と彼はとても冷淡に答えます。この言葉を聞いて、私は沸き立つ気持ちに水をさされたように感じました。それで私は、

「わが党は、国家発展のいかなる方針も準備もなく、他国を真似し、他国の言うことを聞き、真っ暗な中で道に迷ったように、行き先もわからずに手探りで歩くことにならないですか？理論のない党は盲人に等しく、実践のない党はびっこに等しいのではないですか？」と厳しく尋ねました。こうして私たち2人の話は思わしくないものになりました。私はそこを出ました。出る時、ドアを外から勢いよく閉めました。私たちの対立は最初こんなふうには始まったのです。

その後、ツェデンバル書記長のこの回答には納得できないようになりました。私たちのあいだにそんな会話があってもなく、私をゴビアルタイ県の党委員会第1書記に任命するという決定が出されたのです。これは私を党の理論問題から遠ざけることを目的とする決定だったと私は今でも思っています。県の党委員会第1書記は、理論問題よりも経営活動に留意すべきでしてね。ツェデンバル氏は自分の側にマルクス・レーニン主義理論の知識を持った人間がいることをとても怖れていたということが、あとになってはっきりしました。本人がこの方面の系統だった理論的知識のない人物だったことと関係があったかもしれません。「ソ連共産党の進んだ道を、その後について行けば、

失敗は生じない」というたった1つの考えが、彼の中には頑強に存在し続けたのです。起きている事象を分析し、正しい評価を加えるという理論的な準備が不足していたことが、他国の進んだ道に従って盲目的に進む事態を導いたのかもしれませんが。

1956年にハンガリーで、1968年にチェコスロバキアで起きた事件は、ツェデンバルのこの閉鎖的な態度をさらに深めるのに強く影響したかもしれません。本来、この事件を深く研究し、そこから出てきた教訓を自分たちの今後の事業に生かす必要があったのです。もし、私たちにそれができていれば、1990年初めに市場経済システムへの移行を始める際に、「種オス羊が交尾調節布を足にひっかけて歩く」ような、みっともないことをしなくてすんだかもしれないのです。起きた事件に対して、ハンガリーとチェコスロバキアの政権党が正しい研究をし、正しい評価を加え、その教訓を自国のその後の活動に生かしたので、こういった国々は短期間のうちに東欧の社会主義諸国の中で自国の経済を最も迅速に発展させることができたのですよ。1990年代、世界の社会主義システムが崩壊し、東欧の旧社会主義国を巻き込んだ経済危機から、こういった国々は最もすばやく、損害も小さく、抜け出すことができました。

ツェデンバルは理論面で自分の素養が芳しくなかったために、これについての素養のある人たちを常に側に置き、彼らの力を利用していたのです。しかし、そういった人たちの運命はいつでも悪い終わり方をしました。ツェデンバルは彼らの力を一時は利用しますが、あとになってさまざまな理由を見つけては非難し、ある者は降格して別の役職につけ、ある者は無期限で地方に流したのです。このような形で流された人たちの中で残念なのはD.トゥムルオチルとL.ツェンドでした。この人たちは祖国に多くを成すことのできた人たちですよ。彼らの人生と運命が無念な終わり方をしたことを、われわれモンゴル人は誰でも知っています。このような形で追放されたトゥムルバートルやルハムジャブたちは、若くして亡くなりました。トゥムルバートルはフブスグル県に流されているあいだに亡くなったのです。ルハムジャブは投獄中にやはり亡くなったのですよ。いずれも哲学で学位を取った人たちでした。

## 9 ゴビアルタイ県にて

LO：こうして私は、1954年に自分の生まれ育ったゴビアルタイ県に生まれました。私はそれまで経営事業に携わったことがありませんでした。初めてこのような大きな経営事業を指導することになりました。訓練も経験もないそんな人間が来たわけです。チョイバルサン元帥の時代に大臣や幹部に同行して地方を訪れていた時に、いくつかの実務を視察していたことが、今度は役立ち始めました。元帥は誠実であることを他人に求めた人物です。へつらう人間をととても嫌っていました。私自身の父もそのような性質の人でした。このことが私に一定の影響を与えたのでしょうか。ゴビアルタイ県に赴任し、新し

い職務を受け入れました。県の党委員会の職員と会い、自己紹介を交わしました。そして彼らと行った会合で私は何点かを強調して話しました。

— 国から当県に与えられた経営事業計画を期限内に首尾よくやり遂げるためにあらゆる条件を動員する。この方向で全員が団結して協力することを希望する。

— モンゴル国憲法およびその他の法規に従ってあらゆる活動を処理する。いかなる形でも法規に違反するようなことがないよう、全員が努めることが必要である。故意なし過ぎて法規に違反した人は、その全責任を自ら負う。この点において、地縁やコネの問題があってはならない。

— 各人の活動はその成果で評価する。積極的にしっかりと働いた人のことはそれなりに評価する。

— 現在いる職員の異動や別の新人の採用などの変更はしない。みな自分のしていたこれまでの活動や役割を引き続き遂行する必要がある。しかし、活動の過程でその成果を鑑み、変更もあり得る。

この会合ののち、私は自分で県内の各郡をまわり、業務状況を視察することになりました。当時ゴビアルタイ県には郡が17ありました。農牧業協同組合（ネグデル）がまだ設立されていなかったの、人びとは自分の私有家畜の世話をして暮らしていました。家畜からとれる素材を自ら加工し、必要なものは自ら作り、フェルトを作り、革紐をなめし、乳製品を作って暮らしていました。これは私たちの昔ながらの生活ですよ。私たちは何世代もの間このような生活をしてきたのです。しかし、戦時中にはこの生活には若干の変化がありました。

当時「義務」という新しいものが出現したのです。人びとは自分の家畜からとれる皮や毛といった素材や乳、肉、脂を、国が定めた固定価格で国に売るようになっていました。その価格もとても安いのですよ。家畜の頭数に応じて各家庭に「義務」が課されてきました。こういう新しいものの導入により、私有家畜の増加が落ち込み始めました。家畜が多くなってしまうと「義務」によって国に売る分も増えますね。これは人びとにとってとても困難な仕事に変わってしまいました。それと並んで、家畜の種付け作業が国の管理下に置かれました。家畜の種付け作業を年1回行うという規則の実施が始まりました。こうして、ゴビアルタイ県の家畜は40年代から50年代半ばまで増加しませんでした。

当時は、ある県の事業がうまくいっているか、そうでないかということは、家畜の増加で評価されていました。ゴビアルタイ県は家畜が増加しなくなったので、全国でも仕事ぶりの良くない県の1つに数えられていました。私はゴビアルタイ県の各郡を視察した時には、その地方で権威のある、かつて政府で働いていた人びとを訪問するよう心がけていました。それでD.ゴンチグという人に会いました。その人と、県の家畜が増加しなくなった原因についてずいぶん話しました。するとその人はこう言います。

「今、家畜が増えないと言いますがね。元来、私たちの地方では、家畜は年に2度子を産んでいたのですよ！家畜の種付け作業が政府の管理下に置かれました。種雄羊、種雄山羊を別個に飼うようになりました。人びとの家畜が増えて来れば「義務」が増やされます。以前の家畜の消費量より今の消費量の方が多くなっています。以前にも消費ならありました。しかし家畜が子を2度産んでいたのです、1度の出産で消費を補い、もう1度の出産で家畜の増加を満たしていたのですよ！」と。

この話は私にはとても興味深く思われました。確かに、私が小学生だったころ、私たちは家畜に子を2度産ませていたことを思い出しました。2度目に生まれた子羊を種羊にしていたのを思い出しました。そういう家畜は辛抱強い良い家畜なのです。「家畜頭数を増やし、繁殖を取り扱う民間の方法があったのにそれを変更したことが、家畜が増えなくなる1つの原因になっていた」という考えが浮かんできました。そして「これからは県の家畜に子を2度産ませてはどうだろう？」と考えるようになりました。そして、この問題を県の党委員会の一部の同志と話してみました。昔用いていたやり方を認める人もいます。しかし、「これについては農牧業省から公式に許可をもらう必要があるだろう」ととても慎重な人もいます。このように意見は2つに分かれる様子でした。

私はこの仕事を農牧業省から許可をもらわずにすることに決めました。ちょっとしたわけがありました。当時、何か新しいことをしようと望むなら、まず当該担当省に照会しなければなりません。しかし、わが国の省庁はどこでも、新しいことをしたりしませんし、支持してくれないものです。政府の省の上に計画委員会があり、その上に閣僚会議があり、その上にモンゴル人民革命党中央委員会が位置していました。これらのすべての頂点にモンゴル人民革命党中央委員会政治局があり、その書記長であるY. ツェデンバルが率いていたのです。大小の別なくほとんどすべての案件を政治局が協議していました。納屋の見張り番を指名する案件くらいは協議しないでしょうがね。そういう構造でした。これらの段階を踏んでいくと何らかの決定が出ます。何ヶ月も何年も待ってようやく決定が出るのです。しかもその決定たるや、当初の計画からほど遠く、あるいは遂行するのに必要な予算が大幅に削られて、するに足りないものになるのがおちでした。たいていは、許可など出ず、可能性がつぶされるのでした。仕事の提案をした人たちが自分の立場を主張してあくまでも実行しようと努めれば、誤りとして処分されて終わるのでした。さらに問題化すると、国政の大問題となって、刑務所入りになってしまいます。実際、よい仕事をしようとして処分されたり、解任されたり、捨てられた人は大勢いたのですよ。当時、大小さまざまな問題を当該省の専門家に話しても、彼らは大臣に伝えませんし、大臣に話しても専門家に伝えませんでしたね。みんな、処分を恐れていました。のちに私が国営農場管理局に勤めたときもいつもそうでした。とてもたいへんです。当時、私は自分で思いついたいろいろな仕事をやろうと決め

たら、さまざまな方法を用いて政治局に許可させていました。長年、そのような状況で仕事をしていると、最後にはどんな仕事もする気が失せるものです。これについてはあとで話しましょう。私たちは当時、ゴビアルタイ県で年に2度出産させる一件について農牧省から許可をもらおうとするとどうなるかについてよく知っていました。それで私たちのこの計画が成功しなければどんな大きな処分が来るかもほぼ了解していました。逆に成功すればどんな褒美があるかはわかりませんでした。ともかく、「ゴビアルタイ県は業績が悪い！」という長年の評判を克服するという期待があったのです。これは、私の前に立ちはだかった最初の試練でした。

私の考えに賛成している人たちもいたので、私はこれを試してみることに決めました。県の党総会を招集しました。この会議で県の家畜に年に2度出産させるという正式の決定を下しました。しかし、県のハンガイ地帯に含まれている3つ4つの郡の家畜にはこの事業を適用しないことを決めました。そういった郡では秋の早い時期に寒くなるので、家畜の出産が終わらないうちに雪が降れば家畜と人間の両方が困難な状況に置かれ、家畜の損失が多くなりかねなかったからです。

こうして私たちは早春に種雄羊と種雄山羊を群に入れました。その年はとても良い夏になりました。家畜はうまく夏を越しました。秋、家畜がふたたび子を産み始めました。こうして私たちの県の家畜は、年末の計数で増加という結果を出しました。私たちはこのやり方をそれからも継続することに決めました。しかし、各郡の立地を考慮して、毎年ではなく隔年ですることになりました。この結果、私たちの県の家畜は年々増加の結果を出しました。家畜増加計画を3年連続で達成し、全国でも3年連続トップになりました。こうしてトップの県に移譲される「赤旗」を3年連続で取りました。政府は私たちの県の活動を高く評価し、30万トゥグルグの賞金をくれました。人びとのやる気も戻ってきました。

私たちは賞金で県の中心に2階建ての博物館を建てました。それはたいそう立派な博物館になりました。これは全国で初めての地方博物館になりました。私は自分で博物館の図面を描きました。1956年のできごとですよ。私たちは自分たちの地方に展示物を集める事業を手配しました。とても貴重な、歴史的・文化的な展示物が集まりました。私たちのコレクションの中にはジュンガル帝国のガルダン・ボショクト・ハーンの使っていた鞍が加わっていました。このようにとても貴重な展示物が多数集まったのです。今もその博物館にあることでしょう。

県の学校や病院にスチーム暖房を入れました。各家庭に鉄ストーブを使わせる事業を行いました。それ以前には、私たちの県の全家庭はトルガ〔五徳〕を使っていたのです。鉄ストーブを使うようになったことによって燃料に石炭を使うことが可能になりました。私たちのアルタイ地方は木が少ないので、燃料の問題はとても深刻な問題でした。石炭をまったく使っていなかったのです。しかし、アルタイは石炭が豊富な地方なので

すよ。鉄ストーブを使うことで燃料問題はこうして完全に解決することができました。

私たちは県の中心地に人造湖もつくりました。私たちの県の中心地は空気がとても乾燥しています。人造湖をつくれれば、空気の湿度に好ましい影響を与えてくれると思われましました。ボルハンボーダイ山に源を発するチャツェルガナト川をオラーンボフ水路に通し、ハリオン谷に水が入るようにしたのです。オラーンボフ水路というのは、古くて使われなくなった運河でした。私たちの地域は山岳地帯なので馬や自動車に乗った人が通る際、とても難渋する高い峠の多い地域なのですがね。そこで私たちはいくつかの恐ろしく高い峠を削って低くし、道を改修して人が通りやすいようにしました。

私たちの地域には「ターナ」という草がたくさん生えます。秋によく育ち、家畜が食べれば栄養が豊かで、ネギ類の植物です。それを秋、とても栄養のある時に集め、塩と混ぜて干し、飼料を作るようになりました。冬、水に浸し、えさが足りずに苦しんでいる家畜に与えるのです。このような飼料をえさ不足の家畜にほんの少し与えるだけで、すぐに元気になるのです。こういう飼料を昔から人びとは自分たちで準備していました。私たちはこのような飼料の準備作業を全県規模で実施するようになりました。このように統一的にしっかり手配しなければ、ある者は飼料を作り、ある者は作らないということでは、冬、雪が多く降った時に家畜が飢え、損害が大きくなってしまいますからね。

私たちの県には河川がありません。家畜の放牧に好都合な土地を水がないために利用できませんでした。県の北側にはザブハン川とバイドラグ川という2つのきれいな川が通っています。その2つの川のあいだにゴーリン平原という、とても広々とした平原があります。そこでは3県の人たちが馬を放牧していました。しかし、流水がないので家族で暮らすことはできませんでした。水があれば多くの家族が宿営し、多くの家畜を放牧することのできる良い土地なのに、です。ある時、私は仕事でデルゲル郡に行き、ある一家のところに泊まることになりました。その家の主人と放牧地や水についてずいぶんと話しました。その人はかなりの物知りのように思われました。その人が私にある言い伝えを話してくれました。「いずれこのザブハン川とバイドラグ川はゴーリン平原の中を流れ、シャル谷と合流し、1つの川となってベゲル盆地に至るようになるそうさ」という、人びとのあいだで長年語られてきた言い伝えを話してくれました。それ以来、この言い伝えの内容が私には興味深く思われるようになりました。人びとははるか昔からザブハン川とバイドラグ川の水がこのゴーリン平原の中を流れることを夢見て、この言い伝えを作ったような気がしていました。そしてこの事業を「してみたらどうだろう?」と考えるようになりました。それでこのアイデアを県の党委員会の同志たちに話してみました。すると彼らもその事業に関心があることがわかりました。

こうしてザブハン川の水をゴーリン平原に通すための水路を掘る作業が始まりました。近隣の郡の18~45歳の若者全員を集めました。全部で約3,000人集まりました。そ

して水路を掘る作業に加わりました。水路を掘り終えました。そしてザブハン川の水を1箇所せき止めておいて水路に流し込みました。水は私たちの掘った水路を伝い、8キロ流れて小山にぶつかり止まりました。それを越えて流れさせようとしたのですが、できませんでした。水路掘りをすべて手作業で行ったので、何か技術的な手違いがあったようです。私たちが作業の中止を決定しようとしていると、農牧業省から専門家が1人やってきました。私たちはその人に作業のすべてを説明しました。どこでどのようなミスをしたのかきちんと明らかにできていないことも話しました。こうして作業は停止しました。

この事業を私は後年、農牧業省の第1副大臣在任中にやり遂げました。当時わが省の大臣はN.ジャグワラル氏でした。ジャグワラル氏と私はとても懇意にしていました。氏は私の手がける事業をいつでも支持し、高く評価していました。ご本人はとても名高い、教養の豊かな人でした。ジャグワラル氏は当時、党中央委員会の政治局員で、氏の発言は政治局会議で重みをもって受け止められていました。氏はモスクワで経済学の学位を取得し、わが省の大臣となったのです。当時、農牧業省には副大臣が2人いました。私は国営農場担当の第1副大臣で、もう1人はネグデル〔農牧業協同組合〕を担当していました。こちらはD.バルジンニャムでした。

1958年ごろ、わが国の農牧業の発展のために、ソ連から3,000万ルーブルの無償援助が供与されました。ジャグワラル大臣はある日バルジンニャムと私を呼んで、この無償援助の資金の有効な使い道について案をまとめてくるよう指示しました。それから1週間後、ジャグワラル大臣は私たち2人をふたたび呼びました。私たちは大臣室へ行き、それぞれの案を説明しました。初めにバルジンニャムが自分の案を説明しました。彼はこの援助金でトラクターを購入し、全ネグデルに提供するという案をまとめていました。バルジンニャムが自分の案を話し終わると、大臣は私の案を尋ねます。

私は自分の案を話しました。

「バルジンニャムはトラクターの購入案をまとめました。この案でもいいかもしれませんが。しかし、現在わが国は外国貿易を通じて数多くのトラクターを買い入れていますね。今後も多数輸入する機会があります。ネグデルではこれまでに購入したトラクターの活用の改善ができていません。そこに加えてトラクターを購入するのはどれほど適切なのでしょうか？ネグデルにトラクターが必要ならば国営農場から適当数、ネグデルに移管することもできます。援助金のもっと別な、有効な使い道の案が私にはあります。ザブハン川の水をゴーリン平原に通す水路を掘り、運河を作るためにこの資金を使っただけではどうでしょう？以前、私たちは1度そういう努力をしてみました。地元の人びとが長年夢見てきたことです。これをうまく解決できれば多数の家畜と多数の人びとが飲料水を得ることができ、広大な適地を利用できるようになるはずですよ！」と自分の案を述べました。するとジャグワラル大臣は私の発言に大いに賛成です。こうしてこの問題を

党中央委員会の政治局会議にかけることになりました。

当時、わが国には水資源調査局という機関がありました。それは、のちに水利省として拡大されました。私たちはこの省の意見も聞きました。彼らは私たちの案に賛成です。こうして党中央委員会政治局会議でのジャグワラル大臣の提案は支持されました。そしてザブハン川の水をゴーリン平原に流す事業が再開しました。水利省が調査をし、掘削と運河の設計図と計画を作成しました。こうして順調に掘削と運河建設の作業に入りました。それから1年後の1959年に工学的構造を持った運河の利用を開始したのです。こうしてザブハン川はゴーリン平原の中を流れ、地元の人びとが長年見てきた夢が実現したのです。そこは多くの郡の多くの家畜の季節移動をする恰好の場所になりました。

現在はそこに水力発電所を建設し、発電をしているのだそうですよ。ゴーリン村という新しい集落もできました。私のところにはゴーリン運河建設40周年記念行事の招待状が来ましたよ。

## 10 国営農場管理局長に

KY：ゴビアルタイ県の党委員会の第1書記は何年お務めになったのですか？

LO：3年近くです。1956年の末に私は国営農場管理局長に任命されました。このころわが国では「未開地開墾運動」はまだ始まっていませんでした。しかし、いずれ党が未開地の開墾について大きな目標を掲げるということは明らかになっていた時期です。このころソ連では「全人民未開地開墾運動」が展開されていました。カザフスタンの広大な平原をすべて開墾して畑にし、穀物や野菜、とうもろこしを空前の規模で植えていました。わが国では国営農場の礎はボグド・ハーン政権モンゴル国時代に作られました。当時、ボグド・ハーンと政府要人は食料供給の目的で1つの国営農場を作っていたのです。後年、人民政府時代に「草刈り・馬ステーション」という名の国営農場が設立されました。こういった農場は良種の家畜の繁殖、穀物・野菜の作付け、草刈り、飼料備蓄の作業を担当していました。

すでに20年代半ばには、わが国はモンゴル羊と羊毛の生産性向上を目的としてオーストラリアから約10頭のメリノー羊を買い入れていました。シンメンタール種の牛も買い入れました。しかし、そうした家畜はもちろんいずれも、定住による飼育に慣れた家畜でした。冬用、夏用の畜舎や恒常的な飼料が必要ですよね。飼料と言ってもさまざまな種類の飼料が必要です。常に身体を拭いて世話をしてやる必要があります。モンゴルで放牧されている家畜とはまったく異なる家畜なのです。それでモンゴルでは外国から買い入れたそれらの家畜の飼育がうまく行かなかったのです。必要とされるこういった条件すべてを満たすことができなかつたのでしょ。家畜たちはまもなく病気に



かかって死んだと言います。私がヘンティー県のバヤンオール郡を訪れた時、死んだ種雄羊の角を1ヶ所に集めて山にしてありましたよ。みな疥癬にかかって死んだそうです。

戦後、東部の県に駐留していた軍の部隊が解隊されました。軍の諸部隊は兵士に食料を供給する目的で大規模な農場を持っていました。その解隊の際、農場の管轄を国に移したのです。このようにしてわが国に国营農場の礎が築かれました。こういった国营農場はすべて国家予算で運営されていました。経営してもちっとも利益は上がりませんでした。国家予算で運営していたので常に支出が出る一方だったのです。帳簿はすべて赤字でした。そのような国营農場は合わせて20ほどありました。10ヘクタール足らずの畑で野菜を作っていました。ズーンハラーとツァーガントルゴイの国营農場は少しの小麦を作っていました。それでわずかばかりの小麦粉を作っていました。また飼料やエンバクを少し作っていました。当時ハラー川に水力発電所が2ヶ所造られ、稼動していました。

未開地開墾運動はソ連の直接の影響下に行われた事業です。ソ連で全人民未開地開墾運動を始めた人はN.S.フルシチョフです。この人物はウクライナ共産党中央委員会の第1書記だった人です。1952年、スターリンの死後、ソ連共産党中央委員会の第1書記兼ソ連閣僚会議議長になりました。当時は独ソ戦がソ連の勝利に終わり、東欧諸国が社会主義建設の道に入ったという非常に独特の時期でした。その時代を「世界社会主義システムの確立期」と規定していました。「社会主義社会体制は資本主義社会体制と比較すれば多くの優位性を持ち、人間の幸福な生活の条件をより満たしてくれる社会体制である。このことを実生活で実証すべきだ！」という見解が非常に幅を利かせていた時代です。社会主義社会と資本主義社会のあいだに当初存在する経済競争は、社会主義の勝利に終わるということをフルシチョフは固く信じていたのでしょう。彼は常に「ソビエト人民は、人類の明るい未来である共産主義社会にまもなく突入する！」と言ったり書いたりしていました。「共産主義社会というのは貧富の差がなく、社会構成員はみな等しく幸福な生活を送り、文化・科学の発展は頂点に達し、貨幣はなくなり、人間は自分の能力に応じて働き、必要に応じて受け取る社会である」と教えていました。そういうわけでこのころから、社会主義建設の道に入った諸国の経済発展により大きな注意を向けるようになったのです。フルシチョフ自身、経営事業に精通した人物でした。彼はモンゴル経済の発展問題により大きな注意を向けていました。

最初のうち、モンゴルでは未開地開墾事業を何から始めればよいかかわからず、時間ばかりが過ぎてゆきました。そこで、大規模な代表団をソ連に派遣してソ連の経験を学ぼうとしました。

私はこの代表団を率いてモスクワへ行き、ソ連農業省で2ヶ月働きました。ソ連農業省が新しく作った国营農場の多くについて現場で実態を調べました。ソ連農業省はと

でも毅然と明確に業務を遂行してくれました。大臣や局長たちは、開拓農場を見たいときに飛行機で連れて行ってくれましたし、とりわけ未開墾地を開拓しているカザフスタンへしばしば行ったものでした。私は彼らと共に何度もあちこち飛びました。地面を耕し、植えるすべての作業を最初から最後まで実見しました。すばらしく新しい考えや経験をととてもたくさん得ました。仕事の内容を自分の十指のごとく理解している優秀な人とたくさん知り合いました。開拓事業に欠かすことのできない難しい新技術を見学しました。そのなかからモンゴルの開拓事業に必要なものを自分で選びました。ソ連農業省の大臣は私の仕事に対して努めて支援してくれました。とても良い人でした。いつも感謝していました。最後にモンゴルへ帰る前に私は彼の部屋に入り、彼と会いました。そして最後に希望を彼に告げました。「農業省の財務局長であるセルゲイ・イワノビッチ・エリザロフをモンゴルに派遣してくだされませんか？」と。こんな希望を述べるなどと思ってもいなかったのでしょうか。彼は少したじろいだようでした。「ちょっと待ってください。決めてあげましょう！」と彼は言いました。数日後、彼は本当に決定してくれました。モンゴルで新しく組織された国営農場を実体化するには、広く経済学の知識があり、また新しく組織された国営農場の経営問題を知っている経験のある人が私には必要なのでした。モンゴルで私のアドバイザーとして3年余りセルゲイ・イワノビッチ・エリザロフはととても多くのことをしてくれました。当時はとても厳しい問題がありました。どんなことでも掌握している私たちの言葉よりもソ連から来ている専門家の言葉に耳を傾けるということです。ですから、中央委員会で議論する諸案件を決定する際には、S.I.エリザロフ氏が私にとって本当に大いなる支援となりました。

私の仕事に対して大いに助けてくれたもう1人は国家対外経済交流委員会のピョートル・イワノビッチ・スタルコフです。この人を通じて農業のための技術はモンゴルに入ってきたのでした。一般に私たちは未開墾地開拓というこの大きな新事業を農学の進展に支えられながら技術力で進めたのです。古い伝統的な技術ではありません。開墾、播種、収穫などすべての農作業を技術支援により遂行しました。開拓する場所を選び、開墾を始め、種子を選び、播種し、世話をし、生育させ、水をやり、また世話をするなど必要となるあらゆる作業を農学の支えによって組織したのでした。だからこそ、この新しい部門は短期間で成果を上げることができたのです。私たちの成果の大きな理由はここにあったのです。未開墾地開拓に必要な技術の面で、モンゴル側では外国貿易大臣のS.ゴムボジャブが担当していました。ゴムボジャブと私の2人は仕事の面でとても協力していました。1964年12月のモンゴル人民革命党中央委員会第6回総会で、彼はほかの人たちのようにツェデンバルを擁護して私に不利な発言をするなどということはしませんでした。しかし、そのことが「反逆者ローホーズの共謀者であるかもしれない！」という疑念を生じさせ、しばらくのあいだ、彼はとても疑われていました。

その後、ソ連農業省がYu. スタルコフという学者を長とする大規模な調査チームを派遣して来ました。この調査チームはモンゴルの土壌調査を総合的にを行い、農耕に利用できる全面積、農耕に適する地方を明らかにしました。それらすべてを示した地図を作ってくれました。彼らは、「モンゴルでは55万ヘクタールの未開地が農耕地として利用可能だ」ということを明確にしました。スタルコフを長とする調査チームの作ったモンゴル農業適切地域を示す地図は私の執務室につねに掲げてありました。

その後、わが国は前から経営していた国営農場を再編し、一部は統合、拡大し、農耕地に利用できる肥沃な土地に新たに国営農場を作ったのです。オグタール、ダルハンといった穀物分野の国営農場を新設しました。その後、輸入したトラクターやその他の農業機械を全農場に配分しました。未開地開墾運動はこのようにして始まったのです。

のちに国営農場の総数は30を超えました。土地を耕し、作付けをする作業は「ハンガイ、森林ステップ地帯」から始まりました。ここには農耕に適した肥沃な土壌の土地が豊富なのです。初期は、穀物では小麦を主とし、野菜ではジャガイモ、タマネギ、マンジン〔カブに似た根菜〕、人参、キャベツを作付けしました。初期は1ヘクタールから1ないし1.5トンの収穫がありました。穀物についてはいささか特殊です。私たちは収穫のおよそ3分の2をごみとして捨てることになりました。それはどういうことかという、穀物の種を選別したあとには、茎つまり藁はそのまま廃棄物になるのです。それを家畜のえさとして利用する大仕事が降って湧いてきたのです。飼料基地ができれば、家畜の品種改良や豚、鶏、毛皮獣の飼育・繁殖の環境が整います。

未開地開墾以前、わが国はキビをロシアから輸入していました。しかし、キビも作るようになったことによってすべての需要を自らまかなえるようになり、外国からのキビの輸入をやめたのですよ。

果実類の植物ではリンゴを植えました。シャーマル国営農場では果実類の植物を植えるようになりました。最初のリンゴを収穫したのはシャーマル農場でした。のちに、北方の全国営農場にリンゴの木を植え、収穫しました。東方のハルハ河国営農場でも果実類を栽培するようになりました。私たちは飛行機でハルハ河にリンゴの木を運び、植えたのです。西アルタイ地方のウエンチ川やボルガン川にも植えました。これはシベリアリンゴと呼ばれる特別な品種のリンゴでした。

**KY**：初めて土を耕し、作物を植えた時にはどのような困難がありましたか？モンゴルではそれほど大規模な農耕をしたことがありませんでしたよね？

**LO**：未開地開墾の問題には党も政府もとても注目していました。モンゴル経済には独自の農耕部門はありませんでしたから、何百年ものあいだ常にモンゴルは農作物を外国から得ていました。もし私たちが手に入れつつあるこの機会を生かせれば、わが国が農作物を生産する可能性が開けるであろうことを、私たちはしっかり理解していたのです。これがわが国の経済発展にとって絶大な意義をもっていることは明らかでした。で

すから党はこれを全人民未開地開墾運動として実施したのです。モンゴルの各地から何十万人もの青年が新設されたばかりの国営農場へ働きに来ました。この事業にモンゴル革命青年同盟は先頭に立って参加したのです。私自身若いころに革命青年同盟で活動していましたから、未開地に来ている青年たちと親しくつきあっていました。青年たちは新しい開墾技術を短期間で巧みに習得し、未開地を開き、作物を植えるという仕事をあつというまに覚えました。「トラクター運転手速成講座」を多くの県で実施し、青年たちは45日間の講習を受けたのち、トラクター運転免許を取得しました。ソビエトの専門家はわが国の青年の才能を高く評価していました。1959年、開墾で初の「労働英雄」が誕生しました。それはトラクター運転手のD.ビャムバツォグトでした。この人は自分の割り当ての開墾計画を何度も超過達成して来ました。その後、アルハンガイ県のトゥップシルレーフ国営農場から労働英雄N.トワーンという人が誕生しました。

ただし、ここで問題がなかったのではなく、大いに問題がありました。とりわけ新しく建設した国営農場で働く労働者の確保が難問でした。家畜を放牧している遊牧民が家と家畜を放棄して土地を耕しに来るなどということはまれでした。ほとんどいなかったのです。そもそもモンゴル人は土地を耕すのが嫌いですよ。土地を耕して農作物を栽培するのは何よりも家畜の放牧地を破壊することなのでした。また一方で、「土地を耕して農作物を栽培するのは貧しい人の仕事である。ほかに生活する手段がない人びとが餓死しないように土地を耕し、農作物を栽培し、それを食べるのである！」という伝統的なモンゴル人の考え方があるのです。モンゴル人の脳に数千年もあるこの考え方を克服するのはとても難しいことでしたよ。「この思考を超えるには近代の科学と技術の双方が大いに役立った。ほかには何も役に立たなかった」と私は思っています。モンゴル人は家畜を自然の草地に放牧しているので、自然界を崇拜し、とても愛し、守ってきたのですよ。「私たちの暮らしている自然界には主がいる。それをロースサブダグと言う。もし自然界を愛さずに耕して壊したり、あるいはまた別の方法で傷めたりすれば、主が荒れて、旱害や寒害になり、畜群が減り、病が広がる！」と考えていました。私たちは自然界の主のご機嫌をとるためにオボーを祭っていたのですよ。私たちは幾千年もこうした伝統を有してきたのです。わが故郷で私が幼かったころに農耕をしていた人びとについて話をしましたよね。農耕に従事する世帯が耕すときには、とても厳しいおきてがありました。好きなところを勝手に耕すようなことはまったくありませんでした。家畜の放牧地を傷めることなく、川に近いところでしか農耕をしていませんでした。

モンゴルで未開墾地を開拓し始めたころ、農牧業協同組合を組織し、家畜を社会化すると、大勢が家畜を失って都市で生活するようになりました。とりわけ若者は大いに都市部へと移動しました。近年、モンゴルの各種新聞で当時の人口移動現象を「小移動」と呼んでいるようです。1990年代以降はまた大勢が都市部へ移動するようになっていきますね。この移動は新聞で「大移動」と呼ばれているようです。そもそも移動現象の大

小を決める統計はありませんよ。農業組合を組織するときに大勢が家畜を失って移動せざるを得なかったことはまったく隠されていました。これに関する公の統計はまったくないのです。90年代以降、都市部への移動についてもまた公の統計はありません。概してモンゴルには公的な真実の統計はそもそもないのですよ。これはモンゴル人民革命党のイデオロギー上の問題になってしまいました。社会に生じている悪い現象を大衆から隠し、モンゴル人民革命党の政策や実践を何十倍も拡大して宣伝していました。社会現象の真実を知る機会はありませんでした。

家畜を社会化するときに家畜を失って都市部へ移動した若者たちには就く仕事がありませんでした。いなかへ行っても家畜を失ってしまっていました。当時、モンゴル革命青年同盟中央委員会の第1書記はCh.プレブジャブという人でした。私はこのCh.プレブジャブを自分の仕事によく使いました。まさに「雑巾のように使う！」と言うのでしたっけ？そんな言葉があるでしょう。まさにそんな感じでした。彼はそもそも獣医でした。知識も行動もやや劣っていましたよ、気の毒に。幹部たちにおべっかを使い、とりわけツェデンバルと親密で、ツェデンバルに常に樽を吹き込み、下の人たちに対してとても厳しくあたり、そんなどうしようもないたちの人でしたよ、まったく。都市部とくにウランバートルで生活している若者たちを集めて新しく建設した国营農場に送るという仕事をする必要がありました。その際、彼がツェデンバルと親密であるという点はとても役に立ったのです。「モンゴル革命青年同盟はモンゴル人民革命党の片腕にして予備軍」と言うでしょう。こうして、数千の若者たちが「モンゴル革命青年同盟の派遣」によって未開墾地の開拓に参画し始めたのでした。この仕事を組織するときには笑い話がたくさんありましたよ。

農耕事業を進める上で注意すべき1つの点は、収穫物の貯蔵施設を備えるべきだということでした。私たちは当初、そのような準備をすることができませんでした。収穫が始まると貯蔵施設の問題が鋭く突きつけられるようになりました。当時操業していた製粉工場にも、それほど大量の穀物を貯蔵する施設がありませんでした。初めのころはナーダム会場となるスタジアムに穀物を集め、防水布で覆っておきました。その後、フブスグル、ドルノド、ボルガン、ダルハンに新しい製粉工場が作られ、そこに穀物を収容するための巨大な貯蔵庫が建てられました。

野菜の貯蔵には特別な決まりがあります。野菜は平均0～1度で保存しなければなりません。土の凍結する部分より上が1度になるのですよ。それを利用して「地穴貯蔵庫」を作りました。秋、収穫後に「地穴」に入れてしまうようになりました。春、それを開けてみると野菜は傷まないままです。こうして私たちは野菜の貯蔵方法を見つけました。最初の地穴貯蔵庫はバトスムベル国营農場で作りました。

このような地穴貯蔵庫はモンゴルで暮らす中国人が昔用いていたという話があります。しかし、私たちは中国人の作った地穴貯蔵庫を見たことがありません。地穴貯蔵庫

を数多く作る作業を緊急に手配することが必要になりました。この作業には人民軍部隊を動員しました。初めのころは、収穫物の貯蔵施設というこのような大きな問題が持ち上がっていました。しかし、年が過ぎるとともに、私たちはこの問題を徐々に解決することができました。およそ収穫作業というのは時間との戦いで、人手を必要とする責任重大な仕事です。わが国の気候条件は収穫期間の正しい設定を必要とします。もし、収穫期間の設定を誤れば、突然の天候変化に見舞われ、収穫物を失う危険があります。ですから、収穫期間を正しく設定し、作業を短期間に終わらせなければなりません。わが国の農作業従事者はこの作業を常に立派に成し遂げてきました。人手が必要なこの作業には人民軍部隊を動員するようになりました。

後年、モンゴル人はジャガイモや野菜を個人でもよく植えるようになりましたね。今では家庭にも私的な地穴貯蔵庫を作るようになってきました。私自身が学んだのは社会科学です。そこで国営農場の事業を指導する者として、こういったことを知るために研究したり、調べたりして、実生活に導入するということが不可欠になってきました。私のいた国営農場管理局にはソ連から来た、高度な農業専門家も大勢働いていました。1959年からわが国では、自力による農牧業専門家の養成を始めました。

私の在任中、国営農場は新しい会計・賃金システムに移行しました。このシステムを導入したことによってわが国の国営農場はすべて利益をあげ、赤字の帳簿は黒字になってきました。国家予算から補助金をもらわなくなったということですよ。独立採算・独立会計のこのシステムは最初、「モンゴル鉄道」に導入されました。人びとの仕事の達成度に応じて賃金を計算して支払うというシステムです。つまり、しっかりと働けばその分受け取る賃金も多くなるということですよ。「お前のしている仕事はお前の受け取る賃金に直接つながっているのだぞ！」ということを人びとによく理解させなければなりません。どの人も良い給料をもらうことを考えるものです。それならしっかりと働く必要がある。良い給料をもらえれば良い暮らしができる。人びとがそう考え始めれば、仕事ぶりも改善するはずですよ。わが国の経済に新しく誕生した農耕部門にはこのシステムの導入がどうしても必要でした。

モンゴル鉄道にこの賃金・会計システムを導入したのはN.テムチグという人の指導によるものでした。テムチグは優れた経済専門家でした。彼は鉄道指導局を解任され、ほとんど無職に近い状態でした。私はこの人を探し出して会いました。国営農場に新しい独立採算・会計システムを導入する考えであることを話しました。彼は「この仕事に参加するのにためらう理由はない」と私の意見を認めてくれました。それで私たちは彼を国営農場管理局に採用しました。個室も提供しました。それから高給を支払いました。そして国営農場のそれまでの賃金システムの説明をしました。この作業は未開地開墾運動開始の直前に行われました。テムチグはこの事務に2ヶ月携わり、1つの計画を作り上げました。私は彼と共に毎日この仕事に取り組みました。私たちはこの計画を

財務省に説明しました。財務省は当初、私たちの計画にとっても反対しました。私たちは何度も訪問し、説明しました。そして最後によりやく、財務省は許可しました。こうして、この計画を政府の会議にかけ、承認をもらいました。その際、セルゲイ・イワノビッチ・エリザロフ氏はとても協力してくれました。こうして、この独立採算・会計システムの国営農場への導入が始まったのです。

このシステムによって各人に「労働ノルマ」が課せられるようになりました。各人、自分の「労働ノルマ」を達成すれば賃金を全額受け取ります。ノルマを超過達成すれば賃金が割り増しされます。ノルマを達成できなければ、賃金はその度合いに応じて減額されます。このため、各人はノルマの達成に努めるようになりました。ノルマ達成のために各人は自分の労働の組み立てをよく考えるようになってきました。最初に何をするか？次に何をするか？いつ寝るか？いつ起きるか？というように人びとは自分の労働の組み立てを自分で行うようになってきたのです。

人びとは道具や機械を正しく扱うようになりました。トラクターやコンバインが故障すれば、ノルマと計画を達成できないぞということを理解してきたのです。ですからそれを壊れないよう大切に使う努力を始めていました。トラクターやコンバインを自分の計画的作業以外には使わなくなっていました。ガソリンや燃料を節約するようになりました。このようにあらゆる作業が計画的に行われるようになってきました。

計画を超過達成した国営農場は、自らの管轄する財源を手に入れました。たとえば、ジャルガラント国営農場は年に2,000万トゥグルグの自己管理財源を持つようになりました。農場長はこの新しい財源を自ら管理し、文化や大衆活動に使うようになりました。国営農場は自前の文化会館や「赤いコーナー〔娯楽室〕」を作るようになりました。こうして次第にすべての農場が自らの力で支出をカバーするようになりました。すべて損失なく、利益をあげるようになってきました。赤字の国営農場はなくなりました。損失が出た時には国営農場は相互に助け合い、損失を補填しました。国営農場の立地によって損失が多かったり少なかったりさまざまでしたがね。たとえば、森林ステップ地帯の肥沃な黒土地域の農場は高い利益を上げていました。一方、ドルノドやヘンティーといった県のステップ地帯にある農場は損失が大きかったのです。そして利益の大きな農場が利益の少ない農場の損失分の支出を補填するようになりました。

もう1つ注目すべき点は、自然条件のどの地帯にあるかということを鑑みて、農場の規模を適正なものにする必要があったということです。農場が小さすぎれば利益や収入も小さくなります。また大きすぎれば、支出が大きくなります。こういったことすべてを詳細に計算して経営をする必要があります。2つの異なる自然環境にある農場に、まったく同じ課題を与えてはなりません。ステップ地帯にある農場は農耕と並んで牧畜に、より留意すべきです。そうすることで、より多くの利益が得られます。一方、適した自然地帯にある農場は、農耕に対して、より留意すべきです。農耕を主にした農場

は、牧畜を主にした農場のために飼料準備をして援助すべきです。このような形で私たちはあらゆる実務を手配していました。

IL：国営農場では農耕や牧畜以外にどんな経営を行っていましたか？

LO：国営農場は農耕や牧畜以外に、養豚、養鶏、ウサギの養殖などをするようになりました。農場ごとに自前の建設班ができました。養豚・養鶏施設は国営農場が自前で建設するようになりました。農場は経済的に、しっかりと自立した状態になれたのです。私たちはボグド山に、新しい種類の経営を行う「国家集約農場」を設立しました。ここでは恒常的に黒テンの養殖を行いました。私たちはこの農場の設立のためにヘンティー山で300匹余りの黒テンを捕まえてきました。シベリアからも黒テンを買い入れました。こうして黒テンの養殖が始まりました。黒テンの毛皮はとても高価なのです。高級品の冬用帽子や冬用コートの襟にするのです。モンゴルは黒テンの毛皮を輸出するようになりましたよ。

ボグド山には、鹿1,000頭を収容した鹿飼育場も設立しました。私たちはソ連のシベリアの鹿飼育場の経験を調査して来て、この飼育場を作ったのです。シベリアはとても数多くの鹿飼育場のある地域ですよ。鹿の袋角は医療用に使われます。これはとても高価な素材です。ソ連は鹿の袋角を外国に、国際通貨で売っていました。私たちは以後、鹿飼育場を増やし、10ヶ所設立することを計画しました。経済的計算をしてみると、10ヶ所の鹿飼育場から1年に得られるであろう利益はモンゴルが家畜から1年間に得ている利益に匹敵する見通しでした。つまり、外国貿易を通じて家畜を生きのままソ連に売ることなく、鹿の袋角を輸出することで同じ水準の収入を得られるという計算になったのです。

それ以外に、わが国のステップ地帯に何万頭も生息するモンゴルガゼルの飼育場を設立するという計画がありました。私たちはソ連でのモンゴルガゼル飼育場の経営経験を視察調査しました。ソ連にはサイガ専門の飼育場さえありましたよ。非常に高い経済利益をあげる飼育場でした。野生動物の飼育場を作るのはそれほどたいへんではありません。何よりも、野生動物にエサを与えて馴らし、病気の感染予防措置をその時々で講じること、また繁殖の作業を正しく行う必要があります。このような不可欠の作業ができれば、あとはそれほどたいへんではありません。

私たちが計画したこれらの案はすべて党の政治局まで行った末、結局承認を得られませんでした。これだけでなく、当時私が計画したり発案したりした多くの事業が党中央委員会政治局の支持を得られなくなって来たのです。このような時には、その先働く意欲が低下してくるものです。それで私はその後どうするかということをよく考えるようになりました。時には誰かとこの問題について意見を交換してみました。そして私は仕事をやめることに決めました。そのことをツェデンバル党書記長と話し合うことに決めました。



私がこのような決心をしたそのころ、1つの政治的大事件が起きました。1962年9月に開催された党中央委員会第3回総会が、政治局員で書記のグラミーン・トゥムルオチルを「反党活動を行った」と誹謗し、決議を挙げてすべての役職から解任し、地方へ追放したのです。幅広い知識と高度な教養を持ち、類まれな才能を持ったこの人物は、きっと将来、党の指導者になるだろうと大衆に評価されていました。チョイバルサン元帥は彼に多大な信頼を寄せていました。第10回人民革命党大会でチョイバルサンは、「将来、モンゴルにとって必要で、有能な」青年10人の名前を挙げました。その中には「現在ソ連に留学中のD.トゥムルオチル」という名前も入っていました。

ツェデンバルは書記長に就任後、ソ連に留学していたトゥムルオチルを呼びつけ、党の総会や大会での演説や報告の準備をさせていました。ツェデンバルの隣に特別な部屋をあてがい、特別な待遇をしていたのです。トゥムルオチルは報告原稿を完全なものに仕上げやって帰宅するのです。トゥムルオチルはロシア語をよく知る人でした。トゥムルオチルの解任という決定を下した党中央委員会第3回総会は、ツェデンバル自身が直接指導し、党中央委員会の成員に秘密裏に、陰謀的なやりかたで組織されました。

トゥムルオチルは1921年、現在のトゥブ県のルン郡で生まれた人です。ソ連の東洋大学とモスクワ国立大学、ソ連共産党中央委員会附属社会科学アカデミーに留学し、卒業しました。哲学博士です。卒業後、党幹部大学の学科長、党中央委員会附属党史研究所長、党中央委員会政治局員、書記などの役職にありました。トゥムルオチルは党中央委員会書記に就任したころから、ツェデンバルの手法やその個人的欠点について党の総会で鋭い批判を述べるようになっていました。「ツェデンバルの手法や個人的欠点の指摘と批判は党にとってとても必要かつ重要な仕事だ」と彼は何度も言いました。トゥムルオチルはモンゴルにかつて起きた「個人崇拜」の害悪を一掃するために大いにイニシアチブを發揮しました。「チョイバルサン時代に個人崇拜に拍車をかけ、彼の『政治的弾圧（肅清）』に大なり小なり関与した人間を処分する必要がある！」と彼は言っていました。長年チョイバルサンのもとで働いていたツェデンバルにも、この処分が課せられるべきだとトゥムルオチルは考えていたのかもしれませんが。いずれにしろ、チョイバルサン時代の「肅清」にツェデンバルがどのように関わっていたのかについてトゥムルオチル自身は最も良く知る人物の1人でした。ツェデンバルはこのような状況からの出口を探し始めたのでしょう。ツェデンバルは彼を解任するためのもう1つの理由を見つけたのです。

ツェデンバルは「トゥムルオチルが民族主義を助長した」と非難したのです。1962年、トゥムルオチルは党中央委員会政治局員、イデオロギー担当書記として、「チンギス・ハーン生誕800周年」記念行事を指揮していました。当時、チンギス・ハーンに関するテーマは禁じられていたのですよ。チンギス・ハーンと彼の事績の後継者であるモンゴ

ルの大ハーンたちが世界諸国を何百年間も支配下に置いていた歴史を、私たちはみな知っていますよね。モンゴルの支配下にあった諸国の中にロシアも含まれていました。ところがソ連共産党はそのような歴史を容認しなかったのです。歴史を容認するかしないかという問題はありません。かつてそのような歴史があったのですから、それを消し去ることができないのは当たり前のことです。これはただの共産主義イデオロギーだったのです。たとえば、「チンギス・ハーンは世界中を征服した好戦的な人物で、諸国を支配して自らの奴隷にし、多くの文明を破壊した人物だ。ソ連共産党とモンゴル人民革命党は平和を重んじる党であり、世界の平和を確立するために、資本主義諸国と妥協なき闘争をしている党であるから、チンギス・ハーンとその後継者たちの行った好戦的活動について語ったり賞賛したりしてはならない！」というイデオロギイ的教義があったのです。つまり「チンギス・ハーンは好戦的な人物だから、それについて語ったり書いたりしてはならない」というイデオロギイです。

共産主義のこのイデオロギイの背後にはさらに1つの重要な問題が隠されていました。それは何かと言えば、ロシア帝国が、カザフ、キルギス、ウズベク、トルクメンなどの中央アジアのテュルク系遊牧民たちやモンゴル系のタタール人、シベリアの少数民族たちを統合しようという政策を長年にわたって執拗に続けてきたことです。これに対してこれら諸民族や人民は大いに抵抗し、何世代にもわたって武器を手にして闘ってきました。彼らはチンギス・ハーンの建設したモンゴル帝国を構成する人びとでした。この闘いは人びとの敗北に終わりました。このように何百年も血を流して自らの支配下に取り込んだ諸民族を、帝政ロシアは武力でしか掌握することができませんでした。彼らを統合し、ロシアの支配下にとどめる方法は他になかったのです。社会主義革命が勝利したのち、民族問題はロシアにとってずっと最優先事項でした。モンゴル帝国を構成していたテュルク系遊牧民の系譜をもつ人民がソ連や共産党に対して反対運動を展開するのを、共産党のリーダーたちはひどく恐れていたのです。チンギス・ハーンが建てたモンゴル帝国の直接の後継として発展し、今日なお独立国であるモンゴル国は当時、彼らの戦いのよりどころとなる可能性を大いに秘めていました。1990年代の動きがそれを証明しているでしょう。ソ連が崩壊すると、こうした諸民族はほとんど独立国を宣言したでしょう。こういう背景があるので、彼らにはモンゴル国を発展させる気などそもそもないのです。かつての大きな力を失い、今や取るに足らないものになってしまった遅れたモンゴル国を、彼らが単に自分たちの地政学的勢力圏にとどめておくことしか望んでいなかったことは、誰の目にも明らかです。

実際は、チンギス・ハーンの征服は世界に多くの新しい進歩をもたらしたという事実についてさまざまな国の学者が記しています。チンギス・ハーンのモンゴル帝国建設によって、あちこちに散在し、お互いに調和することのなかった世界が1つの支配下におかれ、調和し、多くの文化がそれぞれの特徴を保ちながら発展し、国同士の関係が

開花する礎が築かれたのです。チンギス・ハーンとその後継者たちが多くの宗教に寛容な態度をとっていたために、宗教間紛争の起きない環境が整ったそうです。こういった諸問題は今日でも意義を失っていません。今日の世界はこれらの諸問題をどう解決しているでしょうか？事実上、解決できていません。

トゥムルオチル自身は、モンゴル史について幅広い知識を持っており、このテーマで多くの論文を発表した人物です。「チンギス・ハーン生誕800周年」を記念することをトゥムルオチルが主唱し、それをツェデンバル本人に承認させることができました。こうしてこの事業の一環としてチンギス・ハーンの記念碑をチンギスの生まれ故郷である現在のヘンティー県ダダル郡に建て、ウランバートルでは大規模な学術会議を開催しました。モンゴルの学者は初めてこの会議でチンギス・ハーンと彼の樹立したモンゴル帝国の歴史に関するさまざまな問題について意見を交わし、多くの興味深い報告が議論されたのです。これは実に正しいすばらしい活動でした。ところが、ツェデンバル側がトゥムルオチルを解任する時には、この活動は「民族主義を助長した」と非難されたのです。このような理由づけによってトゥムルオチルは解任され、地方へ追放されました。

それから1年後、また1つの政治的大事件が起きました。1963年12月に開かれた党中央委員会第5回総会が、「L.ツェンドは党の人間としてふさわしくない行動をとった」と中傷し、彼を解任し、地方に追放する決議を挙げたのです。この総会もやはりツェデンバルが党の中央委員に極秘裏に、陰謀的なやりかたで組織したものでした。ツェンドは当時党中央委員会の政治局員で、第2書記の役職にありました。彼は党の中でツェデンバルに次ぐ地位の人だったのです。ツェンドは1922年、セレンゲ県シャーマル郡の生まれです。

彼はソ連のプレハーノフ経済大学で経済学の学位を取得した人物です。「ウランバートル鉄道」で働いていたことがあり、国家計画委員会の委員長など要職を立派に努めてきた人物です。彼はものごとを組織する才能に恵まれ、高い理論的素養がありました。どの方面でも党の指導者となる資質をもった人物だと人びとは評価していました。当時の党政治局内で彼を支持する人は多く、知識人たちも彼に一目置いていました。ツェンドは党政治局会議で、ツェデンバルには国家の指導能力がないことを何度も指摘しました。ふだんツェンドは口数が少なく、よく考えて言葉を発し、他人に対して自分の考えを的確な言葉で表現することができ、落ち着いたある、高潔な人物でした。ツェデンバルは彼を解任するもう1つの理由を言いました。それは「ツェンドは地位を追い求めた」という非難でした。つまり「ツェンドは党書記長の地位を望んだばかりか、この望みを実現するための手立てを講じていた。ツェデンバルを解任する準備をしていた」などと彼を非難したのです。

本当にツェンドはツェデンバルを解任する準備をしていたのだろうかという疑問があ

ります。ツェデンバルには国家を指導する能力がないということはすでに誰の目にも明らかでしたから、ツェンドがそのような準備をしていたというはあり得ます。いずれにせよ彼は「今やわれわれはツェデンバルの利益を考えるよりも国家の利益を考える時だ。われわれは自らの業務に考えをいたす必要がある」という趣旨の話を、党中央委員会の一部の政治員にしていました。彼はこの話をモンゴル人民革命党内だけでなくソ連共産党中央委員会政治局員で第2書記のF. R. コズロフという人の耳にも入れていました。コズロフはソ連共産党中央委員会政治局員の中でフルシチョフに次ぐ地位の人でした。彼はL. I. プレジネフと一緒にソ連共産党中央委員会政治局に入った、高名で影響力のある人物だったそうです。

モンゴル人民革命党のこのような複雑な「内部問題」についてツェンド側からコズロフになぜ話していたのか、今、推測するのは難しいですがね。いずれにせよ、ツェンドとコズロフの会話の内容はソ連国家保安委員会（KGB）のユーリー・アンドロポフ委員長を通じてツェデンバルの耳に届いたのでした。そしてツェデンバル側がツェンド解任を決定しました。こうして党中央委員会指導部にいたすぐれた人物2人が解任され、地方へ追放されたのです。この2人の解任は国内で大きなセンセーションを巻き起こしました。まじめな党員のあいだでツェデンバルの評判が上がらなかったのは当然のことです。

このような厳しい政治的環境の中で私は辞職を願い出ることに決めました。党の上級指導部にいる人びと自身が、教養の程度が低く、実務の経験もなく、政治的気概もなく、経営活動の収益についてもよく理解せず、その必要性もしっかり理解していないことが、おのずから事業の障害になって来ました。彼らはソ連の援助だけを頼りにし、その日その日をやり過ごすという政策をとっていましたよ。そんな政策がまるで役に立たないことは火を見るよりも明らかでした。当時、経営事業は常に前進を必要としていました。多くの新しいことができる可能性が見えていました。党指導部はそれらを受け入れず、正しい方向に向けた指導ができていなかったのです。党自身が、これらの諸問題に取り残され、障害になっていたのです。空虚なイデオロギーは腹の足しにはなりません。経営活動の収益を彼らは少しも評価せず、これをろくに理解していませんでした。たとえば、収益を上げることでできる新しい部門の立ち上げと発展を進めることは、そこで働く人びとの生活向上ばかりでなく、最終的にはモンゴル国の経済成長に直接影響を与えるのですよ。よその国やよその人びとがしていることは、われわれ自身が自国ですることができるでしょう？このような現実的可能性が目の前にあるというのに、それをちっとも正しく評価できていなかったのです。その代わりにあらゆるものを借款や援助で解決しようといういたずらな試みをし、貴重な時間と労力、資金をまったく無駄に費やしていました。

モンゴル経済に借款や援助は必要だったでしょうか？必要でした。けれどすべてをそ

れで解決できるでしょうか？できませんよ。私たちが自力でものを作り、自力で労働してこそ、自分の頭を使って自国を発展させることができるのです。モンゴル人の代わりにわが国を発展させ、国民の生活を向上させてくれるような人は誰もいないし、そんな国は1つもありません。これはわれわれモンゴル人こそが自らなすべきことなのです。これはわが国の歴史が証明した、究極の真理にほかなりません。ツェデンバルと私の主な対立点はここにありました。

IL：ところで、わが国で農耕部門が今後発展する可能性はあるでしょうか？

LO：わが国における農耕の発展の可能性は限られています。これは農耕を営むのに適した、肥沃な黒土のある土地が限られていることと関係があります。海拔1,000メートル以上は小麦ができません。それより低い土地の面積は、わが国では小さいのです。わが国全土の平均海拔は1,500メートルです。これは小麦の栽培に適した標高ではありません。農耕に最も適していると見なされるセレンゲ地方は海拔900メートル余りです。ハルハ河付近の地域もそのくらいの標高があります。アルタイの向こうのゴビもこのくらいの標高ですが、そこには農耕に適した黒土はなく、黄色い粘土です。未開地開墾運動の開始前、ソ連から派遣されたスタルコフを頭とする調査チームが出した計算は、実情と非常に近い数値だと私は思います。スタルコフ率いる作業班はソ連で未開地開墾運動が始まる前に、農耕に利用できる黒土地帯を明らかにするための調査の経験がある学者たちでしたよ。彼らは、ここに小麦を作付けできる、ここにはできないということを非常に詳細に明らかにしてくれたのです。彼らは飛行機を使って、地域の最高・最低の標高を明らかにし、農耕に利用できるかどうかを明らかにしました。

後年、70～80年代にわが国は再び未開地開墾という名目で大規模な放牧地を台無しにしました。トゥブ県のルン郡より手前の広大な土地を耕し、作付けをしたのです。この地域は穀物や野菜の育つ条件の少ない、非常に劣った土壤の地域ですよ。ヘンティー県のステップ地帯もみな耕しました。これは科学的根拠なしに、調子に乗ってしたことです。ここでは決して好ましい収穫を得ることはできません。今ではすべて放棄されて、誰にも必要のない場所になりました。貴重な土地がこのように放牧地としての価値を失いました。こういった土地はもう修復することができません。このような土地では家畜が草を食いません。

私たちが最初に耕したオルホン・セレンゲ合流点やボルガン県の土地は現在でも高い収穫量をあげていますよ。私たちはかなりの科学的根拠をもってそういった地域を選択したと考えています。ですから長年のあいだ価値を失っていません。

私たちは全国営農場と連絡をとることのできる無線局を営農場管理局に開設しました。このような通信システムは、ソ連のカザフスタンのツェリノグラードで最初に導入されました。飛行機で使う無線通信システムです。私は自らカザフスタンへ赴いてこのシステムを購入するよう決めて購入したのです。

そう言えば、それを導入するよう閣僚会議から裁定を得るのにずいぶん時間がかかり、奮闘しなければなりませんでしたね。まず通信大臣S.ダムディンジャブの許可が必要でした。当時は、ある国営農場と国の通信システムを使って連絡をとろうとすれば、ほとんど1日、ときには2～3日待たなければなりませんでした。そんなに長い間待ったあとようやくつながっても人の声はほとんど聞き取れません。最大限の力を出して叫んでも2～3語伝われば伝わるし、伝わらないときはしかたないという状態でした。モンゴル国の通信はそんな状態でした。「こんな通信状態のままで、いかなる発展について話をするというのか？」と私は常々思っていました。何とか理由をつけてS.ダムディンジャブ大臣と会うようになりました。会うたびに通信について話をもちあげて、わが国の通信状態の欠点について少しずつ話をして彼に理解させていきました。そうするうちにある日「本当にそうだ！君の言うとおりで！わが国の通信はとても悪い！」という言がもれました。私はそういう発言を待っていましたので準備万端で臨んでいました。そこで国営農場管理局が自分たちで通信システムを持つ準備があることを紹介し、用意してきた書類に「この書類に署名してください」と頼みました。彼はぬきさしならない状態を了解したように少しだけ考えて無言で署名しました。つぎは閣僚会議で議論しなければなりません。閣僚会議の許可がなければどんな仕事もおしまいでした。数ヶ月間、どうすればよいか考えました。そして運に任せることにしました。するとまさに幸運が訪れたのでした。この案件を話し合う閣僚会議でD.モロムジャムツが議長をすることになりました。D.モロムジャムツは政治局員で、モンゴル人民革命党の経済担当書記ですよ。Y.ツェデンバルはそのとき短期間ソ連に行って留守でした。そうして閣僚会議が決められた日の決められた時に始まりました。各省大臣や長官たちがみな来ていました。

モロムジャムツは開会の挨拶をしました。そして議案に移りました。わが案件の前に2件議題があったと記憶しています。それらについては議案が十分練られていないことを理由に差し戻されました。そしていよいよわが案件が議題にのぼりました。議長のD.モロムジャムツがわが案件を紹介しました。そして、国の通信システムがあるのに国営農場管理局が独自の通信システムを構築するというのはどういうことか？これはいったいどういうことだ？国の中にもう1つの国を作るということか？ダムディンジャブ大臣はこの議案を承知しているのか？どうしてこんな議案がのぼるのか？などと強い調子で尋ねました。ダムディンジャブ大臣は立ち上がり、「これは本当に理解しがたいことです。私はあなたと同感です。このローホーズがこんな議案を出して分離しようとしているのですよ。どういうつもりか、わかりかねます」と言うのです。すると、ほかの大臣たちもこの2人の発言を支持するような風向きになりました。「私たちの提案はこれでおしまいだ！」と私は内心、暗澹たる気持ちになってしまいました。それで許可を得ないまま直ちに立ち上がり、発言しました。

「どうなっているのかと驚いたり、わからないと理解を拒んだりすることなどここには何もあります。未開墾地開拓事業は全人民的活動です。これはわが愛する党の政策です。それを人民は支持しています。農業は一刻を争う、時間との戦いです。ところが、私たちがある国営農場と通信しようと試みると数日かかります。この閣僚会議は、このような問題も理解しない、なんという場所になってしまったのでしょうか？この大臣たちは議題に迫ることなく、どうしてこんなに差し戻しばかりするようになったのでしょうか？これはいったいどういうことですか？この議案をダムディンジャブ大臣が承知しているのかと言うなら、承知しています。D.モロムジャムツ議長が紹介した企画書のなかに彼の署名もありますよ！と少し強い口調で述べました。すると、S.ダムディンジャブは黙りこんでしまいました。モロムジャムツ議長の声の調子がいくらか変わって、

「党の政策であり、人民が支持している労働であることを私たちは了解していますよ。そもそもしっかり議論する予定だったのですよ。ダムディンジャブと君は話し合ってきたようですね」と言って黙りました。ほかの大臣たちからは発言がありません。こうして閣僚会議で決定が出ました。このように幸運なことに私たちは専用の通信を持つことになったのです。

私たちはこの無線通信を24時間作動させていました。そして農作業の進行状況について全国の国営農場から毎日報告を受けていました。全国営農場の耕地地図が私の執務室にはありました。何台のトラクターが耕耘に出勤したか、どれだけの面積の土地を今日耕したかといったすべての情報をその日のうちに得ていました。収穫期には、何ヘクタールで収穫作業が行われているかといったすべての情報をその日のうちに得ていました。私は執務室から全農場長と「無線会議」をしていたのですよ。それほど迅速に作業を進める必要があったのです。私自身、飛行機を使って各地の農場へ行ったものです。

私たちはモンゴル航空から飛行機を1機リースしていました。のちにモンゴル国功労パイロットになるTs.ダラブガルが私の飛行士でした。われらが国営農場の数々は成功裏に仕事をしたので国営農場管理局の局長は自身で2億トゥグルグを管轄していました。今のお金で言うと、200万米ドルに相当するでしょう。このお金を何に使うかを私は自分で決めるのですよ。

## II 学位取得をめざして

KY：1962年に党中央委員会書記長に願い出て辞職されましたが、その後どこへ行かれたのですか？

LO：辞職後は、再びソ連へ行きました。モスクワにあるティミリャーゼフ農業アカデミーへ行き、研究活動をしました。その研究で学位をとることになりました。私の研究

テーマは「国营農場の定住・半定住環境における牧畜の収益拡大の方法」というものでした。私の指導教官はセルゲイ・ラゾという人でした。彼はヨーロッパで経営学の学位を取得した人です。「経営学」のことを今では「マネジメント」というようになったようです。このテーマでの研究は私にとって難しくはありませんでした。

わが国では家畜の品種改良や生産性を高めるために大いに努力していました。たとえば、モンゴル羊の羊毛を細くしようとする努力がされていました。しかし成功しませんでした。このような羊は、常設の暖かい囲いや小屋の中で、常に飼料を与えて世話をしなければなりません。そのような環境がなければファインウール〔細い羊毛〕の羊を家畜にすることはできないのです。伝統的な放牧方法のもとでは、ファインウールの羊をつくることはできません。モンゴルの家畜は何百年ものあいだにこの放牧という飼育方法に体格が適応してしまっています。国营農場という環境では、ファインウールの羊を恒常的に飼育し、暖かい畜舎に収容する条件が整っています。国营農場では自前の飼料を大量に備蓄するようになりましたからね。いずれ農牧業協同組合も穀物や野菜を育てるようになり、そういった飼料基地を備えるようになれば、ファインウールの羊の飼育・繁殖環境が整うだろうと私は考えていました。ファインウールやセミファインウールの羊毛を工業的に加工すれば多様なものを作ることができます。しかし、モンゴル羊の羊毛を工業的方法で加工する技術は当時ありませんでした。国营農場という環境でモンゴル羊の一定部分をファインウールとセミファインウールのものに品種改良し、経済的増益をはかる可能性はあると考えていました。放牧家畜以外にも、豚や鶏といった動物にも同様の飼料基地を作る必要があります。飼料基地ができれば、養豚や養鶏はとても大きな利益をもたらす経営なのですよ。

北京ダックをご存知でしょう。私たちはボルノール国营農場でアヒル10万羽を飼育するようになりました。そこからウランバートルの食堂やレストランにアヒル肉を供給していました。卵もとります。この経営はとても大きな利益をもたらしていました。自分がこのような仕事をしていたので、私にとって研究は困難ではありませんでした。私はソ連に2年間滞在するあいだに研究論文を書き上げました。

## 12 ツェデンバルへの批判

I L：ご自身は、1956年に行われた人民革命党中央委員会第2回総会でツェデンバル党中央委員会書記長・首相の手法を初めて厳しく批判しました。「国内の基幹要員の言葉に耳を貸さない」という批判でした。これについて少し説明していただけますか。

L O：自国の知識人に対するチョイバルサンとツェデンバルの態度はまったく異なっていました。チョイバルサンは若い専門家の言葉によく耳を傾け、時にはその人たちを連れて地方を訪れ、人民の生活を見学させたり実務を教えたりと常に支援する人でした。



とは言っても当時、青年専門家はとても数少なかったのですがね。チョイバルサン以後、内外の大学を卒業した青年専門家の数が徐々に増えてきました。彼らはモンゴルの将来の発展問題についてさまざまな考えや理論を提示しました。青年たちが多くのすぐれた発案をしていたのです。チンゲルテイ川の水をせき止め、ノゴーン湖を作ったのは革命青年同盟中央委員会のダンガスレン第1書記の発案によるものです。これは首都を洪水の危険から守るのにたいへん役立つ事業となりました。

ウランバートルのエネルギー供給の改善意見や創意も青年の側からよく出されていました。さまざまな計画がありました。中には何と水力発電所の建設という話題もありました。専門知識と教養のある青年が増えてくるにつれ、ツェデンバルに国家を指導する能力のないことがますます明らかになってきたのです。世間では、ツェデンバルの個人的欠点や政策の誤りに関するさまざまな風聞が、乾いた草の野火のように急速に広まっていました。ツェデンバルはこのような風聞を「知識人の迷妄」と名づけました。そしてそれを弾圧することに決めたのです。

しかし、ツェデンバルには国家を指導する能力がないということに関して、一体誰が、何と言っているのかは一向にわかりませんでした。最初に誰が何と言ったのか知れない風聞が世間に広まっていたわけです。そこで、ツェデンバルはこのような風聞を流した犯人を特定することに決めました。党中央委員会の書記および国務大臣、長官らを工場や企業、省庁、国家機関、社会団体に派遣し、勤労大衆との諸々の会合を催しました。「人民革命党指導部と国務大臣、長官は勤労大衆の考えを聞き、彼らの希望を調査し、以後行う事業計画に反映させて実現する！したがって自らの考えや意見を自由に忌憚なく詳しく話し合うことが必要だ！あなたがたは何も恐れなくてよい！」大衆にはそう説明しました。大衆は「党指導部、国務大臣、長官が国家の発展と将来について私たちの考えを聞きに来た」と信じました。こうして彼らはその会合で、ツェデンバルには国家を指導する能力がないということやモンゴル・ソ連の友好関係について、国家の発展と将来について、自分たちの考えを自由に話し合ったのです。ツェデンバルはこういった会合の資料にもとづいて、彼自身やモンゴル・ソ連の友好について批判的発言をした人物すべてを解任し、党から除名し、地方へ追放し、人生を破壊しました。こうして多くの人々が「知識人の迷妄」なるこの捏造と係わり合いをもたされ、仕事や人生を破壊されたのです。

1956年の総会での私のツェデンバル批判は、特別に新しいことではありません。私はそれ以前に何度も言っていたことを繰り返して述べたまでです。違いは、党の総会での発言という点だったでしょう。私はその総会で、発言の趣旨を次のように表明したのです。

— 国内の知識人の意見を聞き、支援するという活動がたいへん滞っている。工場の機器の操作や修理のために外国からエンジニアや専門技術者を招き、指示を仰ぐことはあ

り得ることだ。しかし自国の現在の発展水準や展望に関する理論問題は、われわれが自力で、国内の知識人の力に依拠して練り上げていくべきでないのか？この仕事は他の誰もわれわれのためにしてはくれない。われわれは他人に示された道を進んではならない。それは行き先もわからずに歩く盲人と同じではないのか？そもそも党の基本的任務は理論活動であるべきで、実際のところ知識人の創造力を正しく活かし、この任務を遂行すべきなのだ。自国の知識人の考えを軽視し、彼らの能力を見下し、そればかりか、わが国の発展開花のために痛めた心に誠実に、批判的な発言をした人びとを冷遇するようになっている。これは実に不健全な状態だ。この先、このような状態には絶対に安住してはならない。

— わが国の対外政策は積極的でない。国連加盟および世界の国々の関係拡大について独自の政策がない。

私の発言の原文は人民革命党文書館にあるはずですが。大衆に見られるのを恐れてすっかり隠されていましたよ。

モンゴルの発展に関わる諸問題は10年ごとに何度も修正すべきです。この10年間にすべきことを定め、次の10年間にすることの基本方向を出して行くべきなのです。これはモンゴルの一流知識人の力によってこそすべき仕事ですよ。ほかのどこにもない、モンゴルならではの特殊性というものがあるでしょう。それは外国のどんな賢人や教養人にも理解できないものです。戦時中から戦後にかけて、わが国のあらゆるシステムでソビエトの専門家が働くようになりましたよ。ソ連から来た専門家と意見が食い違ったり、その人たちの助言を受け入れなかったり、採用を拒否したり、ソ連についての批判的な発言をしたりした人たちは即座に解任あるいは降格配転されたり、一部の人は遠方に追放されたりしました。このような懲罰的なやりかたはツェデンバル自身が直接提唱し、指導していました。このようなやりかたでモンゴルの多くの優れた人物が仕事や生活から引き離され、社会のゴミとして捨てられたという歴史は今日でも古い話ではありません。

モンゴル・ソビエト友好関係は必要でしょうか？とても必要です。私自身ソ連に留学し、卒業しましたし、ロシア人と親しくつきあってきた人間です。ロシア人が正直で性格も良く、知的能力の高い人びとであることを私は良く知っています。私はこの友好の発展、拡大のために尽くしていました。友好を擁護し発展させたのはツェデンバルただ1人だったわけではありません。この友好の基礎は、ツェデンバル以前に、わが国の熱烈な愛国者たちが築いたものです。私たちはみな、この友好を強化するために可能なこと、そして不可能なことも何でもしました。しかし、この友好には批判的に扱うべきものが当時多かったのです。あなたがたは「家畜のトーバル〔家畜を放牧しながら目的地まで移動する〕』とは何かご存知でしょう。西部の県から家畜を追って来た牧民に「スターリンのひげを動かして来たのか？」と尋ねるジョークがありました。「ウランバー

トル鉄道」の運行が始まってから生まれたジョークがもう1つありました。列車がモスクワから到着する時には「ウーフ、トス、ウーフ、トス（脂、油、脂、油）！」という音が鳴り、帰りには「ハナラー、ツァドラー、ハナラー、ツァドラー、（充分だ、満足だ、充分だ、満足だ）！」と鳴る、という話です。人びとは、両国の友好関係には不平等と不公平がたくさんあることをこのようにジョークの形で批判していました。ツェデンバルには自国の発展のための自分なりの考えがあったのだろうかという疑問がおのずから湧いて来ます。自国の権益を常に後回しにしていた彼が、そのような考えを持っていたとは言い難いですな。

わが国にはかつて「国家ブラックボックス政策」というものがありました。それはモンゴル人が自分で考えたものです。このような政策がなければ、国も民族もなくなりますからね。わが国の隣にある2つの大国はモンゴルをめぐる長年、張り合ってきました。ロシアはシベリアをすべて自国の支配下において以来、わが国に対して露骨に関心を示し始めました。彼らはブリヤート地方を自らのものにしてから、たいへんたいへん積極的になったのです。モンゴルに関するロシアの政策と清朝の政策のあいだには大きな違いがありました。清朝はモンゴル人を減らすこと、完全な消滅を意図していました。それができればモンゴルの土地は自然に彼らの支配下になりますからね。ロシアは逆に、モンゴル人を増やす意図を持っていました。それができればモンゴルの広大な土地は自然に自発的に清朝を離れて来るのです。ロシアが中央アジアで用いた地政学はシベリア鉄道と分かちがたく結びついています。ロシアはこの鉄道から清朝をできるだけ遠ざけることを意図していました。このような思惑を果たすために、モンゴルの領土の位置はロシアにとってたいへん有利でした。ロシアは自国のこの思惑に導かれ、実に積極的な活動を始めました。しかし、ロシアのこの思惑にとって、その後、障害となるものが2点あることがわかり始めました。

それは第1に、モンゴル社会に多大な影響力を持つ仏教、第2に、「モンゴル民族主義」です。この2つの危険をどのように免れるか？完全に手を切らなくとも縮小するためにはどんな可能性があるかを探し始めました。ロシア皇帝たちの何世紀にも渡る果せない夢あるいは頭痛の種となっていたこの問題を、レーニンを先頭とするロシアの共産主義者（ボリシェビキ）が自ら解決に着手しました。レーニンが創設し指導していたコミンテルンが、一流の教養と知性を持つモンゴルの愛国者を、何の理由もなしに次々と消していったことを私たちは覚えています。スターリンはこの活動を、自ら手馴れた「テロ的」手法でやり遂げたのです。社会主義・共産主義の話は彼らのこの目的を達成するための隠れ蓑にほかなりません。

この点で毛沢東は彼らと瓜2つでした。「われわれはあなたがたに対して300年間の借りを作ってしまった。それを返済する」という趣旨の、毛沢東の発言があります。1956年、党中央委員会の代表団が、新たに樹立されて間もなかった中華人民共和国を

訪問した際、毛沢東はこの発言をしました。毛沢東の言った「われわれ」とは誰でしょう？300年前、共産主義者の毛沢東や彼の率いる中国共産党も赤色中国も存在しなかったことをわれわれは重々承知しています。当時は、清朝皇帝、清朝、モンゴルなら存在しました。もうろくした共産主義者の毛沢東は満洲皇帝でもなければ、その正式の後継者でも毛頭ないということは歴史が証明しています。彼の靴に踏みつけにされて苦しんでいた赤色中国も清朝ではありません。レーニン、スターリン、毛沢東らは歴史の真実の露骨な歪曲者だということを人類は肌で感じました。歴史は歴史として残るべきです。誰かが勝手に修正したり解釈したりしてはなりません。そんなことはできもしません。

ツェデンバルが政権を握っていた時代、われわれモンゴル人は自らの真の歴史も文化も持たない人びどになってしまいましたよ。人民の築いた偉大な歴史とそれが残した深い痕跡を世界史から拭い去り、人民の築いた永遠の文化を人類の文化の偉大な遺産から排除し、破壊し、否定することは誰にもできはしません。しかし、われわれについては少数民族と同じような次元で語ったり書いたりされるようになりました。この状況はとりわけモンゴル文字をキリル文字と取り替えて以降、ますます幅を利かせました。民族の文字を持たず、独自の歴史も文化も持たないかのように、少数民族と同じようにわれわれについて語り、書くということが始まったのです。「このような少数民族は独自に共産主義社会へ移行するほどの発展はできない。したがって何らかの『大民族』とともに、その助けを借りることで存在し、自らを維持し、共産主義社会へ移行することが可能になる！たとえば、ソ連を構成する少数民族と同様に、『大ロシア民族』に依拠し、それとともに『ソビエト民族』を作り、共産主義社会へ移行すれば最高の発展をすることが可能になる」という見解が幅を利かせていました。

ソビエトの学者や政治家がこのような「理論」によってソ連を構成する少数民族や大衆を「洗脳」する際、それに輪を掛けた、根も葉もない噂が生まれました。「モンゴルはソ連に加盟し、その第16番目の共和国になることを願い出た」という噂でした。このような話をいったい誰が最初に流したのか、今のところはよくわかっていません。このような根も葉もない噂をソ連共産党中央委員会および国家保安委員会（KGB）の側が流し、モンゴル大衆の意思を試したかもしれないことを否定できません。モンゴルでは「ツェデンバルこそがこの噂を流した張本人だ」と見なす人びとが大勢います。また、この噂を「モンゴルの一部の学者と政治家が流した」という話もあります。この根も葉もない噂はスターリンの死後、忘れられていきました。ツェデンバルの行った行動は、結局われわれにこのような状況をもたらしたのですよ。

1940年代末、モンゴルの国連加盟問題が大いに話題になりました。首相のチョイバルサン元帥はこの問題に特別の留意をしていました。若いころからモンゴルのために、自分に関わりのあることもないこともすべて行い、死以外のすべてを見た彼には、モン

ゴルの国連加盟は一生の夢の実現であったかもしれません。そして、チョイバルサンは1947年、この問題を解決するために、ツェデンバルをニューヨークへ派遣しました。ツェデンバルは到着後、国連の会議で1度発言をしたことを除けば何もせずに帰国したのです。自国の宣伝や支持の獲得のために他国の代表部と面会するといった活動を何もしなかったのです。このことから見て、ツェデンバルにはモンゴルの国連加盟を果たす気がそもそもあったのだろうかという疑問が湧いてきます。ニューヨークに行き、何もせず、部屋からも出ずにただ何日もじっとしていた彼の奇妙な行動は、何をもってしても説明がつかないので、どうしてもそのような疑問が湧いてくるのです。

しかし、それ以降のツェデンバルの行動を観察すると、彼にはそうする気があったかもしれないという考えが生まれても来ますが、モンゴルの国連加盟問題は1962年まで先延ばしになりました。1962年にモンゴルは国連に加盟し、常駐代表部の活動が始まりました。国連がモンゴル加盟を受け入れる決定を下したころ、ツェデンバルは足を骨折し、モスクワで入院していました。「やる気がなければ力にならない」という言葉がモンゴルにはあります。

### 13 党中央委員会第6回総会にて

I L：ご自身は、1964年に開かれた人民革命党中央委員会第6回総会でツェデンバルを非常に強く批判なさいました。「科学的根拠のある長期的国家発展計画がない」というような批判を展開されました。ご自身のこの批判について少しご説明いただけますか？

L O：1964年はたいへん特別な時期でしてね。この時期はソ連共産党の第20、21、22回大会が開催された時期です。これらの会議で、ソ連共産党第1書記で閣僚会議議長のフルシチョフがスターリン時代の「粛清」を鋭く批判し、社会は全体として大いに活気づき、信頼が生まれた時期でした。歴史ではこれを「フルシチョフの雪解け時代」と呼んでいます。私はモスクワのティミリャーゼフ農業アカデミーで研究活動をしていました。総会で私と共に批判を行ったB.ニャムボーは共産党大学に留学していました。私たちは2人とも党中央委員会の「総会構成員」でした。この会議で批判を行ったのには1つ理由がありました。この総会は第14回人民革命党大会以後開催された最後の総会だったのです。翌年には第15回党大会を開催し、新しい党中央委員を選出するはずでした。ですから総会構成員としての私たちの任期がこれで終わろうとしていました。人民革命党の規則では、党中央委員を党大会で選出承認することになっていました。党中央委員を選出する選挙の候補者名を、初めに党中央委員会書記長が自ら選び出し、事前に政治局会議で討議承認してから、大会にかけ、選挙を実施していました。いったん党政治局会議で話し合っただけで承認した以上、党大会は候補者をほとんど100%の支持で選

出していました。私たちはツェデンバルとその取り巻きを、複数の総会で批判していました。ですから私たちが次の党大会で党中央委員会の総会構成員に再び推薦されないことはわかっていました。それで私たちは、自分たちが総会構成員であるうちに、この機会を利用して党の同僚の前でツェデンバルの手法と彼の進めていた政策の誤りを批判してやることにしたのです。

私たち2人はモスクワで顔を合わせてこのことを相談していました。党の規則では党中央委員会の総会構成員は総会には必ず身をもって参加しなければなりません。ですから私たちは総会に身をもって出席することにしました。ところが、私たち2人が総会への出席を決めたという情報がツェデンバルに届いていました。総会の直前、ツェデンバルはモスクワを訪れました。ツェデンバルにはモスクワ訪問の別の目的があったのでしょう。その時に、私たちと1度会う機会を作ったのです。その会見で、「今回の総会は経営方面の問題を議論する。君たち2人は留学中という状況を考慮して、われわれは出席を免除することに決定した。総会にわざわざ身をもって出席する必要はない!」と言いました。彼が私たちを何とかして会議に出席させまいとしているのは明白でした。私たち2人が党中央委員会総会に行けば、必ず自分の批判を始めるということとを彼自身よくわかっていたのです。

当時、モスクワに勤務・生活・留学していた人びとの中には、ツェデンバルに情報を提供したり告げ口をしたりする連中が大勢いました。党員がお互いを探り合い、学生たちがお互いを探り合う、そんな嫌なシステムができあがっていたのです。ツェデンバルは社会に起きているできごとをこのような方法で監視していたのです。ツェデンバルに密告したり何度も情報提供をしたりした人物を要職に任命し、報奨金を与えるようになっていましたよ。

そこで私たち2人は秘密裏に党中央委員会総会に来ることにしました。私たちはこの時初めてツェデンバルを批判しようとしていたわけではありません。彼と会う時には、誤りや欠点を何度も指摘していました。これは本来、人が怖れるほど目新しいことではありません。1956年の党中央委員会第2回総会で、党の同僚の前で初めて批判して以降、仕事や親戚関係で、そして個人的に彼とは何度も会っていました。会うたびに「これこれの誤りがあるぞ、こんなふうになんか言っているぞ、これこれこんなふうに参加しなければならぬぞ」と話してはいたのです。そのあいだに約10年が過ぎたのですよ。

党中央委員会第6回総会は1964年12月に開催されました。この会議では「党・国家の管理・検査の改善について」という題のツェデンバルの報告が討議されました。会議に出席していた党中央委員会の総会構成員は報告に関連して15分の発言をすることになっていました。この総会で私たちが批判を行うことがわかっていたので事前に細かい準備がされていました。会議には発言者リストが提出され、誰がいつ発言するかが事前に決められていました。私たち2人の前後の発言者名が決められ、発言が準備されて

いました。発言者の目的は、私たちの批判を撃退し、私たちを批判することでした。この総会で私はいくつかの問題をとりあげてツェデンバルを批判しました。

— ツェデンバルは人民革命党中央委員会と政府を長期にわたって指導してきたが、その成果ははなはだ少ない。

— ツェデンバルは外国の機嫌をとるためにモンゴルの領土の一部、自分の生まれた土地までも渡している。

— ツェデンバルはわが国の対外政策に危険をもたらしている。ソ連・中国という大国が対立している。ツェデンバルはこのように世界の労働運動に起こった論争や対立をますます助長している。

— ツェデンバルはわが国の対外債務の縮小のためにどんな手立ても講じていない。わが国の対外債務は乱脈なものとなり、ますます増大しつつある。

— ツェデンバルと彼の指導する人民革命党中央委員会には今日、わが国の経済発展のための、真に科学的な根拠に基づいた長期的計画がない。すべての事業が明確な目標も計画もなく、流れのまま舵取りを失った形で進んでいる。このような姿勢によりわが国の経済は外国の借款と援助に頼った、自立する力のない経済になってしまった。

— ツェデンバルは党中央委員会総会を秘密裏に陰謀的に組織するようになった。このようなやりかたで党の最近の総会を組織し、トゥムルオチルやツェンドらの問題を討議させ、彼らの中傷して解任し、追放した。

— ツェデンバルは政治経験の浅い青年を脅し、ある者には賄賂を与えるという狡猾な方法を用い、不正なやりかたで登用している。彼らにはツェデンバル自身を擁護する以外、成し遂げたものはわずかである。

— ツェデンバルは内務省の力を甚だしい規模で増強しつつある。これは何のためにしていることだろうか？ 1937～1938年の「政治的大弾圧〔粛清〕」を繰り返すためだろうか？

— ツェデンバルは祖国の将来的発展のために心を痛めた知識人・青年を「モンゴル・ソビエト友好に害毒をもたらしている」、「自民族中心主義だ」、「くだらないおしゃべりをしている」といった言葉で叱責し、抑圧し、解任や追放をするようになった。

— ツェデンバルの個人的欠点は党及び国家、政府の要職にある人びとに伝染した。彼の周囲にいる人びとの中には家族そろって国家の資産を着服する者がおり、ある者は昇進のためのさまざまな計画を企てるようになった。

— ツェデンバルは党および国家、政府の財産と権力を、自らが党及び国家・政府の要職に留任し続けるための道具として使っている。社会主義建設についての彼の話はこの目的のための単なる隠れ蓑になっている。

— ツェデンバルを指導部から排除すれば、わが党にはほかに国家を指導する人物がないかのような風説を彼自身が流すようになった。長年のあいだ彼をこの役職に留めて

崇拜したことによりわが党は大いに害を被っている。今こそこの問題を急いで解決する時である。

— 私がツェデンバルを批判するのは、党の利益という見地から、彼の実施している諸政策の誤りを正すためである。私の語っている内容は、今ではなくともいつかは必ず実現するだろう。したがって、私はこの会議後にいかなる叱責や非難を受けることも恐れていない。

私の批判の要旨はこのようなものでした。私の発言の原文は人民革命党文書館にあるかもしれません。ないかもしれません。その総会でツェデンバルは「私の事業がうまく行かない主な原因は、管理と検査が甘いことである」という結論を出しました。これは実に誤った結論でした。当時わが党の事業がうまくいかない主な原因は管理と検査の甘さではなく、大衆の積極性が弱まったことでした。大衆の何かをしよう、成し遂げようという大いなる積極性を導いて組織し、方向づけをすることができなかつたのです。そのような指導ができなかつたので大衆の積極性は次第に弱まってきたのです。

当時、経営事業は常に前進に向かっていました。すべき仕事がおのずから見えていたのです。収益の上がるさまざまな新しい部門を立ち上げて発展をはかることが死活問題になっていました。それなのに党指導部はこういったことをつかめなかつたのです。新しい発想と創意のある一部の人のびとに対しては、さまざまな理由をつけて中傷し、地方に流してしまいました。大衆の側が発案し計画したさまざまな事業を支援しなかつたばかりか「くだらないおしゃべりをしている」として抑圧し、冷遇するようになりました。彼らは自分でものを考え、発案して取り組む能力を失っていました。こうして次第に彼らは経営事業から取り残され、それを理解しなくなり、事業の邪魔となり、捨てられるようになったのです。彼らはよその人間の言葉にただ従い、彼らの言葉をそのまま口移しに伝える存在へと変わりました。モンゴルの事情は実に独特なのです。それは外国人にはわからない。それでわが人民革命党の指導部はイニシアチブを失い始めたわけです。彼らはできごとのあと追いをするようになりました。ものごとを予見し組織するということができなくなりました。その総会でツェデンバルの出した主な結論は「管理・検査の改善によってわれわれの事業は改善される」というものでした。

「そうではない。管理と検査の改善というのは〈ディクタトゥーラ（独裁）〉を厳しくするという意味だ。ディクタトゥーラを厳しくしても経営事業が改善されたことはない。ディクタトゥーラを強めれば強めるほど人民は政府の政策を理解も支持もなくなる。ディクタトゥーラを強めれば強めるほど社会の中には政府の政策に敵対する空気が生まれる。これはわが国のつい最近の歴史で証明された苦い真実だ。経営事業は経営的発想と経営的手法でこそ指導すべきなのだ。そして大衆の積極性も取り戻す必要がある。彼らの積極性はいつ取り戻されるだろうか？ 取り組んでいる仕事自分たちの生活の向上にじかに影響を与えるようになった時にこそ取り戻されるのだ。中味のない『あ



あしなくてはならない、こうしなくてはならない』という言葉では大衆の積極性は戻らない。そんな言葉を大衆は受け入れない。経営は絶対にディクタトゥーラ的手法で指導してはならない！」と私はツェデンバルに言い返しました。総会で私は彼のことをこのような内容で批判しました。

I L：1964年の党中央委員会第6回総会が開かれた時期は、わが国で農牧業ネグデル〔農牧業協同組合〕が設立されてまもない時期です。ネグデル員の生活は当時どんなものでしたか？

L O：農牧業ネグデルが設立される直前、人びとは家畜の飼育に耐えられなくなってしまっていました。家畜は非常にたくさんいたのですよ。ネグデル設立のために牧民の家畜を強制的に社会化し、当人をネグデル員にし、ネグデルの家畜の世話をするようにしました。

1950年代末に設立された農牧業ネグデルは1930年代初頭に強制的にたくさん作られたコルホーズを直接引き継いだものです。当時は人民蜂起が起こったので急いでコルホーズを解体したでしょう。この事業は人びとの心にとっても深い傷を残しました。ですから50年代末の総合的ネグデル化事業開始の時には、かなり慎重を期していました。30年代の人民蜂起が再び繰り返されるかもしれない、まっとうな根拠があったのです。ですからこの事業を開始するために事前の準備が長期間にわたって行われました。初めに「ネグデル員模範定款」を作成しました。人びとの農牧業ネグデル加入の基本原則は「自発性にもとづく」と説明されていました。つまり「自発性にもとづいて」人びとは自分の家畜や財産を社会化すべきだったのです。

なぜ、どうしてもネグデルやコルホーズを設立しなければならなかったのかという疑問があります。これは社会主義社会を建設する「レーニンの計画」によって行われた事業です。「経済的社会構成体」に関するマルクス・レーニン主義の理論があるのです。

「人類は発展の歴史において4つの経済的社会構成体を経た。それは原始共産制、奴隷制、封建制、資本主義という経済的社会構成体である。第5にして最後の経済的社会構成体は社会主義・共産主義である。これは人類の最後の発展段階である。経済的社会構成体を規定する3大契機がある。それは社会的生産手段と生産関係であって、その2つに合致した上部構造である。その社会がどのような社会かということを中心に規定するものは生産手段である。すなわち、生産手段が私的所有であるか、それとも社会的所有であるかということによって、社会の性格は規定される。社会主義・共産主義以前のすべての経済的社会構成体においては、生産手段は私的所有であった。このような社会では貧富の差が生まれ、社会的階級が生じ、人間の人間に対する搾取が支配的となり、社会構成員の不平等が生まれる。このような社会は常に内部矛盾をとめない、階級闘争が行われる。人類の歴史は階級闘争の歴史である。階級闘争の最高の形態は社会革命である。あらゆる革命の主な目的は社会的生産手段を所有する私的所有の問題の解決

である。このために政権を握る必要がある。17世紀半ばに英国で起きたブルジョア革命と18世紀末にフランスで起きたブルジョア革命の結果、ブルジョアジーの手に権力が移行した。社会主義革命の結果、権力は労働者農民の手に移るはずである。労働者は農民階級と共に武装蜂起を起こすことによってブルジョアジーから権力を奪取するはずだ。彼らはブルジョアジーから力で権力を奪取し、自らのディクタトゥーラを確立するはずだ。このディクタトゥーラを〈プロレタリア独裁〉と呼ぶ。なぜなら社会主義革命の時の革命の主な推進力はプロレタリア階級だからだ。こうして〈プロレタリア独裁〉の樹立によって社会主義革命の主要目的である生産手段の私的所有の廃止と、社会的所有を確立することができる。生産手段が社会的所有になった時には、貧富の差はなくなり、社会的平等が確保される。人間の人間に対する搾取はなくなり、社会正義が確立される」とマルクス・レーニン主義は教えています。

1917年10月にロシアで社会主義革命が勝利したのち、生産手段はロシア・ブルジョアジーから強制的に奪取されました。工場、道路、橋、通信手段はすべて国有財産になりました。それ以外に土地も生産手段と見なされました。そして、大規模地主の土地が強制的に奪取されました。こうして土地も国有財産になりました。しかし、膨大な面積の土地が農民の所有のままでした。規模は小さいとはいえ、農民は土地を私有していたのですよ。この問題をどう解決するかという問題が持ち上がってきました。

このころレーニンの『協同組合計画』という著作が発表されました。レーニンはこの著作で「協同組合化という方法によって農民を社会主義建設事業に参加させるべきだ」という理論的結論を出しました。つまり「彼らの私的所有にある土地を社会化して社会的所有とし、私的所有をなくすべきだ」という理論を打ち出したのです。1930年代、「レーニンの協同組合計画」を現実に適用するためにロシアでは悲劇的な事件が起きました。土地を奪われ社会化された何百万人もの農民が飢えに苦しみ、死んだのです。富裕農民は土地の社会化に強く抵抗しましたが、スターリンは人の血を流してそれを鎮圧しました。こうしてロシアには事実上、土地を私的に所有する農民階級がいなくなりました。

モンゴルの状況はどうだったでしょうか。モンゴルでは理論的に最も困難な1つの問題が持ち上がりました。モンゴル社会における生産手段は家畜か、土地か、という問題を最初に解決することが必要になったのです。ある者が「生産手段は土地であるはずだ」と言えば、別のある者は「生産手段は家畜であるはずだ」と論争したのです。この理論的問題は解決できませんでした。そして家畜を社会化することにしたのです。50年代末に始まった、大衆の家畜の社会化というこの事業は、非常に強力な「陰の反対」に直面しました。人民は「自発性にもとづいた家畜の社会化を望みませんでした。「自発性にもとづく」という言葉は単に「農牧業ネグデル模範定款」に書かれた言葉にすぎません。人民の家畜を30年代のコルホーズ設置の時のように強制的に社会化してし

まったのです。

こうしてモンゴルの遊牧民や牧民は「農牧業ネグデル員」となり、ネグデルの家畜の世話をするようになりました。こうして「遊牧民」という言葉の古典的な意味は失われました。「農牧業ネグデル模範定款」ではネグデル員の私有家畜の数を、ハンガイ地帯では50頭、ゴビ地帯では75頭と決めました。毎年、農牧業ネグデルと国営農場の、そして私有家畜の頭数を計るようになりました。この計数で「農牧業ネグデル員模範定款」を上回った家畜は社会化されました。そしてネグデルの家畜には肉、乳、毛のノルマや計画が与えられるようになりました。ネグデル員はこのノルマと計画を達成するために、牛の乳搾りを夏中行い、牛乳を納めるようになりました。自分たちにはお茶に入れる牛乳が残らなかったのですよ。

農牧業ネグデルの家畜を世話する牧民は、自分の好きに場所を替えて移動することができなくなりました。いつ、どこへ、どのような乗り物で移動するかといった問題を「ネグデル評議会」が決定するようになりました。ネグデルの家畜の搾乳期間の設定、種付け作業の手配、子家畜の受け入れ、毛刈り、移動放牧の実施などあらゆる作業を国が管理するようになりました。牧民が自分で決めてする仕事は何もなくなりました。

こういったことから、ネグデルの家畜を「ヤルタイ・マル（罪のある家畜）」と呼ぶようになりました。家畜がまるで受刑者ようになったという意味です。あらゆるものが期限や規模を定められるようになったわけです。他方、ネグデルの家畜を無駄に死なせたり、国から与えられたノルマ・計画を達成しなかったりすれば、牧民は処分を受け、投獄されるようになりました。ですから家畜も「有罪」、それを世話する人間も「有罪」というわけです。このような厳しい状況になりました。まもなくネグデル員の子弟は町や定住地の学校で学ぶという名目で地方から逃げ出すようになりました。こうして家畜の面倒をみる人がいなくなりました。いくらかの老人が、いくらかの家畜と残りました。

こうして人びとはだんだんとこの「有罪家畜」から免れることを望むようになりました。人びとの生活はこうしてますます悪化しました。家畜の社会化以降、牧民は自前の財産がなくなったわけです。モンゴル人は妻が出産すると新鮮な羊のスープを飲ませ、体力の回復をはかります。牧民のゲルの外には囲い一杯の羊がいるのにそれは自分のものではなくネグデルの羊ですから、そこからたとえ1頭でも勝手に使ってはなりません。必ず組合長の許可をもらわなくてはなりませんでした。組合長が許可を与え、牧民が羊を手に入れて利用するなら、その代金は自分の給料で払わなければなりません。もしも返済しなければ、ネグデルの家畜を減らした罪で投獄されるのですよ。ネグデル員の生活はこんなふうになってしまいました。

I L：ご自身は1964年の総会で「この債務は乱脈なものになった」と発言なさいました。これについて少し説明していただけますか？

LO：そうです。当時は債務問題が乱脈化していたのです。わが国はなぜいつも債務を負い、借金をしているのか？なぜわれわれは自国の予算をまかなうことができないのか？これは考えるべき問題ですよ。債務を負わず、その規模を縮小することはできたのか？このような疑問が常に生まれていました。当時、工業、農牧業、保健、教育、文化といった国民経済の全部門が、中央集権化された国家予算を資金源としていました。国家予算がこのような大きな負担に耐えるものでしょうか？耐えられないのはもちろんのことです。それで借金のお話が出てくるのでした。借金は乱脈化の一途でしたよ。

債務が増え続けた主な原因は、自国の潜在的可能性の完全な利用ができなかったことと関係があります。わが国の経済の主要部門である農牧業において高い収益をあげるさまざまな新部門を立ち上げることができなかったことと関係があります。高い収益をあげることができ、わが国の条件に合った、原価の低い製品を生産する小・中規模の産業の発展がはかれなかったことと関係があります。外国貿易で常に赤字の商売をしていたことと関係があります。当時、外国貿易の損失はとても大きなものでした。ソ連は自国の国内市場価格より何倍も高い値段でわが国に品物や製品を「押しつけ」ていました。ソ連からの輸入品は価格がそれほど高かったにもかかわらず、質はわが国の市場の要求を満たすことのできない不良品が多くありました。不良品が多かったためにわが国の消費者は買うのを強く拒否していました。

これに関連して1つの例を挙げてみましょう。わが国はお茶の木を栽培していません。モンゴルはお茶をいつでも外国から輸入していました。自国で消費するお茶すべてをソ連から買っていました。私たちはそのお茶を「ドゴイ・ボラント（角のまるい磚茶）」と呼びます。しかしこの「ドゴイ・ボラント」の質はわが国の消費者に拒否され、売れませんでした。そこで人が買わないお茶を売るために、中に女性用の耳飾りや指輪を入れたのです。人びとはその耳飾りや指輪を取って、お茶は捨ててしまっていました。工場の設備としては、古くなり、もはやどこにも使われなくなった技術や設備が多くもたらされてきました。時には使用済みで中古になった設備に色を塗り、新品のようにして送って来たこともありました。また、わが国にはまったく必要のない品物や製品を高い値段で突きつけてきたことも多かったのです。たとえば、外国貿易を通じてわが国からは山羊のカシミア毛やラクダの毛、家畜の皮や毛といった素材や、生きた家畜がソ連に輸出されていました。そういったものには世界の市場価格や相場の何分の1の低い価格がつけられていました。その代わりに、ソ連からはわが国にはちっとも必要でないものを非常に高い値段で提供してきました。これと関連して私たちの間ではおもちゃの「ゴムの羊」の話が長年語られていました。つまり、わが国から外国貿易を通じて先に述べたような製品を輸出し、その代わりにおもちゃの「ゴムの羊」といったものが入って来ていたわけですよ。ソ連の国内市場価格より何倍も高く、生きた羊1頭に匹敵する値段で、ですよ。このようなおもちゃの「ゴムの羊」がわが国の経済成長にどんな役目を

果たすことができるのでしょうか？この疑問の正解を出すには、ツェデンバルには彼が習得したという「経済」の専門性は何の足しにもならなかったのですよ。このような「経済専門家」たちが私たちを指導し、「モンゴル国を発展させる」と語って長い時間が過ぎました。国民はがまんの限界に達していたのです。このような状況にあって、わが国の債務が乱脈化するのには当然ではないでしょうか。

当時はアルタンボラグ、エレーンツァブ、フブスグルのハンハ、西部のツァーガンノールの中継基地を経由して家畜をロシアへ輸出していました。モンゴル東部5県の家畜はエレーンツァブ経由で、中央部の家畜はアルタンボラグ経由で、フブスグルやザブハンなどの県はハンハ経由で、西部の諸県の家畜はツァーガンノール経由で輸出されていました。

清朝時代には、モンゴルの家畜は南へ送られていました。当時は「トーバル」という方法で家畜を南へ届ける特別な道がありました。西部アルタイは西部の境界を通過して出ることができました。そこには南へ通じる「シャル・ザム（黄色い道）」という道がありました。ホブドのハルオス湖からフィスゴビ、シャルガゴビ、それからビゲルの谷間を通過して境界を南に抜けるのです。これを「西通路」といいます。「中通路」というのもありました。それは「南北タミル川の合流地点」、それからトゥブシルーレフのウルグート平原、フシグ平原に入り、ハルホリンのオルホン平原から南へ抜け、ズイル平原を通過してドムボンゼーレンゴビで境界を南に出ていました。中央ハルハを通る南への出口もありました。ヘルレン平原から始まり、ノホイツァンガフ平原に入り、ドルノゴビの西側、スフバートルの西側を通過して境界を抜けていました。この3つの通路を通り、家畜を南へ出していたのです。これは清朝時代のことですよ。これはたいへんうまく自然と折り合いのついた通り道ですよ。家畜を放牧という方法で追いながら境界を越えるということですからね。今ではこれらの通り道を利用しているのはドルノゴビ西部の人だけです。ほかの場所は使われていません。モンゴルがこの通り道を通じて家畜を南へ送り出していた話は昔のことではありません。大きな歴史的教訓を含んでいますよ。

私たちは今後、南の隣国と関係を持ち、交通の問題ではこの3つの通り道することに注目すべきです。今ならこの通り道に沿った鉄道や自動車道路を敷設してもいいでしょう。これは障害物のない低地です。ラクダの隊商はこの3通路を通過して入って来ました。隊商の「黄色い道」はこの通路に沿ってあるのです。ラクダの隊商はすべてホブドのハルオス湖を経由していました。この道は、何百年間もラクダの隊商が通った1番の近道なのです。

1950年代半ば、モスクワ・ウランバートル・北京を結ぶ鉄道が開通しました。中国側からモンゴル国に入って来た鉄道がモンゴルの道と結ばれたのでした。このことと関係して、モンゴル側からはツェデンバルを長とする政府の代表団が、中国側の政府代表団と、双方の鉄道の結合地点で会合することになりました。モンゴル側の代表団にはと

でも大勢が参加しました。私も入っていました。私の友人である『ウネン』紙の編集長であるS.デレグも行きました。そこでは壮大な式典が執り行われました。両鉄道のレールが大きな銀の釘4つで結び付けられました。私たちはこうして、鉄道によって南と北の隣国を訪れることができるようになりました。この2国を通じてその先、世界各国と関わる可能性が生まれたのです。これはわが国の歴史にとって大きなできごとでしたね。この盛大な式典に参加した帰路、私はS.デレグと2人で代表団から別れて「犬の喉がかわく平原」と呼ばれる有名な平原を見に行きました。この驚異的な大平原について私は記事を書き『ウネン』に載せました。当時、この平原の中を走ると私にはとても奇妙な気持ちが生れました。何百年ものあいだ、この広大な平原をラクダの隊商の行列が越えてモンゴルに入って来たのです。

当時、予算の損失の縮小、収益拡大、国内必需品の国産について、党指導部はもっともイニシアチブを発揮していませんでした。人民はそれを知り、話題にし、批判していました。とくに知識人はこれについて大いに話題にしていました。1964年の総会が開催されたころ、社会の空気はとても重苦しいものでした。国民の不満は最高に達していました。国内生産はほとんど停止していました。自国の必需品を生産することもできず、収益の上がる中小工場の発展は完全に停止していたのです。ソ連と中国のあいだでは大きな論争が起こっていた時期です。この論争はわが国の経済に非常に大きな打撃を与えました。

I L : ご自身はその総会でツェデンバル書記長の人材採用の手法を批判されました。これについてご説明いただけますか？

L O : ツェデンバルが権力を握り始めたころには、人物を活動内容で評価して役職に任命するというのを完全にやめてしまいました。

およそ国の要職に任命された人はすべてオブス県出身者になったのです。オブス県はツェデンバルの故郷です。オブス県出身でさえあれば国の要職に任命されるし、どんな職場でも長として任命されるようになってしまいましたよ。その人たちは役職に任命されて、自分の周りに同郷の人を置き、内輪でお互いを引き上げ、どんなに誤りや逸脱を犯しても構わず、業務がどれほど低調になっていても構わず、お互いをかばいあうようになってしまったのです。国の事業が私的な性格を持つようになって来ました。このような状況を正して仕事をまっとうするべく心を痛めた人びとに対して、冷遇したり、解任したりするようになってきました。大衆はこうした状況を嫌がっていました。このころ、人びとのあいだには

ドゥルベドは人ではない

4本の脚は肉ではない

というジョークさえ生まれていました。こうしてモンゴルの民族問題とも言えるような諸問題が起こってきたのです。モンゴルは多民族国家ではありません。私たちはみな同

じモンゴル民族です。モンゴル民族の中に、多くの小さなヤスタン（部族集団）が含まれます。それらのあいだにとくに違いはありません。話し言葉や習慣の地域差を除けば、みな同じです。ところが当時は、このようにドゥルベドとハルハで2つに分かれ、紛争を始めたのです。

少しあとにはソ連の学校を出た人を役職に任命するようになりました。ロシア語を知ってさえいれば簡単に出世しました。ロシア語を知っていることはいいことです。しかし、それは役職にふさわしいかどうかの基準ではあり得ません。このような形で昇格した人たちは仕事をする能力がありません。彼らは国から無償で住宅の提供を受け、年中外国に出張し、高給をもらい、特別な待遇を受けるようになりました。あなたがたは「幹部用店舗」というのを聞いたことがあるでしょう。大臣や大きな役所の長官たちがこの特別店舗でサービスを受けていたのです。党中央委員会の「秘密決議」がありました。その決議は党中央委員会の政治局員が享受する「特別待遇」および他の大臣や長官たちの「待遇」問題をとりあつかうものでした。特別店舗には一般人は入ることができません。禁止されていました。国民の日用品不足は極限に達し、普通のものまで店頭になくなった時期ですよ。このような形で要職に任命された人たちは傲慢になり、ツェデンバルを礼賛し、ソ連を擁護するばかりです。当時彼らは、

ドゥルベド人は国家の支え

4本の脚は家畜の支え

という言葉さえ作り出しました。そして一方で、業務を熟知し、長年働いた経験豊かな人びとが解任されたり、降格を命じられたりしていました。ある人たちに対しては名誉を汚し、地方へ追放していました。このような行いは社会にとってたいへん有害なものです。ですから国家発展の基礎がありません。へつらい屋が生まれました。そして、党の事業も政府の事業も機能しなくなったのです。このような連中が党や国の機関に増えてくることによってたいへん苦しい状況が生まれていました。

I L：1964年の党中央委員会第6回総会でツェデンバル書記長の手法や政策の誤りを批判した時、彼をこの役職から解任する目的があったのですか？

L O：私は彼と何度も面会し、彼のしている仕事の誤りや政策の誤りについて何度も指摘していましたよ。ツェデンバルが私のしている活動を支持し、私の問題提起を快く受け入れる時期もありました。私は国営農場管理局長を6年務めるあいだ、彼と恒常的に会っていました。私の担当していた事業は本当に重要で、モンゴルの農牧業においてまったく新しい部門であり、ひいてはモンゴルの社会経済的發展にとってははなはだ大きな意義をもつ事業でした。このことを私たち2人はよく理解していました。このような歴史的機会を逃さないよう私たちはみな努力していました。

しかし、ツェデンバルがどうしてこのような重要かつ困難な部門を私に担当させたのかわかりません。この点でいつも思い出されることをお話しましょう。1956年私がゴ

ビアルタイ県のモンゴル人民革命党第1書記として働いていたとき、突然「ウランバートルに急いで来い！」とモンゴル人民革命党中央委員会から呼び出しがありました。呼ばれたとおり私は中央委員会に行きました。ツェデンバルは自分の執務室で私を迎えました。そして2人で地方業務について少々話し合いました。しばらく2人でそんな話をしているとツェデンバルはゆっくりと話題を変え、未開墾地の開拓について話を始めました。そして突然「私たちは君を国営農場管轄局の局長にしようと思っている。君はこの仕事ができるかね？」と尋ねました。私はこんな質問があるとは思いがけず、少し躊躇しました。そして「できます！」と明言しました。彼は私の言葉を聞いて私の方を向き、椅子から立ち上がって向こうへ歩きました。そして歩きながら「ああ、そうかね！君はなんて多くのことができる人だろうねえ？」と、ほんやりつぶやくのが聞こえました。彼のその言葉が今でも思い出されます。ツェデンバルはまったく別の考えから、この重大かつ困難な新部門を私に任せたのかもしれませんが、もし、この重大かつ困難な新部門を短期間で成功させることができなければ、どうなっていたかは明らかです。

私は自らのところにあったあらゆる条件を動員し、この部門を確実に自分の足で立たせるために、自分に関係のあることもないことも何でもしました。私の努力は無駄ではありませんでした。モンゴル農牧業に独自のまったく新しい部門が発展し、モンゴルは史上初めて農産物を生産し、収穫の好調な年には輸出するようにまでなったのです。これは私たちみな 노력のたまものであり、モンゴル人民の努力のたまものでした。私はツェデンバル党中央委員会書記長と車に同乗して地方へ行ったことが1度ならずあります。党書記長という任務の負担が非常に大きく、彼とは普通の時には落ち着いて話す暇がなかったので、私たちは車内でずっと話しながら移動したものでした。

当時は農耕作業において機械技術上の障害がよく発生していました。たとえば、トラクターやコンバインの部品がないために、作業に出られなくなるということが多く起こっていました。機械技術上の障害が発生したそのような時には私は彼に直接電話をかけていたのですよ。当時は飛行機を使って各地の国営農場を訪問していたとお話しましたね。それで飛行機の無線通信で彼自身に向けて直接話すのです。

ある時、穀物収穫作業の開始前に新しいコンバインが来ました。しかし、それらはすべて油圧ベルトの部品がついていませんでした。つまり、そのコンバインの運転操作ができなくなっていたのです。それでそれらを作業に出せないことになりました。この状況をツェデンバルに電話で伝えました。すると、彼は直ちにモスクワと連絡を取りました。当時、モスクワにはわが国の大使としてS.ロブサンが駐在していました。ツェデンバルは「緊急に手を打ってくれ！」とロブサンに指示しました。本当に5日後、例の油圧ベルトがヘリコプターで届き、ダルハン国営農場付近の上空から投下してくれました。このおかげで穀物収穫作業は少しも遅れることなく、期限内に終了しました。この



ように私たちは恒常的に連絡をとりながら仕事をしていたのです。

しかし、彼の手法や政策の誤りは正されませんでした。正すための時間は充分ありました。ちっとも変更されなかったのです。そして「現実を理解していないならここから離れる必要がある。この職務を遂行する能力のある人物はいる。われわれは自国の発展と将来を考えよう。ツェデンバル、お前はわが身のことしか考えていないのだろう！」と私は彼に言おうとしていました。

私と一緒に彼を批判したニヤムボーは少し別の考えを持っていました。「ツェデンバルを解任する必要はない。彼の代わりに党と政府を指導できる人物は今のところいない」と言っていました。ツェデンバルは、他よりも才能に秀でているがゆえに、しかるべくして重要な地位まで昇進したという人物ではありませんよ。彼が党中央委員会書記長に選出された時期はモンゴルの歴史において非常に微妙で特殊な、困難な時期でした。1937～38年にわが国の教養、専門知識、能力のある人材を内務省はほとんど数珠つなぎにして逮捕し、ことごとく処刑し、ある者を何年も投獄しました。人材がこのような乏しかった時期にツェデンバルは党書記長として選出されたのです。彼は実務経験も浅い、24歳の時に任命された人物ですよ。彼自身が直接担当し、手ずから行って成果を挙げた事業は1つもありませんでした。それに社会科学の理論的素養もろくのない人でした。

モンゴルは地政学上、ソ連と中国という2つの世界的超大国に挟まれた小国ですから、いつだってこの2国とは良好な隣国関係を大切にしなければなりません。1940年代、中国国内の混乱により、モンゴル・中国関係は不安定な傾向にありました。このような情勢のため、わが国の対外政策においてソ連が特別な位置を占めていました。私たちはソ連と全面的友好関係にありました。ですから、わが国政府の指導部にロシア語の知識がどうしても必要だったのはもっともなことです。しかし、彼らの中にはそのような人は圧倒的に少なかったのです。このような時期にツェデンバルがソ連の大学を卒業し、ロシア語を良く知っているといったことは他の人たちより目立つ特徴になったのでしょう。「百人の老婆が競走すれば誰かしら1人は1位になる」〔極めて低レベルの競争でも優劣がつくという意味〕というモンゴルのことわざがあります。ツェデンバルは党書記長として選出されてから、一時は精力的に活動していたかもしれません。

しかし、まもなく党にとっても国家にとっても指導者にあるまじき数々の欠陥の持ち主になってしまったのです。彼があつというまに熱意を失い、業務能力も積極性も失くしてしまったことについてトゥムルオチルは党中央委員会のいくつもの総会でさえ話題にし、批判していました。私は個人的にはツェデンバルと普段から仲が悪かったわけではありません。批判は彼の手法と政策の誤りに対するものでした。

ニヤンタイスレンギーン・ラムスレンやバザリーン・シレンデブはチョイバルサン元帥から高く評価されていた人たちです。それに対してツェデンバルについての評価は

徐々に大きく変わったと私は思います。

チョイバルサン体調が悪化した時、ソ連に行って治療を受けるよう助言をしたのはツェデンバルであり、彼がソ連に行くよう説得していました。チョイバルサン自身はモスクワに行って治療をするのは嫌だったという話もあります。この話には根拠があるでしょう。そのころチョイバルサンはスターリンに対してたいへん冷淡な態度をとるようになっていました。スターリンとチョイバルサンはどちらが先に政治の舞台から降りるかを待っていたことでしょう。チョイバルサンは体調が悪化した時、非常に詳しく自分の考えをニヤンタイスレンギーン・ラムスレンに語ったようです。そして、このことをツェデンバルはスパイを通じて知ったようです。この会話こそがラムスレンを党中央委員会政治局から追放し、党を除名する理由になりました。

ラムスレンの妻ナムスライジャブはモンゴル初の女性研究者で賢い人でした。とても美しい女性でしたよ。ツェデンバルは彼女とも仲が悪くなったようです。ラムスレンとツェデンバルはソ連で共に学んでいました。ツェデンバルは西部の県から出て来たのでウランバートルに知り合いがおらず、故郷が遠いため夏休みをラムスレンの家で過ごしたのです。ラムスレンのところは立派な蔵書のある家でした。それで2人は夏に面白い本を読み、休暇を過ごしたのです。ツェデンバルとラムスレンの服や食べ物はラムスレンの家族がそろえてくれました。こうして2人は子ども時代から親しくつきあって大きくなりました。ラムスレン自身は農学の専門家でした。ラムスレンは農学の研究をするためにソ連へ行きました。ラムスレンの不在のうちにこのすべてのできごとが持ち上がったのです。

1990年代初めにラムスレンは、モンゴルテレビのインタビューの中でツェデンバルを子ども時代の名前で呼びました。子ども時代はツェデンバルと言っていたのです。モンゴルの大衆は、彼がそのような名前だったことを初めてこんなふうになりました。ツェデンバル本人はこのことを隠していたのかもしれませんが。いずれにせよ、長年一緒に働いた人びとはツェデンバルという名前が彼の本名ではないことを知らずにいたとずいぶん話題になりました。

ラムスレンがこのように解任されたのち、ツェデンバル側はシレンデブを党中央委員会政治局から除外し、別の任務につけるということを行いました。シレンデブはたいへん有能で知識の幅も広く、ロシア語の習得に傑出した人物でした。チョイバルサン自身はロシア語を話しませんでした。チョイバルサンとスターリンの会談では、シレンデブが何度も通訳を務めました。「スターリンは私のロシア語の知識を評価し、私のために乾杯してくれた！」とシレンデブは思い出話をしたものです。ツェデンバルとシレンデブたちはソ連のイルクーツクに共に留学した仲の良い友人でした。彼はモンゴルの教育大臣、モンゴル国立大学の初代学長、モンゴル科学アカデミーの初代総裁といった役職を務めた人物です。1980年代初めにツェデンバルが彼を科学アカデミー総裁から解任

したのです。このできごとはモンゴルの社会にたいへんなセンセーションを巻き起こしました。

そもそも国家を指導することのできる人物はごくまれなものです。10年でせいぜい1人か2人の人物が生まれるようです。チョイバルサン時代にはラムスレンとシレンデブの2人が際立っていました。次の10年にはトゥムルオチルやツェンドが際立っていました。党中央委員会の新しい書記長の問題が議論されるたびにツェデンバルは「私は国内の人材養成をまだ充分に行っていない」と言っていました。「私の代わりにモンゴル人民革命党中央委員会書記長の職務を果せる人物はいない。したがって私自身が従来どおりこの職務を遂行するぞ!」ということです。その職務を彼の代わりに、彼よりもしっかりと果せる人びとをことごとく退け、追い出し、追放することができたので、そのように自信たっぷりと言っていたのでしょう。これはとても奇妙な話ですよ。こういう話を多くの人は嫌がっていました。有能な人たちを常に支持する人たちというものもいます。ツェデンバルはまずラムスレンやシレンデブの支持者をすべて解任し、生活の糧を奪ったのです。これは社会に大きく有害な波風を立てました。こういったことから見るとツェデンバルは人格の劣った人だったようです。他人を利用し、使い道がなくなればゴミくずのように捨てる人間です。多くの人がこのようにゴミくず同然に捨てられました。

トゥムルオチルとツェンドはたいへん有能で、精力的に仕事に取り組む人たちでしたよ。2人が党中央委員会政治局員だった当時、すべての事業がこの2人の手に握られました。あらゆる仕事をこの2人が行っていたのです。ツェデンバル自身はあちこちでの式典参加や、あるいは表彰や報奨の授与をしに行くことが役目になってしまいました。彼はこれ以外の仕事をもっと立派にできたでしょうか？わかりません。2人がいた当時、ツェデンバルはこんな状況になってしまったのですよ。

独ソ戦の時には「びっこのティムールの墓を開けたためにこの戦争は始まった」という風聞がよく聞かれました。スターリン自身がゲルジアの出身だったのでこのような話が多少なりとも影響した可能性もあります。終戦時、彼はモンゴル人に対してたいへん敬意ある態度をとるようになったと言われます。「モンゴルはロシアという国が生まれる前に世界規模の帝国だったのだ」とスターリンは常々言うようになったそうです。第2次世界大戦が終わる直前、1945年2月に「反ヒトラー連合」に加わったアメリカ、英国、ソ連という3つの大国の首脳がヤルタ（クリミア半島）で会議を開き、戦後の世界の問題を話し合いました。この会議でスターリンは、モンゴルを擁護し、米英両国にその「ステータス・クオ（現状）」を承認させることに成功しました。スターリンはわれわれモンゴル人に対してもこのような功績を残した人物ですよ。

ツェデンバルが自分のことを「ロシア生まれ」だと言っていたという話があります。彼がそう言う理由が1つありました。1960年代中ごろ、ツェデンバルは自分の生まれ

故郷である、モンゴルの領土の一部をいきなりご機嫌とりのためにソ連に渡してしまったという一大事件を起こしました。ツェデンバル本人はオブス県のダウスト郡の人です。この郡は北側がソ連国境と接しています。ソ連国境内にツェデンバルの生まれた土地であるダウスト山があります。これは大量の岩塩を擁する山です。この山のふもとでツェデンバルは生まれ、子ども時代を過ごしたそうです。ところがソ連の側からこの山を自国に併合するという話題が出されました。大量の塩があるので、その塩を利用する考えがあったのかもしれませんが。向こうでは塩工場が作られたという話もあります。

このようなことがよく話題にのぼっていたころ、V.M.モロトフがモンゴル駐在のソ連大使に任命されて来ました。彼をモンゴル大使に任命した目的の1つはこのダウスト山をソ連の一部として併合することだったという噂もあります。モロトフは第2次世界大戦の前後に、スターリンと共に世界を自分の好きに分割した経験のある人物ですよ。それでモロトフはわが国の政府とのあいだでソ連・モンゴル国境問題の協議を始めたのです。当時、わが国の外務大臣はソドノミン・アウルゼドという人でした。アウルゼド外相はダウスト山をソ連側に移譲するというモロトフの要求を受け入れませんでした。「ダウスト山は古来モンゴルの領土の一部だった。将来もそうである。これは党書記長の故郷だ」という意味の発言をし、モロトフを黙らせたと言います。モンゴル人民革命党中央委員会書記長自身の生まれ故郷を、乱暴に「これはわが国の領土だ！」と主張することはモロトフにはちょっとできなかったのでしょうか。独ソ戦の直前、この怖いものなしのロシアはバルト海沿岸の国々を攻撃し、ソ連に併合したという歴史があります。ダウスト山とその周辺の土地がモンゴルの領土の一部だということを証明するこれ以外の適当な証拠がなかったことは当然のことです。もしダウスト山がロシアの土地ならツェデンバルはどちらの国の国民かという問題が持ち上がってきますね。それで協議は中断され、何日も、何ヶ月も過ぎました。モロトフは、アウルゼド外相の立場がソ連-モンゴルの国境問題に関して動かしがたく強硬だということをフルシチョフに報告したのでしょう。

この時、ツェデンバルはソ連で休暇を過ごしていたのですがね。まもなくツェデンバルはウランバートルに戻って来て、アウルゼド外相を解任し、党から除名しました。そしてモロトフと行っていたソ連・モンゴル国境協議を再開し、ダウスト山とその付近の土地をそっくりソ連側に移譲したのです。これは第2次世界大戦の最後に「反ヒトラー連合」に加わった3大国首脳のヤルタ会議で合意した条約・協定に違反するできごとでした。ツェデンバルはこのような奇妙なことをあからさまに行った人物なのです。人民はこのできごとをたいへん嫌いました。このような人物をどうして愛国者と言えるだろうか？このような人物がモンゴルのために心を砕くことができるだろうか？そういう疑問をモンゴル人は当時お互いに口にしていました。「自分の生まれた土地を外国のご機嫌をとるために渡してしまっているのだから、モンゴルのどこかの領域を誰かに渡すか

もしれないぞ！」などと人民は言っていました。アワルゼド外相は解任され、党を除名され、長年無職のままでした。ときにはタクシー運転手まで経験したようです。

1990年代、このアワルゼドは非公開の原因により、非常に残念な亡くなりかたをしました。ウランバートルの通りで彼が見知らぬ若者の一団につかまり、殴られたことが原因で重症を負い、回復することなく亡くなったのです。モンゴルの警察はその若者たちを見つけるための捜査をせず、放置したのです。

このころ、やはり非公開の原因で、首相のチョイバルサン元帥の副官であったスレンジャブ氏も亡くなりました。1952年のチョイバルサンの死後、代わりに誰を首相に任命するかという問題が大いに話題になりました。「ツェデンバルこそ首相になるべき人だ」という認識は世間にはありませんでした。チョイバルサンと長年ともに働いてきたので「スレンジャブ氏が首相になるだろう」と人びとは期待していました。ところが、ツェデンバルが首相になるという奇妙なことが起こりました。1990年代初頭、ウランバートルの路上で1台の車がスレンジャブ氏をひき殺すという事件が起こりました。それからまもなく、ザブハン県トソンツェンゲル郡に流されていたツェンドがウランバートルに戻り暮らしていたところ、「突然」亡くなりました。軽い風邪を引いて入院する前には彼の身体は健康だったことを多くの人が証言しています。

党中央委員会政治局員で書記を務めたTs.ナムスライもやはり「突然」亡くなりました。ナムスライは長年、党書記長の秘書だった人物です。1984年のツェデンバル解任後、ナムスライは党政治局員となり、党問題担当書記になりました。1990年3月に民主同盟がスフバートル広場でハンガーストライキを宣言し、党中央委員会政治局員の総辞職を要求しました。当時党の政治局員の意見は、この問題に関して2つに分かれていました。一部は民主同盟の要求を受け入れ総辞職するという意見でした。もう一方はこの要求の受け入れを真っ向から拒否し、スフバートル広場で行われているハンガーストライキを強制的に追い払い、解散させるという意見だったようです。1989年に北京の天安門広場で起こった事件がほとんど繰り返されるかもしれない。ナムスライは民主同盟の要求を受け入れ、党政治局が総辞職するという意見の側にしっかり立っていました。その後開催された党中央委員会総会での彼の発言は、モンゴル大衆の注目を大いに集めました。モンゴルの経済に生じたさまざまな困難について、複数政党制の実現が不可欠であることについて、そしてプルーリズムの発展と情報公開の確立についての彼の発言と提示した見解は人びとに支持されました。権力をすでに失った党の旧指導部は彼を、民主同盟の側につくかもしれないとたいそう警戒していたかもしれません。

このころ、内務省の副大臣だったS.ジャムスランジャブ将軍もまた「突然」亡くなりました。ジャムスランジャブ将軍は党中央委員会統制委員会が吟味していたトゥムルオチル、ツェンド、ローホーズ、ニヤムボー、ソルマージャブらに関する諸問題を内務省で担当していました。彼はこれらの「捏造」事件に対して事実に基づいた姿勢で臨ん

でいました。これについてはニャムボーの回想録『我は祖国を想う国民』という書物の中に思い出として収録されているのを見ることができます。

民主化前後のモンゴルにはこのような「原因は非公開」の「人命に関わる事件」が多く起きていましたが、その中でもモンゴルの社会全体を揺るがす2つの事件があります。それは1985年の「トゥムルオチル殺害事件」と1998年の「S.ゾリグ殺害事件」です。この2つの事件が「組織的な政治目的の殺人だ」ということは現在のところ捜査で確定されていません。しかし、疑いを抱かせるいくつもの根拠があります。この事件は両方とも10月2日に起きました。10月2日はモンゴルの歴史において「大規模逮捕」の始まった「暗黒の日」となりました。1937年10月2日、内務省の命令で何千人もの無実のモンゴル人が逮捕され、政治的冤罪によって処刑されました。

もう1つ別の根拠があります。トゥムルオチルは晩年、ダルハン市で生活していました。彼の追放期間も終わろうとしていました。彼はウランバートルに移り住む「許可」の申請を党中央委員会に提出しました。彼の許可願いを党中央委員会統制委員会は受け入れ、ウランバートルへの移住を許可しました。この知らせを「党中央委員会政治局員D.モロムジャムツの指示に従って、彼の秘書だろうか、誰かが電話で知らせた」という口伝えの噂があります。そしてその「許可」を受け取りにトゥムルオチルの妻であるサンジミャタビーン・ニンジバドガルはウランバートルへ出かけたのです。ニンジバドガルは教養と学識があり、組織化の手腕のある女性です。彼女はモスクワ国立大学で天文学の学位を取得した最初のモンゴル人女性です。1962年、トゥムルオチルが侮辱され、地方へ追放するとの決定が出されたあと、党中央委員会の統制委員会は「党中央委員会のこの決定はニンジバドガルには適用されない。ニンジバドガルはウランバートルに残り、天文学の仕事をしてよい」と言いました。その時ニンジバドガルは「私はトゥムルオチルと結婚したのであって、あなたがた中央委員会と結婚したのではありません！」と言って仕事をやめ、夫の追放先へついて行ったのです。トゥムルオチルの追放期間のあいだずっと共に過ごし、彼の味わったあらゆる侮辱、差別、苦労を共に経験した意志の強いモンゴル女性であり、聡明なモンゴル夫人です。それでニンジバドガルがウランバートルへ党の「許可」を受け取りに出かけたのち、トゥムルオチルが自宅に1人である時に殺されるという「殺害事件」が起きました。

トゥムルオチルを監視していたのは内務省のダルハン市駐在支所の勤務員であるダシドルジ大佐でした。内務省のダルハン市駐在支所はトゥムルオチルがどこで、いつ、誰と会い、何を話したかなどを分刻みで記録し、内務省の幹部に提出していました。ですからトゥムルオチルの自宅に1985年10月2日の夕方、誰がどんな目的で入り、家で何が起きたかなどを知らないはずはないのです。モンゴルの国民はそう理解しています。2000年の選挙で再び政権を握ったあと、人民革命党の現在の党首であるN.エンフバヤルは、内務省のダルハン市駐在支所の勤務員ダシドルジ大佐の訪問を受けて面会し、人

民革命党に対する彼の功績と尽力を高く評価し、祝福を送りました。これはモンゴル人民の目の前で起きた、自由新聞に写真と顔写真とともに掲載されたできごとなのですよ。

1998年のモンゴル民主革命の指導者ゾリグが殺害される事件が起きてから「権力機関の関与があったかもしれない」という噂が大衆のあいだでは途切れることはありません。この事件が起きた時、モンゴル警察長官は、モンゴル国功労法律家のD.ムルン大佐という光り輝く若者でした。ムルン大佐は以前、何度も重犯罪を摘発していた優秀な捜査官であり、すぐれた法律家でした。だからこそ、彼は最年少でモンゴル国功労法律家となり、モンゴル警察機関の最年少指導者となったのです。この事件が起きた翌日に開かれた記者会見でムルン大佐は「この重大殺人事件をモンゴル警察組織が解明する」という内容の発言をし、ショックを受けた大衆をこぞって自分の味方につけたのです。彼は2000年の選挙で民革命党から国家大会議員に立候補の最中、「民主同盟が政権を握っているあいだはこの事件は解明されない」という内容の発言をして、大衆を再びこぞって自分の味方につけました。2000年の国家大会議総選挙で民革命党が圧倒的勝利を収めるのにムルン大佐のこの発言は決定的な役割を果たしたと、わが国の独立系新聞は結論づけました。国民は彼が「民主化運動指導者の殺害事件を解明できる」と信じたのです。現在では彼のこの発言は「大衆を惑わせ、騙し、欺き、沈静化させる、社会心理に影響を与えるための言葉だった」と大衆は理解するようになりました。このような目的を持つ発言は当時ムルン大佐だけがしていたわけではありません。

民革命党から立候補してモンゴル国大統領に選ばれたナツァギーン・バガバンディの発言にもこのような目的があったことは否定できません。「私は重大なこの殺人事件を自らの特別管理のもとに置く」という内容で彼が繰り返した発言を、今日、モンゴル国民は忘れていません。バガバンディ大統領のS.バヤル大統領府長官はモンゴルの独立系新聞のあるインタビューで、モンゴルの民主化運動指導者サンジャースレンギーン・ゾリグが1998年10月2日に行ったすべての活動、面会したすべての人を朝から分刻みでつかんでいたことを話しました。これはどういうことでしょうか？偶然命を落としたということでしょうか？わかりません！この2つの事件の原因がいつ解明され、犯人をいつ、どうやって処罰するかをモンゴル国民は今日、待ち続けています。

## 14 私生活

KY：このへんでご家族についてうかがいましょうか？

LO：妻はジャムパリーン・ボヤンジャルガルと言います。妻の父親は「厄介なジャムバル」と呼ばれ、地元では有名な人でした。母親はナムダグと言いました。2人は80歳をかなり過ぎるまで長生きしました。妻は母親が50歳の時の子です。姉が2人、兄

が2人います。わがゴビアルタイ県のナラン郡の出身です。私たちは1955年に初めて知り合いました。私は当時ゴビアルタイ県人民革命党委員会の第1書記に任命され、活動していました。1度、春に家畜の出産状況を視察しにナラン郡へ行きました。その日は吹雪で、とても寒い日でした。それで少し暖をとるつもりで、ある家庭を訪問しました。その家に1人うら若い女性がいます。母親がいます。父親は不在で、家畜の世話に外へでかけていたようです。ほかに人はいませんでした。その女性は私に濃い乳茶をいれてくれます。私はそのお茶を飲み、母親と世間話をしてずいぶん過ごしました。そうしていると父親が帰ってきました。私たちはナラン郡の家畜の出産状況や地域のことを話題にしました。そうしているうちに吹雪も止みました。私はおいとますることになりました。そしてそれ以来、その家の女性に心を惹かれ、気に入って、その家を何度も何度も訪れるようになりました。彼女の両親とも懇意になりました。こうしているうちに、その女性と結婚して家族になることを決めました。

当時、私は父から「嫁をもらわなくてはならん！」とさかんに迫られていましてね。私は30歳を過ぎていました。それである日、知り合った女性のことを父に話しました。父は「お前たちには年の差がある。が、それは構わない。ただ、その女性はどんな家系かね？」と尋ねます。それで私は親しくなった女性の両親の家系を訊いてみました。父親はタイジの出でした。私の地元には「ボディ・タイジ家」という一族がいたのです。その一族とつながりがあったようです。それで父は「結婚してよろしい」と許可してくれました。こうして私たちはゴビアルタイ県の中心地であるアルタイ市で結婚しました。その時は県の党委員会主催で式を挙げました。こうして私たちは正式に婚姻登録をしました。1956年から49年が経ちました。私の家族は子どもが4人です。2人は養子です。

私たちが式を挙げたその年、妻の実の兄のところに男の子が1人生まれました。その子が生まれてまもなく、仕事の都合で私たちはウランバートルへ行って生活することになりました。私たちには子どもがいませんでした。それで、妻の兄のところに生まれたその男の子を連れて行くことになりました。「ウランバートルに行けば誰も知らない、子どもを連れて行こう！」と話したのです。その子が5歳になるまで、私たちには子どもができませんでした。それで私のもとで働いていた私の親類ダシゼベグという人の家からもう1人、女の子を養子にもらいました。こうしてわが家には息子と娘ができました。

そのうち、妻が35歳の時に男の子が生まれ、40歳で女の子が生まれました。それでわが家は子どもが4人になったのです。この4人の子どもはそれぞれ、多くて5人、少なくても2人の子どもをもったので、13人の孫ができました。

妻は故郷で小学校3年生まで終えました。ウランバートルに来て夜学に通い、8年生を修了しました。そして1年間、薬剤師講座で学び、薬剤師になりました。そして



その先大学に入って勉強することを望みましたが、他の事情で時間的な都合がつきませんでした。薬剤師になってウランバートルの第2病院に勤めました。そこでは薬剤師の仕事と、「生化学研究所」での仕事をしました。妻は一時期体調を崩しました。肺を患ったのです。それで北京で手術を受けました。薬剤師は一生涯続けました。今は年金生活です。一時期この仕事は中断しました。私が党中央委員会第6回総会で批判をし、党を除名され、地方へ追放されてそこで暮らすことになったために、妻の仕事が一時期中断されたのです。

## 15 未開地開墾事業

I L：初めてトラクターで土地を耕し、式典を行い、未開地開墾事業が始まった場所はどこにあるのですか？

L O：未開地開墾事業を担当していた国営農場管理局の局長を私は6年務めたと話しましたね。1957、1958、1959年に開催された党中央委員会総会では農業問題について話し合われました。国家計画委員会のツェンド委員長と私が総会の準備作業をしました。モンゴルは古来、アルタイ山脈のこちら側で小規模な農耕をしていました。20世紀初め、ハラー川とユルー川の流域で農耕を行うようになりました。このころからモンゴルでの中国人の農耕がとて増えました。これは国の経済に何の影響もない、個人の生活の足しになる程度のごく小規模な農耕でした。わが国は未開地開拓によって穀物生産を急激に増やし、自国の穀物需要を完全に自給するという目標を立てました。この全事業はわが国にはかつてなかった新しい事業ですよ。

最初の年は芳しい収穫は得られませんでした。2年目からは豊作になりました。そしてまもなく国産の小麦粉が販売されるようになりました。こうして、わが国は初めて小麦粉の国産を開始したのです。これは何百年もモンゴルに存在しなかった、まったく新しい事業ですよ。この時にはソ連から300人余りの専門家が派遣されていました。農業機器の専門家、農業技術者、土壌の専門家、灌漑専門家、家畜の品種改良の畜産専門家がみな、各国営農場で働いていました。こういった仕事はすべて国営農場管理局で集中管理していました。当時、私たちにとって最も困難だったのは、あらゆる種類の農業機械の供給、交換部品、整備、燃料の問題でした。農業機械の専門家は少数でした。国営農場では農業機械の車庫や整備場を大急ぎで建てました。整備の専門家は、ソビエトの専門家について習わせました。作業の過程で生まれてきたあらゆる問題を私たちは一刻を争い、速やかに解決してやっていました。私たちがそのような原則にもとづいて活動していたので、作業は熱心に速やかに前進していました。ソビエトから来た専門家たちに国営農場は自前で住宅を提供しました。報酬も自前で負担しました。働き振りが良ければ報酬を全額受け取り、働き振りが悪ければ報酬は減額されます。そのような報酬

システムがソ連からの専門家たちにも適用されました。

私たちは最初の開墾を、森林ステップ地帯の肥沃な黒土のあるオルホン・セレンゲ合流地点から始めました。西部諸県、ゴビ諸県、東部諸県では最初の年、開墾はそれほど行われませんでした。そういった地域は農耕ができるような、肥沃な黒土のある面積が小さかったのです。ヘンティー、ドルノド各県でも同様に、黒土のある土地は面積が小さかったのです。ソ連のチタ州と国境を接するエレーンツァブ国营農場にならいくらかあります。そこからこっち、ヘルレン国营農場、バヤンオール国营農場でも若干開墾をしました。フブスグル県のタリアラン国营農場、アルハンガイ県のトゥブシルーレフ国营農場、ウブルハンガイ県のハルホリン国营農場の各地では、大規模な未開墾地を耕しました。セレンゲ県のゼルテル、ツァガーンノール、ツァガートルゴイ、アルタンボラグ、ユルーそしてダルハンの各国営農場、トゥブ県のジャルガラント国营農場では大規模な開墾を行いました。

1 番初めに新しい土地の犁入れの式典をしたのは、ダルハン国营農場のツァイダム平原という場所でした。最初の犁を入れたのはそこです。この式典にはツェデンバル、サムボー、ジャグワラルなど党中央委員会政治局員が参加しに来ていました。

人民大会議幹部会議長のJ.サムボー氏と私はそれ以来何度も国营農場を共に訪問し、現地の状況を視察しました。私は地方の国营農場を訪れ、議長に国营農場の事業を説明し、勤労者たちとの会合での発言を準備してあげていました。

彼と一緒にこのように地方へ行くとき起こったあるできごとを話してあげましょう。どれほど長いあいだモンゴルの代表として外国で暮らしたとはいえ、わが議長J.サムボー氏は概してモンゴルの習慣を大切にする人でした。すべてをモンゴル流で行いました。食事はモンゴル風でした。タバコだけは輸入品だったようです。彼はソ連製の「カズベク」を吸っていました。モンゴルではその箱の絵から「黒馬」と呼んでいるものです。当時、モンゴルでは家畜からの利益を増大させるために品種改良を進めていました。そしてアオールザナを長とする畜産学者たちが、モンゴル羊と外国産の羊をかわせて細毛の「オルホン」という品種を作り出しました。これは細い毛を目的とした品種でした。肉用種ではありません。これはわが国の研究者や技術者たちが勢力を注いだ結果生まれた絶大な成果でした。一大事でした。私たちは自力でモンゴルの風土に適した、毛用の品種を作ることに成功したのですよ。そこでこの事業を記念することとなり、そこにJ.サムボー氏を招待しました。彼は招待を受けて来ることになりました。そこで私たちは特別なゲルを建てて迎える準備をしました。招いた学者たちはすべて到着していました。また農業大学の教師や大学院生たちも全員来ていました。「オルホン」羊から一匹をほふり、その肉を煮ました。議長は到着しました。私たちは彼を例の特別なゲルに招き入れました。彼は全員と挨拶を交わし、席に着きました。そして羊の肉を切って食べました。2口食べてやめてしまいました。「犬の尾の肉なのか？」と言って

向こう側へ押ししてしまいました。私は内心真っ暗になりました。モンゴルでは外国産との混血羊を「犬の尾」と言うのです。雑種の羊の尾は犬の尾のように長くたれているのでそのように名づけたのかもしれません。モンゴルの羊ならその尾はお皿のように大きくまるいことをもちろんあなたがたはご存じでしょう。モンゴルでは赤ん坊に羊の尾を与えてしゃぶらせます。羊の尾は、幼児の健康にとってもよく、タンパク質を多く含む、栄養食なのです。幼いころに羊の尾をしゃぶっていた人は体格がよく、健康で、賢くなるものですよ。概して羊の尾をしゃぶらずに育ったモンゴル人はいないでしょう。子どもにしゃぶらせる尾がなく、肉がまずいので、私たちモンゴル人は混血の羊が嫌いです。本当に混血種は肉のうまみという点でモンゴルの在来種にかないませんよ。そもそもあらゆる家畜のなかでモンゴル人は羊を一番おいしいと思っています。「羊の肉のようにおいしい!」と言って、どんな風味も羊肉と比較します。しかし、議長のその言葉は私の心をひどくがっかりさせました。なんとも思慮の浅い言葉でした。私たちは長年努力してきた仕事をようやく完成させ、みな大喜びだったのですよ。私1人だけではなく、そこにいたすべての人びとがおのおの感じるがあったことなのでしょう。みなうなだれて、まったく意気消沈して立っているのを私は見つめました。議長はモンゴル羊の肉だけしか食べてないことを知らなかったのかと言われれば知っていました。しかし、これはそもそも羊肉の味の問題ではないのですよ。私は数日間とても意気消沈していましたよ。そんなことがあったのです。

議長本人はチェスを指すのがとても好きな人でした。ウランバートルでは休日に私はたいてい自宅に呼ばれ、2人してチェスを指したものです。奥様のニャマーさんがモンゴル乳茶を入れてくれ、私たちは日がな1日チェスを指して過ごしました。ニャマーさんはとても普通で飾り気のない素敵なお人でした。私が「党からの措置を受け」、ウブスハンガイ県のサント郡で内務省の厳しい監視のもとで羊を放牧していた当時、ニャマーさんが私にデール（民族衣装）を作るための浮き出し模様の入ったビロード生地を贈ってくれたことを私は忘れません。

わが国で未開地開墾が始まった当初、「農耕とは何か?どんな特徴を持った事業か?」という点について、専門家が政治局員向けに特別授業を行いました。モンゴル人専門家がこの授業を教えていました。しかし、当時農学を専門とするモンゴル人はわずかで、ほとんどいませんでした。ソ連から来たある学者が主な授業を教えていました。私自身もその授業を聴講しましたよ。自然の温度、地表の高低、土壌の良し悪しなどは農耕にどのような役割を果たすのか、など初歩的な知識を教えていました。わが国の土壌は一切農耕を行ってこなかったもので、地味に富む良質の土壌です。

当時の気候は今とはかなり違っていました。春と初夏には雨が豊かでした。洪水と雨の季節はナーダム後に来ました。ハンガイ地帯では雨が多く降ります。秋、9月には稔ります。すべて機械で収穫します。当時、ソ連からSKA-3やSKA-4というコ

ンバインが入って来ていました。そのころソ連はすべての農業機械を刷新したので、新型で強力かつ十分な性能がありました。わが国では農業機械が不足するということはありませんでした。交換部品の不足は多く見られましたが、私たちはこの問題をその時々々に早急な解決ができていました。

1959年に農牧業大学の農学科が卒業生を送り出しました。卒業をかなり早めたのです。卒業生はそのまま開墾地の国営農場へ行って働きました。ソ連のティミリャーゼフ農業アカデミーを卒業した人たちはわが国には数少なかったのです。専門家はまったく足りませんでした。1つの国営農場には7、8人の農業技術者がいるべきでした。すべてではないとはいえ大半のところに専門家を配置しました。農場長の点では若干困難がありました。専門家が少なかったので、組織能力があり、一般常識を広く持ち、大衆と社会的につきあえる人を農場長に任命しました。以前に指導的な活動に携わったことのある経験者を任命したのです。ほかに方法はありませんでした。ソビエトの専門家は作付けと収穫の作業を手助けしました。

農耕の全作業を技術的手順に従って行いました。作付けや収穫などの技術的なきまりごとはきっちり守りました。休耕や輪作という技術的なきまりごとがありました。たとえば小麦は1つの土壌で2～3年続けて植えることができます。その先は土地がやせるので1年おかななくてはなりません。小麦を育てたあとは、飼料のエンバクやら他のものに替えて植えなければなりません。このように植えることによって土壌の質が劣化せず、収穫高が落ちないのです。このようなきまりごとを厳しく守っていました。私たちは化学肥料の大量使用はしませんでした。ただ畑の雑草をなくす目的では使いました。1ヘクタールにつき1トンの収穫がありました。土壌の質が良い場所では収穫高は2～2.5トンに達しました。全国平均では1ヘクタールにつき0.8～1.2トンの収穫でした。

「未開地開墾によってモンゴル農牧業に革命が起きた」と言われました。未開地の開墾によってわが国は小麦粉を完全自給したばかりでなく、伝統的生活様式にも大きな変化が起こりました。農耕部門で働く人びとが定住や半定住の生活に移行し始めたのです。農耕に従って、かつてモンゴルにはまったく存在しなかった新しい経営が生まれました。農牧業部門に人びとが集まり、中心部や定住地が生まれました。文化・教育の発展の可能性が開かれたのです。国営農場の中心地は文化の一大中心地になりました。学校、幼稚園・保育園、病院、通信局、文化会館といった施設が国営農場の中心地にできました。これは巨大な進歩でした。何百人もの人が農牧業の専門を身につけました。農牧業の労働英雄や優良勤労者が数多く誕生しました。農耕はモンゴルの農牧業における独立した1部門となり、他の部門に強い影響を与えました。こういった事業を指導していた者として私は「労働功労赤旗勲章」を受章しました。

後年、モンゴルで民主化と刷新が始まって以降、1999年に未開地開墾40周年を記念して、農牧業省の提唱により、私に「モンゴル国労働英雄」の称号を与えるという提案

がされました。当時私たちの行った事業は人民の目にはっきりとした、有益性のある事業でしたから、その称号をもらいたいという気持ちは私にはありません。いずれにせよ人民はわかっているし、見ていますよ。業をなした人にこそ与えられるものならばその称号は私のところに来るでしょう。しかし、この称号の授与にはイデオロギーが強力な役割を果たしています。今でもそうです。バガバンディ大統領もそのような決定を下しませんでした。

国営農場管理局は一時期、農牧業省と合併され、私は農牧業省の第1副大臣になりました。ニャミン・ジャグワラル農牧業相は私を大いに支持してくれました。鹿飼育場や養魚場、ガチョウ・アヒル飼育場の設立を彼は大いに支持してくれました。私たちは設備をソ連から買い入れ、養鶏場を設立しました。この養鶏場の建設許可を政治局から取りつけるとき、ちょっとした笑い話になりました。この案件を協議する会議はY.ツェデンバルが自分で議長をしていました。彼はこの案件をいつもどおり流してしまう可能性があったので、私はその会議にセルゲイ・イワノビッチ・エリザロフ氏を連れてゆきました。ツェデンバル議長がこの案件を説明しました。そして

「わが国の人口は現在ようやく100万人になったばかりである。このローホーズが建設しようと言っている養鶏場は100万個以上の卵を生産するものである。そんなに多くの卵を誰が買うのか？これは少々大きすぎる。こんな無計画なものはだめだ！これはどういうことか？」と言いました。すると、会議に同席していた政治局員たちは「本当にそうですよ！あまりに多すぎるではありませんか？」と口々に言い、ツェデンバルの発言を支持するのです。「これで私たちの計画も失敗する！」と思うと私は意気消沈してしまいました。そして、私の横に座っていたS.I.エリザロフ氏に「立て！」と肘をつきました。彼は立つと鶏卵をそのままゆでる以外の使い道についていろいろ説明しました。すると、Y.ツェデンバルは彼の言葉を聴いているではありませんか。そもそも彼はソ連の専門家の言葉には耳を傾ける人だったのですよ。それでかなり状況が良くなってきました。許可が出そうな雰囲気になってきました。そこで私は加えて

「議長！わが国の横綱デムールは1回に100個のボーズを食べることができますよ！彼ほど食べる相撲取りは少なくありません。100個の卵は彼らにとってなんてことありません！」と言ったのです。私の発言を聞いて他の政治局員たちは笑いました。こうして会議は盛り上がり、私たちの案件は裁定されたのです。モンゴルでは今でもこの養鶏場だけは運営されています。

カラクル羊飼育場という大きな飼育場を私たちは設立しました。1～2万頭のカラクル羊を飼養していました。そこではカラクル毛皮〔生後2～3日のカラクル種の子羊から採られる黒色のちぢれた毛皮〕を生産し、外国に輸出しました。このカラクル羊はとてもすばらしい毛皮の家畜ですよ。このような毛皮で軍の士官の冬用帽子を作ります。ソ連軍の將軍や士官はカラクル毛皮で作った立派な服を着るのです。とても上等な

毛皮です。それでわが国の軍の士官もやはり国産のカラクル毛皮で作った服を着るようになりました。黒やグレーの上等な毛皮を作っていました。私たちは黒テンの毛皮や兔の毛皮までもソ連に輸出するようになりました。国内需要は完全に満たしました。

当時、私はソ連から来た専門家とよく仕事をしました。当時のソ連の新聞類を私は非常に興味を持って読んでいました。それに自分もソ連に行き、シベリアの経営施設をよく視察しました。シベリアは気候条件の点で、よりわが国と近いのです。冬は比較的寒くなりますがね。私たちはシベリアの経営経験を自分たちの事業に導入することをよく考えていました。

しかし、ただソ連の経験だけを学んでいたわけではありません。概して当時は社会主義国と広く交流がありました。1度、ブルガリア農業大臣が私をブルガリアで保養するよう招いてくれたことがあります。私は黒海沿岸で休養しました。私を招待したブルガリア農業大臣はイワン・プリモフと言います。彼は私に車を1台提供してくれました。おかげで私はこの休養中にブルガリアの農業についていくらか知ることができました。私は日の昇る方向から日の沈む方向までブルガリアの全地域を行きました。ブルガリアの全面積はわがゴビアルタイ県ほどなのです。ブルガリアは農業の発展した国です。帰国前にイワン・プリモフ氏と会いました。彼は

「何かお望みがありますか？」と尋ねるので

「私たちは貴国の経験に基づいてモンゴルに養豚を発展させたいという興味もっています」と答えました。

「けっこうですね！私たちの側にはまったく問題ありません！あなたは帰国後、どのような養豚場を建設しようとしているのか私たちに計画を送ってください！」と言いました。こうして私はウランバートルに戻ってからこの案件を省内の専門家たちと話し合いました。養豚場建設にとって最大の問題は餌でした。そこでウランバートルの製粉コンビナートのそばに養豚場を建設することになりました。私たちの計画はブルガリアに届きました。私たちの専門家が外向いて1,000頭の豚を導入することが決まりました。そして豚が来ました。穀類工場の近辺に養豚場を建設したことはまさに正しかったでしょう。わが豚たちは増殖しました。概して豚は容易に増える動物ですよ。まもなくわが国は1万頭の豚を擁するようになりました。この仕事はこうして大いに成果を収めたのです。

私は、この間、中国にも何度も訪問しました。中国の農耕部門にとっても独特な方法や経験があるのを見ました。ソ連では大きな河川の水を畑の灌漑によく利用します。その際、必ず水路を掘り、運河を作って水を流し、灌漑をするのでした。中国ではこれとは違う方法が使われているのを見ました。中国では揚子江や黄河の水を麻に浸み込ませ、大量に引いてくるのを見ました。たいへんよくできた方法を考え出したものです。われわれモンゴル人は「ロシア人には知性があり、アジア人には工夫がある」と言いますよ。

それに便所の汚物を発酵させ、「気体燃料（ガス）」を取り出しているのも見ました。私が訪れた南部の広州の各家庭でこのような気体燃料を使っているところを見ました。このような気体燃料は私にはとても興味深く思われました。そしてこのテクノロジーをモンゴルに導入したいという願望が生まれました。モンゴルに帰国する前、北京で全中国燃料エネルギー省〔人民政府政務院の燃料工業部のことか〕に行きました。そしてこの装置の図面をくださいと要望しました。そこでは私の要望をすぐに受け入れ、ファイルにはさんだ数多くの図面をくれました。私はモンゴルに帰国し、それを漢語から翻訳する作業を始めさせました。そしてモンゴルにおけるこの方面の全専門家を集めました。翻訳した図面を見せ、この装置の作り方についての意見を聞きました。多くの人が多くの意見を述べました。彼らから出された意見をもとにして、アムガラン国営農場に作ることに決めました。それから作業チームを任命し、直ちに設置作業に入りました。装置もまもなくできました。それを作動させました。家々で気体燃料を使い出しました。夏の暑い季節だったので、私たちの作った装置はうまく動いていました。そして夏が終わりました。暑さの勢いも衰えてきました。装置の働きに困難が生じ始めました。気温が零下になる環境ではこの装置が作動できないのです。それで10月末に、私たちはこの装置をしかたなく停止しました。今も国営農場管理局の文書館にはこの資料があるはずですよ。

## 16 私たちの正義

LO：私の在任中、全国規模で貯蔵状態の悪さが原因となって大量の収穫物が傷み、利用できなくなるという事態は起こしませんでした。一部の国営農場では収穫期間の設定を誤ったために収穫物の損失を招き、種の不足を招くということがありました。しかし、国営農場の一部が収穫物の損失を出すと、別のところがそれを補って来ていたのです。わが国の特徴の1つは、領土が非常に広大なので地方ごとの夏が異なったものになるということです。たとえば、西部の県では雨が少ない一方、東部の県では雨が豊富で、南部の県では日照りになる一方、北部の県では雨のよく降る好都合な夏になるという具合です。収穫物の損失を出した地方の損失分を、豊作地域が補うのです。

50年代末、党の指導部にはツェンドやトゥムルオチルといった優れた指導者がいました。彼らの力でこの新しい事業を成功させることができました。彼らのことを私たちは強く支持していたのです。

ところが、トゥムルオチルを手始めに、次にはツェンドが「反党活動を行った」と中傷され、解任され、遠方へ流されました。この時から党中央委員会とその政治局には新しい考えを持った人物が急激に少なくなりました。コネに頼り、こびへつらい、ゴマをする、そんな連中の数が増えました。このことは数多くの人びとに反感を抱かせ始めま

した。私の事業は支持されなくなりました。国营農場事業で私は相当な新しいアイデアを出して実行していました。とりわけ「高収益の得られるさまざまな新部門を立ち上げるべきだ」と考えていました。ツェデンバルの目の前に入って事業の障害になるご機嫌とりのへつらい屋が多くなったことが、われわれの仕事への熱意を低下させました。

こうして私は1962年の秋、収穫作業を終えると、ツェデンバル書記長のところへ行きました。私は辞職を決め、彼にそのことを話しに行ったのです。このころ農耕は基本的に軌道に乗っていました。新しくすべきことはまったくなくなった時期でした。私はそのことを何度も何度も党中央委員会総会で批判していました。彼は私に冷淡になり、私たちのあいだにはお互いに対する不信感が生まれていました。私の辞職願に対して彼がどんな態度をとるか、私にはわかっていました。私を自分から遠ざける理由を探していることを私は知っていました。ですから私の言ったことを彼が直ちに認めるだろうと私は考えていました。

彼は、「それで君は学校へ行くのかね？」と尋ねました。私はそのような質問が出てくるだろうと思っていたので「そうです！」と答えました。ツェデンバルはその先一緒に活動することのない人間を学校へ行かせたり、地方に異動させたり、遠方で大使に任命したりというように、自分からできるだけ遠ざけるのが常でした。私はもともと「社会科学アカデミーに留学したい」と内心思っていました。「ゴビアルタイ県の党委員会で2年、国营農場管理局で6年、合わせて8年経営の仕事をした。今度は社会科学で多少なりとも充電する時だ」と考えていました。

すると、彼はすぐに「君は国营農場の仕事は何年もした！よってそれをさらに磨く必要がある！ティミリヤーゼフ農業アカデミーに行き研究をする必要がある！」と言ったのです。こうして私は研究活動をするようになりました。彼のこのような決定には、やはり私を社会科学の仕事から遠ざける目的が含まれていました。こうして私はティミリヤーゼフ農業アカデミーへ行き、経営学の研究を始めました。私の研究をセルゲイ・ラズという教授が指導したとお話しましたよね。その時はドイツ語やフランス語からの翻訳書を読んで利用しました。

ティミリヤーゼフ農業アカデミーにはとても大きな図書館がありました。私はいつもそこにいました。農業の組織や国民経済の指導法に関する本を読んだものです。それまで経営事業を何年も指導してきたので、この研究は私には難しくありませんでした。国营農場の例に基づいて、モンゴル農牧業の収益増大と商品生産の成長を進める方法に関するテーマで学位論文に取り掛かりました。私は研究論文を1年余のうちに仕上げてしまいました。そして学位の取得がすまないうちに、党中央委員会第6回総会が開かれたのです。

この会議でツェデンバルを批判したことにより「党からの措置を受け」たため、研究論文の審査を受けて学位を取得できなくなりました。当時、モスクワ留学生の中には党



中央委員会指導部を批判し、彼らの手法を軽蔑する雰囲気が大いにありました。党の指導部は本当にとっても遅れていました。新しい発案をせず、新しいことをしたいと考えている精力的な青年を支持せず、見下し、「くだらないおしゃべりをしている」などと冷遇するようになっていました。わが国の発展は本当に遅々としたものになりました。国家の将来は極めて漠然としていました。あらゆる事業が流れまかせで、未来に向けてのいかなる計画もなく、やっとのことで日々を過ごすという状態になっていました。人民の生活は貧しいものでした。私たちは国家の状況について常々話し合っていました。指導部の手法は社会経済的要請から遅れていました。

当時、ニャムポーは共産党大学に留学中でした。私たち2人は毎週会いました。当時モスクワ留学生の中で人民革命党の中央委員は私たちしかいませんでした。チェスをよく指しました。チェスを指しながら国で起きているできごとや国家の発展についても話していました。私たちは「われわれの事業が芳しくない最大の責任はツェデンバルにある。上の人間の手法は下の人たちの悪い手本になっている。この状況を正さなければならない。われわれの仕事はツェデンバルの活動の改善から始める必要がある!」と話したものです。「泉の湧き水がきれいなら流れる水もきれいだ」ということわざがあります。総会が始まる前に私は試験を受け終わっていました。ウランバートルへ行く前にティミリャーゼフ農業アカデミーの学長を訪ね、モンゴル人民革命党中央委員会総会に出席するため帰国する旨を話し、許可をもらいました。ウランバートルに来て総会での発言を準備しました。私は発言に、経済成長の上昇と下降を示す銀行・金融データを利用しました。こういったものはすべてそれに携わる知人から提供してもらいました。モスクワの大学院に留学していたジャムバーやトグトホといった優秀な経済学者たちと知り合いだったのです。彼らは手を貸してくれました。彼らから経済の数値資料を提供してもらいました。

総会開催前、党中央委員会政治局会議では私たちについて話し合われたようです。「党中央委員Ts. ローホーズとB.ニャムポーが批判の準備をしている。これにどう対処するか?」ということをお話したのです。一部の政治局員は「この2人に発言させない」という案を述べました。「党中央委員会総会構成員は党中央委員会総会で発言する権利があるのだからこの権利を制限してはならない」と一部は拒否しました。そして「発言を認めよう。しかし、その代わりに彼ら自身を批判しよう」ということで一致したようです。トゥムルオチルとツェンドの解任の際の、本人たちには知らせずにおいて、突然何人もの人があちこちから批判し、脅し、解任した経験を用いることに決めたのです。

こうして総会は特別な根回しがされました。私たち2人が「批判」をしようとしているという話は各地方から来た党総会構成員のあいだに広まっていました。多くの人が私たちを支持してくれました。社会全体がこの総会のなりゆきを待ち構えていました。人

びとはラジオを聴き、新聞報道を待ちきれないでいました。ツェデンバルとその取り巻きは会議の空気を自分たちに有利なものにするためにあらゆる手を使っていました。私たちの支持者に恐怖心を抱かせることに成功したのです。彼らはものを言うことのできないどうしようもない状況に置かれました。ツェデンバルの支持者の中にも内心では私たちを支持する人がいました。しかし、私たちに同調する発言はできませんでした。私たちはこういったことに對抗しきれませんでした。そして会議は終わりました。

私たちの「人民革命党員証」を没収し、党中央委員会の総会構成員から追放しました。「党員証」が没収される時、私は最後の言葉を述べました。「わがモンゴル人民革命党は、創設者たちの考えから後退した。わが党はいずれ刷新されるだろう。スフバートルとチョイバルサンの創設した党らしくなった時、私は党員証を取り戻すだろう。今は党文書館の金庫に保管させておこう！」と言ってやりました。

それ以来、私の「反逆者ローホーズ」としての生活が始まりました。1920～1930年代、党の指導部が実施した政策を批判したり意見が異なったりする人びとは「階級の敵」とか「反革命」と呼ばれ、逮捕され、処刑によって消されました。私はそれよりも危険な分子で、今度は何と言いましょ、う、「反逆者以上の反逆者」とでも言いますか、そんなふうには呼ばれたのです。世間にそのような認識を抱かせるためにあらゆる機会が使われだしました。私がこの名前から解放されたのは25年後です。

I L : ローホーズ、ニャムボー、ソルマージャブ各氏の反党分派活動についてあげられた党中央委員会第6回総会の決議には「……モンゴル人民革命党中央委員会の今総会で、上述の反党分子は、党の基本方針に反対を唱えだした。……わが党が社会主義の勝利のために人民を指導する能力のないブチブル政党となったかのような根拠のないことを述べた」と記されています。この評価について解説していただけますか。

L O : 当時、人民革命党は本当に指導力を失っていたと思います。理論的思考がなく、加えて人民の期待する経営活動の舵取りを正しく行えていなかったことがそれをはっきりと証明しています。新しい思考と健全な考えを持った党員に依拠せず、へつらい屋に頼れば党はどんな状況に陥るでしょうか。それは党が指導力を失ったことを示しています。それは党が目標から後退していることのあらわれですよ。このような明らかな証拠があったので私たちは勇気を持ってこの発言をしたのです。

総会で私は党の基本方針を名指しで批判したわけではありません。しかし、私の発言には、党の基本方針の思想と相容れない文言が多く含まれていたかもしれません。党の基本方針を実施してきた40年間に、人民の前衛は何をしたか、どんなことが起きたか、という疑問が当然生まれて来るでしょう。一方、不幸や苦労は数え切れないほどあったと言えるでしょう。このような状況においてディクタトゥーラの再強化という話があるいいものでしょうか？ ツェデンバルは「ディクタトゥーラが甘くなったためにわれわれの事業がうまくいっていないのだ」と言いました。ディクタトゥーラの強化は絶対に

してはなりません。しかし、このような発言をしたために、この世のあらゆる失敗を集めて、すべてが私のせいにされ、追放され、すでに適用しなくなった古い法律に従って処罰されることになり、投獄され、生涯冷遇されることになったのですよ。

I L：総会で面と向かってツェデンバル氏を批判した人は何人いたのですか？お2人以外に批判を述べた人はいましたか？

L O：総会で面と向かってツェデンバルに対する批判を述べたのはニャムポーと私だけでした。ほかに真っ向から彼に対する批判を述べた人はいませんでした。総会決議は「ローホーズ、ニャムポー、ソルマージャブらによる反党分派活動について」という表題であげられました。党の規則によれば総会の決議案は総会構成員による討議ののち多数決で承認されるはずですが、しかし、その総会では総会構成員は私たちに関するどんな決議案の討議も採決も行わず、どんな決議の承認もしませんでした。

ところが、数日後「総会構成員が全員一致で承認した！」という言葉とともに決議が新聞に掲載されました。人民革命党の規則によれば、これは有効な決議ではありませんよ。この決議では「分派」という語を選択していました。本当に反党分派はあったのか、それともなかったのか、という疑問があります。そんな「分派」はありませんでした。私たちは分派を作る組織活動はしていませんよ。批判を述べた私たちに対する「反党分派活動」という規定は私たちを非常に強力な分派に見せるために行われたものです。つまり「国家にとって非常に危険で強力な分派が活動していたが、その分派の有害な活動を摘発し、活動をやめさせた」という認識を抱かせるという目的を含んでいたのです。

危険で強力な分派を摘発し、国家を救った人びとは、それ自体強力なとても良い人たちでしょう？本来は2人で行った行動のことは「分派」とか「グループ」とは呼ばないものです。「グループ」は3人以上の人間で作られるものです。国際的に定まったそういう基準があるでしょう。こうして「非常に危険で強力な分派を摘発し、制圧した！」と見せようとしても私たちはたった2人です。それでこの決議の計画者たちは困った状況に陥ったのでしょうか。それでこの状況からの出口を探したのでしょう。そして私たち2人にソルマージャブを加えて3人にしたのです。3人の行動なら「分派、グループ」と規定することができます。ニャムポーはソルマージャブの細君の母方のおじです。そんなわけで彼を「見解を一にする」として私たち2人と同じグループに入れるのは簡単でした。

ソルマージャブを中傷するためのもう1つの理由をツェデンバルは見つけました。ツェデンバルはソ連で政府の改変があると真っ先に訪問して新しい指導部と会っていました。これは慣行になっていました。当時「クレムリンの陰謀」によってフルシチョフがソ連共産党中央委員会書記長・閣僚会議議長を解任され、保守派のL.I. プレジネフが書記長に選出されました。ツェデンバルはレジネフに会いに行きました。帰国後、わが国の政府の成員にこの会談について話しました。ツェデンバルとの会談でレジネフ

は、「……ソ連は今後工業を大きく発展させる。われわれはモンゴルに必要なあらゆる工業製品を供給するようになる。したがってモンゴルは自ら工業や中小工業を発展させる必要はない。むしろ牧畜の発展が必要だ。われわれはあなたがたの家畜を、従来どおり外国貿易を通じて買い入れる」という趣旨の話をしたのでした。その後、ブレジネフのこのような政策に合わせてツェデンバルの側から党の政策に変更を加えたのです。当時、党中央委員会の工業課長はソルマージャブでした。ツェデンバルはここからソルマージャブの活動に対する支援を一切やめました。ソルマージャブは、収益が良く低コストという、モンゴルの条件に合った中小工業の発展に関してかなり創意を持って取り組んでいた人物です。とくに畜産物加工の方面によく取り組んでいました。ツェデンバルはまもなく彼を党中央委員会の工業課長から解任しました。その後、国家統計局長に任命しました。ソルマージャブは1964年の第6回総会で発言しました。彼の発言は「党書記長と閣僚会議議長の役職をツェデンバルが1人で兼任するのは誤りだ。この2つの役職はそれぞれ別の人間が務めるべきだ。このような2つの責任重大な役職を1人の人間が兼務したことによって事業に大きな差し障りが生じている」という趣旨の批判でした。ツェデンバルはこれがとても気に入らなかったのです。そうして彼を私たちと同じ「グループ」にすることに決めたのでしょう。ニャムボーと私は何の「分派」でも「グループ」でもなく、外国で学ぶただの「留学生」だったのです。これはできの悪い「捏造」でしたよ。

**K Y**：1920～1930年代には党の政策や決定の実施を拒否したり、批判したりした人は直ちに逮捕され、処刑されましたね。ご自身にもそのような事態がふりかかる恐れはありましたか？ そのように勇気を持って、わざわざ弾圧を受けるようなことをしなくてはならない理由は何ですか？

**L O**：1930年代は党の政策や決定に反対したり、批判したり、何らかの形で意見が異なるといった場合には逮捕は免れませんでした。処刑さえ免れることはできなかったのですよ！ 私たちが批判を述べた時には、いくらか違う時代が始まっていたのです。党大会で「個人崇拜」の害悪が厳しく批判され、政治的冤罪で処刑された人びとの名誉回復が始まっていました。「捕まる」という認識は遠く感じられていました。とは言っても、私たちにそういうことが起きるかもしれないという警戒心はあったのですよ。私たちの逮捕という問題は内務省で話題になっていたようです。しかし、当時の司法機関の一部指導者は「この人たちを逮捕するための法的規定はない」と拒否したようです。私たちは、その時わが国で実施されていたどんな法律にも違反していなかったのですよ。党中央委員会総会構成員が党の総会の発言で批判を述べることの規則上の規定はあります。これは黨員規則で認められた問題です。

しかし、私たち2人が「批判」を述べたなら、政府の責任ある役職に任命されないとか、「党の規律に違反した」などの説明によって降格され、別の職務に任命されるだろ

うと予想はしていました。「人民革命党および国家にとって危険な、ツェデンバルの欠陥と政策の誤りについて党の同僚に言わなくてはならない。必ず指摘して正すべきだ。こうして批判をしたためにわれわれは党から追われるだろう。追われてもかまうものか。このような重大な欠陥を指摘し、批判したことでナライハ炭鉱へ行って働くことになってもいいさ！」と私たち2人は語り合っていました。年齢は41～42歳になっていました。若くもあり、熱くもありました。当時は「党からの措置を受け」た人間をナライハ炭鉱の炭鉱夫に降格していたものです。「われわれもそういう処分を受けるだろう」と思っていました。しかし、思っていたのとはまるで異なる処分になりました。私たちは地方へ流されることになったのです。なぜ流されることになったのかについては、何の説明もありませんでした。その追放は無期限で、生涯冷遇される、そんな追放になりました。

## 17 反逆者として

I L：総会后、あなたがたの問題は党中央委員会の統制委員会が決定したのですか？

L O：そうです。党中央委員会の統制委員長は当時S.ロブサンラブダンでした。この人は私たちから何らかの「犯罪」の痕跡を見つけようとたいそうがんばりましたよ。「どんな活動を計画していたのか、どこで誰といつ会い、何を話していたのか！」「党指導部を変えたあと、誰をどんな役職につけようと準備していたのか？」などと尋問しました。してもいないことをしたとして突きつけるために、あらゆることを尋問しました。私たちは統制委員会で1ヶ月近く尋問を受けました。彼らは何も見つけられませんでした。こうして取調べが終わりました。私たちを地方に追放するという決定が下されました。

モンゴルは広大ですから、私たちがお互いに会うことができないうくらいそれぞれ遠い地方が選ばれました。私はウブルハンガイ県のゴビ地帯にあるサント郡に羊飼いとして、ニャムポーはドルノド県のエレーンツァブ国营農場に牛飼いに指定されました。ソルマージャブにはいくらか寛大だったようです。彼はベルフ鉱山で計数・記録係に任命されました。党中央委員会統制委員会はこのような決定を下したのです。

私たちはこの決定に抗議しました。「私たちは党を追われたのだから党の決定は私たちには関係ない。私たちがどこで生活し、何をするかはモンゴル国民として自分で決める」と言いました。彼らは私たちの党からの除名を急いだのは大きな誤りだったとわかってきたのでしょうか。まもなく「閣僚会議決議」があげられました。閣僚会議決議なら私たちに関係ありますね。こうして私たちの追放は避けられないことになりました。出発前にロブサンラブダン統制委員長の部屋へ行きました。「私たちは出発します。追放の期間はどれだけですか？」と尋ねました。彼は「とにかく3年だ。3年経ったら

われわれは今回の決定を再検討することになる！」と言いました。私たちは「地方で3年生活したら、何かしら変更があるようだ」と理解して出発しました。

私たちが出発する時には冬の1月になっていました。1月というのはモンゴルで最も寒い時期ですよ。モンゴルで最も寒い時期は81日続くのです。モンゴル人はそれを9日ずつに分けて名前をつけています。最も寒い時期は最初の3つの9日間です。それを「イデル・ゴルバン・ユス（若い3つの9日）」と呼びます。1月はちょうど「イデル・ゴルバン・ユス」のころです。この時期、寒さの勢いは「3歳の去勢雄牛の角をカチカチに凍らせる」とモンゴル人は言います。このような時期に地方の牧民は移動しません。モンゴル全土が厚く雪に覆われ、毎日吹雪になる時期ですよ。

私をウブスハンガイ県サント郡に送り届ける問題は農牧業省に任されました。農牧業省は1台のトラックを用意しました。当時うちの子ども2人のうち1人は8歳、もう1人は2歳でした。私と一緒に姉や継母も行くことになりました。この2人は2人とも70歳を過ぎていました。このような顔ぶれで、このような時期に地方に移ることになったのです。ウランバートルではわが家は3部屋ある住宅に住んでいました。私は本をたくさん持っていました。その本をウランバートルに残していける環境はありませんでした。うちの家族はその住宅からも「急いで出ろ！」と追い出されました。当時、住宅はすべて国有財産だったのです。私有の住宅はありませんでした。モンゴル人民革命党中央委員会統制委員会は住宅の面でも私たちを苦しめだしました。およそこのころから私たちは党・政府の恒常的な圧迫を受けるようになったのです。

私たちを内務省はたいへん厳しい監視下におきました。「反逆者ローホーズ」はどこで何をしているか、誰と、いつ、どんな目的で会ったか、誰に何を言ったか、ということがその時々内務省を通じて統制委員会に伝わり、そこからツェデンバルに報告されていました。総会が終わったその時から、全国の報道機関でローホーズ、ニャムボー、ソルマージャブの「反党分派活動」について、国家にいかなる危険と害をもたらす活動をしていたかということが報道されました。「反逆者ローホーズ」はいつ、誰と、どこで会い、党の指導部をどのように変え、どのような人びとをどのような役職に任命するかをどのように準備していたかということについて分刻みに報じられました。

報道機関を通じて報じられていたその類のことには、1つも真実はありませんでした。「反党グループの首謀者ローホーズは漢人との混血だ！彼の父親は中国の新疆ウイグル自治区からモンゴルへやって来た漢人だった！」などという噂もありましたよ。すべて嘘です。しかし、信じた人はいたでしょうね。さすがに「ローホーズは日本のスパイだ！」とは言わなかったようですが、30年代なら「日本のスパイ」という汚名を着せるところです。首相が2人、「日本のスパイ」の汚名を着せられ、処刑された歴史はまだ記憶に新しいものですよ。そのような中傷をした連中も、彼らの勤めていた内務省も、旧態依然として存在していた時期ですよ。

わが家は国有住宅を早く明け渡すために地方への引越し作業を急がなくてはならなくなりました。地方へ行ってから生活するゲルを私は人に頼んで確保しました。覆いも保温も粗末なゲルでしたよ。それから地方で着るための冬用の服も準備する必要ができました。当時、モンゴルのゲルやデールを売っている店はウランバートルにはなかったのですよ。そんな商売をしようものなら刑務所送りでしたよ。人びとはただ自分に必要な分だけを自分で作っていたのでした。余分なものなどありはしませんでした。そんなわけですから、国営商店では冬用のモンゴル服や衣服を売ってはいませんでした。都市で冬に着るヨーロッパ式の洋服で地方に行くことはできません。洋服は地方にはまったく適さないのです。モンゴル服こそが最適なのです。私は農牧業機構で働いていましたから、知り合いが大勢いました。知り合いの人はみな暖かい衣服を提供してくれました。そのころアムガランに農業機械供給基地がありました。私は基地長のS.チョローンをよく知っていました。この人は農牧業省の参与官でした。この人が私をウブルハンガイ県サント郡に送り届けてくれることになりました。甥も私を送ってくれることになりました。農牧業省が準備したトラックに家財道具を積みました。甥がトラックに乗って行くことになりました。チョローンは自分が使っているUAZ469型の公用車で私を送ってくれることになりました。深夜3時ごろチョローンがわが家の外にこっそりやってきました。その車に妻子と年寄り2人を乗せて、こっそり出発しました。ウブルハンガイ県知事は私の古い知人でした。ウランバートルを出発する前に彼に電話をしました。彼は「君のことは聞いている。来なさい！ゴビ地帯までの移手段は私が何とかする」と言いました。彼は本当に手助けしてくれました。そして指定されたサント郡に来ました。サント郡から先、ゴビ地帯の郡がボグド郡、トゥグルグ郡とあります。妻は保健部門の人間ですからウランバートルを離れる際、保健省から「ウブルハンガイ県の総合病院に勤めてよらしい」との書類をもらいました。それを提示して県保健所から書類をもらいました。妻が郡の中心地に勤める許可をもらったので、ゲルは郡の中心地に建てることにしました。しかし、県の中心地にある内務省の部署から電話がかかってきて、「ゲルを郡の中心地に建ててはならない！絶対に家畜の世話をする場所に建てろ！」と求めました。それで人里はなれたところに行くことになりました。

ところが、子どもが学校に行けなくなるという問題が出てきました。この郡には学校の寄宿舎がないのです。子どもを預けられる知人の家もこの郡にはありませんでした。いずれにしても子どもの教育を続けるための手段を見つける必要がありました。それで郡役所の人たちと会いました。すると、彼らが子どもの預け先を見つけてくれることになりました。それで人里はなれたところへ行き、ゲルを建てました。

私は、サント郡の第1生産隊の羊飼いで、人民革命党の党員が担当する羊群で「羊飼いの補助要員」となりました。当時は1人当たり100頭の羊をみるというノルマがありました。それで私も羊100頭を受け持ちました。羊を飼うことは私にはそう難しい仕事では

ありません。そもそも羊を放牧せずに育ったモンゴル人などおりますまい。そんな人などいないでしょう。すべての人びとが羊や子羊を放牧して育ち、一部の人びとが学校へ行くうちに首都に住み着くようになったのですよ、当時は。

ずっとウランバートルに住んでいたことと、直接自分の手ではしていなかったということが原因でしょうか、だいぶ遠ざかっていました。畜群長と私は羊を交代で世話するようになりました。1日おきに放牧に行きます。故郷で子ども時代にしていた仕事ですから、人里はなれた草原に1人で羊の番をするのはとても気分が良いのです。

こうして羊の番をしているうちに1ヶ月が過ぎました。モンゴルの旧正月も近づいて来ました。わが家はウランバートルを出る時にお金を相当使ったので、お金が底をついていました。それで1ヶ月間の羊の番の給料が下りるのを待っていました。給料日をかなり過ぎました。私たちは何日も待ちました。しばらく待たされた末に給料が出ました。ところが羊100頭の番を1ヶ月した労賃が17トゥグルグ50ムングです。これが私の給料全額だと言います。モンゴル経済を背負った、畜産業で働いている人間の1ヶ月の給料ですよ。羊100頭を1ヶ月世話して受け取る給料がこれなんです。

放牧はるか昔からモンゴル人が営んできた生業の主要形態でした。世界の海洋から隔絶した内陸アジアの、空気の著しく乾燥したこの地域ではこれ以外の生業を営む条件は極めて限られているのですよ。私たちは何世代ものあいだこの生業を営み、それによって生き延びて来たのです。私たちは、最も強力で世界を支配していた時でさえ、ありがたい家畜と牧草地、水を崇拜していたのではないのでしょうか。『モンゴル秘史』の一言一句に草原の匂い、ありがたい家畜の匂いが感じられるのではないのでしょうか？それなのにモンゴル人の魂となってきた牧畜がこのように軽んじられ、悪く言われ、それから早く決別することを夢見るようになってしまいました。これはどう見ても賢い人間のすることではありませんよ。

ツェデンバルの手法と政策の誤りを批判した人間に対する処罰が羊飼いなのですよ。われわれモンゴル人はみな羊飼いだし、みな羊の番をして育ったのではないのでしょうか？ツェデンバル自身は羊飼いではないのでしょうか？それなのに羊飼いになること、羊の番をすることが「罰」なのだと言います。このような状況でモンゴル人民をつかむには、ディクタトゥーラ以外何も役に立ちませんよ。そういうわけで彼は「管理と検査」、つまりはディクタトゥーラの強化を常に夢想し、内務省の力を何十倍にも強化したのでしょ。

当時、私には給料以外の現金収入がありませんでした。わが家には1頭も私有家畜がいませんでした。この状況は私にいろいろ考えさせました。このような給料で生活するなんてあり得ませんよ。わが家は家族が多かったのです。私は1,500~1,700トゥグルグの月給で10年以上も生活した人間ですよ。そのころは月給を受け取っても、いくらを何に使うかということとはひとつも考えませんでした。金銭的な問題は何もありません



でした。ここで受け取った給料の17トゥグルグ50ムングを、次の給料が出るまで使うはめになっているのです。それではその使い道をどうするか考えなくてはなりません。そこで、買うものを考えました。初めに今自分の家にあるものもないものを詳しく数えあげました。肉は多少ありました。乳は、家畜の世話をしているので手に入るだろうと思いました。そして小麦粉や米、お茶を買うためにお金が必要だということがわかりました。年寄り2人を連れて来たので、お茶をたくさん消費するのです。2人のためにお茶を切らせてはなりません。それでちょうど良い安い食料品はキビだと考えました。キビはたくさんあれば役に立つと思いました。不案内な土地で風邪を引いたり、病気になるったりしたらとても危険な状態になりかねないと思いました。年寄り2人が風邪を引くかもしれないでしょう。そんな時には絶対にお金がなくてはいけないと思ったのです。そして給料のうち5トゥグルグは薬代にしっかりとっておくことにしました。それを党中央委員会第6回総会で没収された党员証の袋に入れてポケットに入れ、針と糸で縫いつけて保管しました。なくさないためです。うちでは、布で袋を作り、党员証をなくさないように非常に大切に保管していたのです。党员証をなくせば大問題になったものです。「党员の規律に違反した」と大問題になり、「党からの措置を受ける」に至りました。人民革命党员規則には党员の規律について非常に厳格な数多くの規定がありました。党员の生活のあらゆる問題をこの規則で統制しようとしていたのです。

これに関してモンゴル人のあいだで長年語られてきた冗談があります。「モンゴル人民革命党委員会が存在する限り、君と僕は簡単には別れないぞ!」というのです。当時モンゴル国民の家族問題は法律に従って処理される以外に、人民革命党员の家族のことは党委員会での討議・決定の対象でした。夫婦2人の離婚問題はモラルの問題だと見なされていました。党の規則には、党员は高いモラルを身につけていなければならないという規定がありました。妻や夫と別れる人間はモラルに欠けると見なされていました。妻や夫と別れるというモラルに欠ける行為をした党员は「党の規律に違反した」と見なされていました。このような人に対しては党を除名するという措置さえとるのです。除名された人の運命はそれで終わりです。その人は決して再び名誉を回復したり、社会的地位を得たりすることはできなくなりました。その人は常に軽蔑され、恒常的な圧迫のもとで生活しました。そのような人はどんな職場でも採用されないのです。個人で働き、生活を向上させながら生きるという機会はどこにもありませんでした。すべてが禁止されました。

そのような状況に陥らないため、党员はできるだけ離婚をしないよう努めていました。一方では「党员はみな、高いモラルを身につけている」と宣伝されていました。ですから党员は離婚という不道徳なことをしてはならないのです。党员にとって離婚問題はタブーでした。党员が離婚を決めたなら、そのことをまず党委員会で議題にし、許可は与えられなかったのです。そういうわけで「モンゴル人民革命党委員会が存在する限

り、君と僕は簡単には別れないぞ！」という言葉が生まれたのです。このように党員の私生活まで党員規則が統制しようとしていたのです。

家庭問題だけでなく党員の生活はまるごと党委員会の管理下にありました。党員はお互いの「党の規律違反」をあばこうと血眼になりました。誰かの何かの違反を知れば直ちに党委員会の書記長に伝えました。多くの人の多くの違反をあばいた人は「模範的な党員」と称えられ、褒賞されました。党委員長は党の規律違反に関して党員を人質に取って迫害しました。党員を迫害する時には「お前はこのような時にこのようなことをして党の規律に違反した！」と言われました。こうして社会全体がまるごと恒常的な圧迫と管理のもとに置かれていました。私たちはそんな社会に生きていたのですよ。

当時は党員以外の人間には社会全体が閉ざされていたと言えます。自分が身につけた教養や習得した専門に合った仕事をし、社会での自分の位置を占め、普通の生活を送ることを望むなら、この党の一員となるよりほか道はありませんでした。党員でなければ直ちに社会で差別されました。その人は指導的な役職には絶対昇進させてもらえませんが、国営工場や公的機関に新しい人材を採用する時でさえ党員が1番に採用されました。このような厳しい状況の中で私たちは働き、生活していたのですよ。

さて、1ヶ月間羊の番をして受け取った給料をどのように配分したかという話に戻りましょう。薬代の5トウグルグ以外のお金を次のように配分しました。キビ10キログラム、2等小麦粉2キログラム、ロシア茶半塊、角砂糖1箱を買う計画を立てました。残りのお金はこういった物を買うのに何とか足ります。そこで、郡の中心地の店に行きました。配分に従って先ほど言ったような物を買いました。その日、子どもを預けた家も訪ね、少しばかりの乳製品、アーロール、エーズギーをあげました。わが家は郡の中心地から25キロメートル離れたところにありました。午前11時ごろになっていたと思います。みな仕事に行き、郡の中心地は人っ子ひとりいない、そんな感じでした。私はラクダに乗って来ていました。帰宅の途中で、1人の若い女性に出会いました。

女性は、

「お帰りですか？知り合いがいなくてたいへんでしょう？私の家に来てお茶でもいかがですか？」

と言いました。私は喜んでそれを受け、その女性の家に一緒に行きました。その家はたいそう快適で、裕福な家庭です。その女性はお茶と食事を出してくれました。本人は白い子羊の皮でデールを縫っています。私は、

「旧正月の晴れ着を仕立てているのですか？」と尋ねました。

「夫にデールを仕立ててあげているのです。子羊の皮のなめしが悪くて、うまく縫えなくてたいへんだわ！」とその女性は話します。

そこで私は、

「こちらでは、なめしていない子羊の毛皮はいくらしますか？」と尋ねました。

「なめしていない子羊の毛皮は1トゥグルグです。時には2～3トゥグルグになります。このあたりでは皮なめしの人がいなくなってしまったのです。なめし革なら15トゥグルグで買っていますよ」とその女性は言います。

「それなら、きれいになめした子羊の毛皮を持って来たら15トゥグルグで買いますか?」と尋ねました。

「もちろんですとも。今仕立てているこのデールに合わせて買いますよ!」と言います。

「ご主人はどんな仕事をしているのですか?」と言うと、

「郡の会計主任です」と言います。会計というのはどこに行っても賃金の安定した仕事ですよ。私の父は非常に優れた「皮なめし職人」でした。私の継母と姉は父のそばにいたので皮のなめし方を父からとてもよく習いました。私自身はなめしをしたことはありませんでしたが、その技術全般は良く知っていました。こういったことに意を強くし、その女性に、

「子羊のなめし革を君に持って来てあげましょう。あなたはそのほかのものを作っていないさい!」と言い、女性がデールを仕立てていた子羊の皮から少し切れ端をもらいました。どんな色の毛の、どんな風合いのなめし革が必要かという見本としてもらったのです。

そしてこの切れ端を持ってネグデルの出納係を訪ねました。

「こういう子羊の毛皮が必要なんです。1枚ください」と頼みました。

するとその人は、

「そのドアを引きな」と1つのドアを指します。そのドアを引いて開けてみると、天井に届くほど毛皮を集めた部屋でした。端のほうから子羊の毛皮を1枚取りました。

出納係は、

「ああ、それでいいなら持って行きなさいよ!」と言います。

それで私は、

「ただでもらうわけにはいきません」と言い、薬代にとっておいた5トゥグルグを渡しました。

すると出納係は驚いて、

「それをどうしろって言うんだ? 受け取らないよ!」と言います。

私は彼に「いいから受け取って!」と無理やりお金を渡しました。そして、ラクダを走らせて帰りました。ほんの短い時間にその毛皮をなめして使えるようにしなくてはなりません。1枚の皮をなめせば、1ヶ月間100頭の羊の番をするのと同じ位の金額が手に入るのです。妻はその毛皮をすぐさま水に浸し、洗ってくれました。皮なめしには3工程あります。「前処理」「なめし」「仕上げ」という3工程です。この3つを行って皮なめしは完成です。最後の段階で皮は絹のように美しくなめらかになります。1日

たって、私の皮なめしは終わりました。当時、うちの若い者つまり私たちはいつもヒヤラム〔乳を水で薄めたもの〕を飲んでいました。お茶を節約してのことです。朝10時ごろヒヤラムを飲み、なめした革を持って例の家を訪ねました。道中、人目を避けて移動しました。そして毛皮をあの女性に渡すと

「とってもきれいになめしてあるわ。全部こうだったら立派な DEAL になるでしょうに！」と15トゥグルグくれました。15トゥグルグを受け取ってネグデルの出納係のところへまた行きました。15トゥグルグを彼にまた無理やり渡して子羊の毛皮3枚を選び出しました。彼にお金を渡すと彼はとても驚き、訳がさっぱりわからない様子でした。こうしてその3枚の毛皮をやはり急いでなめし、例の女性に45トゥグルグで渡しました。またネグデルの出納係から45トゥグルグで毛皮を9枚買いました。このようにして20日間のうちに皮をなめしては売り、800トゥグルグを得ました。

## 18 モンゴルの伝統技術

L O : わが家はウランバートルで生活していた時、お金はすぐ使っていました。節約とか貯金とかいった観念はちっともありませんでした。今度はお金を非常に節約しながら使うようになりました。このようにして手に入れたお金の使い道を事前によく考えるようになりました。その後、私たちの周囲で生活している人たちの暮らしを調べてみました。彼らの生活に何が大きく必要とされているかを調べました。すると彼らはみな馬に乗っています。馬にじかに乗るのではなく、必ず鞍を載せています。鞍には必ずグルム(あおり革)を使います。鞍に1番必要なものはグルムです。ところが店ではグルムをそもそも売っていないようです。それを作って売る人もいませんでした。これは何よりも作れる人がほとんどいなかったことと関係があります。グルムはすぐにぼろぼろになり、改めて買おうとすると手に入りませんでした。それに地元の人びとは格好の良いグルムを買いたいという気持ちがあるようです。モンゴル人は自分の乗る馬を飾るのを好み、馬を美しい鞍や頭絡で飾るのを好み、美しい鞍を美しいグルムで飾るのを好むのです。それなのに美しくしっかりとしたグルムはどこにもありませんでした。それでグルムの需要が非常に大きいことがわかりました。その地域の人びとは昔ポリガール〔牛や馬の柔らかいなめし革〕でグルムをつくっていたのです。それでポリガールが貴重になっていました。郡の店にはたまに入荷します。貴重品の1つになっていました。1枚のポリガールが100トゥグルグくらいしました。ポリガール1枚で2つのグルムを作ることができます。これは牛まる1頭分の皮革ですよ。昔はポリガールを工業コンビナートで作っていました。最近では中国から若干買うようになったようですね。普通のグルム1つは600トゥグルグで、完全な模様が入った飾りグルムは1,000トゥグルグでした。これは地方に定着した相場ですよ。

その地方にはグルムを作れる人が1人だけいることを知りました。その人はレンチンと言いました。わが家からそう遠くないところに住んでいることがわかりました。それで郡の商店に残った1枚のポリガールを買って来てレンチン氏を訪ねました。そして彼に「グルムの作り方を教えてください」と頼みました。その報酬として「冬の食糧用の家畜をあげる」と約束しました。そして、その人の弟子になりました。その人は喜んで私に手を貸してくれました。レンチン氏は例のポリガールでグルム2つを切り出しました。グルムの縁取り模様というものがあります。その作り方を教えてもらいました。こうしてグルム作りの方法すべてを教わりました。それから彼がグルム作りに使う道具すべてを借りました。こうして自分で独自にグルムを作る仕事に入りました。

私は何年も高給の職務にあったので、自分で、自分の手で物を作るということがまったくありませんでした。もの作りの作業道具が私には1つもありませんでした。レンチン氏もわが家にしょっちゅう来るようになりました。そして、私は彼に教わりながら自分で2つのグルムを作りました。私が自分で作った初めての作品です。そのうち人びとがわが家に来て、グルムを売ってくれますか、いくらですかと尋ねるようになりました。それで「1つ600トゥグルグでどうぞ!」と言うようになりました。2人の人が私の作ったグルムをすぐに行って行きました。100トゥグルグで買った皮が1,200トゥグルグになったわけですよ。10倍に増えたでしょう。それでとても喜びました。やる気が出てきました。4～5包みのポリガールを買い、家族みなでグルムを作るようになりました。慣れと経験を積んで、簡単に作れるようになりました。羊の番に行く時には、切り出し、貼り合わせ、縫い合わせ以外の作業をするようになりました。そして、たくさん作るようになりました。1ヶ月に10から20のグルムを作るようになりました。それを買いに大勢の人がわが家に来るようになりました。知り合いも増えました。わが家の収入は羊番をして受け取る給料の何十倍に増えました。

こうしてお金に不自由しなくなりました。生活も良くなって来ました。ゲルも暖かいフェルトの覆いや白い布カバーを使うようになりました。そして、当時ソ連から輸入していた三輪の「ウラル」というサイドカー付きオートバイを買いました。モンゴル人はそれを「シャーハイト（短靴つき）」と呼びました。第二次世界大戦のころ、ドイツではこのオートバイを軍用に生産していたものです。これに乗ったドイツ兵はヨーロッパのすべての戦線に出向いたものです。優れたオートバイでした。素晴らしい技術を用いた驚異的なものでした。戦後はロシア人がその工場を引き継いで自分たちで作ったでしょうね。

1年後、ポーランド製の「ワルシャワ」という乗用車をロシア大使館から1万8,000トゥグルグで買いました。そして、たくさん家畜を所有するようになりました。私たちはウランバートルから何も持たずに来たのですよ。毎年15頭の馬から搾乳するようになりました。牛は20頭ほどになりました。羊は100頭余りになりました。家畜はすべ

て買ったものです。数を増やすために初めはいつもメスの子羊を買っていました。放牧という飼育条件では、羊は約300頭になって初めて利益が上がるのです。自分の需要を満たした上で商品になります。そのような基準があります。

私の行ったサント郡のグルムの需要は100%満たすようになりました。そしてサント郡に近いバヤンウンドゥル、バヤンゴル、ウルズィート、ブルド各郡の人たちがお互いに聞きつけて、わが家にグルムを買いに来るようになりました。それで飾りグルムを試しに作ってみました。飾りグルムは1,200トゥグルグもしました。そのような飾りグルムと銀細工のついた鞍は6,000トゥグルグでした。6,000トゥグルグでチェコスロバキア製の「ヤーバ」というオートバイを買うことができます。地方の人たちも都市・定住地の人たちも「ヤーバ」によく乗っていました。両親が子どもに財産を残してやろうとする家庭というのがあるものです。子どものためなら金を惜しまず、質の良いちゃんとしたものを買ってやろうと考え、探しているものです。それで銀細工つきの飾り鞍の注文が来るようになりました。それで年に1組、飾り鞍を作るようになりました。その後、年に2組作るようになり、その後は4組作るようになりました。夏に2組、冬に2組、鞍を作るようになりました。ますます経験を積むわけですよ。どれも注文を受けて作るのです。鞍4組は2万4,000トゥグルグになります。鞍で得る年収が2万4,000トゥグルグになりました。飾り鞍を作るには、鞍の木製部分、銀細工つまり「アルバン・ツァガーン（10個の白い部品）」、グルムといった部品が必要です。鞍の木製部分は購入します。銀細工は細工職人に注文して作らせます。それ以外は自分で作りました。買ったものや注文で作らせたものの代金を払います。これにはかなりのお金が必要なのですがね。その職人に作らせたものを自分で作れば利益が多くなるように見えます。

それで自分で金属細工の作業を習うことにしました。金属細工のできる人はごくわずかで、ほとんどいません。金属細工のできる老人が1人、郡の中心地で暮らしていることを突き止めました。その家を訪ねると、その老人はいつも1人でものを作っていました。老人には助手がいませんでした。それで私が手伝うようになりました。老人とは親しくなりました。こうして金属細工のやりかたを多少なりとも知りました。そして金属細工に使う道具やそのほかのものも知りました。そして自分でも作ってみることにしました。それで老人に頼んで道具を借りました。やってみるとできそうです。少しずつ作っているうちにできるようになりました。その老人のやり方は、「鍛造」という方法です。県の中心地には「鑄造」を知っている人がいるということを知りました。この方法は短期間に多数を作ることでできる方法なのです。その人は「緑のダムバ」と呼ばれていました。そしてその人に会い、知り合いになりました。そしてやはり、彼のやり方を教わりました。弟子になりました。それは作るものの型をとって流し込む方法です。修正して磨いて出来上がりです。とても手軽な方法です。このようにして自分でほ

とんどすべてを作るようになりました。鞍から得られる年収は4万トゥグルグになりました。

当時、ソ連製の「ボルガ」という乗用車は3万トゥグルグほどだったでしょう。そのころモンゴル・トゥグルグとルーブルとのレートは、モンゴル銀行が1ルーブル=5トゥグルグ、アメリカ・ドルとのレートは1ドル=4トゥグルグと定めていました。本当の市場レートではありませんよ。当時、わが国には個人で「ボルガ」を持っている人はほとんどいませんでした。そもそも自家用車を持っている人はわずかでしたよ。しかし、政府の幹部や省庁の大臣たちはみな黒い「ボルガ」を使っていました。当時、政府の駐車場には「ボルガ」以外の自動車はなかったでしょう。私は国営農場管理局長だった当時、公用の「ボルガ」を使っていました。「とてもいい車だ！」と賞賛しながら乗っていたものですよ。今ではフチト・シヨンホル食品市場の肉仲買人が肉を載せるためにしばしばボルガが使われるようになったようですがね。みなボルガに目もくれなくなりました。

当時、私の家には長距離輸送の運転手がよく来ていました。その人たちとはとても仲良くなりましてね。馬乳酒や乳製品をしょっちゅうあげます。冬用の肉をあげます。家畜の世話をしていた時、私がラクダで移動したのは1度だけです。それ以外はいつもウランバートルの長距離輸送の運転手の車で移動していました。当時は各県に自前の自動車輸送基地がありました。ウランバートルには遠距離輸送自動車基地がたくさんありました。わが家は1年のうち春から秋にかけて10~15回移動していました。移動の回数を増やして放牧地を替えれば替えるほどその分家畜もよく肥えるのです。1ヶ所に長く留まれば家畜の肥え具合に悪い影響を与えます。夏の環境で家畜を最高に肥やすことができれば冬にする仕事は減ります。そうすることができれば家畜はたくさん子を産み、病気にもあまりかからないし、死亡数も減ります。そうすることができず家畜が痩せていれば、多くの困難が生じて来ます。家畜の病気は増えるし、子家畜の損失も多くなり、成畜の損失も多くなります。母家畜は子どもを育てられなくなり、家畜からの生産性もすべて落ちます。これは放牧式牧畜業の鉄則です。そういうわけで春から秋にかけて家畜を最高に肥えさせる必要があるのです。このために草の豊かな場所へ小さな間隔で移動し、放牧地を常に替え続けることが必要です。そのために自分でも常に放牧地を選びに出かける必要があります。放牧地が劣化することで家畜はゲルから離れたところへ行って草を食むようになります。家畜は常に新しい手つかずの草を食べます。家畜の足で踏みつぶされた草を食べたがりません。家畜がゲルから遠く離れて草を食めば家畜の移動距離が増え、肥えるのに悪影響を及ぼします。家畜がゲルから5~10キロの距離にいれば丁度良いのです。これより遠くなれば家畜の移動距離が増えるほかに、主人自身が遠くまで行き、家畜を見回るのにも時間が多くかかります。ほかの仕事がたいへんになります。ゲルの近くにいれば時間はそうかかりませんね。新しい放牧地に来れ

ば家畜はゲルから遠いところまで行きません。ゲルの近くにいます。よく肥えればそれだけ生産性も上がります。これが最も重要です。私は運転手たちに「うちの一家を移動させてくれ」と頼みます。彼らにとってはたやすいことです。やって来て移動させてくれます。

私がグルムを作るためのポリガールは貴重でした。「サリス」というもの〔羊や山羊の柔らかいなめし革〕があります。それをグルム作りに使います。ウブルハンガイやアルハンガイあたりの店にはこの2つはあまり入荷しません。それを運転手たちに頼むのです。遠方の県を走る運転手たちが来る時に持って来ます。運転手はたいそう遠くまで行くのですよ。ドルノド、ヘンティー県にいるニャムボーやソルマージャブの消息を聞いてきます。当時は通信や電話はよく通じませんでした。運転手がそういった消息を聞いてくるわけです。

そのころモンゴルには自動車輸送以外の輸送形態はありませんでした。長距離・短距離のあらゆる輸送を自動車だけで行っていました。ずっと昔はラクダの隊商がすべての遠距離輸送を遂行していました。短距離輸送は牛車が行っていました。場所によっては馬車が多少は使われていたでしょう。昔は引越しには主に牛車を使っていました。ゴビ地帯の諸県ではラクダで移動していました。その後、農牧業ネグデルや国営農場が著しくしっかりしてきたころには自動車で移動し、居を構えるようになりました。モンゴルは土地が広大ですから、現代の需要はラクダや牛では満たせなくなったのです。

当時、ニャムボー、ソルマージャブそして私は自分がウランバートルへ行く時には、自分の暮らしている県の内務保安局に報告し、「許可」をもらう決まりになっていました。この「許可」はウランバートルにある内務省経由で人民革命党中央委員会統制委員会から来ていました。統制委員会は党書記長に私たちの要請を知らせることになっていました。私はその決まりにちっともとらわれませんでしたよ。月に何度もウランバートルへ行きます。運転手は年中走っていますからね。土曜日、ある運転手の車に乗り、内緒でウランバートルへ行ってしまいます。日曜日、雑貨市場へ行って用を済ませ、月曜日に別の運転手の車に乗って帰ってきます。私がどこへ行ったかうちの者に尋ねに誰かが来たら「家畜のところです。家畜がいなくなりました！」と言うのです。私がウランバートルへ行って来たことは誰も知らずに過ぎます。運転手は私の秘密をしっかりと守ることができました。このようにして会うべき人に会います。

しかし、恒常的な情報提供者もまたいたのです。当時、私に関する情報を提供するようには内務省から指示を受けた人は大勢いました。できるだけ彼らに見えないところを通ります。首都で生活し、省庁に務める、かつての同僚の中にも内務省の密告者が大勢いました。彼らは私に関する定期情報を上に渡します。そのころは私だけでなく、すべての人間を内務省の密告者が常に監視していました。国の公的機関ごとに内務省の密告者が勤務していたのですよ。誰が、いつ、誰に何と言ったか、誰がどんな服を着て、何を



使っているか、などすべてを内務省に報告していました。もし高価な、立派なものを使っていれば大問題になります。この人はそんな高価なものをどこから、誰から買ったのか、それを買うためのお金を誰がその人に渡したのか、など調べ始めます。とはいえ、私のことは非常に大勢の密告者が監視していました。

家畜の飼育で最も仕事が多いのは春から秋にかけてです。家畜の乳を搾り、乳製品を作ります。このような時期に私はウランバートルで生活する親類の子どもを呼び寄せて手伝わせます。女は乳搾りをし、男は羊や家畜の番をします。7、8人、時には10人の子どもが来ます。1人ひとり、運転台に乗ってきます。秋に乳製品を与えてまた1人ひとり、運転台に乗せてやって送り出します。彼らはわが家にいるあいだに乳搾りや羊の番を覚えます。総じて仕事を覚えます。こうして子どもたちには幼いころから仕事をさせて教える必要があります。子どもはあらゆる仕事のコツをつかむ必要があります。そのように仕事のコツをつかみ、身につける必要があります。子どもたちはわが家に来て、全然したことのない仕事のコツをつかんで、できるようになりました。今、その子どもたちは「お宅に行き仕事をしたことは、市場経済のこの時代、生活の役に立っています」と言っています。

I L：「反逆者ローホーズ」が訪れた当初、地元の人たちはどんなふうに対応しましたか？

L O：地元の人たちは私に親切でしたよ。「この人は政府が何も成し遂げずにいることがらを正直に批判した。ほかにまちがったことはしていない」と人びとは知り、迎えてくれました。しかし、彼らはそのことを直接大っぴらに示すことはできません。大衆は心の底では私を大いに支持してくれたのです。私がこのように追放されたことに内心ではとても反対していました。人びとがそのような態度でしたから、私は「まちがったことをした」と自責の念にかられることはありませんでした。

人というのは自分の思想を守り続けなければなりません。「私の発言はこの先、党にとって必要だ。私はまちがったことはしていないのだからいつかきっと名誉回復される」と思っていました。ちっとも意気消沈しませんでした。仕事をすること、担当したネグデルの家畜をしっかり飼育することだけを考えていました。そして、ネグデルの羊はおよそ250頭になりました。そのころネグデル員の私有家畜の数は、ハンガイ地帯では50頭、ゴビ地帯では75頭と定められていました。しかし、それより多い家畜を持っている人もいたのです。私はネグデル員ではなかったので私にはこの規則は関係ありません。それでも「この規則に従わなくてはならない」と迫られていました。当時、定められていたこの数より余計に家畜を持っていたネグデル員は、自分の超過分の家畜を他人の名義で申請していました。わが家には400～500頭の家畜がいました。それでこの家畜を別の人の名義で申請してもらい、その人に飼育してもらっていました。

私たちがサント郡に来てから6年が経ちました。子どもは中学の8年生を終えました。そして9年生に上がることになりました。ところがサント郡には10年制学校があ

りませんでした。そこで別の郡に移り住むことが必要になりました。行く時2歳だった娘も学校に入る年になりました。一緒に行った例の年寄り2人は80歳まで生きて、亡くなりました。妻は妊娠していました。私はネグデルの羊と自分の家畜を飼育しきれなくなりました。それで別の郡に移り住む願い出を党中央委員会統制委員会に何度も送りました。返事は来ません。それで何人かの幹部に直接会い、言い争いもしました。長いこと待った末に、「ハルホリン国営農場に移ってよらしい」という許可が来ました。

こうして私はハンガイ地帯で認められていた50頭の家畜を残して、あとは売ってしまいました。それは相当な大金になりました。そして、ハルホリン国営農場へ移って来ました。妻は薬局で薬剤師の仕事をするようになりました。長男は9年生に進みました。もう1人は1年生に入りました。そこで私は「養豚・養鶏生産隊の計数・記録係」という仕事に就きました。月額320トゥグルクの給料をもらうことになりました。こうして働きました。そして、子豚を2頭、人から買い、ほかの人に飼育させるようになりました。その後、自分の豚小屋を持ち、豚も多くなりました。養豚はとても高い利益が上がります。豚の飼育と経済的利益についてたくさんの本を手に入れて読みました。ハルホリン国営農場は製粉工場や食肉工場のあるところでした。私は製粉工場の廃棄物をもって豚のえさにするようになりました。この廃棄物はとても良い豚の飼料になります。製粉工場は廃棄物をただでくれていました。製粉工場は自分のところでは廃棄物をまったく利用していませんでした。それをもって利用するところもありませんでした。製粉工場からは廃棄物が大量に出るのです。私にはトラック何台分もくれました。豚1頭は1度に10~14頭の子豚を産みます。年に2~3回出産します。子豚はすべてこの廃棄物で肥らせ、秋に2頭残してあとは処分して、肉を売るようになりました。当時、ソビエト軍部隊がウブルハンガイのハルホリン国営農場の近くに駐留していました。私は豚肉を1キログラム当たり8トゥグルグでこの部隊に卸売りするようになりました。ソビエト軍部隊は肉がなかったのもとても喜んで買いました。ロシア人は豚肉が好きなのです。モンゴルは1969年からソ連軍部隊を駐留させ始めました。このような部隊はあちこちにありました。ソビエト軍部隊はわが国の政府の要請にしたがって入って来たと言われます。それらの部隊はM.ゴルバチョフのペレストロイカの波のもと、1989年にモンゴルから完全撤退しました。

私はハルホリン国営農場へ来てから、もう1つ新しいことを覚えました。それは「モンゴル靴」です。ここには昔、エルデネ・ゾーという大きな寺院がありました。モンゴルで最初の大寺院ですよ。仏教がモンゴルの国教になったのは16世紀の末だと学者は書いています。ハルハのアブタイ・サイン・ハーンがエルデネ・ゾー寺院創設の決定を下したそうです。20世紀の初め、仏教はモンゴル社会に巨大な影響力を持つようになりました。このころ、モンゴルには大小700の寺院が活動していたと言います。そこに

何千人もの僧侶が住んでいました。モンゴル家庭の子どもの1人は必ず僧侶になっていたそうです。20世紀の初め、エルデネ・ゾー寺院には1,000人余りの僧侶がいたようです。1937~38年の「大粛清」の時代には、内務省はこの僧侶をみな逮捕し、銃殺しました。この時にはエルデネ・ゾー寺院だけでなく、モンゴルのほとんどすべての寺院を破壊したり焼いたりし、僧侶を銃殺したのですよ。モンゴルの人民が何世紀もの間に作り上げた文化遺産はこうして破壊され、消滅の道に入ったのです。共産主義イデオロギーはモンゴルにこのような危険なことをしたのですよ。エルデネ・ゾー寺院の僧侶のうち、ある者は何年も投獄されたのち釈放されて来ました。私はハルホリン国営農場に来たのち、そういった人たちの何人かと知り合いになりました。彼らはモンゴル靴以外の靴を履きません。ところがモンゴル靴を作れる人がほとんどいなくなっていました。かつて僧侶だった人たちの中にモンゴル靴を作れる人がちらほらいました。そしてモンゴル靴を上手に作るある老人と知り合いになり、靴の作り方を教えてもらいました。彼の作る靴は上質な良い靴だったので、見た人は即座に買っていました。

靴を縫う方法は、グルムの縫い方とほとんど同じです。しかし、作り方はいくらか違います。その人は靴の材料を自分で手に入れ、作った靴を自分で売っていました。これはたやすい仕事ではありません。それで私は彼のために靴の材料を手に入れてあげるようになりました。靴を作るにはボリガールとサリスがたくさんいるのです。また彼の作った靴を売る仕事を受け持つようになりました。知人が多いので私にはたいへんな作業ではありませんでした。こうしてその老人とその老妻と一緒に、私の妻が靴を縫うようになりました。私自身も縫い方を覚えました。こうして数人がかりで縫うので、靴を作る速度が早くなりました。私たちは1ヶ月に1足作るようになりました。モンゴル靴を作るというのもまた、そう簡単な仕事ではないのですよ。とても多くの工程があるのです。老人はしまいに靴の革を切り出し、靴底をとりつける作業だけをするようになりました。そのほかの縫い仕事は私たちがするようになりました。こうして1ヶ月に3、4足を作るようになりました。つまり私たちは生産協同組合的なものになっていたのです。老人がそれまで1人で作っていたのに対し、今や協同で、私のできないことは老人がして、老人のできないことを私がするようになったのです。このように組織的に作業をするようになったので、1ヶ月に何足も作ることが可能になったのです。

当時、協同組合設立の問題は法律で禁じられていました。私営工場の経営も法律で禁じられていました。もしそのようなことをすれば、法律に従って処罰され、投獄されました。こうして、ハルホリンやホジルトなどその付近の郡にモンゴル靴を売り、恒常的な収入を得るようになりました。靴1足を3,000トゥグルグで売ります。靴を履きたい人はかなりいたのですが、作れる人がわずかしかなかったのです。

このようにして私はハルホリンで5年間暮らしました。自家用の乗用車にオートバイ、大きな敷地の家も持っていました。それに家畜も多数いました。たいそう裕福な生

活をしていましたよ。ところが、この状況がその国营農場の指導部には気に食わなかったのです。私たちのいたハルホリンの農場長は私がここに来た当初から冷遇する方針を採っていました。彼は私が何をしているか、どのように暮らしているかを常に内務省に報告していたのでしょう。それで向こうからは私にどのように対処するかという指示も受けていたのでしょう。私が彼と穏やかにつきあわなかったことも良くなかったかもしれません。私は彼と折り合わず、ぶっきらぼうな態度をとっていたかもしれません。それで私たち2人のあいだの対立は非常に深刻になりました。その人は「反逆者ローホーズ」をしっかり見張り、名声を得ようと努めるわけですよ。私にはそのことがよくわかっていました。それでその人はこの思いに負けて「仲買と私的生産活動をしている」という根拠を持ち出して、私のことを調べるよう検察に申し立てをしました。この問題は検察を通してツェデンバルに伝わったでしょう。ツェデンバルは私を直ちに処罰するよう命じたでしょう。検察は私の「事件」を吟味しました。そして「確かに私的生産活動をした。多数の家畜を売り、仲買をした」と見なしました。こうして裁判所に送られました。

## 19 刑務所での生活

L O：裁判所は私に禁錮6年という判決を下しました。私には弁護士はいませんでした。私は自分で自分を弁護しました。「そもそも私以外に私を弁護できる人などいるのか？」と思っていました。当時、モンゴルの裁判実務において弁護士が果たす役割などないも同然だったでしょう。

そして、私の全財産は裁判所の決定に従って没収されました。ゲル、家屋、自動車、オートバイ、家畜、豚のすべてが没収され、国庫収入にされました。控訴する権利がないため判決は確定しました。本来はどんな人にも控訴の権利があるものです。そして私はズーンハラーにあるベルレグ刑務所に入りました。そこでは、私は他の囚人と一緒に作業に行かされませんでした。電流の流れる有刺鉄線の中にいつもいることになりました。私はたった1人でその有刺鉄線の中で5年以上過ごしました。ほかの受刑者は外に出て作業をします。刑務所の決まりはとても厳しいものでした。面会をさせません。面会の必要があれば、面会に来た人間を調査します。そのあとで許可をくれます。これは規律の厳しい「政治囚」に違いありません。1度私は肝炎にかかりました。刑務所の医官たちは「中心地の病院に送って治療を受けさせる必要がある」と診断しました。ところが上の内務省が許可しませんでした。この問題にはツェデンバルが関与したに違いありません。私は「政治的罪を犯した」という理由で公式に処罰されたわけではありませんが、「政治囚」としての扱いを受けたのです。

わが国で実施されている刑法を私はとても詳しく知っていました。私が投獄される契

機を詳しく調べました。私自身、さまざまな仕事をしていたので「この仕事を口実に投獄されるかもしれない」と思っていました。それで私は法律を詳しく調べてみたのです。検察は私が「仲買をした」という結論を出しましたが、私は「仲買」を一切していません。私は自分の労働で作ったものを売ったのです。人びとには私の作ったものが必要でした。彼らにはそういった必要なものを買うところがほかにありませんでした。それを作るのできる人はほかにほとんどいませんでした。私が自分で作ったのですから、それには国の設定した価格はありません。私は人びととの合意で地元の相場で売っていました。それを「仲買」と見なす根拠はありません。わが国の法律では国が設定した価格の品物に価格を上乗せして人びとに売れば「仲買」と見なされます。私は国が価格を設定したものは売っていません。私が「多数の家畜を売った」という非難もされました。この羊は私が自分で育て、増やしたのです。ウランバートルから追放され、この地方に初めて来た当初は1頭の家畜もなしに来ました。誰かからたくさんの羊を買い、別の人に売ってもうけたわけではありません。私が自分で労働したからこそ、羊がそれほど多くなったのです。自分の私有家畜は誰に何トゥグルグで売ってもいいはずです。こういったことで私が法を犯したと見なす何の根拠もありませんでした。私は「わが国で現在実施されている法律では私を裁くことはできない」と知っていました。他の法律はありませんでした。

私はウランバートル市の有名な「ガンツホダグ拘置所」に76日間に入れられ、取調べを受けました。ガンツホダグ拘置所は東ドイツが建設してくれたものです。第2次世界大戦時、ドイツは多数の監獄を作って経験を重ねていたのでしょう。その経験を東ドイツが受け継いだのでしょう。アウシュビッツ、ブッヘンバルトなどという、ドイツのファシストが建てた有名な監獄がいくつもありました。ファシストはこういった監獄で大勢を、とくにユダヤ人を集団で焼き殺していたものです。わが国に東ドイツが建ててくれたガンツホダグ拘置所は、そういった監獄のレベルには届かなかったでしょうがね。しかしがっちりした監獄ですよ。トゴントゥムルという捜査官が取調べをしました。私はその人としまいには親しくなって遠慮なしに話すようになりました。その人は「あなたは国営商店網で販売していた、国が設定した固定価格の商品を買い、値段を上乗せして売るといことはしていません。もし、店の商品を高値で売れば仲買になりますが」と言いました。トゴントゥムル捜査官はウブルハンガイへ行き、私の暮らしていた場所を訪ね、調べてみました。大勢の人と会いました。それで仲買をしたという証拠は見つからなかったのです。私の売ったものはどれも自分で作ったものだったことが明らかになりました。また、私の売った家畜は他人のものではなく、自分自身の家畜だということも明らかになりました。こうして私を処罰するための法的規定は見つからず、行きづまりました。そこでトゴントゥムル捜査官は「あなたを処罰することはできないようだ。処罰するための法的条項はない！」と言いました。

そうこうするうちに状況は急変してしまいました。上から、つまり内務省から私を「必ず処罰せよ」という命令が来たのです。現在実施されている法律の条項ではなく、何と戦争直後、1945年から1950年のあいだに実施されていた、閣僚会議が挙げた、ある決議があったようです。その決議は当時の新聞に掲載されたものでした。私はそれを読んだことがまったくありませんでした。その決議は「輸出入の製品による何かしらの用途品を作ること、それを販売することを禁止する」という趣旨だったようです。その決議によれば、ポリガールとサリスは輸入品に相当します。輸出品の中には家畜の皮革がすべて含まれます。この決議によれば、ものを作った人はみな投獄されることになりますよ。これはモンゴル人にももの作りを禁止するということになりますよ。このようにたいへん極悪な決議があげられていたのです。そしてとくに実施をやめていたこの極悪な決議を見つけ、再び持ち出し、私を処罰したのです。これもまたたいへん不公正なことですよ。その時には実施をやめ、すっかり忘れられた、そんな決議を見つけてきて処罰するのですから。こうして控訴する権利もなく処罰されたのです。私は刑務所に入るよりほかなくなりました。

私は服役中、監房の料理係になりました。ときには看護師にもなりました。囚人が病気にかかれば私が注射をしてやっていました。私のいた刑務所ではいつも製材作業をしていました。木を切って丸太にするのです。たいへんな重労働です。私は服役期間を有効に過ごそうとよく考えました。財務省の副大臣だったD.タンガドという人は私の従弟です。党中央委員会の第6回総会后、彼は「反逆者ローホーズの仲間」として解任され、党を除名されました。当時「ローホーズ、ニャムボー、ソルマージャブらの反党派の一味」として何人も優れた人物が仕事や生活を破壊されたのですよ。

私たちの事件にはとても多くの人が連座させられました。モンゴル社会全体を揺るがす大更迭が行われました。何の罪もないのに、単に私と知り合いだったために「反逆者ローホーズの一味」との汚名を着せられ、党を除名され、職務を解かれ、人生を狂わされた人は大勢いました。タンガドはズーンハラー鉄道の木材加工場の所長を務めていました。その木材加工場にはロシアの専門家が大勢いましたよ。近くなのでタンガドは私のところにしょっちゅう来ていました。彼はソ連の新聞や書物を持って来て差し入れてくれました。私はその新聞や書物をいつも読んでいました。私は自分でもトランジスタ・ラジオを持っていました。それをいつも聞いていました。こんなふうにして5年間で過ぎました。

私と一緒に服役していたのは法を犯した「重大刑事犯」ばかりでした。私と同じような法律に基づいて服役していた人はいませんでした。いるはずもありません。このような法律で服役していたのは私だけだったのです。

そして私は折にふれて受刑者たちに「科学・技術の成果」というテーマで話をしてあげました。受刑者はその話を聞くのを好みました。彼らはとても疲れています。それで

食事後に私が話をするのが日課になりました。受刑者は疲れていても私の話を好んで聞きました。私は受刑者の疲れをとる食事を自分で考案してよく作ってあげました。「煮こごり」というおいしいものがあることをあなた方はご存知でしょう。それをキビと混ぜるととてもおいしい料理になるのです。受刑者たちの好物でした。疲れた受刑者にこのような食事を食べさせると、疲れがすぐとれるのです。ユルー川には魚がたくさんいます。秋に魚をたくさん獲りました。大きなトル〔イトウに似た魚〕をユルー川から荷袋にいくつも獲るのです。私は監房の調理場の床下に「地穴貯蔵庫」を作りました。そこに魚を貯蔵しました。とても疲れた受刑者に魚のスープを出します。「疲れた時には魚が疲れをしっかりと取ってくれる」とモンゴル人は言うのです。料理係には読書する時間があります。さまざまな料理の作り方の本を頼んで持って来てもらいました。そしてそういった料理を自分で作って覚えてしまうのです。

私は服役中、本を読んで料理をする以外に、指輪も作っていました。食事用のフォークやスプーンはステンレス製です。またメイン料理用の皿もそのような材料できています。私のいた監房ではスプーンやフォーク、皿がとても傷んで使えなくなっていました。このように使えなくなったものは帳簿から抹消されて廃棄されました。私は、このように使えなくなって帳簿から抹消されたスプーンやフォークを廃棄前にもらいうけていました。そしてそのステンレスで指輪を作るようになりました。私は金鉢、はんだごて、はんだづけをするのに必要な酸、錫などを頼んで取り寄せました。そして、鉢を使って指輪を切り出します。その真上に2羽の白鳥の形を作ります。その2羽は首のところできっついているのですよ。青い地に模様を入れます。ステンレスを磨くとガラスのようなつやが出て、どこから見ても顔が映るようになるのです。このような指輪を作っていました。それを25トゥグルグで売るようになりました。服役して、刑期を終え、出所する人たちが私の作った指輪を買いました。

受刑者は労働報酬をもらいますね。しっかり働けばお金もたくさんもらえます。それで受刑者から私に指輪の注文が来るようになりました。その監房の看守も私の作った指輪を買うようになりました。こうして私は刑務所の中でもお金には困らなくなりました。妻には1年に2度、私との面会許可が与えられました。彼女は子ども2人の手を引いて1年に2度面会に来ました。私には他の人との面会許可は与えられませんでした。面会のたびに妻には1,000トゥグルグを渡していました。

**KY**：ベルレグ刑務所での服役中、奥様や子どもさんたちはどこで暮らしていらしたのですか？

**LO**：人民革命党の第6回総会で私が党書記長の個人的欠点と政策の誤りを批判し、「党からの措置を受け」、追放されたこの処罰は私に対するものでしたが、最も苦勞し、生活を破壊されたのは、妻と子どもたちです。この期間、1番苦勞したのは彼らです。最も破壊されたのは彼らの生活です。私は苦勞も、何も失いませんでした。私の自

由は制限され、内務省からの恒常的な監視や圧迫を受けていましたが、私は人びとのあいだで生活していました。私に対する処罰の判決が裁判所から出され、わが家の全財産が没収されたということは話しましたよね。そういうわけで妻と子どもたちはウランバートルに来て、再び家屋を手に入れました。

子どもたちをウランバートルで学校に入れる必要がありました。長男は10年生を終えました。私が投獄される前、党中央委員会統制委員会から子どもの大学入学許可をとってやりました。そのころ、うちの子どもは一般の子どもとは違う目で見られていました。「反逆者ローホーズ」の子どもたちは普通の人の子どものように大学に入ることができず、禁じられていました。そこで私は子どもを大学に入れようと統制委員会まで行きました。そこで、子どもを大学で学ばせる許可が私に与えられたのです。ブルガリアの「軍建築学校」に行く許可をもらいました。当時「反逆者ローホーズ」について内務省に情報を提供して名声を得ようと、党员や国の役人は競い合っていました。そういう連中がそれを台無しにしました。そういう連中が、私の子どもを進学させませんでした。「反逆者ローホーズ」の子どもを進学させることを一部は恐れ、一部は名声を得るために奔走し、そしてその犠牲となって私の子どもは学校に行けずに残されました。「反逆者ローホーズ」の子どもを大学に進学させれば、一部の人はその「一味」として疑われる危険が本当にあったのです。ひとたび内務省からそのような嫌疑を掛けられれば、その人の人生と運命はそれで終わったのと同じです。そういうわけで一部の人は私と関わることを本当に怖れていました。そして息子は進学できず、兵役につきました。兵役期間をまっとうして除隊してきました。それからウランバートル市の第3発電所で労働者になりました。そこには20年ほど勤めましたよ。

モンゴル国憲法によれば、16歳になったモンゴル人は全員「身分証明証」をもらう資格があります。けれども、うちの子どもにはさっぱり身分証明証が交付されませんでした。16歳になっても身分証明証をくれなかったのです。娘の1人は成績の優秀な子どもでした。10年生を終えました。試験の結果では、外国の学校に行く資格ができました。試験委員会もそのような決定を下しました。ところが身分証明証がありません。身分証明証がなければ国外パスポートも取得できないのです。それで妻は先生がたと一緒に1つの方法を考え出しました。彼らはうちの子どもの出生証明書を初め、すべての証明書を変えることにしたのです。これはたいへん難しい作業です。ほとんど無理なことです。そして先生がたの協力により、新しい証明書をもらうことになりました。それには「父姓」を変えて書いてありました。こうして別の「父姓」をつけてやっと国外パスポートを取得しました。こうしてソ連はウクライナのリボフにある国立大学で地質学を専攻し、卒業してきました。このように娘はこっそり進学し、卒業したのです。

この娘以外は大学に入ることができませんでした。娘は卒業して帰国後、地質学の仕事で地方へよく行きました。のちに結婚し、子どもが生まれました。今は自営業者にな



りました。今その娘には子どもが4人います。最初の子たちはモンゴル国立大学をまもなく卒業します。あとの2人も大学に入ったばかりです。私立学校で日本語と英語を学んでいます。その中の男の子は私の金属細工や木工を受け継ぎました。とても上手になりましたよ。モンゴル靴を作るのも上手です。それに銀でもいろいろ作ります。

I L : ベルレグ刑務所を出たのは何年ですか？

L O : 刑務所からは1982年に出てきました。私は刑務所から出るとき、「刑務所を侮辱する事件」を起こし、再び刑務所に入るかもしれない状況に陥りました。それはこういうことだったのです。私は刑期が終わりに近づいたころ、家人に対して「ビーバーの帽子、綿の民族衣装、伝統的な模様のついた長靴など私の衣服を持って来てください！」と手紙を書きました。彼らはもちろん私の希望通り、冬用のすばらしいビーバーの毛皮の帽子、伝統的な模様のついた長靴、ドイツ製の綿布で作った民族衣装を持って来てくれました。私はそれらを身に着けて、刑務所に一緒に入っていた人びとと共に、2日間、羊の肉などご馳走しました。そして、別れの儀を果たして、刑務所長に「さようなら」と挨拶をして出て行きました。

するとまもなく「ローホーズはモンゴルにはない高価な帽子、伝統的な模様のモンゴル靴とモンゴル服を身に着けて、囚人たちに食事をおごって、豪勢にふるまい、社会主義の刑務所を侮辱した！」という噂が出て、ひと騒動起きたのではないのでしょうか。そもそもそんな噂を誰が流したのでしょうか、わかりません。ビーバーの毛皮帽子、伝統的な模様のついたモンゴル靴、ドイツ製の綿布のモンゴル服、これら3点がモンゴルには珍しいもので高価であることは本当です。当時は、刑務所にいる人はもちろんのこと、外を自由に歩き、重要な仕事をしている人びとにとっても得ることのできない贅品だったのです。「思いがあっても力がいたらない！」という表現がモンゴルにありますね。この噂はまあそのうち消えました。しかし、注意しなければならないということを私は再度確認しました。

出所してまっすぐウランバートルに来ることはできませんでした。最初の私に対する判決では「出所後ハルホリンに3年間居住」という規定があったのです。これはどうしたって政治的内容の条項ですよ。内務省を通じてツェデンバルに告げ口し、私を刑務所送りにしたハルホリン国营農場の農場長は、私が投獄されたあと、たいへん大きな賞を受けました。ツェデンバルは彼に「モンゴル国労働英雄」の称号を与えたのです。私が出所した時、その農場長は私をととても怖れたのでしょうか。その人は「私はローホーズをハルホリンに受け入れない」と拒否しました。そして内務省は裁判所の決定を突然変え、私をフブスグル県へ送ると決めました。「裁判所の決定を勝手に変えてはならない！」と私は抗議しましたがだめでした。こうしてフブスグル県へ行くことになりました。

フブスグル県のダルハド盆地というところへ行きました。これはフブスグル県バヤンズルフ郡です。セレンゲ川の水源地です。そこでは「副業経営生産隊長」という職務が与

えられました。これは食堂やホテル、木材加工などをして郡の予算に収入をもたらす仕事です。そこで私は1人で3年過ごしました。

そこではフブスグルの人びととたいへん親しくなりました。ここにはダルハドの人びとが住んでいます。この人たちは人柄がよく、勤勉な人たちです。話好きで、ユーモアのある人たちです。昔のモンゴルの習慣をよく知り、よく保持している、そんな土地なのです。この地方は山がちなのでヤクがたくさんいます。乳製品はおいしいし、たくさん作ります。木工が得意で、木の彫り物をよくします。男はみな木工をします。

私はそこに12人分の公衆浴場を作りました。日本のホンダ発動機を使ってお湯を沸かすようになりました。ユーゴスラビア製のシャワーを取りつけました。それから「のこぎり台」という小さな木工作業所を作りました。トソンツェンゲルの木工所で作っていた机や椅子の設計図を使い、その近隣の郡の中学や病院、文化会館の注文で机や椅子を作っていました。そのような木製品を作ると、とても高い値段で買ってくれました。そしてバヤンズルフ郡の予算に大きな収入をもたらすようになりました。ここでは数多くの新しいものを導入しました。郡ではたいへん評判になりました。

そうしているうちに1985年を迎えました。私が完全に放免される期限が来ました。この時、内務省はまたもや私の邪魔を始めました。彼らは私にフブスグルの身分証明証を交付しようとしてきました。もし私がフブスグルの身分証明証を取得すれば、ウランバートルでは生活できなくなります。当時は地方の人間が首都に行って生活することが認められていませんでした。もし地方から首都に来て生活すると決めたなら、「特別許可」をもらう決まりになっていました。人民革命党は住民の移住を厳しく制限していたのです。厳しい決まりがあったのですよ。地方の人間は首都では何の証明書もなくこっそり生活するしかほかに方法はなかったのです。それで私はこのような企てに抗議しました。「私がどこで暮らそうと私の自由だ。もう私に指図するな。どこで暮らすかは自分で決める！」と言いました。このように戦っているうちに追放期間が終わり、ウランバートルにきました。

ところが、ウランバートルで生活することをやはり許可してくれません。当時の党書記長はJ.バトムフ、閣僚会議議長はD.ソドノムでした。彼らは私に「絶対に地方で生活しろ」と言っていました。それで「私は単身、地方へ行って生活する。妻子はウランバートルで生活する」という条件を出しました。私のせいで家族の誰も身分証明証がなかったのです。ところが、この条件もやはり許可されませんでした。それで、私と妻はこのような状況からの出口について話し合いました。そして「形式上婚姻を取り消して、子どもを妻の籍に移そう」と決めました。こうして私たちの婚姻を形式上取り消してもらうことを願い出る申請書を裁判所に提出しました。ところが、裁判所は婚姻取り消しをしてくれずにしばらく経ちました。本当に別れるのか、そうでないのか、ということ調査していたのでしょね。それに他の目的もあったとも考えられます。それで

私たちは「本当に別れるのです」と言い、説明をしているうちにやっとなり婚姻が解消されました。そして、裁判所の決定に従い、子ども全員を妻の籍に移しました。この後、私は内務省に、ゴビアルタイ県チャンドマニ郡に住むことを希望している旨伝えました。私のこの希望を内務省は直ちに許可しました。こうして私は1985年の末、自分の生まれたチャンドマニ郡に再びやってきました。そしてそこで1人暮らしをしていました。

家畜の飼育や現金収入を得る方法を知っていたので、そこへ行ってから家畜持ちにもなりましたし、金持ちにもなりました。その時、私はモンゴル・デール用の銀ボタンを作っていました。その地方ではデール用の銀ボタンを作る人がやはりいなかったのです。それでいて使いたいと思っている人はかなりいたようです。人びとは私のところに銀ボタンを買いに来るようになりました。やはり注文がたくさん来るようになりました。当時、私は羊の皮で靴を作る方法を習得していました。羊の皮で作る、木の染料で染めるのです。自分でその靴を履いてウランバートルに来て見たところ、人びとは大いに関心を寄せます。それで、それをまた作って欲しいという人に売ることになりました。人びとはそれを250トゥグルグで買うようになりました。こうしてお金に不自由しなくなりました。家畜の頭数は自分で飼育できる規模に保ちます。そんなふうにして生活し、ウランバートルにいる妻子に冬用の肉や乳製品、お金の仕送りをするようになりました。

そのうち、1985年にソ連でゴルバチョフのペレストロイカが始まりました。私は新聞や出版物をよく購読し、ニュースを詳しく読んだり聞いたりするようになりました。「私たちの生活に大きな変化が起ころうとしている」ということを感じ始めました。わが国にペレストロイカの最初の嵐が吹き始めました。そして1989年、ウランバートルに戻って来たのです。

## 20 20年後のツェデンバルの更迭

I L：1984年8月に開催された人民革命党中央委員会第8回臨時総会が、ツェデンバル党書記長をすべての役職から解任する決定を下した時、ご自身はフブスグル県にいらっしゃいましたね。この総会の知らせはどのように聞きましたか。

L O：そのころは、副業経営生産隊長という役を務めていました。うちの生産隊の人たちはとても良い人たちでした。話好きで、ユーモア好きな人たちです。ある日職場に来たところ、生産隊の人たちが両側に並んで立ち、拍手をし、握手をして私を祝福するのです。最初は何が起きているのかわかりませんでした。

「君たちは何だかって私を祝福しているのだ？」と驚いて尋ねました。

すると、

「あなたのおっしゃっていたあのツェデンバルが解任されたのですよ！」と言います。

私は少々警戒しました。生産隊の中にも私を探る密告者がいたのです。彼らのしわざかもしれないでしょう。それで自分で、ラジオの「総会の公式ニュース」を聞きました。ツェデンバルはすべての役職から解任されていました。党の書記長はバトムフになっていました。そのとき、小学校で学んでいた時に覚えた言葉を思い出しました。1たす1は2です。しかし、足す数と足される数を入れ替えても、それは2になります。「ツェデンバルの代わりにバトムフがなってもとくに変化は生まれません。しかし、まあいい。ツェデンバルを解任したことはお祝いしよう。シャンパンを持って来い！」と仲間と言いました。私の生産隊の仲間が1人走り出て、郡の中心地の店でシャンパンを1瓶買って来ました。そして、それを開けて生産隊のみなどと分け合って飲みました。

こうしてツェデンバルが、彼自身が作った「取り巻き」によってすべての役職から解任されたことを知りました。こんなことがいつか起きると私にはわかっていました。1964年の総会で発言した時、私はすでにこの考えを述べていたのです。これはあまりにも遅すぎる決定でした。ツェデンバル解任の知らせを聞いた地方の人びとが、聞いて残念がる様子は一切見られませんでした。仕事や生活には何の変化も生まれなかったのです。チョイバルサン死去の際には、様子はとても違っていましたよ。「国家を指導する人がいなくなった！」と多くの人が惜しまれました。われわれモンゴル人には1つ良い習性があります。あることがらを見て実に正確に評価をします。そして、この評価をその場では表に出しません。まさに必要な時になって初めて表に出します。評価する時には実に正確に評価するのです。

1985年に、うちの子どもは「身分証明証がない」という理由で解雇されました。妻もやはり「身分証明証がない」という理由で解雇されました。私は1989年にウランバートルに戻って来て、自分用の小さなゲルを建て、金属細工の仕事を少々しました。例の「鑄造細工」ですよ。手軽にできる仕事ですからね。仏具や灯明の器、仏像、法輪、香炉などを作っていました。こういったものをホテルに置くと良く売れるのです。1つ50~100トゥグルグで売っていました。こんなふうに暮らす中で1990年を迎えました。民主化運動が起こりました。1990年3月初めに民主化運動の一群の若者たちがスフバートル広場でハンガーストライキを宣言しました。彼らの提示した要求に従って3月後半に人民革命党中央委員会の政治局が総辞職しました。民主化運動の要求によって政府はこのように変化を始めました。人民大会議の幹部会議長や閣僚会議議長が変わり、政府は辞職しました。そして改組された人民大会議の幹部会は、憲法に追加・修正を加え、それを基礎に人民大会議選挙を公示しました。この選挙で人民大会議の代議員に私たちは立候補しました。

当時、人民大会議の代議員に推薦するという申し出が私のところには4ヶ所から来ていました。私はゴビアルタイ県を選びました。人民大会議選挙は公示のとおり、1990年7月29日に無事終わりました。これはモンゴル初の民主的選挙だったのです。

私は自分の選挙区で勝ちました。私は人民大会議の代議員になりました。こうして私は25年ぶりに国家の政治の世界に再び関与することになったのです。この間、多くのものが変化していました。

KY：人民革命党の処分はどうになりましたか？

LO：1990年3月に臨時党大会が開催されました。その大会でトゥムルオチルの「反党活動」と「ローホーズ、ニャムボー、ソルマージャブの反党分派活動」事件に関与した人は全員、名誉回復されました。党籍も回復してくれました。そのとき、モンゴル最高裁判所の総会も開催され、私を処罰した「裁判所決定」が無効とされ、私は名誉回復されました。そして私たちに政治的冤罪による迫害の賠償金が払われました。また、私が裁判所の処分を受けて没収された財産も検察の決定によって再評価して払い戻してくれることになりました。私が裁判所の処分を受けて没収された全財産は値がつけられて売られていたのです。車には非常に低い値がつけられ、6,000トゥグルグで売られていました。これは司法当局自身が法に違反したということです。彼らの知り合いが安く買ったのでしょうか。また三輪の「ウラル」オートバイは1,000トゥグルグで売られていました。当時、国の役人はたいそうモラル崩壊を起こしていたようです。自分の担当している国の職務を誠実に遂行する人はわずかになっていました。たいてい知人や兄弟、地縁、血縁のコネで役所に入っていたことがこの主な原因になっていました。私が没収されたものすべてを検察の決定により再評価し、払ってくれました。

IL：つい最近まで人びとのあいだで語られていた面白い話が1つありますね。人民大会議幹部会第1副議長のS.ロブサン氏がウブルハンガイへ行ってみると「反逆者ローホーズ」はすっかり富農になっていて、とても高価な三輪オートバイに乗り、道で迎えて会ったそうだ、という話があるでしょう。

LO：人民革命党の歴史には「富農」という用語があります。これは1950年代の末に、人民の財産である家畜を社会化して農牧業ネグデルを設立した時期に生まれた用語です。当時、財産の豊かな裕福な市民を「富農」と呼ぶようになりました。彼らは自分の財産である家畜の社会化に強く抵抗していました。ですから彼らをこのように呼び、彼らの抵抗を抑えるための特別政策を実施しました。私は当時、自分の財産も豊かで、家畜もたくさんいました。この姿は多くの人の反感を買い、「富農」のように見えていたかもしれません。人民は「富農」を嫌っていたわけではないのです。この人たちは自分の力と労働によって自分の財産を作った、一言で言えば実務の能力があり、あらゆるものを処理できる、自分で考えることのできる人たちです。仕事もせずに怠け、ものごとを処理せず、頑固にしているだけでは財産はひとりで生まれては来ないのですよ。どこでも、いつでも、そういうものです。私の会った人はロブサンではありません。私はドンドゴビに行った時、ツァガンラミン・ドゥゲルスレンと会いました。だいたいそのころには公的な人はみな私と会うことを怖れていました。私と会えば「反逆者ロー

ホーズの一味」と見られ、やはり処分されますからね。ですから、みな私から逃げたものです。私はウブルハンガイ県のサント郡に行き6年過ごしました。そしてそこから移住をしたい。許可されない。ネグデルの家畜番をしていたので、受け入れてくれない。放り出して行ってしまえばやはり大ごとになります。

そのころ人民大会議の選挙が行われました。ドンドゴビ県の選挙区からはツァーガンラミン・ドゥゲルスレンが代議員に立候補しました。そして、彼が自分の選挙区の選挙民に会いに来たことを私は耳にしました。そのころ私は三輪オートバイで遠くにも近くにもよく出かけていました。革繩を作り、ドンドゴビの北部の郡で売っていました。牛1頭分の皮から長さ12尋（両手を広げた長さ、約160センチメートル）の革繩50本が作れます。革繩5本を子馬つきの雌馬1頭と取り替えていました。高価な品ですよ。私は牛まる1頭分の皮で革繩を作り、ドンドゴビの北部の郡に入り、子馬つきの雌馬12頭とラクダ2頭と引き換えにして移動していました。私の訪れたちょうどその郡にドゥゲルスレンが来るはずだということも知っていました。それでその郡から生まれた「県の最優良牧民」D. プレブジャブという人の家でドゥゲルスレンを待ちました。ちょうどその家に来るといこともわかっていたのです。

そしてプレブジャブと私は、蒸留酒を少し飲みながら待ちました。そのうちドゥゲルスレンが急いで到着しました。彼に随行して人が大勢来ました。県の幹部がみな来ています。10台以上のUAZ-469〔ロシア製自動車〕が来ていました。プレブジャブの一家は全員、彼を迎えに出ました。私は出ませんでした。きれいな羊の白いフェルトを縫い合わせて作った座布団にあぐらをかいていました。するとドゥゲルスレンがゲルに入ってきました。彼は私を見ると、

「何でお前がここにいるんだ？お前のいるべき場所はここではないだろう！」ととても立腹した様子で尋ねます。私たちはモスクワの共産党大学に一緒に留学したことがありました。お互いをよく知っています。会わずにずいぶん経っていました。

「私がどこにしようとする君には関係ないよ！私は党中央委員会に“派遣されて”来た牧民だ。牧民が友人の牧民の家に来てひと休みしているのさ！私がどこにいるかは君の担当の問題じゃない！」と彼に言いました。そして、

「それにしても君はこんなたくさんの車と人を連れて、こんないなかで何をしているんだい？こんな場所で君にできる仕事は1つもないぞ！」と付け足しました。すると彼は、

「私に何ができるかはお前が判断することではない！私はもうすぐ人民大会議の代議員になるところなんだ。今回は選挙民と会いに来たんだ。お前に会いに来たんじゃない！これはお前には関係のないことだ！」と見下したような態度をとります。私たちがこんなふうにはけんかのような強い言葉の応酬をしていると、彼と同行している人びとがゲルに入ってきました。その近所の牧民たちもゲルに集まってきました。そしてドゥゲ

ルスレンは選挙用の宣伝の話を始めました。彼は立ち上がり、まっすぐ私を指差し、

「みなさんはこのローホーズをご存知ですか？これはモンゴル・ソビエトの友好に反対の態度をとり、ソビエト人民の大きな支援の重要性を評価せず、党の大きな指導力を否定し、社会主義建設中のわが国の発展における偉大な成果を見下し、不満に思う、わが党に対する反党分派活動の首謀者ですぞ！」と説明します。そこで私も立ち上がり、演説しました。

「この牧民のみなさんはドゥゲルスレン君や私よりよほど本や新聞を読み、ラジオを聴いている人たちだ。私が何者であるか、この人たちは君に教えてもらわずともよく知っている。しかし、君のことは良く知らないだろう。これから私が君のことをこの人たちに紹介してやる！」と彼に言いました。そしてゲルに座っていた人びとに向かって、

「このドゥゲルスレンという人と私はモスクワの共産党大学で同じ先生に教わり、同じ釜の飯を何年も食べ、昔から良く知っている間柄です。ロシア料理を何年も食べたこの友人は、ロシア語は覚えず、酒やビール以外にとくに学んだものもなくモンゴルに戻って来た人間ですよ。ロシア女性の家に行き、酒を飲みすぎ、つぶれてタライに頭をつっこんで寝ているところを私たちが見つけ、モンゴルの名誉を考えて、風呂に入れ、服を着替えさせてやり、人間らしい姿にしてやったということが何度もあります。今日この人は人民革命党中央委員会政治局員になったとふんぞり返り、みなさんに投票してもらって人民大会議の代議員になるつもりで来ているようです。みなさんにはとても偉い人に見えているでしょう。しかし、実際にはこの人はいつそこから追出されるかも知れないちっぽけな人間なのです。みなさんに何とでも言う奴ですよ！」と言いました。するとそこに集まった人たちはどうすることもできません。彼らはみな驚いています。ドゥゲルスレンの顔は真っ赤になって苦しそうです。それで、その集会は好ましい会にならずに終わりました。ドゥゲルスレン自身はとても正直者なのです。会のあと、彼は私のところに来て「君は私と会って何を話すつもりだったんだ？」と尋ねます。

「私は君と会おうと思って待っていたんだ。私が最初に党からの措置を受けた時、党統制委員会は3年という期限で地方に送った。ところがそれから6年が過ぎた。何度も上申書を提出したが、返事が来ない」と彼に言いました。

すると彼は、

「ああ、そうか。ウランバートルに帰ったらツェデンバル書記長に会い、君のことを話してみよう」と言います。そして私たちは握手をして分かれしました。彼はウランバートルに戻り、この問題についてツェデンバルに話したのでしょうか。しかし、ツェデンバルは許可をしないまま終わったのでしょうか。

## 21 民主化以降

LO：1990年9月3日、人民大会議の会議がウランバートルで始まりました。新しく構成された人民大会議は最初の会議で大統領候補の問題を議題にしました。

人民革命党からボンサルマーギーン・オチルバトが推薦されました。他の政党は彼を支持しました。また私も推薦されました。こうして私たち2人はモンゴル国大統領になるために競い合うことになりました。この時私は多くのことを思っていました。「大統領になるかもしれない。モンゴル国の元首は責任ある職務だ。私は70歳を超える。それに長年、地方で家畜の世話をして生活し、何年も刑務所に入っていた。現在の社会生活からは取り残された。党の古い影響力はほとんどそのまま残っている。私は1人それに立ち向かって20年余りが経った。今、私にそれを倒すことができるかどうかははっきりしない。やっと始まったばかりのこの変革と刷新の不可逆のプロセスというのもまたはっきりしない。歴史の輪がどちらに回るかはわからない。この仕事は精力的で、影響力のある、若い人がしたほうがいい！」という考えが浮かびました。それで競わないことに決めました。こうしてオチルバトがモンゴルの初代大統領として選出されました。当時、社会心理はかなり変わっていましたよ。私がかんばっていたら大統領になりえたかもしれません。大統領の宣誓式で私はボンサルマーギーン・オチルバトを祝福しました。

こうしてこの後、国家小会議と政府を作る活動に入りました。私はモンゴルの新しい憲法を承認する人民大会議の副議長として働くことを受け入れました。モンゴルの新しい憲法は1992年1月13日に承認されました。こうしてモンゴル国は民主主義と刷新の道に断固として入ったのです。1990年以降、わが国の生活にはたいへん大きな変化が起きました。この中で良いことはたくさんあります。それと同時に良くないものもたくさん生まれました。私たちは混乱の中で1996年を迎えましたよ。民主主義と市場というものを現実知っている人はいませんでした。人民革命党の連中は全然知りません。民主化運動の側の人たちの中に理論を読んだ人はいたでしょう。しかしそれを実践しようとしても多くの困難にぶつかりました。モンゴル人民革命党は反対し、「ああでもない、こうでもない」と言い張り、どれも失敗させていました。5年余りは実に混乱して過ぎましたなあ。1996年の国家大会議選挙で民主連合が勝利し、政権を握りました。民主主義と市場経済が一貫して実施され始めたのはこの時からですよ。農牧業ネグデルの解体をし、家畜を飼い主に与えたのは正しいことでした。その後、住宅も私有化して持ち主ができました。これは正しい事業です。

私が初めてウブスハンガイ県サント郡に行った時、その郡は穀物も野菜も少しも栽培していませんでした。ネグデル員は家畜の世話だけして暮らしていました。郡には他の産業がまったくありませんでした。郡の予算は国の中央集権的予算から直接配分されて



いました。郡自体は利益の上がる事業をまるでしていませんでした。帳簿はいつでも赤字でした。そして国から補助金をもらって、日々をやり過ごしていました。個人の商売や取引は一切ありませんでした。およそすべての農牧業ネグデルはこんな様子だったのですよ。そして私はその郡で、自分のしてきた仕事の経験を活かし、助けになろうと考えました。運転手たちに頼んでウランバートルからタマネギやジャガイモの種を買って来てもらいました。それから郡のツァルガ生産隊に、土壌と水の良い畑を選び、柵で囲って野菜を植え始めました。自分のためではなく、ネグデルを手助けしようと考えたのです。私は自分のラクダで牛乳缶40杯の水を運び、畑に水遣りをするようになりました。タマネギはとてもよく育ちました。郡の党委員長とネグデル長たちに、自分のしている作業を説明しました。どんな目的でそのような作業をしているのかも詳しく話しましたよ。そのうち私の植えたタマネギや野菜がよく育ち始めると、私がいないうちに、その柵の中に子羊や子山羊、犬が入って植えたものを踏みつけ、食べるものは食べて荒らすようになりました。私は柵の入口をしっかりとふさいで出かけるのですが、それでも入ってきます。それで不思議に思って調べてみると、その郡の党委員長がわざとそんなことをしかけていたのです。それで「私はこの人たちを助けるつもりでいるが、この人たちは私に対してこんな仕打ちをしている。これは私のことを社会自体が受け入れられないでいることの表れだ。状況がこうである以上、わが身を考えた方がいいようだ」と考えるようになりました。

こうして私は自分のためだけに働くようになりました。わが国の社会にはこんな雰囲気はすっかりできてしまいました。「ローホーズは反逆者だ！反逆者の中の反逆者だ！」という認識を世間に抱かせたのです。一方で農牧業ネグデルなどは自力で経営を向上させ、独立採算でやっていくべきなのにいつも上からの命令を遂行するばかりで、自分で考えたり何かしたりしないことに馴らされてしまっていました。こんなわけでわが国には当時、利益の上がる経営状態の農牧業ネグデルはほとんどありませんでしたよ。いつでも国から補助金をもらっていました。経営会計、利益といったものをちっとも知らなかったのです。それでいて知っているものといえばイデオロギーでした。

サント郡に行ってから、私のしたもう1つのことがあります。冬の野菜の貯蔵法を考えついたのです。モンゴル・ゲルでは常に火を炊いています。ですからストーブの下に穴を掘って「地穴貯蔵庫」のようなものを作り、そこにジャガイモを貯蔵するようになりました。外はとても寒いのでジャガイモは凍ります。ストーブの下に掘った穴でならジャガイモは凍りません。こうして冬のあいだじゅうジャガイモを使った料理を食べていました。地方の家庭はいつもアルガル〔乾燥した牛糞〕を火にくべますね。アルガルからはたくさん灰が出ます。その灰を常に掻き出していないと火がつかえません。灰を常に掻き出すというのもまた労力のいることです。私は冬用のゲルを建てる前に、ストーブの下に穴を掘り、そこに灰が落ちるようにしました。そしてその落ちた灰が一杯

になったら、ゲルのすそを通して外に出せるようにしました。わが家の仕事をたいへん軽減したわけです。こうしてモンゴル・ゲルの暖房システムの改善を試みました。

私はサント郡にいた時分、伝統的な手法で白フェルトもたくさん作りました。当時、フェルトの需要は大きかったのに、フェルトを作らなくなっていたのです。工業的方法で作ったフェルトは、国営商業機関を通じて入っていましたが、とてもわずかでした。地方の牧民がゲルを暖かくしようとフェルトを探しても手に入らず、大きな問題になっていました。地方で家畜を世話して生活している人には、フェルトはとても必要な品です。要するにフェルトを作るための羊毛がとても少なかったのです。牧民は自分の羊の毛を刈るとすべて国に納めていましたから、フェルトを作るための羊毛がなくなってしまったのですよ。しかし、うまくやればフェルトを作るための羊毛はできるものです。わが家には400頭余りの羊がいましたでしょう。その羊の毛はすべて国に納めなくてはなりません。しかし、それより少しだけ羊毛の余分が出ました。家畜をよく肥らせ、羊毛は一刻も早く刈り取らなければなりません。それができれば多少の余分の羊毛が出るのです。そうすることのできた家庭はノルマ分の羊毛を国に納めたあと、多少の羊毛が余分に出たものです。しかし、中には羊毛がノルマや計画に届かずに不足する家庭もあります。そんな時、多少の余分が出た家庭から羊毛を金で買い、不足分を補っていました。私はそのような余分の羊毛を家々から買い集め、フェルトを作るようになりました。1年間にかんりのフェルトを作りました。そして伝統的な手作業で作った白いフェルトを人びとが500トゥグルグの値で買いました。

その郡にいた時には「ベルト製グルムの父ローホーズ」という言い方をされるようになりました。私は「ベルト製グルム」を作って売りました。ナライハ炭鉱で地中から石炭を引き上げる幅広で平たいベルトがあります。その表面はゴムで、中はズックです。そのゴムをはがす上手な方法が見つければ恰好のグルムになるぞと思っていました。そしてそのベルトを熱いストーブでしっかり加熱してみたところ、ゴムが簡単にはがれます。ゴムをはがす方法が見つかったのでベルトからグルムを切り出し、ゴムの表面に模様を描き、それにそって鋭いナイフで切りました。それからベルトを熱し、例の切ったゴムをはがすときれいな模様が出てきました。こうして模様の穴に染料で色をつけます。とてもしっかりして美しいグルムができます。こうして近隣のすべての郡の牧民がベルト製グルムの持ち主になりました。その後、モンゴル中の牧民がこのようなグルムを使うようになりましたよ。

銀のまるいボタンをウブルハンガイの人たちはよく使います。私はゴビアルタイのチャンドマニ郡へ1985年に行ってから、そういうボタンを作りました。作るのは簡単ですが、とてもきれいなボタンですよ。昔はよく使われましたが、しまいに使われなくなりました。わが国で民族衣装や民族装飾品が使われないようにしたのは人民革命党の政策によるものなのですよ。20年代に都市でも地方でも民族的な金、銀、珊瑚、真珠

製の男女の装飾品の使用を禁止したのです。

古くからモンゴル人は金、銀、珊瑚、真珠の装飾品を多く用いてきました。気候が暖かく家畜がたくさんいた時期にモンゴル人はこのような高価な金銀製品を作り、保管しておきます。そして気候が寒くなり、寒害が起きて家畜の損害が出た時にこういったものを売って家畜を買ったのです。モンゴルは広大ですから、ある場所で寒害が起きて家畜に被害が出て、別の場所では穏やかな冬になり、家畜が育つものです。男性は高価な石製のかぎ煙草入れや翡翠の吸い口がついた煙管、金銀の飾りのついた火打金と小刀、大きな銀のボタンがいくつもついたデールを身に着けたり使ったりしていました。かぎ煙草入れの蓋は珊瑚で作られ、金銀で縁取りしました。また、大きな銀の椀でお茶を飲みました。20年代末の抑圧階級の財産没収の時期にこういったものを没収し、国庫収入とし、このようなものの使用を禁止しました。それで高価な素材で作る美しい細工をほどこした装飾品は必要なくなり、しだいに壊れてなくなっていきました。人びとの中にはそのような貴重品をこっそり隠し持っていた人もいますし、まったく保管しないで子どものおもちゃにしていた人もいられると言われます。珊瑚や真珠の連珠は当時、子どものおもちゃになっていたそうです。これはモンゴル人民の伝統文化を破壊する道を開いた、たいへん誤った行いでした。しだいにそのような装飾品を作る職人がいなくなり、作り方や技術も忘れられてきたのです。

そして60～70年代ごろ、一部の人びとがそのような古い意匠のものに興味を寄せました。しかし、それほど広がりがあったわけではありません。少々ボタンやら何やらに興味を持たれるようになりました。とても高価なものを使ってもやはりいけません。問題になります。どこから、誰から買ったかなどと内務省が調べ始めますからね。内務省に目をつけられます。各県に内務省の支所がありました。

新しいモンゴル国憲法が承認されたあと、それに従って新しい国会を選ぶ選挙が始まりました。私は今度は国会議員に立候補しませんでした。こうして年金を決めてもらって受け取りました。高齢になりました。市場関係への最初の歩みが始まりました。物価の相場は日々変化し、昔どおりの生活をすることはできなくなってきました。裁判所の判決で財産が没収された時に持っていた自動車の代わりに車を1台もらいました。当時自家用車を持っている人はほとんどいませんでした。

そのころから、モンゴル人が外国へよく行くようになりました。1990年以前には、モンゴル人の海外旅行もやはり禁止されていました。モンゴル人が外国へ行くことはもちろん、モンゴルで暮らし働いている外国人と会って話をすることも禁じられていました。内務省がこの問題を厳しく管理していました。1990年以来、私たちは北京やモスクワへ、主に列車や飛行機で行くようになりました。たくさんの品物を運んで来るようになりました。いくつもの大きなカバンに詰め込んだ荷物を私たちは「ブタ」と呼びます。

このころ、私はダムバダルジャーに土地を得ました。当時まだ土地は私有化されていませんでした。安かったですよ。必要なのはウランバートル市当局の許可だけでした。こうして市当局から許可をもらって柵を立て、その中に家を立てました。そこで雌牛数頭を飼い、野菜畑を作りました。ゴビアルタイ県にいた当時、私には家畜が100頭余りいました。そのうち半分を売り、残り半分をウランバートルに連れてきました。市の近くのバヤンツォグト郡で人に世話してもらいました。ところがウランバートル付近は家畜に不相当だということがわかりました。家畜はたくさん失われます。飼料をたくさん使います。費用が多くかかります。利益が少ないのです。

最近では地方から家畜を連れて市の近郊に大勢が移動して来ていますね。これはまったくまちがいです。市の近郊に来るなら家畜なしで来る必要があります。家畜を売って金に換え、養豚や養鶏をする必要があります。それなのにそのことを知らずウランバートル近郊に来て、損害が出てからやっと理解しているのです。国は何の調整もしていません。教えてくれるところがないのです。こうしてだめになったあとでやっとまちがったことをしたと気づいています。私は自分がそういう道をたどったから知っているのですがね。

1990年代半ば、養鶏場には私の知り合いが大勢いました。それで私は家畜を全部売り、鶏を買いました。鶏の数は200羽余りでした。とても多くの卵がとれました。ロシアの白色ニワトリは卵をたくさん産みます。そのころは卵も貴重でした。鶏200羽から1日に卵100個がとれるわけですよ。卵1個は100トゥグルグで売ることができます。こうして大きな食堂やレストランが私のところから70~80トゥグルグという卸値で卵を買うようになりました。1羽の鶏は2年経ったら処分にまわした方がいいのです。処分の前にヒナをとります。鶏を処分に回せば、まとまった肉になるでしょう。鶏肉は食堂が喜んで買います。

最近、外国から卵や鶏肉が自由に入って来るようになり、市場競争が激しくなっています。わが国の政府は自国の市場を保護していませんね。養豚や養鶏はわが国には絶対不可欠なものです。養豚経営をする上で主に留意する点は飼料の問題です。これさえ解決すれば、高い利益の得られる経営ですよ。豚肉からはハムができます。外国には養豚や養鶏の特別な工場があります。いろいろな種類のビタミンを含んだ飼料を準備し、与えています。

わが国の小規模経営者にはたいへんな困難があります。1990年代初め、モンゴル人は中国へ行って安くて質の悪い品物を買ひ、それをロシアに持って行って売っていましたね。このような形のビジネスはどんな利益も与えてくれません。最近では自分で何かを作るよう努力するようになりました。これは正しい方向へ進んでいるということです。多くの人がさまざまな小さな日用品を作るようになりました。多くの人が食堂や店を開いています。競争は激しくなりました。

最近、小規模経営者が「ウルバネク」というサラダをポーランドから輸入しています。モンゴル人はそれを「まだらサラダ」と呼びます。とてもおいしいサラダです。かつて社会主義時代にはわが国はこれをポーランドから国営商業機関を通じて輸入していました。しかし、ダルハン・セレンゲの農耕地帯の農業従事者はすでに当時から「まだらサラダ」を自家製で作る技術を知っていました。私は今それを家で作っています。私の自家製のサラダと輸入されたサラダのあいだには、たった1つ違いがあります。輸入品の「ウルバネク」は塩が多いのに対し、私のは少ないのです。それ以外はまるでそっくりです。ポーランド人は一般販売と輸出向けに作るので、防腐用に塩を多めに入れるとすれば、私のほうは長期間保存する必要がないので塩を少ししか入れません。入れた瓶に自分の携帯電話番号、名前、妻の名前、家の住所を書いて貼りつけます。食品市場に並んだその日に売り切れます。それを買った人たちはまた買うために私の携帯電話に注文をくれます。自家製だからなのか、塩が少ないからなのか、うちのお客は私のサラダをより好んでくれます。値段も安いのですよ。

モンゴルにはきのこがよく生える地域があります。それを摘んで「きのこの缶詰」が作れます。それに「肉の缶詰」もあります。そういったものをすべて自家製で、少量だけ作ることができます。私はそれらをすべて自家製で、少しずつ作ってみました。なかなか良いできばえでしたよ。しかし、1つ注意することは衛生の問題です。食品を家庭で作る時注意すべき主な点はこれです。これを解決しなければなりません。それ以外は技術的に難しくはありません。

バヤンウルギー県のカザフ人は馬肉で「カズ」というおいしい食品を作ります。私は若い時分、バヤンウルギーをしばしば訪問しました。その時にカズを食べてみました。とてもおいしいのですよ。私は今、自分でカズを作っています。まさにカザフ人が自分で作る伝統的方法で作っています。塩、玉ねぎ、こしょう、唐辛子といった香辛料を水に入れて沸騰させ、冷まします。冷めたあとその溶液に馬のあばらの肉だけを入れて1日置きます。だいたい24時間置くということです。この間に例の玉ねぎやニンニクなどの香辛料と塩の味が馬のあばら肉に完全に浸み込みます。こうして翌日、いい味の浸み込んだあばら肉を馬の腸などに1つずつ入れます。そして煙で燻します。一番たいへんなのは燻し作業です。アルガルの煙で燻せばとてもよろしい。そもそも馬肉はそれ自体とてもおいしく、質の良い肉です。アルガルの煙で燻せば最高ですよ。カザフ人はそれを燻すためにゲルの骨組みの先につるします。こうしてつるした馬肉が煙に燻されるのです。こうして燻した肉はそのまま食べることができます。食品市場ではカズ1キロ当たり5,000トゥグルクになっています。馬肉1キロは1,100~1,200トゥグルクくらいですよ。小規模経営者にとってはたいへん利のあるビジネスですよ。最近はその消費者がとても増えています。カザフ人もモンゴル人もみな消費するようになっていきます。またモンゴルで暮らしている外国人もよく買うようになっていきます。

モンゴルでは昔、伝統的な方法で乾燥乳を作っていました。馬乳酒、ラクダの乳、ラクダのホールモグ〔乳と酸乳を合わせたもの〕といった、とてもおいしく、多様なビタミンを含み、人の健康に良い影響を与える、自然の純粋な性質を保ったわが国の伝統的な食品を市場で流通させる必要があります。そういったものの伝統的製法や技術を研究し、広める必要があります。そういったものの新しい製造器や技術を導入する必要があります。最近はこれに関する本がちらほら出ています。私はそのような本をわざわざ買って読んでいます。いくつかは、作れる人のところに行き、頼んで教わっています。

私は追放されてフブスグル県に住んでいた当時、魚の干物の作り方を覚えました。フブスグル湖は水がとてもきれいで、魚の豊富な湖です。その水はバイカル湖の水よりもきれいです。バイカル湖の沿岸にロシア人がパルプ工場を建てたために、水がたいへん汚染されています。しかし、フブスグル湖の周りには何の工場もありませんからね。

IL：民主党のリーダーたちとはどのくらいお知り合いですか？

LO：民主党の「国民評議会」のメンバーとはほぼ全員知り合いです。幹部は全員知っています。彼らとは恒常的に連絡をとっています。民主党大会にも出席しました。最近2回の大会で私はかなり批判的な発言をしました。民主党は自浄の必要があるということを行いました。「民主党内にはさまざまな利害の人たちが大勢入っている。道徳のない、無責任な連中とは縁を切る必要がある。こういった連中が民主党の評判を落としている。こういった人たちは利益を得たり、国の要職につこうとするちっぽけな個人的目的のために国民規模のこの大きな党を利用している。今それを断ち切る時だ。民主党からこういった人びとを一掃し、党の名前を清潔にしよう！もう1つすべきことは、民主党は自分の犯した誤りを認める必要があるということだ。1990年代以降、民主党は多くの失敗を犯した。今この失敗を認め、人民に謝罪しなければならない。そして今後失敗しないために、一般党员から上級の指導部までの総力を結集して活動しよう！」と発言しました。

一方では民主党のリーダーシップを集中する必要があるということです。つまり、民主党の指導部を1つにする必要があるということです。今の状態では民主党の指導部の手法は大いに誤っています。「すべて同じ、平等だ」という名のもとに無秩序が生まれています。正しい発言をした人間の言葉をに耳を貸さないし、それを受け入れて実行していません。この状態を即刻断ち切る必要があると私は思います。党内民主主義にとって批判は重要な役割を持っています。批判を封殺せず、自由にすることが大切です。

ところが自由な批判を認めるという名のもとに、無秩序に、上も下も批判に変えてしまっています。ある人は正しい批判を言う、しかし、その人を別の人が批判します。そして最初の批判と次の批判は両方とも価値を失ってしまうのです。こんなふうでは絶対にいけません。正しい批判をした人の意見に注意深く、忍耐強く耳を傾け、受け入れる

ことが必要です。私はこういったことを2000年の国会選挙の前に行われた会議で言いました。しかし民主党は選挙で大敗しました。選挙後、もう1度民主党の会議が開かれました。私はそこでもう1度自分の批判を述べました。

「選挙前に開催された会議でみなさんは私の言葉を聞こうとしなかった。なりゆきはまさに私の言ったとおりに展開している。われわれは負けることもある。今回の敗北からわれわれは教訓をつかみ、自分に存在する欠陥を取り除くべきだ。そうした時に将来の勝利の基盤を築くことができる。もし、この敗北から教訓をつかみ、自らの欠陥を正すことができなければ、われわれは決して勝利に到達しない！」と言いました。

そもそものところ民主党に強力なリーダーがいなくなりつつあります。誰も似たり寄ったりです。教育も同程度、能力も似たようなもの、経験も同じようなもの、年齢も同じくらいで、すべてが同じになってしまいました。誰かがほかの人より抜きん出るのがありません。ですからお互いの言葉に耳を貸さないのです。すべてを引っ張っていく強力な指導者がいません。これはたいへん厳しい状況を生み出しています。このような状況からどうやって抜け出るか。そのことこそ考えるべきです。私の考えではこのような状況から抜け出る最善の方法は、自分たちの中から1人をリーダーと認めるということです。そして全員がその人の言葉に耳を傾けることを覚える必要があります。その人は失敗してもいいのです。そのような時は各方面からその人を助け、共に失敗を正していくことが必要です。そのようなリーダーも、すべてを1人で決めてはならず、ほかの人たちの言葉にいつも耳を傾けていなくてはなりません。このようにした時、現在の混乱した状態から脱することができます。もしこれができなければ、民主党は恒常的な内部闘争を止めることができません。そんな党に国民は信頼を寄せません。勝利は常に国民の側にあるのです。

あなたがたは今の民主党の会議に出席したことがありますか？私は何度も出席したので良く知っています。どんな会議にも秩序というものがあるでしょう。しかし、民主党の会議にはそういうものがちっともありません。何の秩序もありません。たいへん無秩序な状態で会議をしています。そんな会議はモンゴルの全国規模の大政党の会議ではなく、まるでナラントール市場で商売をしているような印象を与えています。

私はD.ドルリグジャブとR.ゴンチグドルジの2人を名指して批判しました。民主党のドルリグジャブ党首に私はこう言いました。「ナラントール市場でなら商売人は値段や相場をしっかりと知っていなければならないものだ。もしそれができなければまちがいなく競争相手に負ける。ところが君はこの会議で議論されている問題の何が、どんな相場であるかちっともわかっていない！」と。

私は民主党の新しい党首ゴンチグドルジに向かっては、「君はすぐれた数学者かもしれない。しかし、学者や博士であることと、政治家であることは別の問題だ。君は政治に取り組んでいるのなら、一貫していなければならない。この2つのあいだには

絶対にだめだ。政治には厳しいルールがある。そのルールに従って勝ち上がれば政治家になる。君は社会科学が頭に入っていない。君はすべてを数学者の目で見えることを望んでいる。そんなことをしては全然だめだ。社会は政治家の前に巨大な問題を突きつけ、それに応じた規模の構想を必要とするのだ！」と言いました。それ以降、ゴンチグドルジはだいぶ変わりましたよ。

民主党も組織面で大きく変わりました。チンギス・ハーンの時代から「妻を正しく選べない人に軍を指揮させてはならない」という言葉があります。それは妻1人の問題を解決できないなら一群の軍を指揮し、全体の動きのために力を尽くす能力がないという意味です。「妻1人の問題を解決できないなら全体の問題もまた解決できない」とは本当のことです。わが国の最近の歴史でこの言葉がどう証明されたか、私たちは見ました。選挙の時に出ていた諸々の論争を民主党は「公共の大事」のためにコントロールすべきなのです。ところがそういったことがらを意味もなく持ち出して、悪戦苦闘しています。民主党を代表して選挙に立候補している人びとはみな同じ目標を持っていないばなりません。1つの大きな目標のためにすべてが動くようにする必要があります。そして、その目標のために全員が力を合わせて断固戦うことが必要なのです。

最近、たいへん雄弁ではあるが自分で何もできない人が選挙で成功しています。たとえば、バガバンディは自分で何もしていないのにP.オチルバトに勝ちました。N.エンフバヤルがいます。たいへんよくしゃべります。しゃべったことには何の体系性もありません。ただしゃべるだけで、取り上げるに値するような文はただの1つもありません。発言を考え、整然と述べる必要があります。ぶつぶつぶやく人や、おしゃべりな人から知恵は出ません。最近、このような人たちが選挙で成功をおさめています。

選挙で成功した人たちの中には、事業で成果を挙げた人はほとんどいません。私はこの問題について1990年にオチルバト大統領に幾度も話しました。

「民主的に選挙を実施し、いずれかの党が政権を掌握するという方法になったのはまさに正しい。しかし、ここに危険な欠点もある。党になんら関係のない人がただ政権に関与したいがために立候補するようになるだろう。これはとても危険である。たとえば、モンゴル人民革命党になんら関係のない、その歴史を知らず、その思想を理解しない人びとが、党の名前を利用して立候補し、選挙に勝ち、政府の重要な地位を占めるようになるだろう。これはとても危険なことである。これは、モンゴル国の将来の運命に大きな害毒をもたらすだろう。モンゴル人民革命党の勢力は弱まる兆しが無い。政権を握ったままのようである。したがって、これを直ちに弱体化する必要がある。そうすれば、この党内にある新旧のすべての悪人はいなくなる。古い悪い思想から解放される。そうしてから、この党を改めて新しく作り、他の党と同様に選挙させなければならぬ！」と私は彼に言ったものです。彼は私の意見を聞き入れませんでした。それにしても、今日の生活は私の言葉の正しさを証明しているようなことが増える一方です。この



党がモンゴルの人民を前にして犯した誤りや作り上げた榮譽とはまったく関係のない人びとがこの党の名のもとに選挙に勝って閣僚入りし始めています。自分自身の考えなどもたずにただ政権をとりたような人びとがとても危険なことをするようになっていきます。今日の膨大な賄賂や、母国の天然資源を「外資導入」の名のもとに外国へ売り渡すといったことは、そういう人びとがしていることなのです。党が党員から賄賂をせびって受け取り、その資金で新しい党員を募集し、投票を買収するようになりました。これはとても危険です。

ビジネスをやって成功した人はわずかにいます。彼らは次第に政治に入ってきています。これもまた考える余地のある問題です。彼らに対する政府の支援が不足しています。このような支援が足りないために彼らのビジネスは行きづまっています。それで自分で政治の世界に入ってきているのです。彼らは政治が好きなのではなく、ビジネスに対する政府の支援が足りないので、それを獲得するために政治の世界に入ってきているのです。

このような大ビジネスに携わっている人たちは、自分の考えを社会に理解してもらわなくてはなりません。問題によってはそのような人びとはたいへん注意深い態度で妥協をする必要があります。そうしなければその人は支持を得られませんよ。ビジネスに携わっている人が自分の利益のためにだけ行動すれば、社会の側から反感を買う傾向が生まれてきます。わが国には「アポ」という〔酒や飲料を製造する〕大会社があります。これは社会主義時代に国営工場でした。民営化されてまだまもない会社です。その民営化については激しい論争が起きました。新しい所有主はその設備を一新し、拡張をしてドイツの技術で新製品を生産するようになりました。評判も高まりました。世間でその評判が高まったのには、新しい技術よりもこの会社の社会的方針が大きな役割を果たしています。アポの幹部は社会的最困難層に向けたさまざまな措置を講じました。国庫に払っている税金のほかに彼らは多額の資金を社会的困難層のために使いました。こういうことを国民は見ています。正しい方針を持っていると評価しています。

「ナラントール」という大会社がありますね。非常に大きな利益を上げている会社です。サイハンサムボー社長もまた先見の明のある人物です。このように国民的規模のビジネスマンをできるだけ早く誕生させる必要があるのですよ。国民的規模のビジネスマンはとても必要です。つまり、実務経験があり、仕事が身についた、そういう人たちが多くいればいるほどいいのです。人は仕事をするにつれ、その後すべきことが自然にはっきりしてくるものです。

ツェデンバルの最大の欠点は、自分で実務を手がけた経験が一切ない人だということです。いつも人のした仕事を見てばかりいました。ですから現場の人間の話をしていることを理解しなかったのです。これは単に1つの会社の業務ではなく、国家レベルの大事業です。自分で行った経験がないので、そのようないくつもの大きな事業の事情が飲

み込めないのです。それでただ中味もなく「ああしなければならぬ、こうしなければならぬ」と言うようになったのです。それは事業の助けになるよりもはるかに障害になっていました。国家指導者は全責任を自分が負うことができる人物で、人から離れた人物ではあり得ません。

国民は指導者からたった1つのことを厳しく要求するものなのです。それは「誠実」であることです。国民は国家権力を持っている人に唯一このようなものを要求しているのです。ユネスコがチンギス・ハーンを「ミレニアムの偉人」であると宣言しました。チンギス・ハーンには今日のこの世界からこのような高名が与えられるどんな特徴があったのでしょうか？チンギス・ハーンは政治に最も「誠実」でいられたのかもしれませんが。彼は政治において最も「誠実」でいられたので、何世紀も乗り越えて今日まで生き残ることができたのでしょう。ですから現在彼に匹敵する人間は1人もいないでしょう。そんなわけで政治は、ただひたすら誠実にとり行うことのできる人にこそあずけなければなりません。政治において面識、兄弟、恋愛関係、妻子、地縁は全然関係ありません。政治をそういったものからできるだけ遠ざけるべきです。チンギス・ハーンはそしてそういったものを政治から遠ざけることのできる人だったかもしれません。

われわれモンゴル人の生活している自然環境もまた、独特な環境です。内陸アジアのたいへん乾燥した気候のこの環境では植物や動物さえもが独特です。たとえば、わが国では植物はまばらに生えます。しかしこのまばらな植物は、たいそう味も滋養もあり、種類も多く、一言で言えばたいへん質が高いのです。この地の植物は温暖で湿度の高い気候の国の植物よりもはるかに味も質もよく、滋養があります。モンゴル人はこの自然環境での生活に代々馴染んだことにより、ますます有能で、ますます賢くなっているかもしれない私は思っています。私たちは温暖な気候の国の人のように穏やかで物静かな性質は持っていないかもしれません。頑固で荒々しい性質を持っているかもしれません。その分、私たちの中には鋭く、知性のある人間が多くいるかもしれません。頭脳の面で今の私たちよりもずっと進んだ人たちが私たちの中にたくさんいるようです。その人たちが私たちが支え、その人たちが囲むようにしていくことが必要になっています。

最近、このような知性のあるモンゴル人がたくさん外国へ流出しています。アメリカに行きます。ロシアに行きます。ドイツに行きます。さらにそこからまたどこかへ行ってしまいます。これは大きな誤りです。これは危険な兆しです。今わが国では人口の増加や移動に関する正しく厳しい国家政策が必要です。私たちの隣には人口が10億人を超える巨大国家があります。そこでは人口の増加と移動に関して厳しい政策を実施して久しいのです。

わが国には厳しい政策が何としても必要です。私たちは子どもや母親たちに特別な留意を払っていません。今私たちの伝統的遊牧文明はどこへ行くのかということを考える時です。家畜を追う人はますます減少しています。将来私たちは何をして生き延びてい

くのでしょうか？ 私たちには何をなすことができるのでしょうか？ モンゴルの現在のこのように少数な人口は、定住生活に移行しては絶対になりません。町へ向かったこの無秩序な大移動を食い止めるための国の政策が必要になってきています。